女性改造



新年號

改造社

大正大震災誌

豫約募集

讀書界破天荒の新記錄を見よ

千古の史的好記念として各官廳、會社、家庭より破天荒の註文を戴きました。そして地方の各小學、中學、其他の學校が競ふて本書を註文さるるのは大震災を永遠に我國民に徹底せしめんとの教育的見地からだと思ひます。本書が震災を記念する唯一の權威であることは茲に絮說するまでもありません。

豫約締切の切迫

本誌は愈大正十二年

十二月卅一日

内容見本はどこの書店にもあります。無料進呈します

東京 **改造社** 振替長野 三二八〇

改造社近刊書

超　　克　　倉田百三著　十二月下旬發行

農村法律問題研究　　末弘嚴太郎著　一月下旬發行

アインスタイン全集（第四卷）石原純外三氏編譯　十二月廿日發行

アインスタイン全集（第三卷）石原純外三氏編譯　目下印刷中

日本社會史　　本庄榮次郎著　目下印刷中

改　造　社

改造社重版書

厨川白村著　**近代戀愛觀**　一月中旬出來

目下在庫書籍

法學博士 末弘嚴太郎著　**嘘の効用**（十版）　定價貳圓五十錢　送料十七錢

文學博士 松本亦太郎著　**心理學講話**（十版）　定價四圓　送料十九錢

理學博士 桑木彧雄著　**物理學と認識**（四版）　定價壹圓五十錢　送料十五錢

片山潜著　**自傳**（六版）　定價壹圓六十錢　送料十五錢

大杉榮著　**自叙傳**（最新刊）　定價貳圓　送料十七錢

谷崎潤一郎著　**愛すればこそ**（八十六版）　定價壹圓六十錢　送料十五錢

改造社



ゼヌヴィエエヴ（牝鹿姫）
マリイ・ロオランスン作
（記事參照）





（上）三越の銀座マーケツト

（下）バラツクの淺草仲店

女性改造

新年號

1924

靜かな鐘をきくとき

元旦は陽氣であり、日のうららかであることが望ましく、羽子板ついて神秘の世界を思はせることによつてどれだけ私どもの心が若返るであらう。

ことぶきの盃をまどゐのよろこびの中に見出すとき、私どもは生きる外他念なかつたあの日のみにくきさまも忘れたい。そのおそろしい、あさましい姿も打ちわすれて、輝く未來を指おりかぞへたい。

あの日以來、私どもは全く物質の世界のあることだけしか思はなかつた。それだけ私どもの境遇にはおしせまつた、あはれなものがあつた。しかし元旦の明けゆく空をながめてはそこに靜の世界、藝術の世界がまだのこされてあつたことに心づくであらう。自分の心にさうした餘裕の一境が發見されたとき、その瞬間におこるものは自然に對する親しみであり、骨肉の相愛であり、自己を愛する心である。

にくめどもにくめぬもののかず／＼が念頭にうかぶ。にくき人はある、にくき世界はある。しかし自分の心の世界が喜びに滿ちあふれるときすべてのにくき人も、元旦の淨き心では許されるものである。

明けゆく空を仰ぎつつ、輝く星をながめつつ、そして曉の靜かな鐘をききつつ私どもは傍へにある平和の一族を打ちながめる喜びに涙ぐむであらう。

その涙ぐむ心が自己愛であり、その發展が社會愛であり、そして努力の源泉である。そして自分のみにくさをも省み、他人の罪をも許す無垢なる情緒である。その純な一滴をそのままに生かして行く人が此世に尤も尊いのである。

童貞聖母

和辻哲郎

母になるためには童貞を捨てなければならない。これは古くより人間の常識が認めるところであり、また近代の自然科學が實證するところである。がそれにもかゝはらず、童貞であつて同時に母であるといふことは、我々にとつてその意義を失はない。その意義とは何であらうか。

一

童貞であると共に母であるところの人間は、人類の歴史に於て曾てたゞ一度、たゞ一人、この地上に現はれたと傳へら

れてゐる。それはイエス・キリストの生母、童貞マリア、聖母マリアである。この歴史的人物マリアは、その身にうけた處女懐胎の秘蹟のゆえに、また人類の救主の生母であるがゆえに、キリストの教を信ずる世界に於て漸次人々の崇拜の對象となり、遂には基督教の「大いなる主神マリア」となつた。カトリックの通俗信仰に於ては、聖母マリアは現前に世界を支配する大いなる母神である。いかなる人間のいかなる喜びやなやみをも彼女は自分の胸に感じてゐる。さうして頼るものなき人間の苦しみを、その個人的な事情にまで立ち入つて、やさしく慈愛深く助けいたはるのである。この慈愛深き女神の信ぜられる通俗宗教に於ては、父なる神もまたイエス・クリストも全然うしろに退いてゐる。クリストとは聖母がその腕に抱いてゐる、女の子供である。彼女はその限りなき慈愛の故に、このたゞ一人の愛兒をさへも人間と神との結紐たる神秘的な犠牲として、信奉者たちに與へるのである。こゝではもはやクリストが信仰の中心ではなく、クリストをもその附屬物とするところの聖母マリアが信仰の中心なのである。

基督の名に於て行はれてゐるこの聖母崇拜は、西洋の文化に顯著な痕跡を殘してゐる。カトリックの教會では父なる神への祈りよりも聖母マリアへの祈りの力が遥かに優勢である。のみならず聖母の神的誕生が數少ないカトリック教會の信條の内にさへ數へ込まれてゐる。美術に於ては中世より文藝復興期へかけて、幼兒キリストを抱ける聖母が最も情熱的に題材として選ばれた。聖母像を除けば西洋美術史は大半を失ふと云つても過言でなからう。その他聖母への祈りや讃歌が音樂に與へた感化や、聖母への憧憬歸依が文學的構想力に及ぼした影響などは、何人も氣づかずにゐられないところである。聖母崇拜に起因するこれら一切のものは、西洋文化の特性の有力な成分と見ることも出來るであらう。

しかし聖母崇拜が事實上大きい力を持つてゐたといふことは、直ちに童貞聖母の傳說が歴史的に眞實であることを證するものではない。理性の權利が主張され自然科學が急速に發達し始めると共に、聖母崇拜の中心地からさへも處女懐胎を疑ふ人々が續々として現はれた。さうしてこの傳說に「合理的」な解釋を與へようとする試みが幾度となく繰り返された

しかし我々は、マリアの處女懐胎が可能であるか否かを問ふまでもなく、新約聖書それ自身のうちに既にこれを否認すべき材料を見出すのである。

聖母崇拜の根據となつてゐるのは、悩めるマリアに關するヨハネ傳一九二五以下の記述のほかは、主としてルカの傳承である。元來ルカは、説敎をしてゐるイエスの前で群集の中の女が「幸福なるかな、汝を宿しし胎、なんぢのすひし乳房は」と叫ぶところの、最も古い聖母崇拜の場面を記錄した人である。從つてイエスの誕生記をしるすに當つても、濃厚な聖母崇拜の氣分を以てしてゐる。石女エリザベツが主の惠によつて豫言者ヨハネを孕つてから六月目に、天使ガブリエルはナザレの町の處女マリアに現はれて、「マリアよ、懼るな、汝は神のみまへに惠を得たり。視よ汝みごもりて男子を生まん、その名をイエスと名づくべし。彼は大いならん、いと高き者の子と稱へられん」云々といふ。マリアが「われ未だ人を知らぬに、如何にしてこの事のあるべき」と怪しみ問へば、天使は「聖靈なんぢに臨み、いと高き者の力なんぢをおほはんこの故に汝が生むところの聖なるものは、神の子と稱へらるべし。視よ、なんぢの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女と云はれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。それ神の言には能はぬ所なし」と答へる。マリアは受胎を承認する。ついでマリアがナザレから遠いユダの町にエリザベツをたづねた時、マリアの挨拶の聲をきいてエリザベツの兒は胎内で躍つた。エリザベツは聖靈に滿されて叫ぶ。「をんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。わが主の母われに來る、われ何によりてかこれを得し。視よ、なんぢの挨拶の聲わが耳に入るや、我が兒胎内にて喜びをどれり。信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり。」マリアもまた「わが心、主をあがめ、わが靈は、わが救主なる神を喜びたつる。その婢女の卑しきをも顧み給へばなり。視よ、今よりのち萬世の人、われを幸福とせん。全能者われに大いなることをなし給へばなり」といふ。――かくの如くルカは、救主イエスの誕生以前から既にマリアが聖母であることを自覺し、また豫言者ヨハネの母とその胎兒ヨハネとによつて承認せられてゐた

ことを記してゐるのである。

ついでマリアは、戸籍につくため許嫁の夫に伴はれてベツレヘムに到り、馬屋で産をする。その夜一人の天使が野宿せる羊飼に現はれて救主の誕生を告げ、天の軍勢がそれに讃美歌を唱つた。羊飼は、マリアとヨセフと馬槽に臥せる嬰兒とをたづねあてゝ、天使の言葉を傳へた。さうしてマリアは「すべてこれらのことを心にとゞめて、」思ひめぐらした。やがて潔めの日が滿ちてエルサレムの宮に上つたときにも、かねて聖靈から「救主を見ぬうちは死を見ず」と示されてゐたシメオンが、聖靈に感じて嬰兒イエスを取りいだき「わが目は、はや主の救を見たり」と云つた。女豫言者アンナも同じくこの嬰兒を認めた。

これが聖母崇拜の根據たるルカの傳承である。マリアはその子イエスが救主としての任務を果した後に聖母とされるのではなく、懐胎の時に既に「わが主の母」と呼ばれるのである。マタイ傳は同じく處女懐胎を物語つてゐるけれども、それは遙かに簡單で、マリアに對する受胎告知やエリザベツとの會見やまた聖母としての認識などは一切語られてゐない。「母マリア、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖靈によりて孕り、その孕りたること顯れたり。夫ヨセフは正しき人にして、これを公にするを好まず、ひそかに離縁せんと思ふ。かくてこれらのことを思ひ廻らしをるとき視よ、主の使夢に現はれていふ、ダビデの子ヨセフよ、妻マリアを納るゝことを恐るな。その胎に宿るものは聖靈によるなり。かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり。――ヨセフ眠より起き、主の使の命ぜし如くして妻を納れたり。されど子の生まるゝまでは、相知る事なかりき。」さうしてそのあとには、イエス誕生の時東の博士たちが星を見て訪ねてくること、ヘロデの嬰兒殺戮、ヨセフの家族の埃及落ち、などが物語られるのみである。童貞の聖母に對する讃美の感情はどこにも現はれてゐない。がこの際最も重大な相違は、これらの物語に於てつとめる」マリアの役目である。ルカ傳に於ては、最初マリアが天使より受胎の告知をうける。さうしてそのあとの叙述も常

にマリアを主人公とする。マリアは既に懷胎中に「わが主の母」として讃美せられるのを聞き、また自らを萬世の人に讃美せられるものとして自覺する。イエス誕生の際には、羊飼に起つた秘蹟をマリアが心に留め、シメオンの預言はマリアに向つて云はれた。かくマリアは聖母の秘密の擔ひ手、聖母の傳說の出所として取扱はれてゐるのである。從つてルカ傳では夫のヨセフは殆んど名のみの輕い役をしか演じない。だのにマタイ傳では、マリアが夫ヨセフの陰に隱れて了ふ。マリアの姙娠が私通によるものでなく聖靈によるものであることを天使より告げられるのは、マリアでなくてヨセフである。ヘロデ王の嬰兒殺戮をまぬがれるために幼兒とその母とを携へて埃及に逃げよといふ神の告をうけるものも、またヨセフである。母子をつれて埃及を出で、ナザレの町に落ちつくまで、兩度の夢の告をうけるのも同じくヨセフである。聖母の秘密の擔ひ手はヨセフであつてマリアではない。兩者の地位はルカ傳とマタイ傳とに於て丁度逆になる。

　この相違は、處女懷胎の秘密を一方はマリアの立場から描き、他方は夫ヨセフの立場から描いたといふだけの相違ではない。マリアを聖母として意義づける努力のあるとないとの相違である。マタイ傳は處女懷胎を說くに關はらず、聖母を力說しようとする動機には未だ支配されてゐない。

　更に古く遡つてマルコ傳になると、この處女懷胎そのものさへも物語られてゐないのである。マリアについて語られるのは、イエスの親族の者がイエスを狂人として取押へようとした時、イエスの兄弟と共にイエスを呼び出しに來たことと、故鄕の人々がイエスを「木匠にしてマリアの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟」と呼ぶこととの二つに過ぎぬ。そこにはイエスが母を眼中に置かなかつたことの描寫はあるけれども、この母が神聖なものであることの暗示は全然存しない。

　マルコ傳よりも更に古い時代に書かれたパウロの手紙ロマ書によると、イエスは「肉によれば」イスラエル人である（九の五）、「肉によれば」ダビデの裔である（一の三）。このことは勿論父系を意味するのであつて、こゝに處女懷胎の秘蹟は

遺憾なく否定せられてゐる。

イエスをダビデの裔とする傳承は純猶太的であつて、明かに處女懐胎の傳説よりも古い。さうしてそれは、處女懐胎を物語るマタイ傳及びルカ傳にも、系譜の形で保存せられてゐる。マタイ傳のは猶太化せる系譜であり、ルカ傳のは普遍主義的な系譜であるが、いづれも父ヨセフから系統を引いてゐることは一である。これは處女懐胎の傳説と明白に矛盾する。ルカはこの矛盾を感じて、系譜の初めに「人にはヨセフの子と思はれ給へり」と附け加へた。しかしそれによつて系譜は無意義に化した。處女懐胎を立てるために無意義にした系譜を何故にルカは保存してゐるのであらうか。それはメシアをダビデの子とする猶太的信仰が、處女懐胎の信仰よりも先に教會に於て受け入れられてゐたからである。

かく傳承を溯つて行けば、マリアの處女懐胎の傳説は、決して、イエス十字架の死の傳説ほど古いものでなく、福音書の作られて行く途中に發生し發育したものであることは明かであらう。さうしてそれを生み出したものは、原始教會内に於ける信者の熱烈な宗教的想像力に他ならぬのである。彼らはもはや單純にイエスの教を奉ずるのでなく、甦りによつて死に勝ち、人類に救ひの道を開いた超人的な「神の子」を崇拜する。イエスに關する彼らの知識はこの崇拜によつて彩られ、その主導的な思想は彼らの單純な神話的な表象により物質化される。即ち、「神より靈感をうけた教師」としてのイエスを云ひ現はすためには、イエスが洗禮をうけたとき神の靈鴿の如く彼のうちに入り、天より聲あつて彼を神の子と宣言した、といふ風な神話的表象を彼らは用ゐるのである。かくの如く思想を現實的直觀的な形に表象しようとする彼らの傾向が、「神の子」といふ理念を文字通りに解釋して、ますます直觀的な形に成長させて行つた。彼が神の子であるとの證據は洗禮を受けるイエスの上に天よりの聲が響くといふだけでは充分でない。彼は生れた時から神の子でなくてはならぬ。即ち彼の母を姙ませたものは、人間ではなくして、神でなくてはならない。それが神であることを明示する最も手近い證據は、その姙娠が人間にとつて通例不可能である方法、即ち處女懐胎によつて起るといふことである。同時にまたこの姙

娠が神聖たものであるためには、出來得るだけ人間の肉欲から遠ざかつたものでなくてはならない。そこで「人を知らない」清浄な處女のまゝで受胎するといふことが構想される。がまたこゝに他の有力な動機も結合して働いてゐる。それは母と子の關係を父と子の關係以外に獨立に價値づけたいといふ心情の願ひにもとづいた動機である。母と子との關係は人生の最も奥深い神秘的なものであつて、そこに現はれるやさしい母の愛には、他の愛に見られない美しさと強さとがある。人人はマルコ傳の、子を狂人視するマリアや、「わが母とは誰ぞ」と反問するイエスなどに滿足しなかつた。幼兒イエスとその母マリアとが平和に睦み合ふ愛の姿を要求し、その前に黄金乳香沒薬をさゝげたく思つた。かくて遂に聖母マリアが出現するのである。

神の子の傳説は、當時の希臘風・羅馬の文明世界に於ても、決して稀有ではなかつた。アレクサンドロス王の他有名な支配者で神の子と傳へられるものは少くない。哲學者プラトーンもその一人であつた。アポローンの神は彼の母と交はつたあとで、子の生れるまでは彼女に近くなと彼の父に命ずるのである。「されど子の生まるゝまでは相知る事なかりき」といふマタイ傳の記錄と極めて近い類似がある。この種の通俗信仰がマリア傳説に影響してゐることは疑へない。たゞ異るところは、希臘風の想像に於てはたとひ幻影にもしろ神が女の童貞を破るのであるが、マリアに於ては姙ませるものは聖靈であるが故に、童貞は破られない。この一事はマリアに特殊な姿を與へる重大な契機である。従つてマタイ傳が「子の生まるゝまでは」と明かに童貞の期間を限定してゐるに拘はらず、マリア崇拜の榮えると共に信者はマリアの終身童貞を要求せずにはゐられなくなつた。かくてイエスの兄弟姉妹はヨセフの先妻の子とせられ、マリアは永久に處女とせられた。これはマリア傳説の當然の開展であつて、既に福音書がこの方向を目ざしてゐるのである。

がしかし、この著しい相違に拘はらず、兩者のいつれもが想像力の所産であつて現實的な事實でないことは少しも變りがない。

二

處女にして同時に母であるマリアは想像の產物に過ぎない。しかしそれが想像の產物であることは、些かも童貞なる聖母の意義を減じないのである。

第一にそれは過去の信仰の變形として認められる。初期教會の信者の想像力は無の中から童貞聖母を作り出したのではない。限り知られぬ古い時代から人類はかくの如き女神を要求し憧憬し崇拜した。その人類の憧憬を初期教會の信者の想像力が、彼らの教祖の母親に結びつけたのである。

どの信仰がマリア崇拜となつて生き續けたのか。それを精密に定めることは困難である。しかし希臘末期より原始基督教の時代にかけて小亞細亞に榮えた母神崇拜が最も密接な關係を持つてゐることは今一般に承認せられてゐる。あの小亞細亞の「大いなる母」は、その主要な特徴に於て全然聖母マリアと同一である。が更に一歩を進めて、マリアそのものが既にかくの如き母神であつたと主張する人さへもある。その說によれば、福音書の物語に多數に現はれてくるマリアは、實在の人物ではなくて古いマリア崇拜の痕跡である。そのマリアは初めより救主の母であつて、イエス神話の復興されると共に漸次同じく復興されたものに他ならない。が我々はこの說の當否を考究するまでもなく、この說が前提として許してゐるところの事實、卽ち大いなる母神が單に小亞細亞に於てのみならず、埃及より西方亞細亞一體に於て崇拜されたといふ事實に滿足し得るのである。救主の母なる童貞の女神――その名がMariam或はMiriamであつたか否かは別問題として――その女神は猶太教の行はれる地方にも存在した。さうしてそれが單に地方的の現象でなく、當時の文明世界に共通の現象であつた。そこから我々は、聖母マリアの問題よりも更に廣い一般的な「童貞の母」の問題に移り得るのである。

童貞の母は古くより類型として多くの救主神のそばに認められる。人類のために苦しみ、闇の力に滅ぼされ、後死より

甦るところの救主神として、イエス・キリスト以前に榮えてゐた多くの神々、例へば波斯人のミトラ、埃及のオシリス、シリア及びフリギアに於けるアドニス（或はタムッヅ）及びアティス、印度に於けるクリシュナ等は皆童貞の母から產れたと云はれてゐる。童貞の母は旣に一つの類型である。では何故に人類は童貞の母を考へねばならなかつたのか。

我々は遠い原始的な時代に眼を向ける。そこでは「母」なるものは、現在に於ても幼兒にとつてさうであるように、不思議な魔力の所持者であつたらしい。神話傳說は豐富にその痕跡を示してゐる。英雄アキレウスが母の前にはいかに幼兒のやうであつたか。大國主の神の母や春山の霞男の母がいかに奇蹟的に死せる子を甦らせ或は呪咀の力を振ふことが出來たか。しかもこれらの場合、父は何の役目もつとめず、或はその存在さへも知られない。「母」がこのような魔力を持つことは、母と子との本能的に親密な關係や、その關係を稀薄ならしめるべき外因の存しない原始社會の形態などを考へれば、當然のこととして許し得るであらう。のみならず原始的な部族生活に於ては、部民の增殖が外敵に對する最强の防禦であり部族の繁榮の第一の證據であるが故に、產むところの「母」は云はゞ部族の護り神である。かくして增殖した部民は、必然に食糧のための努力を高めねばならない。さうしてこの努力が導き出した崇拜の對象は、穀物その他あらゆるものを產むところの「母なる大地」である。こゝに「母」と「大地」とが結合して、最古の崇拜たる「大地聖母」の崇拜が出現する。それはあらゆる生命の源泉であり、絕ゆることなく產んで人間を護る神である。かくて希臘の古き母神ガイアは大地であり、小亞細亞の大いなる母キュペレーは大地より出で、穀物の保護者なるデーメーテールも大地聖母であつた。印度のマイアも埃及のイシスもさうである。

母の崇拜が子の感情にその最奧の根據を持つとすれば、處女の崇拜の根據は性的に成熟せる男の感情に求めらるべきであらう。が何故にそれは處女であつて女ではないか。こゝに我々は、原始人が戀愛に於て感じた神秘的な魔力の他に、彼らが處女の持つ特性に對して敏感であつたことを顧慮しなくてはならない。彼らは處女の魔力の純粹さを感じた。さうし

てそれが處女の魔力をより神聖なより犯し難いものとして感じさせた。古い信仰に於て處女がその童貞を神に捧げるといふ如き風習はこゝから出たのである。のみならず、恐らくは部族生活に於ける處女團の宗教的舞蹈の狂熱が投射せられて出來たらうと思はれる各地の女神は、すべて處女神であつた。戀の女神アフロディーテーさへも初めは亞細亞の處女神であつて、それをオリュムポスの戀の女神に變形させたのは、亞細亞の神々を輕く取扱つた古い叙事詩人の仕業であるらしい。即ち女神の初まりは、母神であるか或は處女神であつたといふことが出來るのである。

この母神と處女神とは早くより結合した。あらゆる生命を産み出す大地聖母は、夫によつて産むのではない。またその永遠に新しい懷妊の力は永遠の處女のそれである。かくて大地聖母は同時に童貞であつた。父が問題とされずたゞ母系によつてのみ子孫が數へられた時代、男を知る事と懷妊との間の必然の關係が認識されず、懷妊が或魔力によると信ぜられた時代、その時代にあつては處女にして母であるといふことは人を驚かせる矛盾ではなかつた。むしろそれは、母の魔力と處女の魔力とを一つの姿に具體化せしめるところの、最も好ましい觀念であつた。かくして小亞細亞の大いなる母キュベレーやデーメーテールも、印度の母神マイアも埃及の母神イシスも、すべて處女神であつた。

救主の信仰は多くこの後に起つてくる。さうしてこの救主の素性が問題となるに至つたとき、救主處女説は童貞なる母に結びつくのである。何故なら、救主がその部族自身の人格化である場合には、その母は人間であり得ない。かくの如き偉大なるものを生み得るものは大地であるところの處女のほかにない。――これが素朴人の論理である。またもし救主が或實在の人間の神化であつたならば、恐らくその母は記憶せられてゐたであらう。しかしその父については何人も知らずまた問はなかつたであらう。そこでこの人間の母は、いかにしてこの超人的な救主を産んだか。いふまでもなく神によつて。神が撰ぶのは清淨な處女でなくてはならない。神がこの處女に幸ひする、さうしてその生れるまで人間の男に觸れることを禁ずる。――童貞なる大地聖母の信ぜられる世界に於て、このような童貞の母を想像するのは何の不思議でもない。

これが童貞の母の歴史である。それはあらゆる民族の神話を通じて流れてゐる。遠い極東の我々の神話さへもその例に洩れない。天神天照大神は明かに童貞にして母である。

人類の歴史に於てこの童貞の母をいかに古くまで溯り得るかは明かでない。原始的宗教意識發達の順序がもし人、地、天であるならば、即ち性に起因するものが最も古く、次で食物に起因するものが續き、最後に天體への驚歎に基くものが來るとするならば、童貞の母は極めて早い段階に現はれたと見られなくてはならぬ。がそれは各民族の文化の發達段階に添うて起る順序であつて、その文化自身の古さとは無關係である。現代世界の文明國民の如きは、西暦紀元前後になほ悉く原始的狀態に留まつてゐたのである。だから我々が人類の歴史を溯つて童貞の母を探らうと思ふならば、古い文化國民に於けるその痕跡を辿らねばならぬ。さうして我々の辿り得る痕跡の最も古いものは、黄道十二宮に於けるかの處女宮である。

黄道十二宮の起源については、我々は何事も知らない。しかし天文についての詳しい知識は、今より六千年以前に既にカルデヤに於て發達してゐた。さうしてそれはバビロニア、アッシリアに傳はり、他方では埃及に於て發達した。黄道十二宮の名がいづれの時代に名づけられたかは解らないにしても、とにかくそれは我々の文獻の達し得るよりも遙かに古い。

ところでこの十二星座中の處女星座は、そもそも何によつて名づけられたものであらうか。希臘のヘーシオドスによればこの星座はゼウスの娘ディケーであり、他の者によればそれは處女神デーメーテールである。がこれらは希臘人が既に存する處女宮の名によつて構想したものと說くことも出來るであらう。たゞ最初にこのY字形の星座を處女と命名した理由のみはこれまで說くすべがなかつた。

この問に答へる唯一の手がゝりは冬至とこの星座との關係である。冬至の夜は非常に古い時代から知られてゐる。この夜の正子に太陽は新しく生れる——即ちこの時から日がのび始める。(さうして多くの救主神は、ほゞこの日を誕生日とし

てゐる。基督教のクリスマスはこの誕生日の模倣である)。ところでこの太陽誕生の瞬間には、恒星シリウスが丁度子午線上に來る。(現在では少しくずれてゐるが、天文學者の計算によれば、ほゞ三千年前には丁度正確に子午線上に來たのである)。さうしてまた丁度この瞬間に、東方の地平線からは、處女星座が半ばその姿を現はす。太陽、或はあらゆる生物に生命を與へるものの誕生と、さうして處女と。——こゝに處女宮の名の意義が存するのではなからうか。

太陽誕生と處女宮との天文的關係は、聖母マリアの傳説に明かに取り入れられてゐる。東の博士たちが星を見て「ユダヤ人の王」の誕生を知り、それをたづねて行つたとき、星は丁度幼兒のゐるところの上に留まつた。これは子午線上の恒星シリウスである。また埃及のアレクサンドリアでは、幼兒ホルスを抱ける母神イシスの崇拜が、やがてそのまゝ幼兒を抱ける聖母マリアの崇拜に變り、それで歐羅巴の祭儀に入り込んだ。ところで埃及デンデラーの殿堂に描かれた星座圖には麥の穗を持つた女によつて處女星座を現はした傍に、幼兒ホルスを抱けるイシスの像が畫き添えてあつたといふ。ホルスは救主神であつてその誕生日は冬至である。これらの絲を辿れば聖母マリアは處女宮に連絡する。がこれは處女星座が童貞の母であることの後代の證據である。それより恐らく數千年前にこの星座が處女と命名されるとき、果して同じ意義を以てしたかどうかは、この證據では解らない。しかし「處女」といふ名の解釋は他に道がないのではなからうか。

もしこの解釋が當つてゐるとすれば、處女といふ星座の名にはながい前歴史があると見なければならない。天文の智識が進み天體の崇拜が起るまでには、恐らく性及び動物植物に關する崇拜があつたであらう。さうしてそこには恐らく處女の崇拜母の崇拜があり、また童貞なる母の崇拜があつたであらう。でなければ太陽誕生とこの星座との關係が驚異の感情を呼び起した時にも、この星座に「處女」といふ名を與へる筈はないからである。

かくて我々は「童貞の母」なる觀念が、人類の精神文化の古いと同等に古いものであることを認めなければならない。

三

童貞なる聖母マリアは歷史的人物ではなくして想像の所産である。が同じき想像は既に幾千年も古くより人間の心に働いてゐた。さうしてそれは性と食物とのための人間の努力に歸することが出來る。――我々はこゝから童貞聖母なるものの意義が結局性と食物とに歸すると結論し得るであらうか。

人は性と食物とが人生の根本事實であり、そのための努力から派生する想像力の所産は、この根本事實の前には第二義のものに過ぎぬといふ。しかし感覺的に認知し得られる性と食物の事實が、想像力によつて作り出された童貞聖母よりも一層根本的である、或は一層意義深い、と云ひ得る權利はどこにあるであらう。古來無數の男女が、童貞聖母に奉仕するためには、性を捨離し能ふ限りの粗食に甘んじた。さうして彼らは幸福であつた。人はそれを迷信による理性の昏迷として斥けようとするかも知れない。けれども性と食物とが根本的であり、童貞聖母が迷妄であると立證せられない限り、それを理性の昏迷と呼ぶことは出來ないのである。

なるほど童貞聖母は想像の産物であつて現實的に存在するものではない。だから現實的に存在し外的知覺によつて經驗せられるものでなくては眞實でないといふ立場から見れば、童貞聖母は一つの妄想に過ぎぬであらう。けれども存在に對して眞髓、事實に對して本質を認めようとするものには、そこに全然異つた立場を取ることが出來る。本質の把捉にとつては、與へられたものが知覺的經驗的に與へられてゐるか或は想像力によつて與へられてゐるかは問はないのである。即ち想像の産物に對しても、現前の事物に對すると同じく、人はそこに純粹の本質を根源的に觀得することが出來るのである。それが現實の世界に於て絕對に經驗し得られないものであらうとも、その本質の觀得には何のさまたげともならない。從つて童貞聖母といふ如きものも、現代の自然科學が處女懷胎の可能を全然否定しようと、或は新しい研究によつてその

可能を立證しまた實際に處女を懷胎せしめ得ようと、それによつて本質に何等の增減も起らない。かくの如き研究によつて影響をうけるのは、童貞聖母マリアが歷史的人物として現實的に存在したか否かを問題とするところの考察のみである。そこでは事實としての處女懷胎が事實としての童貞聖母を決定する。が童貞聖母の事實よりも本質を認識しようとするものは、一切の事實認識と離れて、たゞその本質を觀得すればよいのである。

原始民族がその生存の努力から、卽ち饑餓の征服と生殖との努力から、母神や處女神を想像し出したといふことは認めてよい。しかし彼らにとつて生存といふ經驗的事實が生の本質よりも一層根本的であつたとはいふことが出來ない。例へば彼らが饑餓に襲はれる、自分たちの無力を痛感する。外なる或大いなる力に縋る。――この場合食欲が機緣となつて外なる力を要求したとは云へるであらう。しかし食欲が原理となつてその要求が動いたと云へるであらうか。食物が欲しいといふ事實は母神崇拜を生み出す機緣とはなつても根據となることは出來ない。彼らが超人的存在を想像するのは經驗を根據としてではなく本質直觀を根據としてである。彼らは多くの人間の母を經驗する、母と子との關係の不思議に强い愛を經驗する。しかしこの個々の經驗からはたゞ個々の母が知られるに過ぎない。彼らがこの個々の母の本質を直觀するに至つてそこに個々の母ではなく「母一般」が把捉されるのである。さうしてこの「母一般」を彼らは理論の形に於てではなく、再び表象の形に於て確定する。そこに彼らの想像の働きが動くのである。だからたとへ性と食物とが機緣となつてをるにもしろ、母神處女神の類は全然異つた原理より出發したものと認められなくてはならない。

「母一般」としての母神が更に「生むもの一般」としての大地聖母となり、「處女一般」としての處女神に結びつき「人類を救ふもの一般」として救主の母となつて、そこに「童貞なる聖母」が結晶する。この開展の原動力は常に本質の直觀であつて經驗ではない。「母」の本質は經驗的な母に於て直觀せられるのではあるが、しかしいかなる現實の母にも見られない完全な慈愛と救ひの力とを內容とする。「處女」の本質は男を知らない現實の女に於て直觀せられるのではあるが、しかし

たゞ男を知らないといふことのみがその内容ではなく、いかなる現實の女にも見られない清淨さ、生々しい美しさ、「男」の魂を充たすに足る純粹な女らしさ、云はゞ完全な戀愛――情欲に於ける如く過ぎ易きものではなくし、永遠に初戀の瞬間を持續せる如き戀愛――を内容とする。處女にして母なるものの本質は、現實の母と現實の處女との結合した場合のような矛盾に煩はされることなく、母の本質と處女の本質とを一つに統一せるものである。この完全なる愛と美とのイデーが、幾千年の昔より人類の願望の的となり、幾度となく想像力によつて具體化された。その最後のものが童貞マリアなのである。

我々は現實の世界に於て完全なるものを經驗することは出來ない。即ち現實の世界には完全なるものは存在しない。しかも人類がそれを求めるのは、完全なるもののイデーが彼らの内に働くからである。個々の母を經驗しながら「母一般」を直觀し、それを更に他の直觀と結合しつゝ、遂に「處女にして母」なるものに於て完全なる愛と美とを直觀するに至るのは、内に働くイデーの仕業でなくてはならない。かくイデーが自らを求める働きこそ、即ちイデーへの郷愁こそ、人類の精神的努力の根柢である。從つて慈悲深く美しき童貞聖母マリアの崇拜は、人間の本然より出づるものであつて迷信ではない。もとより在來のマリア崇拜者はマリアを想像の産物とは考へなかつた。がそれは、小説の主人公のために涙を流す讀者がその瞬間にこれを想像の産物として反省しないのと同樣であつて、深くとがめるに當らない。マリアを象徴として本質を把捉しようとするものには、事實認識の誤りは妨げとはならないからである。

童貞聖母は女といふ概念から處女性と母性とを抽出して作つた女の一典型なのではない。それは女以上のものである。人類を永遠に引き行くところのイデーの象徴である。ファウストの結句に云ふところの、我々を引き行く「永遠に女性なるもの」とはまさにこれであらう。女を材料として作られたもののうち、この童貞聖母の象徴よりもまさつたものはない。がこの象徴のために用ゐられたものが、女の諸性質のうちの母性と處女性とであることは、女が何に於て價値を持つかを最

も雄辯に語つたものと見られよう。女性の前に掲げらるべき理想は、この價値のうちに求めらるべきである。中世人の見たヴィナスを理想とする如き女たちに對しては、奇才オットー・ワイニンゲルの言葉を呈するのが至當であらう。「肉交に於て女の最も深い墮落がある、愛に於て女の最高なる昂揚がある。女が肉交を欲求して愛を欲求しないことは、女が墮落を欲して高められるを欲しないことを意味する。婦人解放の最後の敵は婦人である。」

附記

わたくしはこの一篇を大地震前の靜かな氣持で丁度大地震の前日に脱稿した。即日改造社へ郵送したところ、それとすれちがひに九月一日の午前十一時頃K女史が取りに見えた。自分はこの原稿が丁度改造社へ屆いてゐる頃である旨を答へた。間もなく大地震が襲來し、大火災が起つた。自分はこの原稿もその火に燒かれたことと思つて、この原稿のために費した八月末の數日を幾分の哀惜のこゝろで回顧してゐた。

燒け殘つたこの原稿を地震後の落ちつかぬ氣持で讀み返したとき、わたくしはそこに書きあらためるべきものは見出さなかつた。しかしもし地震後に書いたならば、所論の抑揚はよほど違つてゐるだらうことを思はぬわけには行かなかつた。地震後數日の間、死の脅威によつて生活が緊張してゐた時、我々が女性に於て認めたものは母性と處女性との昂揚であつた。肉欲の原理としての女性は一時その姿をかくした。わたくしはこの印象から、最後の數行をもつと詳細に書くべきであつたと思ふのである。

一

彼方の世界と婦人

原田實

私は、盡くるない女性の力を感ずる。人の子として、殊にまた男として、少なくも自分がたいらなすなほな心持ちでゐる場合には、女性の限りない力を感じないではゐられない。生活の廣野に、日光の如く、靜かに、明るく、そして限りなく、降りそゝいでゐる女性の力を感じないではゐられないのである。

母親は子供の神である。娘は青年の燈火である。妻は夫の幸福の源である。而して、祖母の笑顔は、萬人の慰安の泉である。昔から、幾多の詩人に依つて、かやうな美はしい言葉を以て讚えられて來た女性の力を、私は、聊かも疑ふ氣にはなれない。

或る人は、この女性の力を、太陽の力にたとへ、また太洋の姿になぞらへた。太陽の如く暖かく、太洋の如くおほらかで、またその何れもの如くに神秘で無限で、無盡藏な生産の可能に輝やいてゐるといふのである。かやうな褒め力も、決して過褒には當らない。まことに、事實のまゝを、事實のまゝに正しく、形容してゐるに過ぎないのだ。

だが、遺憾なことには、この女性の力が、如何なる婦人に依つても、すべて同樣に、十分に常に發揮されるといふわけでない。婦人に依つて異なるのだ。或る婦人は十分にこの力を發揮する。或る婦人は極く僅かにこの力を發揮する。また

或る婦人は、全然この力を發揮しない場合がある。

またこの力の發揮される度合が、時代に依つて異なることもある。或る時代は、この力に惠まれ、或る時代はこの力に惠まれない場合があるのだ。

然らば、現代はその如何なる時代であらうか。果して、この女性の力が、どれだけ、現代の現實の多くの婦人達に依つて、發揮され具現されてゐるであらうか。私達の周圍の多くの婦人達の心身のうちに、この女性の力が、果してどれだけ育ち伸びつゝあるであらうか。私はこのことを考へると寂しくなる。實は、多くの現代の婦人達の心身のうちに於て、この力が、その種子のまゝで萎え凋んでしまひつゝあるのではないかと、おそれるのである。

なぜならば、この女性の力は、女性の眞の生命の生長から發現する力だからである。女性そのものが、本然の女性として育つた場合、女性そのものゝ生活を生活した場合に、始めて發現し來たる力だからである。而して、私達の周圍の多くの婦人達は、そのおのれの獨自の生命をわれとわれに踏みにぢつて、徒らに奴隷となつて他の頤使のまゝに動かんことを欲し、或ひは他の己れよりも極く僅かに大きやかに見えるところの力に頼らんことを願つたりして、眞に己れの心身のうちに秘蔵かれてあるところの、女性そのものゝ獨自の生命の發現といふことには、殆ど着眼せず、從つてさやう欲することもせず、ましてさやう努力するが如きことがないからである。

子供のあまえ得る母親、男の調法がり得る女、男の戯れ得る女、さういふ婦人のみが徒らに多くして、眞に、依つて以て子供の生命が昂揚し、依つて以て男の心がひきしまり、男の創造力が倍加されるやうな婦人の稀れであることが、現代の正體ではないか。

二

私は、最初にかう書いた――母親は子供の神であり、娘は青年の燈火であり、妻は夫の幸福の源であり、而して、祖母の笑顏は萬人の慰安の泉であると。女性の力をかやうな言葉で褒めた人があつたからである。

然し、この言葉は、この褒め方は、實は、少しく誤解を招き易いおそれがある。なぜならば、子供の爲め、青年の爲め、夫の爲め、また萬人の爲めに、有力有意義なものであるから、女性の力は偉いなるものであるとでも、謂ふかのやうに、とられさうな危險があるからである。だが、さういふ風に解釋してはならない。飽くまで、女性そのもの〻本然の生命から昂揚發現する力が、そのものとして先づ偉いなるものであるが故に、それ故にそれが、子供の神ともなつて活き、青年の燈火ともなつて活き、夫の幸福の源泉ともなつて感ぜられ、萬人の慰安の泉ともなつて感ぜられるのであるといふ意味であることを、謬りなく理解して貰はなくてはならない。

子供の奴隷となり、或ひは子供の爲めに一身を犧牲にすることが、女性の本然の生活であると考へてはならぬ。夫の奴隷となり、或ひは夫の爲めに一身を犧牲にすることが、女性の本然の生活であると考へてはならぬのである。女性の生命そのものから發揚する力に依つて、おのづからに、子供が彼女のうちに神を見出し、夫が彼女のうちに幸福の源泉を發見するといふのでなければならない。奴隷は主人の便利であるかも知れぬ。然しながら、最高限に奴隷が主人の便利を營み得た場合とても、その主人の創造力の範圍を超えることは出來ない。然るに女性の力は、無盡藏の可能に輝き、子供を子供以上に育て、夫を夫以上に昂揚せしめ、萬人を萬人以上に向上せしめる活きをなす。この力強い女性の力が、今の多くの婦人達から失はれてゐると思はれるのである。私達は、この力を復活せしめなくてはならぬ。

それには、既にも述べたとほり、私達の周圍の多くの女性たちが、眞にその己れたちの心身のうちに種蒔かれてゐるところの、女性そのもの〻獨自の生命の發現といふことに着眼して、あらゆる誠實と勤勉と努力とをこの一方側に向つて差

し向けるやうにならなくてはならぬ。現代の多くの婦人たちは、決して誠實でないわけではない。勤勉でないわけではない。努力が足らぬわけではない。たゞその誠實や勤勉や努力の方向が正しくないのである、彼女たちの生活上の根本の着眼がほんたうでないのである。

だから、彼女たちの誠實や勤勉や努力は、殆ど皆、奴隷や寄生蟲の誠實であり、勤勉であり、努力であるのだ。若い今の婦人を攻撃するものは、先づ第一に、その容姿が華美に流れて、精神内容の充實を忘却し、徒らに浮華輕佻に墮ちてゐることを擧げて、これを責めるのが常である。けれどもこの責め方を私は、正しい、少なくも賢明な責め方だとは思はない。なぜなら、彼女たちが、その容姿をつくることに專心して、精神の充實をおろそかにするといつても、それは、彼女たちの誠實の現はれであり勤勉の結果であり努力の營みであるにほかならぬからである。即ち傭主や主人の意をかなへる爲めにする奴隷や寄生蟲やの誠實なり勤勉なり努力なりだ。だから、浮華輕佻の責めは、當然、その傭主なり主人なりの方で負ふべきである。彼女たちのその浮華輕佻に、眼を細くし、鼻毛をのばして、ほく／＼ものであるところの傭主や主人やがあればこそ、彼女たちは、その意を迎へる爲めに浮華にもなり輕佻にもなるのだ。浮華輕佻を責めるなら、よろしく傭主たり主人たる男子たちを責むべきだらう。

だが然しながら、己れたちの心身のうちに種蒔かれたる女性そのものゝ力を等閑に附して、徒らに奴隷の境涯にその身を墮してゐることについては、婦人たちは峻嚴なる自責を感ぜなくてはならぬ。如何樣の辯護を試みようとも、このことだけは、その究極の責任は婦人自身が負はねばならぬ。そして、その墮落した奴隷の境涯から、廣大な獨自の世界に飛躍すべく、全力を注がなくてはならぬ。彼女たちの誠實と勤勉と努力とを以てすれば、その努力は必ずや、わけもなく奏効するであらうと信ずる。

三

私の述べ方は餘りに抽象的に進んでゐるやうである。少しく具體的に事柄を省みることにしよう。

今の多くの婦人たちが、その容姿の美を徒らに模倣的に競ふといふ話は前に出た。そして私は、それが、奴隷としての彼女たちの誠實なる努力であるといふことを説いた。然し若し彼女たちのこの容姿美への熱中が、眞に己れ獨自の美を創造しようとの努力的熱中であるならば、即ち、主人の嗜好に甘えんとする努力ではなくて、寧ろ男女をひきくるめての人類の世界を高むべくより高貴なる美を寄與せんとの勇健なる創造的努力であるならば、私達は歡びと感謝とを以てこれを迎へねばならぬ。かくあらんことこそ、私達の婦人に對する衷心の願望であるのである。

然るに、遺憾ながら、多くの婦人たちは、男女の主從的關係の世界のみを知つてゐて、それの彼方に男女相提携して向上し一路に進むべき人類の創造的世界のあることを知らないのである。この世界を知り、この世界に生きんとする時に於て始めて、婦人達は女性本然の生命に生きようと發願するに至るであらう。

婦人たちが、傳統的俗的な眼前寸尺の世界のみに着眼して、更に大いなる彼方の世界に開眼してゐないといふ例證は、更にこのほかに數へきれぬほどである。例へば、彼女たちのうちに、たま〱質素簡易の生活を提唱するものがあるとする。すると、その理由と目的とは、費用の節約と手數の省略といふ位を出でない。その質素簡易の生活が人間の生命の育成向上にとつて、果してどれだけの意義を有するものであるかに就いては、考慮しない。費用と手數とを超えた彼方の世界を知らぬのである。また物價の高低に依つて彼女達は一喜一憂する。然しながら單に一喜一憂するのみで、物價が己れたちもまたその一員であるところの社會的關係から定められるものであることに着眼しない。彼方の世界を思はぬのだ。

また彼女たちは、傳統的な階級に痛く拘泥する。而もその階級が何の力で何の爲めに發生したものであるかを知らない即ちその階級を支配する世界のあることを知らない。從つて、傳統的な階級をば人の力では動かし得ないものであるかの

如くに考へるのだ。これもまた彼女たちが彼方の世界に開眼しない一つの例證である。

若い女學校の生徒たちを見ても、早く既にこの彼方の世界に對する眼が、生氣なく鈍く閉ぢてしまつてゐる、第一に彼女たちは、學校の試驗を過常におそれる。試驗の一ケ月も二ケ月も前から試驗をおそれる。而も試驗よりも更にもつと〱おそれて然るべき事柄が、一歩學校の門を出づれば待つてゐるにも拘らず、それには氣がつかない。試驗さへ出來ればそれですべてが安心かの如くに考へてゐるのが多い。これも、彼女たちがひとへ彼方の世界に、開眼は勿論、着眼もしてゐない證據である。試驗の彼方にある大いなる世界は彼女たちの視野には、全くはいつてゐないのである。これでは、彼女たちが如何に誠實に勤勉に試驗に努力したとて、彼女たち自身獨自の生命をみづ〱しく生かし育てゝ行くことが出來る筈がないのである。

四

先き頃の大變災に際しては、敢へて婦人のみとは言はず、人々殆ど皆な非常な缺陷を暴露して、誰人も皆な一層の奮勵を以て正しい修養に努めねばならぬことを反省させられたのであつたが、婦人達もまた隨分と缺陷を暴露した。殊に、婦人達が、眼前寸尺の世界のみに着眼して、彼方の世界に開眼せず、遠慮なく、深慮なく、徒らに周章てふためいた事實が少なくない。その爲めに、自らの生命をも空しくし、夫の生命をも失はしめたといふやうな例も、少なくなく傳へられてゐる。

そのうち、私の最も寂しくおもうたことの一つは、婦人が誠實なる努力のうちに、その短見をまざ〱と暴露してゐた次ぎの一例だ。これは、或る婦人專門學校の當事者から直接に聞いた話であるが、その學校の女學生中あの急激な火災に襲はれたものが數人あつたが、それらが言ひあはせたやうに、あらゆる物を燒失したにも拘らず、學校のノートだけは、みな腰に卷きつけて持ち出してゐたといふ一事である。私はこれをきいて、非常な寂しさを感じた。或る人々は、學生が

學生の生活から離すべからざるノートをば、あらゆる犧牲を拂つて安全に取り出したといふことを稱讃するかも知れぬが私は、この事實も畢竟するに彼女たちが試驗を過當におそれてゐることを示してゐる一事例に過ぎぬと思ふて、にがくしく思はざるを得ないのである。私は、學校のノートを特に輕視しようとするものではないが、か〻る大事變の場合に、而かも他のすべての物を犧牲にしてまで保持せねばならぬほど貴重なものとは考へない。その女學生たちとても、若し試驗の彼方に、更に大いなる、そして更に意味の深い、世界の厳存するといふことを知つてゐたならば、おそらくは、講義のノート位にかほどまでに執着しなかつたらうと考へるのである。彼女たちは試驗制度の奴隷となつて、試驗が何故に發生し、何故に行はれつ〻ある制度であるか、即ち他に試驗の制度を支配する世界のあることをば忘れてゐるのである。

また、私の知つてゐる或る母親は、同じく先頃の變災で、全燒の厄に遭うたが、その繰り言のうちで、せめて娘の女學校の制服だけでも出してやりたかつた。もう學校が始まるといふのに制服がないので娘が悲しんでゐる、買はうにも、その制服の布地が當分手に入らないと言ふて悲しんでゐた。これが冗談でなく、而かも母親の娘に對する誠實なる愛情から湧き出た悲歎だ。制服を支配する彼方の世界のあることを知らなければこそ、このやうな空の悲歎をもしなければならぬ而も、この種の徒らな悲歎に身も心も瘦せ細るやうな思ひをしたり、また現にもしてゐるやうな婦人たちが、他にもおそらくは少なくないことであらうと思ふ。これ皆な、奴隷の誠實であり、奴隷の勤勉や努力であるに過ぎぬものである。

五

このやうな有樣でどうして、婦人たちが、女性本來の獨自の生命を育成向上せしめることが出來ようか。その生命が最高限度に育成向上したとしても、今の分では、その質に於てまたその量に於て、ともに、その主人たる男子なり傳統なり習俗なりが拂つてゐる創造力の範圍以上に發展昂揚することは出來ぬといふ奴隸的標準が、實に多くの現代の婦人達の旋

涯である。

婦人たちは、一刻も速くこの己れたちの境涯に反省の眼を向け、一大革命を以てその現在の生活を破らなければならぬ。而してそれには、何よりも先づ、眼前寸尺の世界を超えて、その上に、またその奥に、男女ともに各々その本然の力に依つて相ひ結び相ひ助けて育成向上せしめねばならぬ人類そのものゝ廣くして深い世界のあることを知り、その世界の一員として恥ぢもし誇りをも感じて、その獨自の創造的生活を營むべく努力するやうならなければならぬ。そこに始めて、婦人達の女性としての盡くるない力が發揚して來るのである。そして、子供は彼女のうちに神を見出し、青年は彼女のうちに燈火を見出し、夫は妻のうちに幸福の源泉を發見するやうにもなるのである。

私は盡くるない女性の力を感ずる。それ故に、私たちの周圍の今の多くの婦人たちが、眼前の世界を超えて、その上にその奧に、更に意味深い彼方の世界のあることに開眼せんことを要望して已み難いのである。



序破急

長谷川如是閑

女性の美に禮讃するのが醜いなら、王者の帝德を讃美するのは一層醜い。前者には敵國はないが、後者には敵國がある。

男子が道德によつて生きやうとするよりも、女子が美によつて生きやうとする方が自然だ。だから前者は殆んど破綻せずには居ないが、後者は往々無事に通る。

女性は靜的に美でも、動的に美でなければ美人であり得ない。同時に、靜的に美でなくとも動的に美ならば美人であり得る。

色と線との美に於て女性美以上のものはない。それが滅多に示現されない點に於ても女性美以上のものはない。

女性美が自然を美しくする範圍の廣さは驚くべきものだ。美人の馬士が一人ゐると、富士の裾野全體を美しくする。

女子を愛することの出來ない生物は何ものをも愛することが出來ない。何ものをも愛することが出來ない癖に、女子を愛することだけは出來る男といふ生物はその例外だ。

女子に生かされた男子は愈男性的になる。男子に生かされた女子は愈女性的になる。

男子は最も正しく考へた時に、男子の考を考へてゐる。女子が最も正しく考へた時には、正しい考を考へてゐる。が、無論それは滅多にないことだ。

哲人の宇宙觀や人性觀を最も徹底的に打ち破つたものは彼等の妻や妾だつた。それは女性の成し遂げた最も痛快な仕事の一つだ。

哲人の宇宙觀や人生觀は、外の哲人によつてたやすく打ち破られる。女性の宇宙觀や人生觀は誰れにも打ち破られない。何人も無いものを打ち破ることは出來ないのだから。女性の宇宙觀、人生觀ほど常勝的のものはない。

女性の信念は誰れにも破られない。これを破り得たと思つてゐる男は、自分の信念が破られてゐるのを知らないのだ。

非常にいゝ女性ほどいゝものはない。非常に惡い女性ほど惡いものはない。が前者の稀有であるやうに後者も鮮い。

男子は、一個の女性を禮讃するにその全生命を以てするが、全體の女性を禮讃するには舌のみを用ゐる。

女子が男子に對する場合に、男が思つてゐるほど「美」の武器を用ゐてはゐない。男子が女子に對する場合に、女が思つてゐるほど「美」の武器にやられてはゐない。

「女子が居なかつたら戰爭の起ることがもつと少なかつたらう。」などといふよりは、「女子が子供を產まなかつたら戰爭は絕對に起らなかつたらう。」といふ方が科學的に正しい。

女性禮讚者を警戒しなければいけない。彼れは往々、或る女性を打ちのめして他の女性を禮讚してゐるのだ。

戀をしてゐる男は決して女性禮讚者にはなれない。彼れは只一人を除いたすべての女性を侮辱したがる。

美しい女ほど幸福な人間はない。自分自身に滿足の出來る人間は彼女だけだ。さうして、男を一人だけ、彼女同樣の幸福な人間にすることも出來る。それらは如何なる聖者にもなし得なかつたことだ。

自分の知識や道德を誇る男よりも、自分の肉體を誇る女の方が遙かにいゝ。少くとも、誇られる方にとつて迷惑が少ない。場合によつては望ましい。

女性は美しいほどいゝ。いくら美しくても誰れも損しない。偶に損するものがあつても、當人は決して損したとは思はない。又同じ損をするなら美しい方が得だ。

罪することの出來ない人間は、赤子と女性とであるが、前者の大きくなつたのが後者なのではなく、後者の小さいのが前者なのでもない。

女は自分の道德で死ぬのに雜作もなさ相だが、その道德で生きるのがおツくうらしい。男はそのあべこべだ。

女性は民衆を好まない。が民衆の好むものを好む。彼女は英雄を好む。

女性が英雄を好むのは、英雄に征服されやうとしてゐるのではない、英雄を征服しやうとしてゐるのだ。

英雄の歷史に女性が附纒つてゐるのではない、女性の歷史に英雄が附纒つてゐるのだ。

英雄の帝國主義は、一時だけ地圖を染めるに過ぎないが、女性の國際主義は永久に人間を染めてしまう。

武器に護られた國旗よりも女の腰卷の方が、迅速に深刻に他民族を征服する。前者に威力がないのではない。後者が威力よりももつとずつと强いものを持つてゐるからだ。

國語の通じない所に、男は通用しないが、女はよく通用する。後者が前者よりも語學の才能があるからではない。男は舌だけを使はうとし、女は全身を使うからだ。

外國語の辭書は、男と書物又は女と書物の間に用ゐられるもので、男と女の間には用はない。

男性は感情を使ふべき場合に道理を使ひたがる。が決して使はない。女性は道理を使ふべき場合に感情を使ひたがる。さうして使う。

すべての人は感情に生きる。が女性と文化人とは、権利として感情に生きる。外の人達は仕方なしに感情に生きる。

生活は決して人間を疲らせない。生活をさせられないことが人間を疲らせる。これは歴史的事實だ。女性と文化人とは餘りに生活をしない爲めに疲らせられる。これも歴史的事實だ。

女性が決心したら恐ろしい。が幸ひに決してしない。

死なうと思ふのが女であり、死ぬのが男である。然し思はなくとも死なゝくともいゝ場合が多いのだから、取り返へしのつく前者の方が賢い。

「猫の寒むがるのと女の怖わがるのは嘘だ。」といふけれども、猫が炬燵を離れては生きられない風をし、女が男を離れては生きられない風をするのは事實だ。

男の嘘のバレたのは半文にもならないが、女の嘘はバレた時からFace-valueを持つ。

數理の通じない世界がある。男プラス女又は女プラス男は加せ算でいゝが、夫プラス妻又は妻プラス夫は減き算で出さねばならぬ。

男でゐて女ではなかつたらうかと疑はれてゐる歴史上の人物はないが、女でゐて男ではなかつたらうかと疑はれてゐる

人物はある――エリザベス女王――男性の女性化よりも女性の男性化の方が可能性が多い。

「國」と「性」とは人間に對して同じやうな働きをする。ガルスワシーによれば、――劇曲「リットル・マン」――イギリスといふ「國」は人間をエゴイストにし、アメリカといふ「國」は人間を廣目屋にし、ドイツといふ「國」は軍國主義者にし、オランダといふ「國」は樂天家にし、何處つ「國」の人でもない人間だけがヒューマンでゐられる。同樣に、男といふ「性」は人間を男性にし、女といふ「性」は人間を女性にし、男でも女でもない人だけが人間でゐられる。

「性」の名で許されてゐる罪惡は、「國」の名で許されてゐる罪惡に匹敵する。

女性の親類に軍國主義者と宗敎家とがある。此三者は、同じやうにファナティックであり、壓制家であり、同じやうに犧牲を要求し、血と特別の關係にある。さうして何れも、きらびやかな衣裳を好む。――昔支那に、鐵と通じて劍を産んだ女の話があるところを見ると、支那人は早くから此ことに氣づいてゐたらしい。

最も殘酷な復讐心をもつたものは、神話時代の神々と、人間時代の女性とである。けれども双方とも、祭り上げられることによつて溫和(おとな)しくされる。

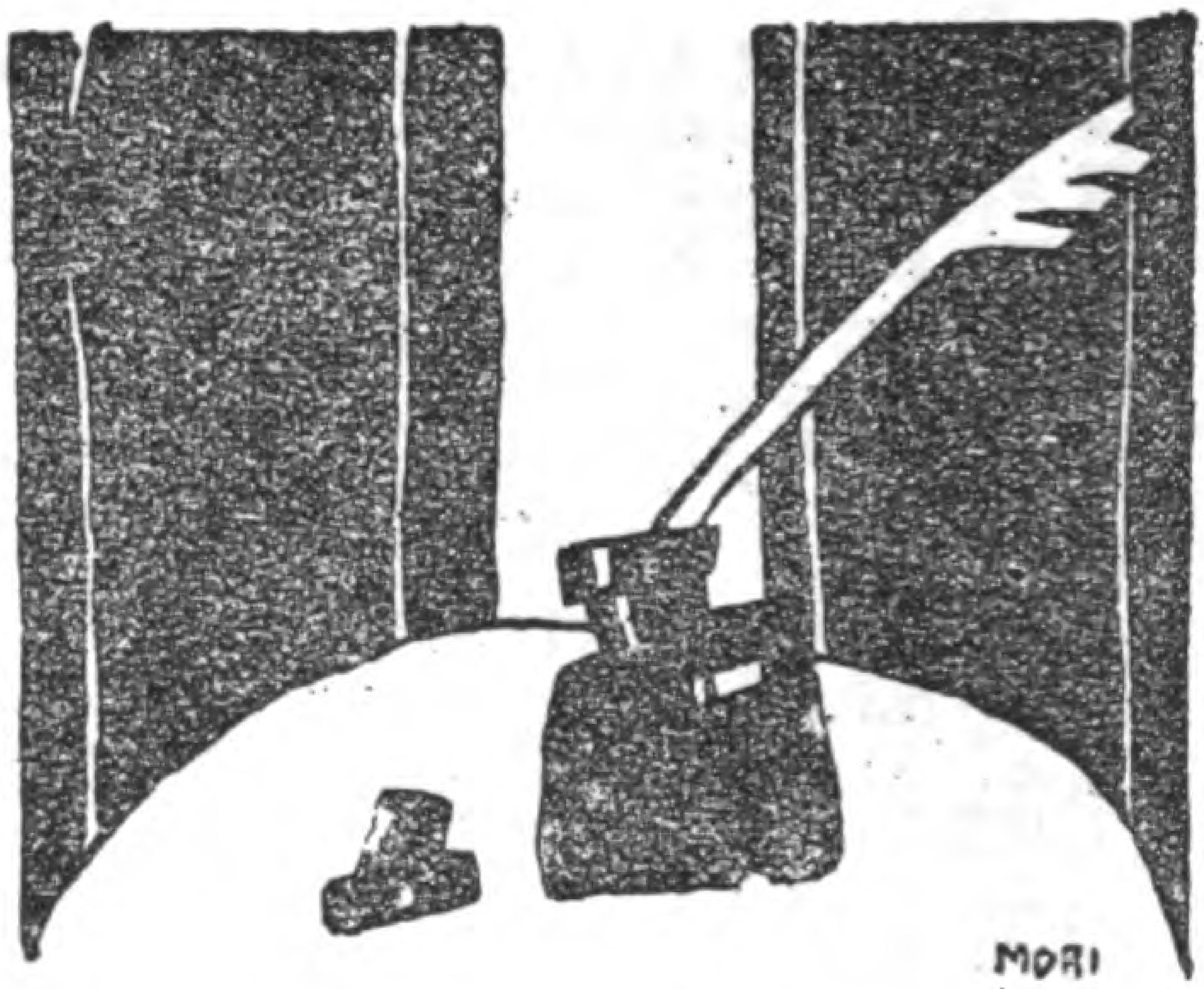
女は一つ所をくる／＼廻る、男も一つ所をくる／＼廻る。が女は内側の小さい輪を目まぐるしく廻り、男は外側の大きな輪をノソ／＼と廻る。女は何度息を切らしても又廻り出すが、男は一度息を切らせると參つてしまう。

女の心臓が早鐘をつけば、彼女は勝利の近づけることを知る。男の心臓が早鐘をつけば、彼れはたゞ鬪氣の昂進することを知るのみだ。」

男でなければ女、女でなければ男、それは餘りに窮屈である。

「お前は男か女か?!」そんな事を問ひ詰めるには及ばない。男にあるものは悉く女にあり、女にあるものは悉く男にあるたゞ形が違つてゐるだけだ。と解剖學者は云ふ。

恐ろしく眞白なものが動いてゐたら、それは女だと思へ。恐ろしく眞赤なものが動いてゐたら、それも矢張り女だと思へ。



男女關係の新標的

—女性改造談話會—

長谷川如是閑　千葉龜雄
平塚らいてふ　鷹野つぎ
久米正雄　佐藤春夫

佐藤　男女關係の新標的と言へば、大變漠然とした題ではあるが、併しその責任の大半は私にあるのです。一日女性改造の記者の方が見えて、何かよい問題がないだらうか、社の中では「藝術家と性道德」といふのはどうだらうかと言つてゐると聞いて、それでは內容の暗示するものが面白くない。文藝家だけが特に他の人と性道德の異る譯はないのだから、その問題はあまりジヤアナリズムで面白くないやうな結果もあると思ふ。そこで僕が題を「男女關係の新標的」と改めたのです。併しまたあとで考へてみると「新」と云つたつて別に新標的も舊標的もないといふやうにも考へられたが、まあさういふやうな譯で、僕が餘計なことを言つたばかりに、今夜の會に出席させられたのです。ついでだから言つておくが、文藝家だからと云つて別に變つたものではない、それだのに政治家や經濟學者の戀愛事件よりも藝術家の場合には新聞で色々に取扱はれる、つまり新聞などで一寸冷かされたり、笑はれたりされる地位におかれ

てあるやうに思ふが、考へて見るとこれは大問題だ、性道德を藝術家の專門だといふやうな取扱ひ方や、見方をされるのは僕には不愉快だ、それなら僕が行つて、文藝家のために大いに論じようとつい言つてしまつたのが、僕が今夜の會にひつぱり出された動機なんです。

千葉　今佐藤さんのいはれたのに、僕はジヤアナリストとして話して見ます。新聞記者の心理のあるところを明かにすれば、私共のは皆が皆何も文藝家の戀愛事件だから面白いから書いてやれと言ふのではない、藝術品は人間心理の取扱ひ方が微妙であるやうに、藝術家その人が、他の人に比べてデリケートな心理を持つてゐる。でさういふ人が實際戀愛問題にぶつかつたら、普通の學者や政治家などの直線的にゆく人に比べ一非常に複雜な內容を持つてゐるだらうといふところから、殊に興味を持つて取扱ふのです。たゞそれを書く人がジヤアナリステツクに書くから、さういふ風にとられるので、藝術家嘲笑の意味ではなく、その中から意義あるものを搜し出さうとする氣持が、今の年若い記者などに相應に出てゐると思ふ。十數年先に山田美妙齋氏と田澤稻舟氏夫人のラブ、アツフエヤを書いた新聞記者などに比べれば、今日武者小路氏や、有島氏などの戀愛事件を書いた記事は、その取扱ふ態度の上に、同じ調子つぺらでも餘程內容が厚味を持つてきてゐると思ふ。

佐藤　社會が默つてゐると、內から發してゆきたいといふ氣持が自然藝術家の中に起ると思ふ、だからこれは興味を持つて迎へられるだらうと思はれるやうなことは、却つて端で騷ぐのを控へて貰ひたいといふのが僕の希望なんだが……この問題が社會からもてるだらうと思ふと僕などは却つて厭になつて何も言へなくなつてしまふ、やはり藝術家の場合などはそつとしておいて貰ひたい。

千葉　しかし新聞記者になると、藝術家がそれを嫌はうが、好むまいが、そんなことには頓着なく、藝術家の場合だと、前に云つたやうな意義で、殊に讀者がそれを迎へるから新聞が書く。或はもつと低い觀察になると、たゞ面白いから、變つてゐるから書くといふ場合も多いやうである。

久米　僕などはやはり普通の冷かしだといふひがみを持つなア。どうも善意には解釋が出來ない場合が多いなア。

佐藤　僕も持つ。

久米　僕の見方から言へば、藝術家の中にもさういふ事に對する潔癖は階段があるから、一概には言へないけれど、噂に上るのも一種の人德の至すところで仕方がないとは思つ

てゐる。此頃ではそれを享樂しようとする氣持にさへなりつゝある。さうでも思はなければやり切れないからね。

佐藤　けれど、久米君の場合などは人氣を受けてゐるからいいが、僕などは人氣を受けてゐないんだ。これは人から聞いた話で事實にあつてゐるかどうか知らないが——ロダンが晩年になつてから、ある小さな國の王女とさういふ關係をひき起して墮落をしたといふことだが、その時、新聞にはそれを扱はなかつた。文壇ゴシツプにすら載らなかつた。併し彼を知る者のみの間には、しきりに噂があつたといふが、佐藤春夫或は有島、武者小路がどんな人間か知らない人から、その當時だけその問題に興味を持たれるといふことは社會的にもなつてないし、當事者にとつて不愉快なことだ。動機の如何に關らず、新聞には常人の動機とまるで反對のものを現すかも知れない。

千葉　それはさうでせう。勿論記者が唯興味本位に書く場合も多い。さういふものは是認すべき動機さへもない。ですから、どの途からも辯護は出來ませんね。

佐藤　それから端から見たら滑稽なことでも、當人には最も嚴肅なことかも知れない。それあ當人が要求するやうには嚴肅に書いてくれないだらうが、ははあ……

長谷川　一體今日の問題は……？

佐藤　これから逐々話を進めるのです。

千葉　今迄のは序論です。平塚さんは我々より先輩ですが、お考へはどうですか？

平塚　ひやかされるとか、不眞面目に取扱はれるとかいふ點では婦人の方が藝術家以上でせう。私どもはこの意味で二重にジヤアナリズムのためにいやな思ひをさせられてゐます。けれどあんまり度重るので、仕舞には又かといふ位で、私などはもう心の中まではとり上げないことにしてゐるのです。

長谷川　まるつきり書かれなかつたら藝術家は不愉快ではないですか。

佐藤　いや話にならなかつたら吾々が話にするから。

久米　縛られるより自首した方がいい、と同じ理窟でね。

平塚　言はれるのがいやなのぢやなくて、その言ひ方がいやなのでせう。

長谷川　自分の思ふやうに評判をしてくれないと言ふのですか。

佐藤　蟲の好い話かも知れないが、どんな間違ひがないとは言へない。

平塚　全然間違ひがなかつたら却つて無氣味なことではないでせうか。

久米　ゆくりなくも思ひ出した一事實がある。何時になるか、改造の發刊同時だつたが改造のゴシップに、僕がカフエーライオンの女給に子を生ませたといふことが書かれた。勿論全く事實無根で、僕はあの時極力糺彈しようと思つた。實際あの時は怒つたですよ。こんなことが今夜の問題に出たのも何かの因緣だらう。——だから。間違ひがないどころか、大間違ひも甚しいと云はれなければならない。

千葉　それからもう一つ疑ひがある。それは藝術家も凡ての人と同樣社會人である以上、その人が、多少目につくと思はれる社會生活を採り上げた場合に、社會批判の目標になるのは止むをえないことではなからうか。それは藝術家だから特に採り上げられるばかりではなく、その場合の社會批判はどんな社會人も、社會人として、當然享け取らねばならぬ義務ではなからうか。また新聞や雜誌はその機能として、少くとも新らしく現はれて來た一切の現象に對して、いつもそれを批判して、その中から新らしい社會問題もしくは時代的意義を求め出し、それによつて時代人の進むべき目標を與へるのが、時代のリイダアとしての當然の責任だと思ふ。それ、藝術家が批判されたと言つて苦情を云ふのは、もらふものだけはもらつて、やるものは遣らないといふ頗る蟲のよい考へだと思ふ。

佐藤　それは社會人だから事實の報告は差支ないが、政治家や學者の場合と、藝術家の場合とは違つて扱はれるのが不快だ、文藝家だけが特別さういふ方面にだらしのないやうに言はれるが、藝術家は內面的な點で普通人には分らない複雜な心理を通過してゐる。それを外側だけで、間違つた書き方をされることが藝術家の場合には殊に酷い。しかしこれに藝術家の僻みかも知れないが……

久米　まあさういふ風な批判に耐えてゆく工夫をたてるより仕方がない。或意味で強くなるより仕方がない。

千葉　しかし藝術家といふものがすべてさう嚴肅なものだといふ考へを今の日本の人はみな持つてゐるかどうか。

久米　それは持つてゐないかも知れない。有島氏なぞの場合は、あの人の事實以上に高潔な人格者として考へられ過ぎてゐたが、佐藤君や我々などは、實際以上放縱に思はれてゐるに違ひないからね。

佐藤　思はれてゐるだらうとも……

鷹野　世俗ではどう解釋しませうと一部の人々は正直な點はどこまでも認めてゐると思ひます。

千葉　その點は餘程嚴肅になつたと思ふ。有島氏の事件を不道德な姦通だといふやうな考へは、今の教育の明るい青年の間にはない。たゞ嚴肅な一つの人生事實として眞面目に凝視して居ます。

鷹野　若し自分で信じて行ふといふやうな場合には、俗世間のことは意にかいさないやうにしたらいいだらうと思ひます。

千葉　さう。僕もさう思ふ。私も佐藤さんなどは、世間がどういふことを、云つたとか、又は云はれるとかさういふものをはるかに超越して、第一線に立つ人だと思つてゐた。

佐藤　理想とするところは平凡にしたいのだが、世間からは英雄兒のやうにされてしまうんだ。

久米　唯文藝家は色々な生活狀態から言つて、他の人と比較すると異性に接する機會が多い。

千葉　そればかりではない、藝術家は作品の中に戀愛を書く取扱ふから、藝術家には特別な戀愛觀や感情があるだらうと世間が思ふのです。

久米　特殊といふ程ではないが、僕だつて性道德については、自分だけのものを持つてゐるつもりです。此點に關しては、それが優越意識とまでは言へなくとも、或種の專門家意識は持つてゐます。

長谷川　藝術家が持つてゐる特殊のものとは、つまり藝術的衝動で、それは私の考では藝術の社會的の意義と關聯したものだと思ふ。藝術家が世の道德や制度に反抗する時には、彼自身はどんな意識でそれをやらうとも、それは藝術の反逆的態度と共通の性質を持つたものに相違ない。藝術の動機は現に社會を靜的に固定せしめてゐる制度、組織に對する生活衝動の反逆に外ならない。制度は、道德にしろ法律にしろ、集團の生活を統一する約束なのだから、必ず生活にとつて殃であるといふものではないが、然しその約束は、生活の進化によつて絶えず更新せしめられるべきもので　それが固定したまゝで社會を拘束すれば、制度は却つて生活の桎梏となる。此の生活を殺す、束縛を最も強く敏感するのが即ち藝術家なのです。そこで藝術家は、その藝術的創造の世界で、生活の束縛を具象的に再現させて、社會をして、その病的苦痛を「感覺」として感知せしめると同時に、藝術家自身の生活行爲でその反逆を實行に持ち來す。有島君の所謂「永遠の反逆者」です。普通人が奴隷制

度や階級制度や、その他生活を拘束する諸制度の爲めに默つて殺されてゐる間に、藝術家はその制度の人間虐待を直覺して、一方で、これを藝術的に再現して、社會を戰慄させると同時に、他方では自ら人間虐待の犧牲となつて、彼自身の生活の力でその壓迫と戰つて斃れるのです。何となれば、人間虐待を自覺するには彼れ自身、虐待の犧牲者でなければならないからです。で此犧牲者は即ち彼れ自身頽廢への形で現はれてゐる。彼れは頽廢者として、制度の破壞者、道德の謀叛人なのだが、此の破壞と謀叛には强い社會的の意味がある譯です。藝術的衝動は、哲學者や法律家が、現制度の缺陷を理智的に認める前に行動的にそれを指摘するのです。理屈は何うであらうとも、藝術は具象的の世界で、それを示現する。無論、一般普通の人々の間には、さういふ衝動が全然起らないといふのではない。制度の固定に對しては、寧ろ一般社會の暗然の反抗が恐ろしい底力で動き出してゐるのですが、その反抗を暗默から强烈な意識に持ち來すのが藝術家の仕事なのです。性の問題についても、藝術的の性的破壞事業が始まる頃には、一般社會の底の方に、性の制度に對する隱れた破壞が十分に行き亘つてゐるのです。藝術家及び彼の藝術はその社會的現實を知覺にまで持ち來すに過ぎないのでせう。それは生活の本能が藝術家に於て、普通人に於けるよりも强く現はれるからで、從つて社會的生存の有機的の生命を、藝術家がよりよく掴んでゐるといふことになる。即ち社會の動的本質を捉へて進むのです。性的行動に於ても藝術家のは頽廢的ですが、その頽廢は、彼れの個人的變質ではなく、よし變質であるとしても、それは一般的頽廢の過程を病覺として社會に知覺させる性質を持つたもので、その行動の社會に與へる影響は、誇張していへば、革命的氣運の促進です。が然しそれには頽廢的には相違ないから、普通の頽廢者の持つてゐる變質者症狀を彼れも持つてゐるのは當然です。もし彼れに藝術がなかつたら、彼れはたゞ病人に過ぎない。有島君に普通の情死男と同じ點があつたからといつて、それは怪しむに足らない。たゞ時代の疾病として社會的感覺にまで持ち來すところに藝術の社會的意義がある譯です。從つて藝術家は、彼れの頽廢的行動に、一種の道德を發見するのです。現在の制度、今の道德を破壞する所に、藝術家の道德意識が活躍するのです。だから藝術家は一種の道德家である譯です。君方に「一種の意識」があるといふのはほんたうでせう。然しさういふ天才的道德意識が、何時も必

ず「社會的」にのみ働くとは限らない。何しろデカダンの事だから、すべて破壞的で、たゞに舊時代を破壞するばかりでなく、何もかも破壞すべく働くかも知れない。人間の意識は病的になれば、生活を超越して昂奮するもので、そこでは必ずその意識の社會的意義は失はれてしまふ。たゞ全く滅亡の憧憬のやうなものにまで亢進してしまうことも有り得る。たゞ藝術的再現だけが、それを社會的感覺にまで持ち來して社會を戰慄せしめ、反省せしめ、新たな生存の芽ばへに培ふことになる。

佐藤　それは異議はないなア。

鷹野　餘りに制度といふものを人は重く見過ぎる嫌ひはありませんでせうか。私としては制度は制度として、別にこだわらなくても暮して行けさうに思へます。

長谷川　然し一般人は制度にこだわらなければ生きて行かれません。それは非藝術的でせうが、元來制度に添うてゆくのが社會人なのです、藝術家は必ず破壞的に進みます。

久米　併し又、壞して〱ゆくことに寂しさを感じ、一市人としての生活を送りたくなることがある。性道德には殊にさうだと思ふ。いろ〱な淫行をやつてゆくうちに、大抵の人はもとの古巣にかへつて隠遁的になる。

長谷川　すべての人間が生存の力を靜的に生かして行かうとすれば自から動的に生かしてゆくことが出來なくなります。藝術家でもその生存の力を靜的に生かして行きたいと思ふこともありませう。久米君なども、偶には普通人になりたいと思ふのはつまりその心理狀態なのでせう。社會の意味での頽廢者の心理に生きるといふ生活、言ひ換へれば、制度破壞者として生きるといふ生活に寂しさを感ずるのです。それは頽廢者が或る瞬間に、その動搖した生活に堪へないで感ずる氣分でせうが、藝術家にもさういふ瞬間のあるのは全くほんとうのことでせう。

千葉　藝術的な意義からの、思索の對象としての懷疑でも、また憧がれでもなく、たゞ享樂の感情の上から生の本源を感じ、淋しさを感ずるなどといふのは、それはたしかに頽廢の氣分だね。たとひ自分では瞬間の反撥的な、ノオマルなものだと思つてゐたにしろ……

久米　一種の倦怠かも知れないが、[illegible]んたくないと言ふ東洋流の悟りとも云へますね。

佐藤　で、藝術家は問題を起してゐる時、デカダンになつてゐるんだ。社會を恐れてはゐないのだ。

長谷川　今も云つたが、デカダンの生活はつまり、社會的に

いへば、社會がそれによつて自分の生存が頽廢的であることを數へられる性質のものなのです。生活が靜的になつて動きがとれぬやうになるのは、その社會の組織制度が固定したことを示すもので、藝術家はその固定を破る犠牲者なのです。有島氏の場合はつまりそれだつたのです。社會的生活は、さういふ頽廢的破壞過程を經て新らたな進化を採るのです。

千葉　有島氏のは破つたのではない。敗れたのだ。

長谷川　頽廢者は「破れた人」であると同時に「破る」人なのです。でその破れ方は、叛逆者の敗れ方であつて、犠牲が一つの強い作用を働くのです。さういふ犠牲者がなければ固定した社會は破壞されない。——尤も藝術家自身は悉く頽廢者の生活を行動的に採用するといふ譯ではありません。例へばイプセンのやうに、藝術家自身決してデカダンではなくて、しかも世紀末現象を容觀の世界に於て發見して、そこに革命的藝術を創造するものもあります、それは藝術としては「制度破壞」的のものでせうが、藝術家自身は行動的に制度破壞者として生きないことを得るといふ一つの例です。だからイプセン的態度は、幾分科學者の態度に近い意味を有してゐるものです。科學者が「自然事實」を科學的に提示するに對し、イプセンのやうな藝術家は「自然事實」を藝術的に提示するのです。有島君は、同じ「事實」を、身を以て提示するものだといへるのです。——氏の行動だけについていへばです。——

制度は人類を集團的生活させる必然の約束でありながら、又人類制度のために亡ぼされるのです。藝術は——又藝術的行動は——その滅亡の過程を社會に意識させる一種の神經作用なのです。それは丁度神經が病氣を當人に意識させる爲めに病覺を起させるやうなものです。あゝいふ事件が頻々として起れば、社會は反省します。その反省といふのは制度の進化を持ち來す意識作用なのです。世紀末的特徴はいろ〳〵の破壞行爲が頻發することゝ、それに應ずる新らたな道徳意識の成長することです。

鷹野　社會に反省さへさせれば、どんなことをしてもいいのでせうか。

久米　していゝか惡いかはやる人の方の問題ですが、反省と云ふ點に至ると、それは受取る方の氣持一つですからね。それは結果ですから、逆に溯つて直ぐ原因を肯定しうるかどうかは分りません。が反省させうれば、少くとも社會的の存在理由はある點だと思ひます。

佐藤　さういふ風に見ると、有島さんのは死んだんぢやない、生きてゐるんですね。

長谷川　さう見るのはつまりあなた方の頽廢心理での見方であつて、有島といふ人間は確かに亡びてゐるのです。たゞ有島君が生きてゐられなかつたといふことに、時代を暗示する意義があるといふだけのものです。「死んでも生きる」とか「生きる爲めに死ぬより外はない」とかいふことは一種の藝術的乃至哲學的心理の亢進狀態であつて、さういふ心理そのものが頽廢的心理なのです。

鷹野　さうですと意義のない存在といふものは一つも無いことになるのではないでせうか。

長谷川　さうです。自然主義的見地にはさういふ點が確かにあります。つまり藝術家は、その藝術なり行動なりが如何に頽廢的であり制度破壞的であつても、さうであることによつて殉教者的犧牲となるのです。

佐藤　さうだ、受取る人の心持次第で藝術家は殉教者だ。

久米　藝術家は試驗管に自分自身と云ふ藥をつぎこんで、その反應を示すやうなものだ。かういふ戀愛の藥をつげば、どんな反應を呈するかといふことを自分自身に於て實驗してゐるんだ。實驗技師でもあれば、又モルモットでもある。業蹟を殘すと同時に犧牲者なんだから可哀さうだ。

佐藤　それはそれとして超越してもいいが……

長谷川　藝術家がジャーナリズムにわさわひされるといふが、ジャーナリズムが藝術家の戀愛事件などに興味を有つて頻りに囃し立てるのをたゞ新聞記者といふ人間が淺薄だからといふ風に解することは出來ない。何故に新聞が囃し立てるかといへば、要するに世間一般が興味を有つからで、何んで世間がそんなことに興味を有つかといふに、世間が藝術家その他の少し普通と變つた人間の普通でない行動に興味を有つ理由は二つある。一つはそれが自分達の生活感情と非常に反してゐるといふことで、今一つは、反してゐるが爲めに、世間は、その變な行動に對して、自己の生活を反應させなければならない。火事がセンローションを起すのと同じです。火事はその火が平和な市中の狀態と非常に違つた勢で盛んに燃えてゐる光景で一般に興味を起させると同時に、燒けて來たらどうしやうといふ生活上の反應としての興味を起させる。藝術家の破壞的行動も、その燃燒の光景が一般の興味をそゝると同時にそれに對する感情の反應が刺戟的効果を有ちます。「怪しからん」とも思ふでせう「痛快だ」とも思ふでせう。制度の擁護者は怒るでせ

う。制度の固定に惱んでゐるものは喜ぶでせう。藝術家の行動は、さういふ一種の昂奮を起させる作用を持つので昂奮によつて利益を得てゐるジャーナリズムは心理的に又營利的に、爭つてさういふ問題を取扱ふ譯です。その取扱ひが亂暴だとか淺薄だといひますが、然しそれは『多數者の感覺や判斷やは、特殊の藝術家や科學者のそれのやうに洗練されたものであり得る筈はない。又洗練されたものであつてはならない。何故ならば社會は藝術家とか科學者とかいふ特殊の個的生活に生きる人々の集團の生活ではなく、もつと一般的な——「藝術」とか「科學」とかいふ概念を中心としないで、さういふもの丶すべてを消化してドロ〳〵な粘液見たいにしてしまつてゐる。——何の概念的特殊をも生命としてゐない俗人の生活集團なのですから、單に「藝術」的、單に「科學」的であり得ないのが卽ち世の中なのです。だから社會人は、何等の概念的統一のないザワ〳〵した動搖を以て、藝術人や科學人を或は喝采したり或は排撃したりするのです。社會としては、それがホントウの所なのです。だからジャーナリズムはそのホントウの所を代表してゐる機關です。ジャーナリズムがなかつたら、人々は社會が何んなに混沌たるものであるかを知ることは出來ますまい。——然し今日の問題は……

佐藤　それで性道德の新標準などと言つても、僕は今のま丶でいいと思ふ。唯不快を感ずる人は今の制度を壞せばいい。壞せない人はそのま丶でいい。

久米　併しぶち壞し方に感じのいいものと、惡いものとあるね。その感じのよさ惡さも問題だからね。

千葉　しかし現在の性制度といふのはどういふ意味か。

平塚　矢張り愛を無視した、內容を問はない形だけの一夫一婦をいふのでせう。しかも男女平等でない。それなら佐藤さんの仰有るやうに今のま丶でい丶と滿足してゐる人はないでせう。

久米　それから破つて後に、眞に目標が立つのかどうかは疑問でせう。

千葉　立つものか、立たぬものかといふよりも、現にわれ等の生きる新社會の目標がどんどんちがつて來てるやうに、現代に、全く昔とちがつた性的道德の親目標が創造されつつあるのは事實である。

平塚　固定したものではありませんが、しかし目標はあると思ひます。最初は漠然としてはゐますが……この漠然とした、現在の性制度を破らずにはゐられない人達の衝動の[illegible]

に混沌として動いてゐる新らしい理想の影とでもいふやうなものをはつきり見きはめ、それをつかみ出して、私達に新らしい性的道德の目標を示してくれるのが、文藝家や思想家の任務ぢやないでせうか。

佐藤　破らねばならぬ固定したものがある。目標といふものは動的な精神から見ると常に妥協的なものだと思ふ。

千葉　しかし今のところ一番近いものは戀愛によつて時間的に相手は違ふ事があつても、やはり單位はどこまでも兩性二人であるところの一夫一婦制だらう。一夫多妻、一妻多夫、本能的にはそれも許され得るが、どちらも戀愛の純眞とは非常に緣の遠いものだ。しかし藝術家は、どうかするとこの純眞をじうりんしようとするやうに思ふ。

久米　僕は一夫一婦制がいいと思ふ。

佐藤　僕はいけないと思ふ。

長谷川　それは時との問題にもよる。一年間のですか。十年のですか。但し一生涯といふのですか。

久米　私の氣持の上から言へば、目標を求めるなら一夫一婦制が一番いい。ほんたうに惚れてゐる相手は、同時に二人はあり得ないと同じ意味で。時間から云へば、たとへ瞬間にしても。

平塚　一夫一婦制がいいと言ふのも惡いといふのも內容の問題でせう。愛に始終する一夫一婦でせう。

佐藤　最も自由な狀態で、自分の好みとしての一夫一婦だらう。主義ではなしに趣味なんだらう。

久米　さうだ。

長谷川　久米君のはそれがいいと思つてゐるのですか。現にやつてゐると言ふのですか。

長谷川　やつてゐないとは思へぬ。

佐藤　その氣持が續けばいいと思ふ。

久米　誰だつて久遠の女性に近いものを、相手の中に見出しさへすれば、寧ろイゴイステイツクで恥しい位、その人一人をしか思はないやうになる。それは主義でも趣味でもなく必要上さうならずにはをられぬ筈だと思ふ。僕は戀愛では其程度の偏執狂だ。

長谷川　その心理は多數の近代人にあるだらうが、それが行はれてゐるかどうかは問題だ。制度は確かにさういふ多數の近代人の氣分に立脚してゐるが、その制度が實生活に一致してゐるか何うかわからない。

久米　僕はほんとうの戀愛關係にはいつたら、結婚までゆくつもりでゐる。つまり制度の前に膝を屈するつもりでゐる。

長谷川　問題はあなたがいいと思ふことをどうして行ふかである。

佐藤　趣味とは快的な狀態です。

長谷川　それを實際に行ふにはどうしますか。

佐藤　離婚の絕對自由のもとに、一夫一婦を嚴守する。

長谷川　それが今日の世界の一般の輿論になつてゐるやうです。一夫一婦を嚴重に守らせて離婚を自由にする、目標と言へば先づその邊でせう。

しかし結婚をして子供を持つとします。その場合、今年結婚し、來年離婚をするといふ風にしてゐて、子供がつぎつぎに澤山生れたらどうなるか。今日のロシアでは夫婦は離婚しても子供は國家が養ふ義務があるが、日本の現在の制度の下では、そんなことは出來ない。子供はすつかり自分の手で養はねばならない。で全體の制度が改まらない以上、あなた方の理想は實現されない。今日の制度は、結婚したら一生そのまゝ續けるといふ根柢の上に立つてゐるのです。

千葉　政府が子供を養なうといつても、母子愛、或は父子愛といふ本能愛は、決して政府にばかりまかせ切りに子供の教育や慈愛をまかせきれるものではない。で、政府が教育するといふ事と、この本能愛が、どんな風に調和すれば、子供の爲に一番ためになるかを考へて見るのも必要な事だらうと思ふ。

平塚　でも一月や二月で變つてしまふやうな戀愛ははじめつから本物ではないでせう。いくら戀愛や結婚が自由でもそんな輕卒な非人格的な愛ははじめつから肯定する譯に行くまいと思ひます。資本主義制度の國であるなしに拘はらず。

鷹野　女性の立場から申しませば、一般に文藝家を、どれほど理解して居りますでせう、現代では僅少な女性の間にも同等のレベルに達してゐるものは尠ないと存じます。斯う云ふ場合文藝家の行動が一方を無視した個人主義に偏したやうにあらはれないものでせうか。斯う云ふ現象は、高い心境を把つてゐる一方にとつては、寂しい事實だと思ひます。けれども斯うは申しましても自分の好みだけで愛を肯定するやうになる時になれば、それが相手の女性にどれだけの理解を持つてゐるかといふことが疑問になつてくると思ひます。これが行動に表はれた時、社會に容れられない一面となるのではないかとも思ひます。

佐藤　快的な狀態を要求する。

鷹野　一度衆人意識が働らき出したとき、いつまでもさういふ快的な狀態で居られますでせうか。

平塚　自分の快的な狀態をつくるためには犧牲者を出さねばならないとしたらどうなさいますか。戀愛は自分一人きりで出來るものではありませんから、自分の氣分を本位にしてゐる快的狀態は時にはその相手やそこから生れてくる者にとつては非常な犧牲であるやうな場合も澤山あると思ひますが。——たとへば自分は非常に相手を愛してゐても、相手は左程に愛してゐない時や、自分の愛は他に移つてゐるのに、相手はまだ自分を非常に愛してゐるといふやうな時や、ふたりが愛し合つてはゐるけれど、健全な子供が生れないのが分つてゐるやうな場合——惡い遺傳や病氣などがあつて。そんな場合はどうなさいますか。

佐藤　快的でない狀態に堪へることはよくないことだ。其處が腐つてゐるやうで不愉快だ。うつとうしい。

鷹野　でも然ういふ理由だけでは我儘を要求するやうなものではないでせうか。

長谷川　つまり藝術家は極端な我儘者なのです。制度に縛られた世の中の人が、我慢をしようとしてゐるのに、俺丈は我慢が出來ぬといふのが藝術家です。しかもその我儘に、前申したやうな社會的動因や効果があるのです。

鷹野　普通私どもの云ふ低い意味の我儘と異ふといふことはわかります。

千葉　犧牲者ではなしに自由人であり革命家なんですね。

長谷川　藝術家の革命は、或る意味で犯罪人の仕事に似てゐます。たゞ犯罪人のアブノーマルは社會的疾病そのものであるが藝術家のアブノーマルはその病覺の鋭敏なところに特徴があるのです。

千葉　平塚さんのおつしやつた制度に對するお考へをもう一度おつしやつて下さい。

平塚　制度に對する私の考といつて……仰有ることの意味がよくはわかりませんが、人間を殺すやうな現代の性の制度は何も藝術家に限らず誰だつて破つていいと思ひます。破る人が多くなればそれ丈制度の改革が促進される譯で望ましい位です。藝術家が何かしら別な人間だといふ風に言はれるのが不思議に思へます。

佐藤　藝術家もすつかりさうだとは言へぬ。

平塚　性の現制度を無視するのはいゝとして、相手や子供を自分一人の犧牲的にしてかまはないといふやうな利己的な態度、自分の享樂の外何も考へないやうな戀愛は、藝術家

であらうが誰れであらうが許されないことは同じだと思ひます。

佐藤　快的な狀態を要求して生きるのが少くとも僕の生活の革命だ。僕のいふ快的な狀態といふ意味の中には個人としての理想もはいつてゐるし、情操もはいつてゐる。

千葉　あなたの作品を見れば、長谷川さんのいはれる意味の反抗が作品の中に大へんあらはれてゐるやうに思ふ、

長谷川　婦人等は一般に制度に對しては奴隷であり勝ちないですが、その奴隷の善の婦人が平塚女史のやうにやられるといふことは、矢張社會的に一種の刺戟を與へる性質のものです。「制度」の眼から見ればそれは一種の犯行です。制度の缺陷を行動そのもので指摘する遣り方です。それが爲めに、場合によつては、犯罪者と同じやうな取扱ひを、制度の維持者から受けなければならない。

千葉　露骨にお尋ねするやうですが、平塚さんは、御自分の戀愛事件について、誇りをお感じになりましたか。寂しいお氣持でしたか。

平塚　寂しさは感じました。自分の心持を本當に理解してくれる人の案外少いのが淋しいと思ひました。でもその心持を一々言ふのがうるさくて、うるさくて、非難に答へるのにあき／＼しました。特に誇りも感じませんでしたが、こんな制度のものではあゝするよりほかに自分を滿足させる生き方がありませんでした。

佐藤　淋しさばかりでなく、何もかも一緒に感じた方がほんたうだ。

久米　さういふ場合に辯解を非常にうまくやるのがいいではありませんか。非常にうまくとは誤解があるが、私の信ずる流では素直にやるのが一番いゝと思ひます。

千葉　岩野泡鳴氏のやうな人だと辯解も何もいらないで、行動そのものが直截で明瞭だ。

長谷川　辯解するのは自分が動搖してゐるのかも知れない。それは丁度、藝術家が自分の繪を非難した批評家と議論をしてゐるやうなもので、その議論に勝つたところで、それが爲めにその繪がよくなることもない。

久米　辯解しないでゐることは、世間に對していいことかも知れないが、默つてゐることも瘦我慢であり、一つのポーズであるやうだ。

平塚　私は辯解はきらひです。人のをきくのも自分がするのも。

千葉　藝術をやる人は神經質であるために、何やかやと一言

に辯解が多過ぎると思ひます。それは却つて損だと思ふが——。

佐藤　世間はどう思はうが、自分を傷める意味でいふのだ。

久米　僕は辯解が好きですね。損でも得でも、自分を辯解するところに存在があるとさへ思つてゐます。

平塚　自分の主張として言ふ場合があつても辯解としはどうも……。

久米　語義は兎も角としてゞす。

長谷川　藝術家が辯解するのは、普通の社會人になつてゐるのでせう。辯解は藝術ぢやないんだから。

佐藤　平常は普通人だが、特別な人になる時があるのだ。それがまた普通人になるのだ。自分の中に辯解を噛み殺してはゐるが、しかしまた時に辯解したい心持にもなる。

長谷川　それは辯解するもいゝです。藝術家は普通人であつてはならぬといふ理屈はないのだから。

久米　適度の辯解が一番必要だ。素直な辯解はそれ自身既に藝術だ。

長谷川　藝術で辯解すればいゝ、畫家が繪を以て批評に答へると同じ筆法で。

久米　今日我々の周圍に集つてくる所謂文學青年でない若い人達の友情關係は、我々の目から見ると驚異に價する程明るくて大膽だ。何といふか、かなり極どいところまでいつてゐて、それでかなり堅實で危險といふ點からみると案外心配が少いやうだ。そんなの見ると僕等は舊道徳家になつてしまつてゐるやうな氣がする。

佐藤　君のほめるそれがいけないところだと思ふ。ほんたうの戀愛には身命を投げ出さないといけない。

長谷川　しかし女と見ればすぐと眞劍になるといふのも、人間か制度かに缺陷のある爲めです。日本人は、男は女に對し、女は男に對しすぐと性的にムキになるといふ傾向がある。これはつまり、今迄の制度では、若い男女は、愈お互が性的交通を始めるといふ時でなければ——その時までは決して——接近しないのです。公認的にもさうですし、隱秘的にもさうなのです。少し親くすればもう「怪しい」のです。「怪し」くしなければ接近の必要も衝動もないのです。これは確かに制度の缺陷です。男女を、丁度土佐犬を飼養するやうに隔離せしめて、放しさへすれば噛み合ふ——惚れ合ふといふ結果を生ぜしめた譯です。所が今久米君の云つたのがほんとうとすると、此頃は餘分飼養法が違つて來たので結果も變つて來たのでせう。けんのんな所ま

で行くが中々堅固だとすると、男女が互に性的交通を開始する前に、人間的交通を十分味はう時間が出來た譯です。異性との接近には、必ず性的動機の存することは確かですが、然し「怪しく」なるばかりが異性の交通の全體ではない。今の男女がけんのんの所まで堅固で進む事が出來るといふのは、性的動機を以てする人間的交通が制度の上で可能になつた譯で、い丶傾向なのでせう。男女が性的動機で互に人間的交通をしてゐる間に或る特定の異性の間にお互に個性の發見が起つて、愈々その二人が性的交通にまで進むといふのが、最も自然な結合でせう、凡人もそれだけは要求してい丶でせう。——僕は一寸外に用事があるので、一足お先へ失禮します。(長谷川氏退席)

平塚　私は戀愛を只個人的なものとしてでなく同時にもつと社會的なものとしてもあつかひたいと思ひます。

久米　ほんたうに性道徳を生かすことは、要するにほんとうに惚れてゐる相手にしか關係しないといふことだらう。自分がほんたうに惚れてるといふことに見極めさへつけば、その男女間の關係は、どんな事でも凡て是認される。だからつまり自分がほんとうに惚れてゐる事を見極める事、それが根本だ。

千葉　見極めがつくといふのは、要するに双方の心持が喰ひあへばいいといふのかね。

久米　此方だけでもい丶でせう。

平塚　でも相手の氣持を考へないで、自分の氣持一つで進んでゆけるでせうか。それは非常に危險ではないでせうか。何時ひつくりかへるかも知れないでせう。

久米　僕は凡ゆる戀愛で、此方の心持だけを唯一のたよりにしようと思つてゐる。強いてさうしようとまで思つてゐる。尤も眞に惚れてかゝれば、相手の心は動くとは考へてゐないでもありませんがね。

平塚　相手が非常に強い人だつたら好いんですが……

鷹野　男の方にとつては正直であつて、よく分つておいでになつても女に理解されないために思ひのほか双方の關係が晦澁に見えてくる場合もあると思ひます。文藝家の方は非常にデリケートな氣持を持つていらつしやるだけに、勢ひ打撃を受ける點も強くて損ではございませんでしようか。

千葉　見極めがつくのは損だ。

久米　それはさうだが——。

佐藤　それは制度の悲劇ではない。性格の悲劇だらうな。

千葉　それから日本の男女は接近すると、すぐに肉的關係に

まで陷り易いやうだか、外國にはそれが少いやうだ。

久米　日本人は近づくと直ぐに肉交に走り易いが、外人は容易に肉交に至らないと言ふが、精神的には、もつと／＼日本人より性的の滿足を補ふに足る程の男女關係の進行を許してゐる。つまり肉交まで至らなくても、或る滿足を得るやうな狀態が、可なり社交機關として成立してゐる。日本にはそれがない代りに、大抵一か八かに定つて了ふらしいが、さういふ場合でもどちらが性的道德にいゝのか。烏渡問題ですね。まア根本的問題ではありませんが、——結局、僕たちは其洋風に傾いた所ぐらゐに、男女交際の標的を置く外はないでせうね。

千葉　しかしどうですか。女性の方で男性の人格を充分に認めねば容易に性交を許さなかつたら久米さんのいふよい戀愛を築くことが出來るでせう。しかしそれは、社會制度によるところの、結婚するか、もしくはしないか、もしくは結婚後に始めて云々などといふことはもつと別なもので、云はゞ客觀的な結婚などといふ外的なものよりも、ずつと進んだ程度の自由な靈的の交渉が基礎になるべきものだといふのです。全く內的のみの立場からいふのです。もちろんそこから性的の交渉が當然に派生して來るのだが。

廣野　性道德上の肉交も、然ういふことになれば複雜で、どちらの時機に重きをおくかは一口に言へないと思ひます。

佐藤　男女の間に、ほんたうに氣にいるか、いらぬかゞ分つてくるのは肉交のあとだ。それまでは假面をかぶつてゐると僕は思ふ。

久米　さうかしら。併しさうだとしたら、肉交に入る前に對手の假面を叩き落すやうに心掛けたらいゝ譯だらう。落ちないだらうかね。

平塚　男女が戀愛關係にあつて、相方の愛が本物で共同生活を永續する意志がふたりにあることがたしかめられた時、肉交を許すのは、新道德として當然許されねばならないと思ひます。(尤も例外はあります、性病者とか、精神的病とかその遺傳のあるものとか)

久米　(後から)平塚さんの括弧內の意味は解りません。恐らく平塚さんは「許す」と言ふことゝ「する結果」とにこだはり過ぎてゐるのではないでせうか。

佐藤　僕は戀愛關係にある者が肉交まで至つて後、双方の理解がかけてゐた場合、再びもとに引返すことも、新道德として許されねばならぬと思ふ。

千葉　平塚さんのいはれるのは、結婚後でなくても、たしか

に成立する戀愛だと思つたら、結婚前でも性交を許していゝとおつしやるのですね。

平塚　結婚後とか結婚前とか、さういふ形式上の結婚手續きは別に問題とする必要はないと言ふのです。所謂結婚の手續さへした後ならば、ふたりの間の戀愛がまだ肉交を許されるまでに熟してゐないのにさういふ關係にいつでもはいつていゝやうに思ふのは不道徳だと思ひます。

佐藤　僕は間違つてゐると知つたら引返していゝと思ふ。

千葉　鷹野さんはそれについてどうお考へですか。

鷹野　平塚さんのおつしやつたことに差支へないと思ひます。

久米　人によつてそれに對する好き嫌ひは持つだらうな。僕は只ロマンチツクな潔癖かも知れんが、成るべくならばしたくない。

平塚　ひきかへすのもいゝでせうが、その引かへし方が無責任ではいけないでせう。

佐藤　間ちがつてゐると思つてゐながら、一緒にゐることは、別れることよりもつと不道徳でせう。好んでやるのではなくデリケートな情操に訴ふべきものだ。

鷹野　けれどもそれが、一方の心持ちだけでもつて、實行するものでしたら、重大なことになると思ひます。必ずしも相手の心持を忖度しないでも、まちがつてゐると感ずることは出來るのですから。性道徳が、兩性の上に同等に重きをおかねばならないとすれば、考へる問題だと思ひます。

平塚　間違つてゐると知りながらその關係をそのまゝ續けて行く事は確に不道徳だと思ひますが、併し引返す前に、お互がありつたけの努力をしなければならないと思ひます。その上でいよ〱望みがないときまつたら協議の上で引返すことです。そこに少しでも強制があつてはならないと存じます。

久米　佐藤君のいふひきかへすのは問題だよ。いつでも引返す氣で初めからかゝられる恐れがあるからね。それに引返すまいとする人間の營みも一應の價値はあるだらうから。

佐藤　不愉快に堪へながら、曇つた日をえらぶ人もあるが、そして他人達はそれを道徳としてみなすかも知れないが、つゞけていつても効果のない時は、不快を破るに限るだらうと思ふ。どちらかが捨てられたと思ふかも知れないが、永い人生の途上で成程と思ふことがあるかも知れない。

千葉　つゞけてゆく時は、お互に苦しむだけであるけれども、つゞけて行けるか否かをこの場合、お互の主觀ばかりで考へた日には、いやになつたものは一晩だつて居るのがいやになる。感情ばかりの交渉になるからだ。嫌惡が好き

あつた時の程度と反比例して加はつて行く、もしそれを引返さうとする努力が必要ならば、それは兩者が客觀的な處へ立ち直つて、そこからお互を見直して行くといふ處にあるのぢやないのですか。

平塚　それから若し婦人が母になれないやうな場合、たとへば男の方でも、女の方でもどちらかに惡い病氣や遺傳などあつて　ふたりの間に出來る子供は多少ともその犧牲にならなければならないやうなときはどうしたらいゝとお思ひですか。

鷹野　結果といふものには餘り重きをおかないで、戀愛の眞實性から發する方が本當だと思ひます。さうしたら子供もまた正しい位置に置かれる筈だと思ひます。

平塚　母になつた場合に子供が不幸になると思ふ時は、その戀愛をどうなさいますか。矢張りその戀愛を肯定なさいますか。

鷹野　私は戀愛を殺してしまひます。

千葉　平塚さんは如何ですか。

平塚　私もさうです。それは隨分苦しい事ですけれど。

千葉　さういふ點で婦人の力がずつと强い。これは戀愛問題の中へ是非加へねばならない條件ですね。

久米　さう云ふ場合になつてみないと解らないけれど、僕はどうもさう云ふ際戀愛を殺し得ないやうな氣がします。尤も小供の愛を知らないからかも知れませんがね。

佐藤　戀愛は全人格が燃燒した發露でなくてはならぬ。すべての情操が完全に働いた時をいふのだ。さういふ戀愛を求めるのが僕の考へる道德だ。その意味で道德は認めねばならぬと思ふ。

平塚　それが一つの本能になるまでに根深くなつてゐてほしいと思ひます。戀愛は自由であると共に教養してゆくべきものでせう。

鷹野　性道德としては自分の眞實性を、もつと廣い意味に求めてみるのも新らしい見方だと存じます。全人格的意識が深められ、强められてゆくといふのもやはりかういふ方をとりいれて教養に資していつたらよからうと思ひます。

平塚　性道德の新らしい目標として、戀愛を戀愛による個人の幸福と愛による人類の幸福とを一致させることだらうと思ひます。戀愛は自由なものだとか、性的關係は愛でなければならない、愛のない性行爲は不道德なそして醜惡なものだとかいふやうなことはもう知れきつたことゝして、これからの性道德はこんな目標によつて人類的の見地から戀愛の自由の上に或る制限が加へられるのではないかと思ひます。戀愛は教養されなければならないのでせう。(了)

外國に於ける婦人參政權運動の實情

英國婦人參政權成立當時の心狀と事情に對する回觀及び批判

杉森孝次郎

大正十七年の總選擧には、いよ〳〵わが日本國に於いても婦人參政權をものにする必要と可能とがある。男子選擧がまがりなりにも通つたあかつきには、婦人參政は、いきほひの必然ともいへる。理に於いての當然であることはあらためていふまでもない。

英國の婦人參政權が、いかなる事情下に獲得されたかといふことを、雜とそれの要點だけについて回觀して見ることは、この際、わが國の婦人及び國民一般にとつて、多少の參考ともならう。

英國の婦人參政が法制上はじめてあかるみの現實となつたのは、一九一八年に於いてだ。それは歐洲戰爭の足かけ五年目のことであり、ロイド・ジョージ氏の內閣の足かけ三年目のことであつた。そして、多年、實に、遠くそれの淵源にさかのぼれば、一七九一年刊行のウルスタンクラフト夫人の「女權の辯護」以來の英國內の或る複數の婦人自身の參政權要求の理想と運動、近くそれの淵源にさかのぼつても一八六一年に書かれ、一八六九年に出版されたミルの「婦人の隷從」以來の英國內の第一に或る複數の婦人自身、第二に若干の男子

らのそれを遠因あり深源ある底流として有したる國が、多少の斷層を持つに及んで、たちまちにしてそれの地殼を破つた奔騰涌發と流野燎田を見るに至つたのだ。そしてその環境の第一に算へらるべきものは戰爭であつた。それの第二に算へらるべきものは首相としてのロイド・ジョージ氏であつた。

勿論、婦人參政は、近代社會理想の、及び近代道德理想の本質的一内容だ。早晩、各國の社會に於いて、それが現實化され、制度化されるといふことは、天旋ぐり地轉じて、霜枯れのそらと地が、やがて百草萠えいで、萬億無數の花が野を織り山を飾るに至るにきまつてゐるよりもなほ確實な事理だ。その邊の原則論はしばらくあづかりとして、比較的に觀察な現象界の範圍について、英國に於ける婦人參政の現實と歷史をそれの内外兩面から讀むにあたつて、先づ注意される一二件は戰爭と、一時のロイド・ジョージ氏だ。

ロイド・ジョージ氏の組閣は一九一六年十二月八日であつた。慧眼なる氏は、國民の愛國心と獨に對する敵愾心と自内閣に對する信賴援助とを總動員するためは、國内の婦人の赤心と意思をあがなひ取るとの必要をも明視した。殊に英國にあつては、戰時中に、男子の手不足を痛く感じて、國土内及び戰地にさへも、婦女子の戰時活動を歡迎するの必要的事情の發生と發達を見るに至つた。彈藥その他の軍需品の製作は勿論のこと、軍用自動車の運轉でも、傷病兵や遺族らに對する看護的慰藉的作業でも、一般の交通機關にも、停車場にも、銀行にも、會社にも、どこにもかにもといふ風に、婦女子の社會奉仕的——勿論それは大抵の場合に同時に自己奉仕的でもあつたのだが、すなはち有給しかも甚だしばしば高額有給であつたのだが、——種類と區域とがひとへに增大した。國家は、目的としても、手段としても、原因としても、結果としても、男女兩性のものだといふ意識がにわかに明確にされて來た。婦女子自身の社會的自信と社會的自任とは、したがつて鼻いきが荒いほどにさへもなつた。

ロイド・ジョージ氏は、他の多くの人々と共にこの事實がなにを意味するかいかに待遇されべき性質のものであるかを早く且つ敏く見拔いた。いはんや英國に於いては、一九一一年に、アスクイス氏を總理とする内閣が、男子の參政權に擴張的改正を加へた際に、女子のそれにはなんの敬意をも示さなかつたといふので、パンクハースト夫人、その兩女あたりを中心勢力として、參政權要求婦人過激團の有名なる亂暴騷ぎがおこされたといふ近い過去の生きた事實もある。五萬の婦

女子が隊を組んで示威的進軍をやつたり、公私顯名の建造物の窓ガラスを投石して傷破したり、公有の美術品、名畫等を滅茶々々に毀損したり、郵便函に燃えさしの卷煙草を投げ込んだりあらゆる手段を用ゐて政府と公衆とをなやます努力をはげんだといふ昨日の事件の記憶がまざまざとしてロイド・ジョージ氏のあたまにもえりつけられてゐる。さらにいはんや、一九一三年にパンクハースト夫人一派が三度目の投獄に處せられて、獄中に於いて「不食ストライク」をやつて獄吏を手こづらせた事は關心事でないとしても、同じ年の四月、すなはち戰爭の前年中には、ロ・ジ氏自身の邸內から爆彈がはぜて見つかつたこともある。その犯人の背後にはパ夫人がひかえてゐたといふのでかの女はまた處刑されたともある。その常時ロ・ジ氏はおもてむきは一人の平大臣にすぎなかつたが、內實には、かなりにアスクイス氏を左右する實權を握つてゐたことは公知であつた。

勿論、英國に於いては、パ夫人及びその後に至つてはかの女の二娘としての二嬢をも多少あはせて中心とする一九〇三年創設の婦人の社會的及び政治的團結のほかに、それと相對時するかたちに於いて、前世紀の四分の第三期前後から次第に獲勢し來たつた婦人參政權組合の國民的團結があるこれはフォーセット夫人を中心とする溫和手段派、すなはちしたがつて目的の遂成の手段を主としては敎育の改造と普及に求めた一團だ。

上記二團あたりを顯著なる組織的中心勢力として、最近代の英國には、勿論殊にもしくは殆んど專らそれの婦人間には參政權及びその他種々のかたちに於いての婦人の社會的位置に對する制度的公認を高めやうとする意識と行動は、婦人の人格質に對する世間一般の觀念を完たからしめんと欲する希求及び努力と關聯して、日一日と伸びひろがりつつあつた。

また勿論、萬事に新進的な英帝國の海外諸自治領の社會に於いては婦人參政はすでに問題ではなく、可否の問題でも、理想の問題でもなく、現實の當然の一平凡事とさへも隨分となつてゐた。北米合衆國には極端の少數ながら女性國會議員さへも常時すでにあつた。

戰時中の英國婦人が、國民的義務をのみ婦人にも賦課して、國民的權利をば男子のみに許與し來たつた制度と慣習と觀念とに不平を抱き高めるに及んだのは、至極當然にして且つ自然であつた。

根が改革ずき、創始好みのロイド・ジョージ氏は、一時の策略的必要との兼帶意識に於いて、參政權をわれから進んで婦

人に贈呈すべき時機の到來を明覺した。パ夫人及びその二娘の一群が、國家の外難と共に鉾をおさめていまは國家を外敵から救ひ、しかるのちに再び國內に於ける同性階級の社會權と人權とを極力主張すべしと聲明したのは、種々の原因と事情とにもよつたのだが、一とつにはロ・ジ氏の好意的態度と多少の實行とがそれの誘惑力になつてゐたのだ。

英國の婦人は、戰爭と共に、一人殘らずといつてもいい程度に、てこでも動かない愛國者になり了したことはだれの目にもあざやかな事實であつた。ロ、ジ氏の洞察力は、この事實を人一倍でなん倍かに確認した、いまにして婦人參政權を敢設すれば、それによつて新たに生ずる數百萬の婦人投票は自派すなはち戰勝主義內閣に有利なかたちに使用されるにきまつてゐることをかれは明察した。そして、そのためには、なるべく早く適當の時機を見はからつて總選擧を斷行するの必要があることをかれは當然知つた。かくして、一九一八年末の總選擧斷行は、自由黨及び勞働黨の極力的反對運動が早くから企てられたにかかはらず、かれは、それには見向きもせずまつしぐらに總選擧斷行を早くすでに心底に決意してゐた。勝算歷々たるがゆゑでもあり、かれ及びかれの內閣の唯一の救命策、延命術がそのほかには見つからなかつたがゆゑでもある。

果たせるかな、六百萬の新婦人投票は、一九一八年十二月の總選擧に於いて、殆んどことごとく、政府黨へ奉納された。細民や勞働者の妻君たちのなかには、ロ、ジ氏をおもしろくない點を種に有するが、なかんづく理想主義者としての不正直な點一身の功名主義に都合のいい時だけの理想主義者といふ證據がかれの近い過去に於いても示してゐるのだが、ともかくも英國を戰勝國にしたのは、政治家としてはかれだ。この際は、またせめて一度、ロ・ジ氏を助けるかたちに於いて投票しないでは、あまりに人間味に缺けた無情、不感謝の行爲になる。それはいやだといふ風に考へたものが多々あつた。

形勢かくの如くにして、一九一八年十二月二十八日開票の結果は、全國の不聰明者を驚かした性質のものであつた。自由黨及び勞働黨の雄將と驍將とは、またたくまにばた〳〵と議會といふ城上から射落されて發見された。先づ自由黨では總大將のアスクイス氏をはじめとし（勿論氏の場合には、ニユーカツスル市に於いての演說中、故キツチナー將軍且つ陸相を、自己に對する國民の誤解を解くかたちに於いて批評した一節がたたつたといふ偶然的一奇禍も手つだつたのではあつた）、勞働黨では、人氣役者のヘンダスン氏をはじめとし

て、スノーデン、マクドナルド、ポンソンビ、トリヱルヤンなんどの棟梁株が揃つて落選した。敵だらけのエストミンスターすはち英國の日比谷をあとにして巴里の講和會議へ臨席することを當然いたく心配したロ・ジ氏は、かくして、みかた一ぱいのそれをうしろだてにして、安心して渡佛することができる身の上とお蔭でなりおほせた。

六百萬の新女性投票は當時英國民の一大部分からは、くだらなく浪費されるだらう、また隨分と棄權無投票におはるだらうと豫期されたが、事實は決してさうでなかつた。同時に新たに投票權をえた陸海軍兵士のなかには、カーキ服きて參政でもあるまいといつて、且つ服務遠在地からの委託投票の面倒をいやがつて棄權したものが實に多數であつたが。女性有權者は、まじめに、正直に、みな投票した。そして、かれらの投票を決定した代表的通般的動機は戰時中に愛國的意志及び行動を證明した政治家へといふかたちに明白になり切つてゐた。要するにかれらは、新獲した參政權を輕蔑もせず、粗末にもせず、むしろ案外な程度に大事扱ひした。わざと興味や、私情などをばいささかも選擧權使用に際してかれらはさしはさまなかつた。かれらは、かれらの平素の修養と聰明とに理性が期待しうる限りの最善をその場合につくした。

一九一八年十二月四日の候補者名乘り上げの公示日に、總計十七名の女性候補者はあつたが、開票して見たら、全部落第してゐた、もつともそのなかの一名だけは當選したが、かの女は政府から平素にらまれてゐた、愛蘭絶對獨立黨すなはちシンフエイン組の一有力者であつたために、國籍關係に難をつけられて資格取り上げを喰うた。マルキエギツツ夫人が彼女だ。

いの一番に朝野一般から望みをかけられてゐた女性候補者はクリスタベル孃、すなはちパンクハースト夫人の二娘中の姉さんの方であつたが、そしてこの人には、政府でも極力の援助を與へたのであつたが、例へば、かの女の競爭相手の一人は勞働黨の男子、他の一人は政府黨の非職軍人であつたのを、ロ・ジ氏と藏相ボーナー・ロー氏とが連署でその非職軍人へあてて退候補勸告狀を送つたやうなことをまでしたが、きわどい次點高票で落ちた。

六百萬の新女性有權者は、別に同性に投票しようとか同性には投票すまいとかいふ風の性別意識をば持たなかつた。愛國政治家への一點張りであつた。それも、確實に有能だと知れてゐる愛國政治家へのみ集中した。したがつていまだ政治家

としての技倆を示す機會をえもたなかつた女性候補者に對しては、熱が薄かつた。希望よりも記憶、確信よりも知識に依賴するといふ保守的堅實性のもので、新女性有權者の投票の決定觀念はあつた。女性の本質的保守主義が、及びやさしい感謝主義が、永い戰爭のおへた當の瞬間であつただけに、支配的威力をほしいまゝにしたのだといふ解釋もこの現象の一部的解釋としては成り立つ。

婦人參政權が英國に於いて法令化されたのは一九一八年二月中の事であつた。その法定資格は、年齡三十歲以上のことそして地方議會の投票權を自身有するものであるか、さもなければそれを有する男子の妻であることを主としてはこの二條件から成り立つ。上記の資格は、六ケ月以上の期間にわたつて地所もしくは家屋の持ちぬし、また貸借り人であることを內容とする。下宿ずまゐや間借りの婦人でも、居室のなかの設備品すなはち床上敷きもの、椅子、机、衣裳入れ、乃至洗面臺、鏡臺、寢臺といつたたぐひのものを私有財物として所有してゐれば有資格だ。かくして六百萬人の新女性有權者が生じたのだが、そのうちの五百萬人は有權者の妻であつた。この新法令前の英國の國會議員選擧權所有者の全數は八百萬の男子であつた。英國では、右の選擧法改正に於いて、十九歲以上の男子にして大戰役に從事せるもの、しつゝあるもの、すなはち陸海軍の兵士、軍人であるものにもことごとく一票づゝの行使權を新たに分配したがために、一九一八年末の總選擧には、男子總有權者數は一躍して千六百萬にのぼつた。

一九一八年二月に六百萬の婦人の參政權は出來たが、その後數ケ月間は、婦人の被選擧權については貴衆兩院に於いても、諸新聞の社說に於いても、英國の輿論は一定しなかつた。兩院議員の大多數者は、內心では婦人に被選擧權を許與することには反對であつた。けれどもすでに選擧權を入手した婦人の感情を害し、人氣を失することは、次期選擧に於ける自己の落選を殆んど確實に意味する行爲であることをかれらは勿論承知してゐるがゆゑに、公然反對を表明した議員は皆無にも近いほどの稀有であつた。たまに反對を表明しても、實彈だか空砲だかわからないやうなずるい、卑怯なもので、それは概ねあつた。議會は深更に及ぶことがまれでない。十一時過ぎ、あるひは朝の二時、三時までも外出してゐることは、婦人の威嚴のためにいかゞなものであらう。また夜に入つて退場する際に見送りはたれがすべきか、その邊の困難も考へなければなるまいなどゝいふ笑はせ議論が、むしろ反對論の見本式のものであつた。こんなわけ、こんな調子で、する

くの間に婦人被選擧權案も年內（くわしくは十一月）に通過し了した。

一八六七年に、したがつて明治元年の前年にあたるわけだが、ミルが衆議院の一員として婦人參政權を提案した時にはかれは、七三反對一八六の多數否決に遭うた。以前から女權擴張にむかつて吝嗇であつたブライトが、ミルの熱誠と論理と辯舌とに動かされてミルの動議に贊成の手をあげた。當時ブライトは、婦人に投票權を與へることには不贊成ではなかつたが、それを與へる勢ひ婦人の被選擧權がつゞいて要求されるに至ることを虞れてゐたのだつたといふ。

十八世紀末にウルスタンクラフト夫人が前記の書を著いたのは、すくなからずフランス革命の精神に刺戟されての事であつた。しかし爾來半世紀有餘の間の英國は婦人參政權の要求をば要するになんら顯著なるかたちに於いて持つまでにはえ進まなかつた。ミルの議會に於ける運動は上說の通りの失敗に歸したけれども、院外に於ける女權運動はその後數年間にすでに多少の成績をおげた。すなはち例へば一八六九年に地方議會の選擧權が婦人にも與へられ、一八七〇年には婦人も敎育議會に委員として選擧される資格をえ、また結婚した婦人を保護する爲めの最初の法令もでき、一八七一年には女子の大學入學が部分的ながらも許可され、一八七六年には女醫の免許が制定された。

他面に於いて、一八六六年には從來散在してゐた女權運動諸團體が一大組織を企つるに及んだ。すなはちロンドン、マンチエスター、バーミンガム、ブリストル及びエヂンバラの五大都市を根據地として作戰し來たつた女權主義者の諸分子が大同團結を形成して共同戰線を張つた。前記のフォーセツト夫人中心の「婦人參政權組合の國民的團結」がすなはちこれだ。

パンクハースト夫人中心の婦人の社會的及び政治的團結は、一九〇六年に、すなはちキヤムベル・バナマンが總理大臣になつて早々の時を目がけてその激烈主義の鋒鋩を露はした。當時、首相自身は婦人參政に內心好意を持つてゐたが、周圍の役人及び輿論が反對であつたのだ。これが一つの事情となつて、パ夫人一派は激烈主義は無怖畏的に敢行しはじめた彼れ等は大臣が演說するやうな場合には、はづさずに出席しては彌次つた。そして一九〇八年にアスクイス氏が內閣を引き繼ぐに及んで、及び爾後激烈派の火の手はいよ〳〵高まり且つ廣まるばかりであつた。パ夫人一派の見解によれば、過去およそ五十年間、誠心誠意の識者の呼號ありたるにもかか

はらず、なほ依然として冷淡と惡意をもつて婦人參政運動に對する當局と公衆とにほどこす方法としては、それら無理解者がもつとも愛重するもの、すなはち有形の財物寶器に危害を加へてかれらをして悚然として反省せしめるほかに賢案はないといふのだつた。かれらは、みづから進んで暴力を用ふることには反對だが、暴力を用ひてかれらを迫害する當局や世間を怖れてゐるわけにはゆかんから、暴力的迫害に對する正義の保護と威嚴を示すのだと聲明した。とにかく、パ夫人は、かかる直接行動を主義としてか、手段としてか、臆せずひるまずに猛斷果敢しつづけて、前記入獄前年すなはち一九一二年にも、また一九〇八年にも下獄された。

　パンクハースト夫人がなかつたなら、たとひ大戰のために新環境が發生したとはいつても、またたとひ溫和的女權伸張論者は年を追ふて增勢し來たつたとはいつても、英國に於ける婦人參政權許與がまだ延着したかも知れんといふ推想はかなりに成り立つ。暴はいかなる場合にも惡だが、怯もまたいかなる場合にも惡だといふ平明理を、わたくしは、英國參政權成立の歷史を想ふにつけても、感慨なしに看過することはできない。

　なぜわたくしは、上記の推想がかなりに成り立つといつたかといふに、婦人參政權許與にむかつて、責任政治家の位置にあつて隻肩をも、双肩をもぬいだのは第一にロイド・ジョージ氏であつた。しかるに、ロイド・ジョージ氏がこの問題に關して、先づ意識の焦點に置き据えたのはパンクハースト母子一派であつた。さればこそ、ロ・ジ氏はパ夫人を無冠名の、しかしながら榮譽ある役柄としての意味に於いて、政府の使節としてロシヤに遣はしたり、アメリカに送つたりした。またクリスタベル嬢を援助して「婦人黨」をおこさせ、週刊「ブリタニア」を機關として發行させたりなどもした。この週刊誌の創立及び經營には、ロ・ジ氏だ金力的援助をも間接ながら多少與へたといふ巷說の如きも、有根抵だつたかも知れんと想はれる。そして、これらの事件は、みな、婦人參政權が現實に行使されるに至つた一九一八年末から算へて、多少前の出來事であつた。「ブリタリア」一派の婦女子が、當時、ロ・ジ氏の肩を無限に持ち、かれのあらゆる政敵をいかに無殘に攻擊し、むしろ惡罵し呪詛しつくしたかは、わたくしは、いまそれを回顧して念頭に再現して見ても、殆んど戰慄を禁じえないほどだ。實に、パ夫人一派のロ・ジ氏びいきは、遠くすでに一九一六年十二月のロ・ジ氏組閣――それは勿論一種の猛烈なる直接行動主義的奪掠式蹴落とし式の政府乘つ取りで

あつたが、すなはち一種のクーデタ式のものであつたが——以前に露骨に開始されたのであつた。ロ・ジ氏とパ夫人一派と婦人參政權許與との間に淺からざる因緣があつたことはきわめて確實だ。、當の政敵の自由黨を墮落させるためには、アスクス內閣時代に元通ほらなかつた婦人參政權をえ通らせることによつて地盤を新投票者間に張りひろげ、第二敵の勞働黨をいためるためには當時の婦人間の愛國熱を煽揚するといふ奇計妙策に、ロ・ジ氏はいでたのであつた。日本の現內閣の普選斷行にはこれほどのあざやかな智勇は見えないが、いくらか聯想させる類比點はある。

クリスタベル孃に着筆したついでに想ひだされる一とつの輕い挿話がある。それは、孃の初陣立候補の當時に、英國の或る新聞に孃に關する記事がでて、孃の才氣と能力の煥發と八面卓越とを讚嘆し、當選は疑ふ餘地もないが、大英帝國は孃に於いて近き將來に、開國以來最初の女性國務大臣を見ると必定といふかたちの麗辭をならべた。「ブリタニア」は爾來每號この記事を卷頭に轉錄して、恐らくそれに沒落以前またはは壯榮時代のカイゼルを想はせるやうな氣取つた寫眞なども添はつてゐたかにも薄憶するが、とにかく鳴りもの入りの佳家廣告をさかんにやつたものだ。それだけに、十二月二十八日の開函の結果は一層と氣の毒に思はれた。

英國の婦人參政權の誕生は、ほぼ以上の如き心狀と事情とに於いてなされた。うらわかい新制度のことだから、まだ被選擧のかたちに於いてはめざましい功績を示すに至らないがそれでも、例へば國民の人口の大多數を形成する貧乏勞働階級の生活を善導するための新努力、性道德に關する男女間の平等權を確立する努力、家庭改良の一端として住宅改良を鋭意研究し且つ實施する新態度、たまたま戰時中に開設された婦女子の產業上及び一般職業上の社會的機會をできるだけ保護する新意思、男女間に俸給または賃銀の公正を實現せんと欲する新意識、その他なほ日はくなに日はくなに、婦女子のための久しかりし社會的闇望と薄明望とは、一九一八年の選擧法改正以來、すくなくとも當の英國に於いては、見まがふべくもない曜望とこそは目出度くも化して來た。わたくしは敢てここにすくなくともといふ。社會一家の　それは實に全人類的社會一家の曠古無前の大曜望さへもが單なる個人の夢想的憧憬にすぎないものでは決してなくなつた今日、全社會のいかなる一角、一隅の出來事であらうとかが多少の本質的眞、善、美、正義、利福を含帶するものである限り、それは全社會のおのくの角と隅とに潜在し又は顯在する眞の理想主義に

とつて、それだけの貴とい友援でなくてなんであらうか。

一九一九年の十一月には、プリマス區に於ける補缺選擧が機會となつて、子爵夫人アスターが政府黨の候補として立つて當選した。これが英國最初の衆議院女性議員だ。

一九一八年中に制定された婦人の衆議院に對する選擧權及び被選擧權は、直接に、また間接に、英國婦人の廣義の行政なかんづく司法、地方、病院、工場、警察方面への就職的または奉仕的活動の區域と自由を多少顯明に增大した。それから小兒中心の問題、たとへば私生兒、子持ちの離婚、貰ひ子等の問題も、婦人參政の影響をうけて、きわだつて有望になつて來た。大學及びその以下の學校、また議會等の社會に於ける婦人の制度的無資格も多少その影響下に緩減されて來た。

參政權は、婦人にとつて、男子にとつてと同樣に、それ自身に有する本質價または本質能によつてよりも、それが多くの個人的自由及び社會的利福の實踐の總門扉に對する一とつの制度的公鍵たることによつて、すなはち進歩的社會に於ける無數の公會及び私的の必要に機會を與ふるための一方法價一手段目的を當然的に固有することによつてそれの存在理由を構成する婦人參政權は、男子參政權同樣に、それの形式的には至極簡單であり、作用的には、もしくは有權者がそれの使ひかたにさへ最善をつくせば、どんなにも煩多であり、富饒でありうる現代的發明の寶とき一種であるのだ。現代の社會と個人と文化とが、婦人參政權の徹底的確設及び活用をそれの當然的、必要不可缺的內容、機能、責務、自由、幸福の一として自認すべき理由はこゝにある。

大正十七年の改選期までには、日本國の婦人も參政權の力ある要求者となりえないでは、國民の立ち場から考へて心細い。力の第一要素は知識だ。

獨逸に於ける婦人參政權の實情

黒田禮二

一

いくら有田音松氏が憤慨しても我が『神國』は遂に普選を實際的に論議する様な時代となつた。將に惟れ世は澆季然れ

ども唯物的に展開する歴史の約束は世界珍無類の特種國たる新樣のバリカードをさへ突き破つて眞直ぐに奔流する事實の力である。怎うも奈何とも致方がない。それは地震の襲來を拒むよりも難かしい社會的必要の力なのだから。

普通選擧、後ればせ乍ら今日豫想され論爭さるゝ此の問題はさりとて必ず經過しなければならぬ過渡期のそれである。過渡期の處置は必ず次期の階梯を豫想する。從つて今日具體的に論議されてる普選の内容はすぐ來るべき次の時代に於て必ず進化し擴張さるゝに極つて居る。（一）選擧者年齡の低下に於て、（二）婦人參政の問題に於て。

法制審議會の席上に於て鵜澤聰明氏は既に婦人參政を推稱する皮切りをやつた。模倣的な概念的な特種の婦人社會の間にも次第に實際的に此の問題に携はらうと努力して居る團體の萌芽が彼方此方に散見さるゝ樣になつた——

此の際時勢の推移を魁する『女性改造が各』國の婦人參政權の實情を讀者諸君に傳へやうと言ふ試みは誠に時宜に適したものと思ふ。**新年早々御婦人の氣焔を一つ煽るかな。**

二

僕に割り宛てられた題目に則り、獨逸婦人の參政事情を記して見やう。事實を物するのだから蠟を嚼む樣な嫌ひはあるがまあ大體次の樣な有樣である。

御承知の樣に獨逸は一九一八年十一月の革命に依り在來のホーエンツオーレルン王家を盟主とし二十六ケ國を糾合して居た獨逸帝國が解體し遂に一つの共和國になつて了つた。尤も之に依り以上の二十六ケ國が無くなつたのではない。それは各々地方的に獨立した聯邦として依然存在する。その各國から選擧せられた人民委員が一九一九年八月十一日、かのゲーテ・シラアに依つて記憶せらるゝ古都ワイマアに相會し、所謂獨逸の新憲法なるものを決議した。此の新憲法に依つて獨逸は斬然たる聯邦共和政體を布き『人民が國權に參與する』ことに規定されたのである。

同時に勿論人民の參政權が擴張された。獨逸共和國の選擧法は始めて完全な普通選擧制となつたのである。完全な普通選擧と言へば言ふ迄もなく一切の獨逸人に對し『一般的で、平等で、直接で、而して秘密投選の樣式』を執れる謂である。從て

つて成年に達したもの、即ち年齢二十歳以上の獨逸人たるものは男子なると女子なるとを問はず悉く平等に參政權を持つて居るのである。されば女子と雖も政治上の集會、結社を作り刊行物を印刷し得ることは男子と些の違つた點を見ない。唯婦女勞働者の勞働力に關しては――之れも男子勞働者の規定と全然同一であるが、――共和國の特種の法律に依り規定せられて居る。即ち彼等は勞働法の下に保護(?)されて居る。而して極端左黨の勞働者(男女共)の政治的經濟的活動は種々の名目に依つて制限さるゝ場合が多い。例へば共產名の印刷物は特別法に依つて禁止し得ることゝなつて居るし、又國法に觸るゝ男女の革命的勞働者の裁判は特別裁判所にて審議され、死刑の宣告さへ下さるゝこともある。之れ畢竟獨逸の新憲法が全然社會民主黨的色彩の下に成立した成果に外ならぬ。

三

斯の如くして獨逸人の參政に關しては特に性の相違に依り別々に論ぜらるべき點がない。故に婦人參政の實情を述ぶるには勢ひ、男子と共通した狀態を觀察するより外に途がない。

今日獨逸の政黨はどんな工合に岐れて居る乎？　今之れを假りにブルジョア政黨と、プロレタリア政黨との二つに分類して擧げて見やう。

ブルジョア政黨に屬するものは左の四つである。

一、中央黨　之れには社會層より言へば智識階級、小ブルジョア及農民の多數が中心となつて居る。然しそれ計りではない。ライン地方では數多の大ブルジョアの工業階級の連中も澤山勢力を占めて居る。總じて加特力教を信ずる獨逸西南地方を根據とする。普選となつて以來同地方の保守の婦人殊に農婦が宗教の關係で擧つて參加したので尨大な勢力となつた此の黨派丈けを取つて見れば獨逸は婦人參政權を許した爲めに却つて保守黨に近い中央黨の勢力が增加したとも考へられる。

二、獨逸民主黨　大銀行、取引所、大商業、大工業に從事する本統のブルジョア、理事以上の使用人及び以上の妻女家族を包括する政黨である。

三、獨逸人民黨　スチンネス一派の重工業階級と其の使用人に屬する一派を代表する。

四、獨逸國民人民黨　反動的な在來の士官、土地貴族、官吏、其他地主等を代表する。

其他數多のブルジョア黨派はあるが、何れも(一)又は(三)(四)の何れかに分屬すべき性質を持つて居る。

次にプロレタリア－政黨としては左の二つを擧げることが出來る。

一、逸獨社會民主黨　俗にエス・ペー・デーと稱する、溫和社會主義者の政黨。本來は一般勞働者階級と使用人とであるが、それに多數の小ブルジョア、智識階級及び中級又は上級の官吏を包括して居る。近頃此の黨派の中へは獨逸社會黨、則ち俗にウー・エス・ペーと稱する尨大な政黨(勞働者、下級使用人、下級官吏)を併合し極めて大きなものとなつた。

二、獨逸共產黨　通稱カー・ペー・デーと呼ばるゝもの、革命的な勞働者、下級使用人、下級官吏を包括し全然勞農露西亞の旗幟の下に活動する政黨である。

以上の二大範疇を總合し、獨逸に於ける選擧人男女の數は約二千六百萬、之れをブルジョア政黨の聯合と、プロレタリア政黨の聯合とを比較すれば最近に於ては前者の方が幾らか多い。而して今月の政府は中央黨、民主黨が中心となりたる社會民主黨、右に人民黨が連なる。中間的聯合的なものであつて右と左の分子の如何により、常に左顧右眄の動搖常なく、極端右黨の國民人民黨と極端左黨の共產黨が絕間なく左右から之れを突つついて居る不安な狀態に在る。聯邦中の赤きサクセンと白きバイエルンの中間に介在し途方にくれたる遣り繰り政府の實情である。

四

扨て少し方面を變へて觀察して見やう。獨逸の婦人が單に家族に從屬する妻として又娘として生產事業に直接參加しないで參政權に携つて居るのはブルジョアの子女である。彼等は選擧及被選擧權を獲得したと同時に其の夫たり父兄たる有產の家長と步調をそろへて保守的反動的政黨に投票するのを常とし、否時としては其の父兄又は夫以上に保守的な分子に同情を持つて居るのである。從つて社會黨が一生懸命ハイカラがつて婦女を政治的に解放したお蔭で、其の結果は反對に保守派の勢力を增した藪蛇の實例が極めて多い。墺太利の社會黨が勢力を失つたのも婦人選擧者が盛んに保守派を助けた結果である。同樣な傾向は獨逸のバイエルンに於ても見ることが出來る。卽ち同國では宗敎的なブルジョア婦人が盛んに中央黨及人民黨に投票するために反動の勢力は益々侮り難いものと成り行つたのである。

一體婦人の政治的行動の結果は左か右か、更に角極めて極端であつて以上の如、、恐しく保守的な右黨を擁護するブルジョア子女の一團があるかと思ふと、同時に又反對に極端な過激派を援助する左黨婦人も尠くはない。それは殊に職業婦人殊に勞働者の子女に多く發見される。

直接の生産經濟に携らないブルジョアの婦人に、政治的參政權を與ふるのは社會的正義から見て餘り公平なものでないと思ふ。然し勞働婦人や有職婦人の場合に在りては假令彼等が單に娘として妻として一方消費經濟に携つて居る場合あるに拘らず、參政權を獲得すべき實際的必要は決して男子のそれに讓らない。だから公平に考へて婦人參政權に最も考量を要すべき部分は其の國の婦人にして直接に生産經濟に參加せる婦人の人口である。

時代の進化と共に婦人が各種の社會的職業に從事する割合は常に急速に増加して行く。獨逸に於ても婦人が職業に就職する割合は年を趁うて増加し、例へば一八八二年當時にはその數五百五十萬人、即ち全有職者人口の二割四分を占めて居たものが、一八九五年には六百八十萬人即ち二割五分となり、廿世紀に入りては丶に長足の増加を見、一九〇七年には九百四十萬人即ち三割の割合となつて居た。それが世界の大戰と共に婦人就業者は絶對的に激増すると共に男子死亡者の多かつた爲め相對的にも大變殖えたので、婦人の有職業者は全有職業者人口の四割以上を占むる樣になつた。殊に勞働婦人の増加には驚くべきものがある。是等の勞働婦人は何等かの勞働組合に加入して居るもの多く、今日では全勞働組合加入者の二割は婦人勞働者の參加せる割合となつて居る。彼女等は一方經濟的には勞働組合としての生活の直接な改善に努力すると同時に、他方では婦人參政權を利用して何等かの政黨に屬し、勞働立法改善の手段に訴へて婦女の社會的地位を高むることが出來るのである。然し此處では婦人勞働組合のことは論じないで單に政黨に關係した點丈けを擧げて置かう。

五

前に述べた通りブルジョア婦女連が政黨に投票するのは主として保守的な人民黨や國民人民黨若くは中央黨のそれへである。之れは遊食寄生の彼女等が如何にも世智辛くなつた今日と、曾て光榮に輝きし王朝時代の贅澤とを比較して現下の民衆的傾向を呪ひ、寧ろ復古の昔を夢みる婦人一流の淺薄な考へと、宗教的迷信に囚はれる丶程度とに依りて生ずる當然の結果と見なければならぬ。

今日獨逸の有產者婦人の政治運動として一番大きいものを『獨逸婦人聯盟』(Bund deutscher Frauenvereine)となす。今日では其の會員數九十萬人以上もあるであらう。これから澤山の有產階級婦人の代議士も出して居る。機關誌も二つあつて、一を『婦人』(Die Frau)と呼び、他を『國內の婦人』(Die Frau im Staate)と言ふ。共に每月一回の發行。

次にプロレタリアー婦人、殊に勞働女子及有職業女子の參加せる政黨の有樣は如何。

現今上述の社會民主黨內へ黨人として參加してる婦人の數は約二十萬人である。卽ち此の政黨々員全數の約一割六分を占めて居る。機關誌としては『平等』(Die Gleichheit)と呼ぶ二週間一回發行の雜誌があつて、每發行部數は一萬六千位である。それから社會民主黨に合同せられた獨立社會黨にも約三萬人の婦人が特に婦人部を作り(該全黨の一割四分)、『戰鬪婦人』(Die Kämpferin)なる雜誌を出して居たが今日では社會民主黨婦人團の中へ併合された。

最後に共產黨に屬する女子勞働者の有樣は怎うであるか？

共產黨にも又特に婦人部と言ふものがある。之れには約三萬人の黨員を糾合して居る。此の中から例のクララ・ツエトキンの樣な立派な共和國代議士も出して居るし、第三インターナショナルで常にラデツクやジノヴイエフをへこます有名なフイツシヤア女史をも出して居る。其の始めかのローザ・ルクセンブルグの薰陶と感化とに依つて生れた團體である丈けに革命的な且つ理論的な婦人が多い。每月一回發行の『共產婦人』(Die Kommunistin)は單に獨逸の該政黨機關たるに止まらず、全第三インターナショナル婦人部の女傑を網羅した言論機關であるとせられて居る。發行部數約三萬。

共產婦人部は中央を伯林に置き、各地方には澤山な支部が設けてある。每年一回中央で共產婦人大會を催す。此の大會の決議中、乳兒及胎兒保護に關するもの、產兒制限及墮胎解禁に關するもの、及勞働者救濟に關するもの、等は第三インターナショナル婦人部の指針となつたものである。

六

先づざつと以上で今日の獨逸婦人の政治運動的活動に關する大體を述べた積りである。要するに時勢の進運と共に獨逸には婦人の有職業者が漸次增加して來た。殊に大戰以來女子職業種類の擴張と、男子人口の減少とに依り婦人の生產的經濟生活に直接關係を持ちもの極めて多く、國家の政治的現象が彼女等の日常生活にも直接間接に多少のインテレストを與へ

る様になつた結果として、婦人參政の問題は人氣取りでも何でもなく必然的な要求から極めて自然に生れ出たものである。而して婦人の極端に流るゝ性情よりして一方有閑徒食の寄生的妻女が封建的な復古の政黨に參與する現象あると同時に、又プロレタリアートの急先鋒は×黨の中心となつて今日の獨逸の革命分子を内部から動かして居る分子になつて居ると言ふ状態を洞察し、これが將に來らんとする我國の婦人政治運動の參考の一助にでもならば幸だと望みつゝ茲に筆を擱く。

米國婦人の特色ある參政運動

井上秀子

先日私のところへ或る新聞社の方が見えて「此際街頭に立つて婦人參政を主張なすつたらどうですか。」と言はれたが、其時も私はまだその時機でないことを話しておいたのである。が、それは唯時機が到來してゐないといふだけで、將來必ず婦人參政の必要なことは言ふまでもないことである。同時に婦人參政運動の目的についても色々の考へがあるが、私は外國の婦人運動の中ではアメリカ婦人の運動振りに最も共鳴することが出來る。

歐羅巴中でもデンマーク、スエーデン、ノルウエーなどは早くから婦人參政の行はれてゐた國であるが、一體にヨーロッパの參政權は男女ほゞ同樣で、男子の政黨の中へ女子も割込んでいつて、一緒に暗鬪もすれば、運動もすると云ふのであるが、アメリカ婦人は大いにその趣きを異にしてゐる。アメリカ婦人の主張するところは「私達も男子同樣米國市民であるからその政治に關與する責任を持つのみではなく、男子の爲し能はざる方面に於て、婦人の義務をつくさねばならぬ。」ことにある。從つてヨーロッパ婦人などが、男子同樣に黨派を組んで戰ふのに比べて、アメリカでは男子が政黨政治の弊を來すなら、婦人はその弊害を救はうとして努力するのである。婦人は生れつき平和を愛するものであるから、男子のやうな

鬪爭には加はらずに、デモクラット黨も何もない、公平な政黨外の立場から、最も理想的な（人格にも手腕にも）人物を選ばうとしてゐる。男子がもたらす弊害を滿し、男子によつて行はれるものを淨めて國內の政治運動の理想化に努めてゐる米國婦人は、いつも政黨を超越して最も正しいと思ふ所に、その一票を投ずるものであることを自覺してゐる。そして彼女達がその運動の目標とし、その論の歸着とするところは、何れも皆世界の幸福、人類の發展に貢獻しなければならぬといふ考へに一致してゐるらしかつた。

私は昨年の二月紐育で、婦人の政治運動の實際を見てきたが、世界大戰後のアメリカに於ける一つの感心な傾向は、その市民教育が最も行屆いた方法によつて實行されつゝあることとである。男子も女子も選擧權を得る前には市民としての教育が當然必要であつて、國家の豫算とか市府の豫算、國產、教育問題など、國民市民としての知識をたしかに持つてはじめて選擧權を利用できるといふ考へから、位置あり、學識ある婦人は、また經驗も知識も淺い一般婦人に對して、政治に關する知識や、如何にして正當な投票を爲すべきかについて訓練を與へてゐる。例へば紐育市で見たところによると、先づ市を數百の小區劃に分けて、その一區劃毎に一人の指導者を推選して、一週に一度乃至二度、婦人有權者集合の機會を作つて、市政に關する問題、又は外交問題についての說明を與へてゐる。村に於ても亦、これと大同小異の方法で、政治に關する常識を養ひ、如何にして適當なる人を選擧すべきかを教育してゐる。

そのほかアメリカ婦人が選擧權を持つてゐるのは、男女は同權で、男も女も同じだからといふ考へから出立したのではなく、男と女とは性來ちがつてゐて、國家社會に對する意見も異つてゐるから、異つてゐるが故に立法に參與する必要があるといふのである。私もこの信念には共鳴するので、アメリカに女の代議士が出てから、赤ん坊の問題が議會に上つたり、兒童の保護法案の問題でレコード破りをしたなどは、その一例である。男子が審議する問題と、女子が審議する世界とが異つてゐるところに婦人參政の必要があるので、一國の文化を完全に進めてゆくためには男女の世界の要求を容れないのは云ふまでもなく不具である。日本の現在は、男子が男子の世界のみから出立した半面の文化であつて、眞に國民の福利を得るためには、日本の女子がもつと鍛へあげられて、立法にも參與するやうにならねばならない。

こゝで一寸脫線をして附加へたいことは在來の不經濟極る

日本の家庭生活についてゞある。實際日本の女子が現在のやうな家庭生活を維持して、着るためと住むためと食ふために追はれてゐる間は、知識的にも、人格的にもその向上を計ることは容易でないと言はねばならぬ。磨きをたてて光らしておかねばならぬ廊下、時間を費して繰りあげねばならぬ板戸など日本の在來の住宅が婦人の手を勞にするのみではなく、衣服も今まで通りの日本服で補綴や縫ひ直しを從前通りにやつてゐたら、そして食事も內容の割に時間のかゝる料理法で、食物の榮養價値とか本質とかを考へずに、花形に切る工夫とか色彩の工夫とかに多くの時間を費すなど、どれもこれも主婦の勞力を貪るやうな現狀維持では、家庭外に日本の女子の高められる時が待つても／＼こない筈である。それに比べてアメリカ婦人の如きは、最少の時間と勞力とを利用して最大効果をあげる工夫に如何に積極的であるか、私が今、我國の婦人に最もすゝめたいと願つてゐることは一思ひに斷行することである。一家の家務に對して家庭の勞力を如何に分配統一するか、そして各人が如何にして最小の勞力をもつて、最大の効果を生んでいつたらいいか、その價値問題は恐らく日本の女子にも分つてゐる筈だと思ふが、たゞ思ひきつて過去を捨てるだけの斷行ができないのだと思ふ。若し此際にも思ひきつて斷行し新らしい生活改善の道を切り開いてゆけないやうな日本の婦人だつたら到底參政權を利用して國內の文化に與ることが出來ないだらうと自分は今懸念してゐる。假りに服裝一つについて見ても震災後の婦人で看護婦とか、運轉手とか、輕々とした服裝の人々が最もよく活動してゐたのは確かであつた私は昨年、アメリカ婦人の集合の席でもつく／＼感じたのであるが、日本で見るやうな消極的方面の氣苦勞は少しもなく、全然積極的に善しと思ふことに向つて直線に進んでゆく會衆の心の調子が、實に羨しいばかりで、かくてこそ益々その職務に興味と責任を感ずることが出來るのだと思つた。

「男子は政治的經濟的に戰鬪的氣分を持つてゐる。故に男子の見解は時には偏狹に陷る場合があるが、愛を宣傳する婦人の心には國境はない。故に婦人は正義を論じ、世界を論ずる立場に必ず與るべき責任がある。」要するにこれがアメリカ婦人の自重であり、信仰であつて、元來アメリカは輿論で動く國であるが、その輿論を起す根本動力としては、そこに、正義を立てんとする婦人の努力が大いに拂はれてゐるのである。私は昨年その實相を見た時、日米兩國間の問題も、その半面に、かかる健氣な博愛主義の鼓吹者が與つてゐる以上は、今日

延へてゐる日米親善の上にも障害を來すことはあるまいと、大いに安んずることが出來たのであつた。

フランスの婦人參政運動

小牧近江

どちらかといへば、フランスの參政運動は、他のイギリスやアメリカのそれに比して、少しく見劣りしてゐるとされてゐる。その理由とされてゐるところは、無論その國民性にもよることだらうが、概してこれまでフランスの婦人運動の一般からいい顔のされなかつた次第は、多分に反宗教的だつたのと、社會主義的原則から踏出したとされたことによるといはれてゐる。フランスの今日のやうなものになるにいたつたのはやつと今からやつと四十年許り前のことだとされてゐる。

だからといつて、古い時代に於て婦人の地位が全然顧られてなかつたといへば、決してそうともいはれない。いや、寧ろそこに不思議な現象を發見するのである。フランスの大革命以前、つまり、例のアンシアン・レジイムの時代に於ては、御承知のやうに、一般民衆は男も女も何ら投票權を持てなかつた。この專制度は貴族階級の萬能時代で領地を代表すべく、この階級のみ男女同權だつたのである。つまり當時の被支配階級には男といはず、女といはず參政權がなかつたのであるけれども、貴族階級は男女ともに同一權利を有したのである。ところが、一七八九年の大革命に入ると、これまでの土地の代表權が個人の代表權になつてしまつた。そして、貴族階級の敗滅とともに一般民衆の男女の政治的並に社會的同權が漸く確立する機運に向つたのである。テロアニユ・ド・メリクール、ローズ・ラコムブ、オラムプ・グージユはこの革命期に於ける最も果敢な婦人運動の鬪士であつた。しかるにナポレオンの天下になると、かつてはコンドルセや十八世紀の哲學者から非常に支持されたところの婦人の地位が又々急激に低下した。その最も代表的な例は、ナポレオン法典を繙けば幾

つも出てくる。

その後十九世紀の初期にいたつて婦人運動は再び問題にされかけるやうな形勢になつたが、これとても頗る微々たるもので、漸く新聞や雜誌で批評せられるやうになつた程度であつた。しかるに、一八四八年の二月革命が起つて普通選擧の世の中になるに及んで、再びこの運動の火の手があがつた。「婦人の聲」の創立者、ニボエ夫人、ジヤヌ・ドロアン、ポーリヌ・ロオランなどはその當時の記憶すべき運動家であつた。ことに上記最後の二人は、秘密集會の廉で六ケ月の懲役にあつてゐる。それが一八五一年の頃である。

世は再びナポレオン三世の御代に移つた。第二次帝政の末葉である。この時代の運動は主としてレオン・リシエ氏及びマリア・ドレエム夫人の手によつて左右された。婦人向上會とでもいふべき協會は一八六九年前記兩者によつて創立されたものである。かくて、一八七八年にいたつて、兩者の斡旋によつてパリで初めて第一回の婦人大會が開催されたのである。しかるに、この運動はどちらかといへば、單に婦人の境遇を改善するといふだけが主なる目的だつたので、政治に參與しやうとするところの運動ではなかつたのである。そんな具合だつたので、ユベルチヌ・オクレエル夫人は率先これとは別な純然たる婦人參政權運動を起したのである。これが有名な「婦人の權利」であり、その後一八八三年にいたつて「婦人參政」と改稱したが、これぞフランスに於ける婦人參政運動の前衞だつたのである。が、フランスの婦人運動が國際的の色彩を帶ぶにいたつたのは一八九一年、マリア・シユリガ夫人によつて「萬國婦人聯合」が創立されてからのことである。これと同時にビユルタン・アンテルナシヨナルといふ時報が發刊されたのである。しかして又、これと前後して數限りない團體が簇出した。「ラ・ソリダリテ」「レガリテ（社會主義傾向）」「ラ・ヴアン・クリエール」「フエミニスム・クレチアン」其他。

そのうち一九〇一年四月十八日パリに「フランス婦人協會」が創立されるに及び、これら幾多の散在せる勢力が初めて統一されるやうになつた。目下同協會は百四十團體、十萬の會員を以て組織されてゐるが當時勞働婦人組合八、婦人運動協會九、その他慈善團體併せて僅かに八十四團體だつたのである。尚ほこの協會が「國際婦人協會」と直接の聯絡をとつてゐることは申すまでもない。戰爭中、フランス婦人協會は離散家族情報局などの戰時事業に從事してゐる。「フランス婦人協會」加入の主なる團體は「アツソシアシヨン・デゼチユ

ディアント、「フオア イエ・ド・レチュディアノト」等の女學生聯合「フアアイエ・ド・ルヴリエール」等の勞働婦人團等で右協會に加盟せざるものに、工場婦人カトリック聯合、女店員聯合等がある。

婦人參政運動が議會の問題になりかけたのは一九〇一年、ゴートレ氏が參政權案を提出してからである。ゴートレ氏の市町村及國會への選擧權運動は當時の議會に於て頗る重要を得なかつたけれども、一九〇六年デュソウソア氏は市、郡、縣會の選擧權を持ち出してから普選委員に附託されることになつた。その年から「フランス婦人協會」でも外國の例にならつて參政權部を設け初めユベルチヌ・オクレエル夫人が部長にその翌年三月二十三日からジョルジュ・マルタン夫人がこれに代ることになつたのである。それまでの婦人協會は、衞生、教育、立法、勞働、學藝とかの部門しかに限られてなかつた。

一九一〇年に入ると婦人運動が俄かに色めくやうになつた。それはルイ・マラン・ポオル・デシヤネル(前大統領)、ジョゼフ・ライナツクジヤン・ジョレス、マルセル・サムバ(以上二名社會黨員)の諸氏が代議院に於ける最も有力な婦人參政運動の主唱者であつた許りでなく、三月十五日フランス代議院普選委員會は報告者フェルナン・ブイソン氏の仲介で女子參政權報告書を議會に提出したによる。フェルナン・ブイソン氏は綿密な各國の實情の調査と時代の趨勢に鑑み、滿廿一歲以上の婦女の參政權を求めた。尙ほ、實行方法としては、「フランス婦人協會」その他の諸團體と相提携して、專ら宣傳運動につとめてこれが一般投票をやつて見たりなどした。同年の總選擧には花々しくパリ及び地方に於て立候補を宣言したが、パリでは四百乃至五百の得票、トウールズ氏で五一一票、ヴイエンヌでは二八一三票の投票を得たが、最初の試みとしてはむしろ成功の方だつたらう。當時の新聞雜誌も擧つて婦人運動に聲援を與へたものだが、中にも「リユマニテ」「フランス・ド・ボルドー」、「デペーシュ・ド・トウールーズ」の諸紙、ルヴイユ・ソシアリスト」「ドキュマン、デュ・プログレ」の諸誌及び、「ラクション・フエミニイヌ」、「ラクションフエミニスト」「ラ・スユフラジスト」等の婦人運動の機關紙がその最も眼ざましかつたものである。

ヨーロッパ戰爭中議會に於ける婦人參政權運動はやや下火の形であつたが、休戰條約後、更らに運動が再燃した。そして、一九一九年五月廿日參政案は初めて代議院の通過を見たのであるが、同案は直ちに元老院に回附されそれが同院の議

議會に附託されたが、どうも元老院の力ではそれ以後旗色が悪いやうだ。

フランスの婦人參政運動の氣勢が前にも述べた他の諸國に比してどうもいい結果を擧げてゐないと思はれる點は、一面無産婦人達の解放運動が別個の方法に向つて躍進しつつある故かも知れない。何しろフランスは他の諸國に比して、婦人勞働者の最も多い國である。一九一〇年の勞働省の統計によると、六百三十八萬二千の婦人勞働者を見る。これをフランス婦人の總數一千九百九十萬に比すれば約三割強に相當するのである。從つてフランスの婦人運動が、その本質に於て如何に組合勞働化しやうとするかといふことが察せられるであらう。勞働婦人の組合運動にも總同盟に屬するものと、自由な組合に屬するものとの二種あるけれども、とにかく組合に屬する勞働婦人は約十萬である。十萬といふ數は大した勢力ではないがこれが一九〇〇年の三萬一千から一九一六年の八萬一千は驚く可き進歩といはざるを得ないだらう。

これらの婦人の多くは社會組織の變革そのものを以て、婦人解放の捷徑だと思つてゐるらしい。從つて、これらの多くの婦人は國際婦人參政運動より國際無産婦人運動に急がうとしてゐる。筆者をして極く率直にいはしむれば現下のフランスでの婦人解放運動の中心點は參政運動よりやはり共産主義婦人運動であらう。某々貴夫人等の參政運動より、マルト・ビゴ・ルイズ・ボダン等の無産婦人運動が將來の大勢を占めやしないかと思はれる。そして、その無産婦人運動の急先鋒の多くが、いづれも少數傑出の論客鬪士であるといふ現象も考ふべき一つだと思ふ。まつたく不思議なことだ。

我が婦人參政權運動の將來

らいてふ

當然實施さるべくして政友會の黨略のために、政界多年の懸案となり、每議會の中心問題となつてゐた普選案が、いよ

く、今期通常議會に政府案として提出されやうとしてゐることは　その動機がどこにあるにせよ、只單に政界の現狀打破といふ點から丈でも、更に言ふなら政界の一大勢力であつたあの横暴な政友會の頭上に鐵槌を下すといふ意味から丈でもなほ買はねばなりますまい、

ところが普選案なるものが、まだ具體的の内容を明に示されたといふ譯ではありませんけれど、過日來の法制審議會によつて、婦人參政權が否決されてしまひましたので、婦人運動者間をはじめ一般婦人評論界にも多少の問題を惹起してゐるやうです。

法制審議會主査委員會に於ける反對論者の理由とするところはこれまで男子の普選に對して向けられたと同じやうな尙早論で、我が國狀がそこまで進んでゐないからとか、今日の婦人が政治的知識を缺いてゐるからとか言つたやうな事でありましたが、(婦人の政治的敎養のあらゆる機會を拒んで置き作ら、今となつて、婦人參政權は贊成だが婦人が政治に對して無智だから困るといふやうなことがよくも言へたものだと言ひたいところですけれど)何はともあれ、昨年やうやく、それも足掛四年に亘る婦人側からのやかましい要求の揚句僅に政談演說をきく自由丈を認めたやうな日本の政治界としては婦人參政權が自發的に法制審議會の議題に上つたといふ丈でも驚くべき長足の進步でありますのに。同じく反對するにしても眞正面から婦人參政そのものを否定し得るやうな勇者は一人として現出せなかつたといふことは明に婦人の勝利の近づきであることを證據立てるものとして、私は婦人參政權運動の將來を寧ろ樂觀してゐるものです。少し話は逆ひますがあの婦人の政治的結社の自由の問題にしたところが議會に於てこそ四年間の惡戰苦鬪の甲斐もなく敗れましたけれど、從つて法文の上では今なほ依然として禁止されてゐる筈ですのに事實は今日完全に解禁されてゐるではありませんか。革新俱樂部への婦人加盟者をはじめ婦人參政權同盟、婦風會の婦人參政權協會これはまだあまり活動はしてゐないやうですが、設立並にそれらの存續しつゝあることはあの一項が明に空文になり終つたことを示すものでなくてなんでせう。これをつい二三年前新婦人協會がその一つの仕事としてゐたに過ぎなかつた治警五條に關する徹廢運動の度每に、警保局に召喚され　その時の同局長川村氏から、あまり目立つやうな運動をするならば法の手前遺憾作ら解散を命ずるより外なくなるかも知れない注意せよなどと脅文句を聞かされたりしてゐた當時に較べると何といふ相違でせう。確に隔世の

感があると言はねばなりますまい。

と言つて、私とて勿論これで滿足してゐるのではなく、普選と同時にこの際婦人參政權も解決がつけばこれほど世話のないことはなく、又婦人界多事の今日、婦人運動者等の精力の浪費を避け得る丈でも望ましいことには相違ありませんけれど政界の現狀から考へればこれはあまりに無理な相談ですし、殊に私共が參政權を求めるのは只々男子と同じやうに政治上の權利さへ得れば、現在のまゝの社會制度でも、政治組織でも構はないといふのではなく、寧ろ眞の目的は參政權を通じて、婦人の立場から社會の改造、政治組織の改造をしやうといふところにあるのですから、あまり一圖に、又は一足とびに早く與へられることばかりをあせらずに、今度はたとへ、婦人參政權を一時犧牲としても普選の現行を期したのが策を得たものではないでせうか。たとへ男子ばかりの普選でも普選が實施され、同時にその運用がよろしきを得さへすれば新勢力を議會に送ることも容易であり、自然婦人參政權運動のためにも非常に好都合な新生面が開けてくることは明なのですから、私から言へば今度の政府案が普選通過の一障害となる婦人參政權を入れなかつたことは却て婦人參政權の前途のために幸だつた位なものです。

來らむとする四十七議會にも一二の婦人團體の運動の結果　多分、婦人參政權は建議案として、又は法律案として提出されることでありませう。そしてこれは無論實現の可能性はなくとも單に婦人參政權のために氣勢をあげるといふ丈でも今日の場合は無意義なことではないのですし、又單獨なるものである以上普選の妨げとなる譯でもありませんから、提出されることは言ふまでもなく結構なことには違ひありませんけれど、併し今それよりももつと〳〵是等の婦人團體、又は婦人運動者等は考へねばならぬ重要な問題の前に立つてゐやしないでせうか。

新聞紙の傳へるところによれば議會政治否認を標榜してゐた勞働諸團體殊に東西の日本勞働總同盟は從來の態度を一變し、普選と共に勞働黨を組織し。議會に乘出すことに決議したやうですが、これは勞働運動のためにも又これと手をとつて進まねばならぬ婦人運動のためにも私はよろこばしいことだと思ひます。勞働問題の總てが議會政策を通じて解決し得るものではもとよりありませんけれど、又日本の政治狀態が彼等を一時議會政治に失望させたことも一應無理もないこと

ではありますけれど、只々直接行動や革命主義のみを唱へて進むことは私のとらないところであり、又これでは理論上はともかく、實際運動の場合に於ては、勞働運動との協力、提携を全然困難な、殆ど望み難いことにしてしまひました。そしてこれは近き過去に於て、又現在に於て婦人運動者等が經驗してゐるところです。然るに勞働黨の出現はそれが眞面目なものである限り、兩者の提携を可能なものにするのでせう。又この勞働黨に限らず、普選實施の結果は當然既成政黨とはその質を異にした民衆の政黨が、どの程度に理想的なものであるかは疑問としても新に生れて來るに相違なく、かうして純勞働者や勞働運動に、婦人運動に理解あり、同情ある知識階級の新人やが多少にせよ議場に送り出されるに相違ありません。この時に於て婦人參政權の運動者等は是等の新政黨といかなる關係に於て進まうとするでせう。私は彼等が今こそこの點を十分考慮し、研究して、普選實施後に於て彼等のとるべき態度を決すべき時だと思ひます。そしてこれが今彼等が運動してゐる四十七議會に婦人參政權案を提出し得るか、得ないかの問題よりもこの運動の將來に遙に重大な影響を齎す問題なのは云ふまでもありません。

なほ婦人運動の運動者達がこの點を靜に考へ、今日最も賢明な態度を選ばれると共に、この際、婦人運動を運動のための運動と化さないやう、又目前の効果を擧げることにばかり氣を奪はれないやう、さうして是等のために肝心の多數の勞働婦人や一般の家庭婦人を背後に置き去りにして行かないやう互に戒め合つてほしいと思ひます。何故なら婦人參政權運動も一般の家庭婦人と勞働婦人とを母體とした婦人團體によつてはじめて有力なものとされるのですから

（二、一一、二二）

愚問に答へて

若しあなたがお年玉に金千圓をお貰ひになり、元日の朝から夜半までに、殘らずお使ひなさいと言はれたらどうなさいますか？

◇　堀江歸一

自分の知つてゐる人々で餘り家計の豐でない家庭を自働車で一巡し、主人妻君子供にそれぞれ適當に適したお年玉を贈つたらば、さぞ氣持がよからうと思ひます。私に其資力のないのを遺憾とします。

◇　岡本一平

若し貰つたらといふ假定では今使ひみちを考へる氣になりません。本當に千圓下さい。そしたら貰つた時の感奮の實感にまかせ、少しの滯りもなく使ひ果す事が出來る自信は確にあります。

◇　江口渙

借金を拂ひます。

◇　奥むめお

「禮に來る」昨日の鬼の額に一枚づゝさつびらをはりつけてやる。もし餘つたら――さうですね、若し餘つたら九條武子さんのやうに、貧乏人の澤山ゐるところへ行つて、一圓札でも一枚宛撒いて「喜よ舞」とやらをみてきませう。

◇　正宗白鳥

小生はそんな大金を雜作なく使ふ方法を知りません。貯金するか、買物するのなら兎もかく、一日の中に消費してしまふことは小生に不可能です。

◇　木村毅

どうも有難い、お年玉に千圓とは夢のやうな話：どうか十圓紙幣位のこまかいお金で頂きたい。一度百圓紙幣で買物をして、うん　り澤山品物があるのに、渡した紙幣は唯の一枚のため、お金の價値がどう考へても分らなくなつたことがある。――それは先づそれとして、千圓の中五百圓は玩具を買ひます。二圓の蜜柑を百箱（此代價合計二百圓）二臺のトラックを午后一時から雇用する、これが一臺半日三十圓として、二臺で六十圓、運轉手と助手二人が一臺に入用として合計四人への祝儀が四十圓。このトラックに玩具と蜜柑を積み込み、家内三人

も乘り、「失業者の子供集れつ」と往來で怒鳴り、又バラック住みの人々の子供を集めて前の如く分配してやる。一擧にして小波おぢさんの名聲を木村おぢさんがこれでとつてしまふ計畫です。

さて夜の八時頃迄に分配を終つて歸つてくると、賴んだ大工が殘りの二百圓で氣のきいた湯殿を造つてゐるから、それを沸かして家内ちうが入る。溫かに寢床へ横になる。きつと復興元旦の我がサンタクロースの初夢はいいにちがひない。

◇　山本有三

まあ貰つてからのことにしませう。

◇　里見弴

百圓一見に如かず、――持つてきて御覽なさい。

◇　芥川龍之介

「女性改造」へ寄附します。

◇　千葉龜雄

近代女性と近代文藝に關する本を選んで買つて了ひます。千圓ぢや何程ども買へませんが。

◇　杉村楚人冠

折角ですが斷ります。元日早々人から金を貰ふなんてことはイヤです。

◇　茅野雅子

御馳走を千圓分命じお友達を招待して晩餐を共にしたらばどんなにたのしいことでせう。

◇　友枝高彥

千圓貰つたらどうしようと女子大學の教室で披露しましたところが櫻楓會に寄附するやうにとの滿場一致の決議。併しそれは別口としまして、改造社から貰ふ(?)分はかうも致しませうか。震災當時我が國が忽ちにして二三等國に成下つたやうに心配して呉れた外國新聞もだいぶあるやうだから、私は我が國民が復興的精神に燃えて居て新年と共に一層の氣勢をあげて來た情況や意見をロンドンタイムスに電報して見やうと思ひます。もし料金が不足したら私の責任支出と致しませう。

◇　藤島武二

先づ頂戴して見なければ良い考へも浮びません。

◇　藤森武吉

さしあたりバラックでも訪ね廻つて、一番困つてる人達にやつちやひませう、匆々。

◇　久保田萬太郎

東京に住んでゐる以上つかへないから入りません。

◇　生方敏郎

先づ現金で渡してみて下さい、實はその位家内がお小遣ひに欲しいと申して居ります。マークツエーンの小說に丁度こんな話がありますが、あれはアメリカ丈けに金額がずつと嵩んで百萬弗かと思ひましたが。

◇　　　　佐々木　喚遵三

時節柄みんな使つて了へなんて、何とも勿體ない話です。しかし使ひ果されば呉れないとあれば仕方がないから僕多年の念願を遂行致しませう。と言ふのは他でもありませんが、先づその一千圓を求ぐるみふところにねぢこんで、買切の自働車でもつて、一軒一軒友達のところを歴訪します。余故に日頃僕を輕蔑してゐる奴原を最先にして、今迄一度もオゴつてやつたことのないやから達をその次にして、最後に僕をブルジョアの雜輩などと罵しつてゐた面々のところへ、一軒々々ふところを叩き乍ら歴訪する考へです。

「ドウだい！まんだこれだけ札があるんだぜ！」つて言ふやうなことを言ひ乍らふところを叩いてね。それで使ひ切れなければ面倒だから地震で破れた障子の穴を繕ひます。元よりあとになつてほとぼりがさめてからこつそりと一枚々々はがして使ふ考へです、

◇　　　　中村　歌右衛門

俳優組合の罹災者にお雜煮を喰べさせて復興第一年の門出をともに祝ひます。

◇　　　　神近　市子

その金が自分の勞力による收入でなく、從つて豫じめ使途が、定められてゐるのでなかつたなら、私は猶豫なく罹災者の必需品蒲團なり餅なり炭なりを買ひ込みます。

が、その金に個人的にしか消費してはならないといふ制限が加へられてゐるのだとしたら？さうですね、半ばは丸善に書籍代に拂ひ込み、殘金で子供の爲めにピアノを一臺買ひ度いと思ひます。しかしこれは「千圓貰つたら」といふ時の使途で、實際に貰つたら何に使はふとするか恐らく神樣も御存知はありますまい。

◇　　　　安部　磯雄

私はバラック生活をして居る人々に分配したいとも考へますが、矢張救濟事業を最も有効になして居る救世軍に寄附するのが、勞力が少なくて効果の多い經濟的方法だと考へます、

◇　　　　帆足　理一郎

私はその千圓を淺草の觀音樣にお賽錢に上げます。但し條件付で。その條件といふのは、そのお金を以て、また足りないところは他のお賽錢から足して、無料宿泊所を一軒、觀音樣のお屋敷内に建てゝ、頂きたいことです。そしてあの御堂の上に毎夜寢てゐる三四百人の宿無し、荷物なしの人々を暖らし休ませて頂きたいことです。若し無料にあまへて何時までも逗留する人には相當の制限を加へてもよいですが、何れにしても、觀音樣見たやうな慈悲深い監督者を頼んで此宿の亭主となし、一切の費用は觀音樣御自身のお賽錢から支出して頂けるやうに願ひたいものです、慈悲深い觀音樣がまさかこれくらいの條件を拒絶よなさるまいと存じます。

女學校時代の回想

思ひ出して微笑む

吉岡彌生

私は若い頃から「遊ぶ」といふことには一向興味を持てない性質だつた。「鷲山さん(私の舊姓)は月を見るのは嫌ひださうね」とよく人から言はれたが、私には月を眺める暇も、花を見る暇もなかつた。遊ぶことにはすべて興味がなかつた。

靜岡の土方村は私の生れた所である。其時分、村ではお寺の大黒さんが村の娘達に裁縫を教へてゐたが、それは唯、早く覺えこんで數を澤山つくるといふのが藝であつた。日曜日とか、祭日とかいふ言葉の代りに、「遊び日」と呼ばれてゐた此頃、娘さん達はよく「明日は嬉しいのね、遊び日だから。」と言ひあつてお互に喜んでゐる氣持が、其頃の私にはどうしてもしつくりしなかつた。それ程遊ぶといふことには興味の持てない私であつた。

それが愈々醫學に志すやうになつたのは、「醫者になつてみたい」といふのでなく、恰度私が十六七の頃は、歐米思想の輸入が盛であつて、鹿鳴館に毎晩のやうに舞踏があるとか髪は束髪に、着物は洋服にかへるとか、男尊女卑の弊風を破らねばならぬとか、非常な勢ひで泰西思想が流れてきた影響を私もいつか蒙つてゐたのであらう。十六七の頃までは普通の娘として育てられてきたが、十七の半頃から、嫁入りの因襲を破つて、どうしても學問がしてみたく、その爲めに二年間といふもの親子反目の状態で暮したものだが、漸く十九の四月になつてから親族會議まで開いて、私はとにかく上京を許されることになつた。それも兩親の心の中では「とにか

く諦めさせるために出してみようといふ程の氣持であつたらしい。ああ其時が本當に私の一生一代の喜びであつたのだ。櫻の花の咲く春陽四月のころで、質朴な村人達は、村はづれまで來て別れを惜んで泣くのであつたが、私にはその涙がまた不思議でならなかつた。その頃は明治の二十二年で、四五日すれば東海道線が全通するのであつたが、私はどうしてもそれが待ちきれなくて、テクテクと歩いて出てきたものである。その夜は靜岡で、東京まで連れだつといふ兄と一緒に一泊したのであつたが、心が躍つて一睡も出來なかつた經驗もそれが始めてである。そして愈々濟生學舍に入學して醫學を研べることになつたのであつた。

その頃東京全市で、醫學を教へるのは濟生學舍と外に三つしかなかつたが、濟生學舍の方は前期と後期の二つに分れてゐて、何でも生徒總數が八百名で前期が五百名後期が三百名の割だつたのをおぼえてゐる。その時分學生は皆下駄ばきで教場に出入りしてゐたが、私が初めて田舍から出てきた時、これがこれから勉強してゆく教室だと云はれたところをみると、五百の男子がズラリと一杯に並んでゐて、這入つて左側前の片隅のところに僅か十五六人ばかりの女生徒の姿が見えた。私は生來は面喰ひ氣味で、下駄の音をしのばせるやうにしてすつと後から通り拔けて女生徒の席へ着かうとすると、いきなり「いやあ……小錦つ」といふ連呼が、四方八方から私にあびせかけられるのだつた。小錦といふのは其時分評判の高かつたお相撲さんの名で、よく肥つてゐて、田舍から飛出したばかりの無骨な恰好がお相撲さんによく似たのであらうが、足踏みするや否「いや——小錦つ」と叫ばれた時には、實際度肝をぬかれてしまつた。それから小さくなつて席へかけたが隣の女學生が、その時の授業について一言も教へてくれない。併し今から考へるとそれは化學の時間であつた。教壇に立たれた先生が黑板に書いては消し、消しては書いてをられたのは、化學の方程式であつて、その時私はそれを見ながら「あれは一體何だらう、何時になつたら分るだらう。」と恐怖の念を眞先に起したのであつた。それからの一年間といふものは夜晝帶もとかず一心に勉強をつゞけてゐると、やがて三月も四月も經つうちに、いつか皆が私のところへ聞きにくるやうになつたので、「これは可笑しい。ちやあ皆にも分らなかつたんだらうか。」と思つて驚いたことがある。そして一年後には前期の學科に及第することが出來たのである。中には五度も八度も落第する人があるのに、一年の中にパスしたものだから靜岡新聞なども前例のないこととして賞めそやし、兩親

までもこの時になつてはじめて眞劍になつて考へてくれるやうになつた。

私が後期に移つてからは、色々な場合に男女共學の不自由を感じた。その中でも頭に殘つてゐるのは、死體でもつて外科手術の練習をする時で、そんな時、生徒同志が術者になつたり助手になつたりするのであるが、その時の一組の中で、女は私一人だつたので助手になつてくれる人がゐない。みかねて先生がよく助手になつて下すつたが、繃帶卷きなどではお互に着物を解きあつたりしなければならぬし、眼を視る時などは暗室に入らねばならぬで、そんな場合には困つてしまひ、仕方がないから宿へ歸つてから女中を相手に練習した。併しその時分進んで勉強でもしようとする女學生は、大抵の男子を見下してゐたし、男も生意氣な女だといふ反感を持つてゐたから、風儀上の問題などはうるさくなつた。

クリニツク室へ行く時などは、二百人しか入れないところへ、三百人はいるのであるが、私はいつも平氣で先に立つては女の人逹を連れだしていつた。一番痛快でもあり、又氣持の惡かつた思ひ出は、いつか校內で演說會を催した時、一人の學生が立つて「特異性のバクテリア」といふ演題で話をしたが、その內容は、この學校は男子の領分であるのに、女が入るのは學校の威嚴に關するもので、女は男に對する「特異性のバクテリア」だと云ふのであつた。私逹は、殊に私は默つてをられなくなつて、五六人の女學生と懇談會を開き、その時分私逹の先輩で女醫になつてゐた四五人の人とも結束して何か女の力を見せるやうな仕事をするつもりだけで、まだ相談も定らなかつたのであるが、その「特異性のバクテリア」を話した人は氣の小さい人だつたと見えて、噂をきいただけで非常に心配をしだして、それが病みつきで肺病で亡くなつたのは氣の毒でもある。が、その頃の私逹にはそれが痛快でもあつた。その後二年間研究をして醫者になつたが、女子の學問の普及と共に、段々風儀上の問題なども騷がしくなつたので、二十二の年學校を出て、三十になつて今の女醫學校を建てたのである。

ギラギラとお陽樣が空氣中を梨子地色に光らせてゐる夏の眞盛りなど、縮みのシヤツを下に着て、足袋と着物の裾から足が二寸も見えるやうなかまはない服裝に二十錢の安下駄をはいて、本鄕元富士町から湯島の四丁目まで七八町位の間を往來する時、きつと二三度は、

「あゝ、あそこへ女の書生さんが通る」と言ふのを耳にはさんだ。かたい束髮に結つて、つんつるてんに着物を着た姿がそ

の頃よつぽど人目にたつたものらしい。

お自慢二つ

神近市子

私は女學校時代を長崎の東山手の居留地にある活水女學校といふミツションスクールで送り、東京に出て來てからは津田氏の女子英學塾に學びました。

大きな都會や、都會に近いところで育つた人々と違つて、極く僅かな教育をうけるにも私は人知れぬ苦勞をしました。それは東京から何百里と隔てゝゐる九州の一寒村では、私の子供時代まで女の子の教育など顧るものは殆どゐない位で、私は自分の熱心な志望でようく女學校に入れて貰ふことにはなつたものゝ、その時でも私の家族は『嫁にやるにしても女學校位はやつて置かないと相當なところにやれないから』と云つた程度の、私自身の志望なり傾向なりについては少しも顧慮しない無關心な態度であつたのでした。それで女學校には入つても、私は田舍で高等小學を了へてから入つたのでした。

高等小學を出てからだと、ミツションスクールに入つてから語學の點で大變な不便があるのでした。ミツションスクールでは語學は科外のやうな形式ではありますが、可なり早くから教へてあるのに、その頃初等一年と云つた級からは正式にリーダアの稽古が始まつてゐたのでした。そして高等小學を出たものはその初等三年に編入されるのですから、つまり英語だけ二年の課程は後れてゐるといふことになるのです。

幸ひに私が入つた時には、私同樣に田舍で高等小學校を濟して入つて來た人が澤山あつたので、私共はすぐ別に英語の組を造つて貰つて速成的に初歩の英語を習ひはじめました。

そして一年半ばかりのうちに從來の人達の級に編入されたのですが、最初の間は多少困難もありましたが、一二個月のうちに全體として却つて新入の生徒の身が凡ゆる點で學校育ちの生徒に勝つてゐることを證明するやうになりました。

が、それはまだ後のことです。女學校に入つた當時の私共は慘めでした。戀ひ憧がれてゐた女學校には入つたものゝ、ミツションスクールではそれのみが生徒の優劣をはかる計量機になる語學が出來ないといふので、同級の人々からさへあつて無きが如き待遇をうけました。そしてそれは寄宿舍でズーツと暮した私共には一層痛切な苦痛を與へました。只だ僅

かに一緒に入學した者同志で勉強もし、入浴、裁縫その他の便宜も融通し合つたものでした。

かうして、あつて無きが如き待遇をうけてその年の卒業式に臨みました。そして自分も他人も夢にも見なかつたことにその年の三つの賞メタルの一が私の手に落ちました。滿堂割れるやうな拍手の中に私はどこをどう出て來たか老校長の前に立つて校長の覺束ない日本語の讃詞を聞いてゐました。その時には全く頭がボーツとして了ふほどに嬉しかつたものです。

小學校時代にも、褒美を貰つたことは珍らしくありませんでした。私の場合には褒美を貰ふことが普通で、それがないと侮辱のやうに感じたものでした。それが女學校に來てからは前に云つたやうな事情で、有るか無きかに扱はれ他人は勿論自分でさへ自分の存在を問題にしてゐないところであつたので、何の豫告もなくそれ故に殆ど平生着に近い服裝で校長の前に立つて校長の手づから胸に銀製のメタルをつけて貰ひ拍手の雨を浴びた時の私の得意さは誰にも想像できるでせう。この時以後少くも全校は私の存在を無視することができないと云ふ考は私のよろこびを一層大きなものにしました。

清水女學校を高等三年で止し、私は結婚の仕度の爲めに家に呼び返されました。しかしこの結婚に私は少しも慾がなくもつと多くの智識、もつと高い教養を求めて止みませんでした。

そして間もなく私はこの婚約を打壞することに成功しました。地位と金力とのある相手の人は、私との婚約を恩惠的とさへ考へてゐたので、私が結婚に對して皮肉な嘲笑を弄んだことが氣に入らなかつたのでした。そして物事は私が豫期してゐた通りに運んで、婚約は破れて了ひました。しかし私の第二の計劃――東京に遊學のことは經濟上の困難があつたので仲々思ふやうに運びませんでした。

清水女學校を止してから上京して女子英學塾に入るまで二ケ年近く經つてゐました。英學塾に來て先づ豫科に入らなくては駄目だらうといふ友人の忠告を退けて、私は冒險的に本科一年の入學試驗を受けて見ました。この時の一年は豫科と稱する準備級を三年、二年、少くも一年は必ず濟して來た人が殆ど全部で、飛び入りは私と神戸の松蔭女學校出の人と二人切りでありました。試驗をうけた人は七八人あつたやうであつたが皆試驗に陶汰されて、豫科に入つたり他校に行つて了つたりしたのでありました。

こゝでも私共は最初のうちは異端扱ひをうけました。何と

なく勉强のこつが分らないのと、私共の知つてゐることゝ、大多數の人が知つてゐることゝがまち／＼で一致しなくて、どうもシックリと自分の實力を出すことができませんでした。さうかうして二學期を濟したのでしたが、二學期の成績發表の時新入生二人は校長のところに呼び出されて、學力不充分の廉で一學年の再修を宣告されました。

强情我慢な私もこれにはスッカリ閉口して了ひました。泣く子と何とか云ふ例の通り、これも我の强い云ひ出したら一歩も後には引かぬ校長のことであれば、この宣告は最後のものだと思ひ込み學校を止して鄕里に歸らうかそれとも何か職につかうかと思ひ惑ふたものでありました。そのうちに友人にすゝめられて二三の教師に逢つて見ると　まだ三學期が全部殘つてゐるので、この學期に充分努力して見たら二學期の失敗をとり返すことが出來やう、成績次第で決定することで校長の感情が全部的に生徒の運命を決してゐないことを懇々諭されたので、まあ三學期をして見やうといふことに決心がついたのでありました。

この三箇月を私はまるで無茶苦茶に勉强しました。寢るから起きるまでよくも口が疲れないと思はれるまで語學の練習をいたしました。食事の時便所に行く時には單語を書いたカードを持つて行くし、夜の夢には床に入る前にやつた『屋根裏の哲學』のつゞきを暗誦してゐました。自分がそんなにした丈けでなく、今一人の新入生が、ともすれば怠けやうとするのを自分の事のやうに叱つたり勵ましたりして勉强を助けました。

こんな風に暮したあとに來た學期末の試驗には、私は案外冷淡でありました。これで再修を命じられても仕方がないといふ氣もしました。全力をあげて勉强してそれで落第するのなら、落第しても好いではないかといふ氣もしました。そして試驗後の何日かの休息を暢氣に宿で遊んでゐると、對手の友達が落第を云ひ渡されたと云つて悄氣てやつてきました。

友達が落第と極つて通知があつて、私に通知が來ないので私の事は及第と極りました。友人には氣の毒でありましたが私も別に嬉しくてたまらないといふ程のこともありませんでした。當り前のことが當り前に起つて來たやうな氣でした。

これで格別の感興もなくて私は二年になり、一年の時ほどではなかつたがそれでも不相變す人並みの勉强をしてゐましたが、何時であつたか惡い事を聞かされて了ひました。

ある朝、私が何の氣もなく學校に出て控室に入らうとすると、丁度反對の側から三年級の人が二三人やつて來ました。

そして私の顏を見ると、

『神近さん、おめでたう。』

と云ひました。

私は何の事だか分らないで狐にでもつままれたやうにポカンとしてゐると、その中の一人が自分達の祝詞がよつて起つたところを說明してくれました。

『昨日私共の級で言語學の時間に、ヘッホン先生があなたの頭をたすつて、ワンダルフルヘッドをもつてゐる婦人だと仰有つたからよ。』

私は久しい間この話を誰にもしませんでした。そしてさう云つたハッホン先生もハッホン先生の言葉をとりついだ當時の三年の人々も、もうすつかりそんな事のあつたといふことさへ覺えては居られないだらうと思ひます。けれども私だけはその數語とその數語が私の上に作用した結果とをありありと今でも印象してゐます。

私はそれを聞いてから自分がワンダルフルヘッドを持つてゐるといふことにスツカリ安心して了ひました、そしてそれ迄そんなに熱心にやつた語學の習得もいゝ加減にして了つて、大切な學修の時代をブラブラと遊んでばかり暮すやうになりました。

作つてワンダアフルと云はれた私の頭も、この頃ではすつかりスリーピイヘッドになつて了ひました。

卒業式の夕

丹野てい子

成績が良くなかつたせいもあらう。私は先生にも級友にもしよつ中壓迫を感じてゐた。學校へ行くのがいやで仕方がなかつた。子守娘になつてゐた方がよつぽど樂だと思つたことさへあつた。だから、今になつてもろくなことは思ひ出せない。先生に叱られたことか反抗したことばかりである。叱られゝば叱られるほど、私は仲よし同志と一所になつて先生の缺點を探した。そしてむきになつて惡く言つた。先生がストーヴにあたり乍ら「何て間がいゝんでせう、」といふ唱を小さな聲で唱つてゐたから。いくらえらさうに生徒を叱つても、あの先生は下品だと言つて怒つたり、しまひには、私たちを叱らない溫順しい國語の先生にまで、愚にもつかない質問をしかけて困らせたりした。今思へば、その國語の先生は、私の作文を度々褒めて下さつた。おかげで、私はその時間だけ

明い氣持でゐられたものを、あの先生には濟まなかつたと思つてゐる。

數學と裁縫が一番いやであつた。

「丹野さん。」と、先生の聲が甲高く響く。どきりとするが仕方がない。席を離れて教壇へ上つて黒板の前に立つ、先生が私に鞭を渡す私はその鞭を取り上げて、黒板の三角型ＡＢ■を説明しなければならないのだが、てんで何と言つていゝか分らない。下手なことを言へば途中で行きづまるのは、自分にもちやんと分つてゐる。仕方がないから眞赤な顏をしたまんま、黒板の三角と、先生の少し縮れた束髪の前髪と、好奇心を以つて自分を見上げてゐる級友の顏を順々に見てゐる。五分でも十分でも立たされてゐる間中默つてゐる。

「よろしい。」と漸く先生が言ふ。私は一禮して先生に鞭を返す。先生は明らかに嘲笑を唇に浮せてそれを受取る。かういふ時私は特に、誰の眼にも愚鈍に映つたに違いなかつた。

その數學の先生が擔任だつたので、お辨當はその先生と一所だつた。食事がすむと先生は生徒にお話をして聞かせることもあつた。「坊太郎仇討」や「少年立志談」のやうなものであつた。私はそれがくだらないと言つて惡口を言つた。ある時、先生は二尺指しを持つて來たことがあつた。そしてそれを班前に床の上に立てゝ、生徒を一人々々呼んで物指しのわきに立たせた。「袴は床上五寸の高さにはくべし。」といふのが學校の規則だつたので、五寸より少しでも長いと直させられた。私は袴はいつも短いからよかつたが、ほころびを切らしてゐては、教員室へ呼ばれて叱られた。

「あなたが身嗜みをよくして來たかどうか、私は、また明日調べますから」と嚴かに言つて、やうやく許すこともあつたさういふ翌日、私はきつと羽織を着て學校へ行つた。ほころびを縫ひはしても、温順しく先生のいふ通りにしたといふのを先生に見せるのがいやで、わざと隱しておくのであつた。

書けばこんなことばかりである。女學生らしい無邪氣な明い日は、一日だつてなかつた。いつもひねくれて苛立つてゐた。これが生れつきの性質かも知れないが「よく思ひ出す場面。」を書からうとすると、今さら面白いことが一つもないのはいやになる。

卒業式が濟み、午後から謝恩會が終ると、もういよ〳〵この學校にもお別れであつた。流石に名殘りが惜しまれて、私たちはまた古い教室へ集つた。めい〳〵思ひ合はしたやうに昨日迄自分たちの使つてゐた机に向つた。

「いつ迄も〳〵、みんな忘れずに仲よくしませうね。」

「お手紙を書いてよ。學校にも遊びに來ませうね。」

みんなが思ひ〳〵の言葉を殘つた、過ぎ去つた五年間が、誰の胸にもいとほしまれた。さうしてゐる間に、日は、はや暮れて行つた。教室の隅が陰ばんだと思ふ内に急にあたりが一段と暗くなつた。それは太陽が、思ひきりよく、すつかり西の空に沈んでしまつたのであつた。部屋の白い壁に、その早春の余映がぱつと明く金色に燃えてゐた。

部屋の中が暗くなると、誰かゞ、

「おらあ。」と聲を上げた。最後の、この日の暮れるのが惜しまれるのであつた。誰かゞしく〳〵泣き出した、つゞいてみんなが泣き出した。うす暗い部屋の中に、大ぜいの啜泣きばかりがいつ迄もつゞいた。その中に混つて、私はことに烈しく泣いてゐた。あんなに、學校を嫌がつてゐたくせに、卒業式の訓示にも涙一つこぼれず、明日から解放されるとばかり喜んでゐたくせに、この時思ひもよらない涙が急につき上つて來たのであつた。私はみんなのやうに學校を離れるのが辛いのではなかつた。友だちとだつて卒業してから交際へると思ふから平氣であつた。私はたゞ、自分の送つて來た學校生活が、今になつてはつきりと振返られたのであつた。みじめな不甲斐ない五年間、私はたゞ不眞面目と不勉強で大切な五年間を消して來てしまつたのだ。そのおかげで、今は何一つ滿足な感じを得ることが出來ない。もう、今さら取りかへしはつかないのだと思ふと、嗚咽は堪へようとしても〳〵、齒を洩れた、啜り泣いてゐる大ぜいの級友に混つて私はたつた一人、まるで異つた淋しい氣持で泣きつゞけてゐた。

それから、もう、十年になる。私はこの時と同じ後悔をこのすぎ去つた年に感じなくて濟むだらうか。そして、また、この後の十年、その後の十年、やがて死ぬといふ時になつて滿足して自分の過去を振返ることが出來るだらうか、私は時時、この卒業式の夕方を思ひ出すと淋しくなる。

二 昔まへ

大村嘉代子

たかの様

私の女學校時代のことで一番よく思ひ出す場面を書けといふお話ですが、私達の女學校時代はあゝであつた、かうであつたと物珍らしくお話するのは、それより古い珍らしい女學校時代の思ひ出を持つかたに對して、何の變哲もないことだ

といふことをいつも思ひます。さう思ふと氣がさして筆を執る氣が致しません。その上よく舊年、新年といふと、女學校時代の思ひ出を書かせられます。あまり澤山の思ひ出を持つて居ない私は、いつも書くことがきまつて居ます。自分でも、あゝ、また四角な肩掛や廂髷のことを書くのかなとためいきが出ます

たかの樣

ですから、私はたゞわかいあなただけにお話するつもりで女學校時代の思ひ出話を致しませう。

たかの樣

この春までのあなた――無論あなたは大學部でしたけれど、女學校の五年位の人と同じやうにわかく私には見えました。――そのあなたの輕快な袴姿と、私達の女學校時代のずる〳〵した着ながし姿とを較べて見ると、着物の上だけでは私達は老けて居ました。

私達はまだその頃、袴をはいて居ませんでした着ながしであたまは油澤山の日本髪で、冬は毛の膝掛のやうな四角の大きな肩掛にお熨斗のやうにくるまつて、首ばかり出し錦町河岸のお濠端を歩いて通學してゐました。明治三十四五年のその頃は考へて見ると神田にも原が多うございました。今復興されつゝある錦町一圓の姿の方がずつと賑やかな位に思へると云つても過言ではないと思ふほど、三輪田眞佐子先生の塾の前や、橋田病院の後などには、ひろ〳〵として原があつたと思ひます。その頃神田橋際にあつた學校に通つてゐた私はそれ等の原を斜にぬけたり、錦町河岸を眞直ぐに通つたりして、番町から一里位の隨分遠い道を平氣で歩いて通つてゐました。別に時間が大變足りないと思ふほど、學校の方も忙しくはありませんでしたし、學校の歸りに音樂や繪の稽古に通つてゐても、大して時間が足りないとは思ひませんでした。今から考へると、あの頃の私達は、日が永かつたのではなかつたかと思ふほど、大變時間がありました。春長閑と云つたやうな氣持がたしかにあつたのです。それは若い頃の思ひ出として悔いを殘すことではないかもしれませんが、でも、私にはすこしくやまれます。

あなたの過ごされた女學校時代のやうに、高い藝術への憬など、その頃の私達には殆どありませんでした。唱物の暗記以上に出ない無味な教授をうけてゐた私達には、學科は門前の小僧のよむ經文のやうなもので、血にも肉にも心の糧にもなりはしませんでした。實用的な家事、割烹までが、皆な紙上空論の暗記にすぎませんでした。

その頃の小說は御存じの通り、今のやうになま〳〵しいものではなかつたのですが、文學好きな生徒がもし一册の小說を學校内に持ち込んだのを先生が知らうものなら、それが政岡の忠節を說き、春日局の忠義を說いたものであつても、小說となづけられた以上、机の隅から隅までしらべられた上句、馬鹿に近い小言をきくのです。私なども若松しづ子の小公子を運動場の隅で讀んで居るのをみつかり叱られました。

たかの樣

わかいあなたには此の話は不思議でせう。小公子なのです運動場で遊ぶ隙に小公子をよんで叱られたのです。皆と一樣に規則通り遊ばないのを叱られたのです。けれどその時分の私達は、馬鹿げた單純な心であつたので、先生に叱られてすつかり恐縮してしまひました。學校に居るうちは學科の本だけよんで居ればいゝ、それが生徒の本分である。たしかそんな風にしかられたのを尤もだと思はなければならないと思ふほど、先生は恐かつたのです。小說を讀むのは罪惡である。そんなふうにその頃の私達は考へて居ました。今、女學校の一年でナナをよんで居る人があるといふことをきいたり、ドストエーフスキイなどのものを包みもせず手に持つたまゝ電車に乘つて居る女學校がへりの生徒を見ると、私はのび〳〵と自由に幸福に手をひろげた生氣に滿ちた雜草をみるやうな氣がします。

たかの樣

それを雜草と見るのは、どうしても私が女學校時代に敎へられた或るものが私の心の底にこびりついて居るからなのです。私はのけることの出來ない此の心を悲しく思ひます。

思はずお話が橫にそれて、紙數も盡きました。

たかの樣

これで筆を擱きます。

ゆかりの袴

森律子

ゆくりなくも懷しい時代を思ひ起されました。

私の學生生活は、六才の折、跡見女塾に入れられたのが始まりでした。今の幼稚園に相當するのでせうが。幼稚園と云ふより、寺小屋と云ふ言葉を用ゐたが至當かも知れません今日では、どれ程悧巧な、聞分けのいゝお子さんでも、親の手許を離れて塾生活に這入るには堪へられない年齡と思へま

すのに、二つ年長の姉と二人して、その頃京橋の采女町にあつた父母の家からは一里餘も離れた、小石川の跡見女塾に入れられたのでした。私と、今は八人のお母さんになつて居られる松平妙子さんとは、塾中の、最も小さいそして、最も手に負へたいやんちやの二人であつたと記憶します。其頃、塾生は恐く、髪をおちごに結んで居りました。今の下町風の結ひ方ではなくて、お師匠さん（その頃は花溪女史を斯う呼んで居りました）のお好みから、御所風の輪の大きいおちごに結ひ、そして、由緒ある紫色の袴をつけて居りました。その髪は一週間に一度、たゞの一度だけ、上級の方が結つて呉れることに定めてありました。その髪も、お友達と喧嘩をしてむしり合つたり木登りをして木の枝に輪をかけたり、それこそ只の一度も完全にもたせ終せた記憶がありません。朝、規定の時間に起きる時でさへ、おめさがなければ嫌だあ、と、だゞをこねて、室母を困らせたものでした。土曜日の夕方になると定まつて家から俥のお迎へが來ました。一週間に一度土曜日から日曜日にかけて私達は家に歸ることを許されました。平素、塾内で白粉を用ゐることは絶對に禁じられて居りましたが。家に歸る時だけは、外出する女のたしなみとして髮を結ひあげ、綺麗におしまひをして、姉と二人で、家に歸つたのでした。道が遠いので、私はよく俥の上で居眠をしました

女學生時代は、お轉婆娘でゐるうちに過ぎてしまつた感じがあります。お稚兒に結んだ髮と紫の袴と、それが私のお轉婆姿なのでした。その頃、梯子段を飛ぶことが流行りました誰それさんは、十段飛んだとか、誰それさんは十二段目でよとか、梯子段を餘計に飛ぶことを自慢にして、授業の休み時間に盛んに飛んだものでした。私はお友達におだてられてあまり飛び過ぎて、腰の關節を外して、病院に入院したこともありました。

お調子者で、お轉婆娘は、と云へば、眞先に白羽の矢の立つ私でした。

學校の門から今の講堂に至るまでは宏大な庭園になつてゐて、中央には、櫻の老木が幾本も並列んで居りました。その花の盛りの頃、散る頃——今思ひ出せば、たまらない懷かしさが湧いて來ます。

いつか、花の咲き亂れた藤棚の下で、お友達達と喧嘩をしたことがありました。相手が誰であつたか、何に就いてした喧嘩であつたのか、今、判然と思ひ出しません。その友達の去つたあと、私は酷く不機嫌になつて、夕食の鐘が鳴つても、拗ねて食堂に這入りませんでした。慰め難い心をだいて、灯點

しころを、校園の藤棚の下に立つて居りました。向ふの食堂では、平常の人達が平常のやうに賑やかに食事をして居りました。頭の上には、暗い藤の花房が垂れて居りました。私は急に家に歸りたくなりました。其處に、仲善しの松平さんが食事を終へて出て來たので、私もうこんな學校に居ませんから歸ります。と云つて、校門を出て、暮れ急ぐ街に出ました紫の袴は處々切れ、段々に編んで下げた髮は亂れて居りました。三菱ケ原にかゝると、向ふから來た男の學生が、丁度日清戰爭のすぐあとないで『ちやんちやん坊主』と冷かしましたので、私は眼に一ぱい涙をため、髮をばらばらに解いて、『日本人ですよ』と振返りながら幾度も云ひ捨てゝ、遂う遂う家まで歸つてしまひました。

その翌日、學校に歸されるとすぐ、私は、暗い裁縫室に押籠められてしまひました。部屋の隅には蒲團が積み重ねてありました。その蒲團を引摺り出して、私は大の字になつて寢て居りました。戸の外の廊下に草履の足音が聞えると私は急に、火のつくやうに大聲を立てゝ泣きました。が、その草履の音が遠くなりますと、また蒲團の上を轉がつて平氣で遊んで居りました。

その夕方、あなたの姉さんが餘り泣くから、姉さんに免じて許して上げると云はれて、私は許されました。姉は私とは正反對の優しい氣質の持主なのでした。

自宅のすぐ前が歌舞伎座でした。私は土曜日に歸宅するのを待ちかねて歌舞伎を見に行きました。そして、塾に歸ると何かにつけて、餘興にお芝居を出しました。今でも羽左衛門さんなどに稽古場などで一緒になりますと『森さんは、紫の袴をつけてお稚兒に結つて、芝居をよく見に來ましたつけねえ』と、其頃のことを言はれます。自分が舞臺に立つ日の來るなどと云ふことは考へなしで、私は芝居が大好きでした。

寺小屋時代から、女學生時代、それから女優時代と、その間は、細いながらもラインで劃されて居りましたけれど、あの大地震で更に更に太いラインが劃されてしまひましたので、それ以前の細いラインは打消されて、過去は、ごちやごちやに、けじめがつかなくなつた形です。

江戸川べりを通つた六人組

山川菊榮

麴町の番町小學校から、小石川の府立第二高等女學校へ同時に入學した私共六人の仲間は、丁度その中で學校への通り路に當つてゐて一番其方へ近い私の家で毎朝勢揃ひをして一所に出かけることにしてゐた。六人が並ぶと狹い往來が一杯になる。それから左とか右とかいつて極めた方の足から一齊に踏み出して、まるで兵隊のやうに美しく足並みを揃へて歩くことに、私共はどんなに誇りを感じてゐたらう。けれども喋べつてゐる中にツイ足並みが亂れて二人三人づゝ、自然に二組ぐらゐに別れてあと先になる。ズルと後れた者は前に行く者をズルイとか何とかいつてさわぎながら足を早めるし前に行く者は後れた者を足がのろいと笑つてなほ急ぐ。そうして麴町から小石川の竹早町まで——當時はまだ電車が無かつた——毎日、街のやうに賑やかにさへづりあつて通つたことだつた。

袴の裾の長い短いも毎朝の私達の話題の一つだつた。私共はツンツルテンに穿くことをみえのやうにしたので、誰か一人裾長にして來るとおしやれだといつて笑つた。又實際氣取つてすましてゐる人に限つて靴の踵がかくれるやうに袴を長くしてゐたものだつた。私達は又丈の高さを競爭し合つた。が六人の中では一番おそ生れだつた私が図ぬけて丈が高かつたので、私の次に丈の高かつた今の三宅やす子さん（當時の加藤やす子さん）などは、隨分くやしがつたものである。

作文や圖畫の作品をやす子さんいお家の玄關の三疊の障子の桟にはりつけて『展覽會』をよくやつたのも其頃のことである。

今と違つて電車も自動車も通はぬ當時の山の手の町には、商家も少く人通りも僅かで、散歩や通學の道にはおあつらへ向きの落ちつきと靜けさを備へてゐた。お濠の水と綠の土手と黑ずんだ老松との物靜かな古びた景色は、朝夕通ふ道でも見飽きなかつた。殊に霧の深い朝や、淡月を踏んで歸る夕方や、秋の江戸川べりの赤い櫻の落葉の散りかゝる下を通つた時分の心持は、今思つて見てもなつかしい氣持がする。

○

江戸川の、中の橋を渡つて右に折れた角に交番が立つてゐた。私達はいつもその交番の時計をのぞいて見ては時間の遅い早いを知るのを常としてゐるうち、隔日に非番に出てゐる一人の巡査と顔なじみになつた。その巡査は終日非番に立ン坊をしてゐる退屈まぎれのためであらう。立つたなり、右の足を左の脛の所へよせ、左の足を右の脛へよせ、交る〳〵それを繰返してゐる恰好が、舞踏でやる『バランス』にそのまゝだといふので、私達は『バランス巡査』と名をつけてゐた。牛込邊からよく私達の組と落合つて一所に通つたおてふさんといふ小柄で無邪氣な愛嬌者の同級生はその巡査と口をきく程になつてゐた。

『今朝は遅いから急いでお出で』『今日はまだ早いからゆつくりで好い』、などゝまだ時計をのぞかぬ中からバランス巡査は數へてくれるのが

そのうち日露戰爭が來た。私達は繪はがきや慰問袋を作つて出征兵士に送ることを學課の中に加へられたやうな有樣となつた。

戰爭がやつと濟むと講和條約反對の聲が起つて、日比谷の國民大會から、熱狂した群衆の新聞社襲擊、警察及び交番の燒打といふ段取りとなつた。

街燈もなく電車も通はぬ眞暗な町に、物凄い群衆の叫喚の聲が傳はつて來、燒打の光りが空の涯を赤々と色どつてゐた。

朝、學校へゆく道で群衆が多勢珠數つなぎに警官に曳かれて行くのを見た。牛込警察署の裏庭には檢束者が黒山のやうに集まつてゐた。江戸川べりに出ると例の交番は燃えくづとなつてなほ餘燼がふすぼり、バランス巡査は呆れ顔に其前に立つてゐた。

○

裁縫の大嫌ひな私は、裁縫の時間にはいつも切れの下に本を忍ばせて、先生が見まはりに來る時、あはてゝチク〳〵針を動かすばかりで、その餘の時間は机の下でコツソリ本を開いてゐた。女學校を卒業して以來今日まで、二葉幼稚園で貧兒の救濟に盡して居られる徳永恕子さん——同級生はみな名を呼ばずに『阿母さん』といふ名で通してゐたほど、ホンの小娘の時代から徳永さんは慈母らしい溫情と親切を湛へてゐた人だつた——の愛讀書だつた木下尚江氏の社會主義小説『火の柱』や『良人の自白』を借りて讀み耽つたのも、主に裁縫の時間のことだつた。尤も裁縫に限らず、私はどの學課も嫌ひだつたので、何の時間でも平氣で好きな本の盗み讀みをし

たものではあつたが。
　確か倫理の時間であつたと思ふ。
『社會主義はよいと思ふか、惡いと思ふか』といふ問が先生から發せられた。四十餘人の生徒の中、二人を除く外は一齊に『惡いと思ふ』方に手を擧げた。その時手を擧げなかつた二人が、黒崎悦子といふ婦人協會などで働かれた御目になつて居られる人と私と二人だつた。私は理由を聞かれた時、『社會主義のことをまだ知りませんから、そんなに惡いものかどうか分りません』と有のまゝを答へた。黒崎さんは『本當は私も社會主義なんか知らないのだけれど、皆が惡いといふからわざと好いと思ふといつてやつた』と笑つてゐた。

紐育に渡る前後

石本靜枝

　平凡な時代に、平凡な家庭に順境に育つて、女學校を終へた私にとつて、特に深い印象を後に殘した程の事は殆どないと云つてもよい。それは、その頃の自分にとつては嬉しい事と樂しい事と、そして又娘相應な悲しみに胸を痛めた事があつたには違ひなかつたが今から思へば、その頃の自分と云ふものがたゞ現實の社會に少しも觸れない環境の中の、云はゞ夢を見てゐる頃の自分としてしか思ひ出せない。
　ロマンチツクな自分の夢を少しでも破られる樣な事に出會はない中に女學校を卒業すると間もなく自分は幸福な婚約をして、更に希望に輝いた結婚生活を營む事になつた。
　幼稚園に通ひ初めてから、女學校を卒業して結婚生活に入るまでの自分の幸福な、愉快な思ひ出が、現在の自分にとつても幸福な夢の連續の樣に感ずる事が出來るものであつたら、自分の生活は社會の醜い半面を全く知らない、現實の悲哀を全く觀る事のないお人よしで、優しい、女の性格を、發揮する事が出來たかも知れない。そして或はそれが自分にとつて幸福であつたかも知れないけれど、私の境遇は結婚後かなり變化に富むだ生活を營む樣になり、更に進んで紐育の職業婦人を養成する學校の女學生生活と云つた樣に、どん〳〵と場所が變つて來た爲に前の女學校時代に持つてゐた、例へば溫室の花の樣な溫りを知らない爲の美しさ、性格が純だといふ許りで少しも鍛錬されてなかつた自分のその頃の性格とはかなりの隔りを自分の中に見出す樣になつた。
　室咲きの花の樣な學習院出の自分が、紐育のビジネス、

カレッヂ生活をして、路傍の雜草として目立たないけれど確かりする事の出來る力強さを握り得たいと、努力した頃の自分の學生生活こそは、性格の弱かつた自分にとつて可なり苦しい思ひ出には違ひないけれど、前に云つた夢の樣な思ひ出よりは顧る度にどれほどの愉快さを感じる事か分らない。

そして、私と云ふ一個の性格が、健康と若さに漲つて、植物で云へばまだダン〱と幹が延びて行く時代の、その頃の私に、私の生涯を通じての力強い基礎となる柱は、充實し切つた學生生活の機會――それは單期間ではあつたけれど、實にはち切れる樣な充實さであつた――を與へて呉れた人の深い愛に感謝したい。

既に圓滿な家庭生活に入つてゐる自分は又仕合せと何等の經濟的な壓迫を受けて居らなかつたから、良き妻、賢き主婦として、單に消費經濟を處理して行けば足りる筈の境遇に居りながら、溫室育ちの弱さを自覺する樣になつてからは、自分自身と自分の愛するものとを、完全に生かす事の出來る、自由な確心を掴んでゐない事がたまらなく心を惱ましてきた。自分の生活を他に頼らなくては爲し得ないその心苦しさは、どうしても、自分と云ふ弱い者を現實の社會に吹きまくる荒い風に揉まして鍛へる事と、具體的には、經濟的に獨立する事の出來る確心を得る方法とを習得しなければ止まない決心とを持つて紐育の女學生生活を初めたのであつた。

一九二〇年の十月一日に、新學年の始まる二週間前、自分はまだ着こなしの出來ない洋服姿を氣にしながら、紐育に着いた。學習院時代には運動の方面に身が入り過ぎて大した勉強もせずに過してしまつた自分は、英語と云つても僅かにおとぎ話が讀める程度で日用の用事を足すにさへ、何の役に立たないものであつた。あの中で良く氣が狂はないでゐられたと思ふ樣な騷々しい、高架電車が、いつと云つて横切る折のない樣に、ひつ切りなしに走る自動車、荷馬車の町を、たゞ一筋學校へ行く通路だけを覺えて、私は通學し初めた。

たつた一人の、言葉も何も出來ない日本人がクラスに入つて來たと云ふ事は、先生にも餘程興味のある事と見えたらしく、大變親切であつたし、お仲間はみな慣々しく自分に近づいて呉れた。けれども、私はたしか一ケ月の間位は學校で一ことも物を云つた事がなかつた。話すべき言葉もよく知らなかつたし、何しろ女學校位を卒業して來てゐる人々の仲間にいきなり入つて、追ひ付いて學んで行かうと云ふ努力に自分の力を十二分に働かせる事で力一杯であつたから。

學課は米國の樣なビジネス國として一番必要な職業でも

り又婦人が占めるに最も適した一つの地位であつた、秘書役を養成する爲のものであつたから、速記術、タイプライター、簿記、經濟學、事務用英語等であつた。速記術を會得する事が自分にとつては、その英語の發音から意味を調べ、更にそれを如何に速記術で表すかを學ばなくてはならないために他の學生の三倍の勉强をしなければならない事になる。どうでもかうでも、日一日を一瞬時を惜んしで勉强しなければならないと云ふ場合にのぞんで、自分は全く生れて、初めて血の出る樣な努力を持つて勉强をし出した。米國の女學生生活と云へば、生活程度の高い國だけあつて、日本人の目からは贅澤なと云ひ度い位の、餘裕のある、羨しい許りの生活で、私の樣に自分自身を職業婦人に養成する目的だつたもので、勉强の傍ら惜しい時間を裂いて自炊したり、洗濯物の始末もしたりしなければならない忙がしいものはなかつた。食事の時間も睡眠の時間も裂いて勉强しなければならなかつた事は、その時分たしかに苦しい事でもあつた。しかし、眞に緊張した精神は不眠不休の努力をしても病魔に取りつかれる隙も與へず、到底登り得ないと見えた、險しい山にも案外容易に登り得ると云ふ經驗を身につけて、自分で吹聽するのも、をかしいけれど、完全に良い成績で、米國の學生生活を終へる事が出來た事は、今になつて思へば、そのかち得た良い成績などよりも、自分自身が徹底的に緊張して、努力した苦しい思ひ出の方が、遙かによく今日の自分に生きる力を得へる事を嬉しく思ふ。

花園の中の禁斷の果實

厨川蝶子

悲しさと寂しさに塞された私の心も、その華やかだつた長崎の想ひ出にひたれば聊か慰められもする。殊に、そこにも亡夫の面影を見出す事が、悲しくもあれば、またしばしの樂しさでもある。

幼くして父を失つた私達は、氣丈な母の手一ツで育てられた。私達には兄と姉とがあつた。父が死ぬると母は私達に

『私はお前達を自由にしよう、だが自分達の行動に就ては自分達が全責任を負はねばならぬ。』

さう云つた。それから私達の自由な華かな生活が初まるのであつた。

その頃、私は縣立長崎高等女學校に居た。この學校がまた恐ろしく規則づくめの學校で、そして體操だの理科だのがひどく發達して居る割合に、情操教育の事は忘れられて居た。

どこの學校にもある事だが、藝術によつて結ばれた十人ほどの級友が、ほかの生徒のだれよりも親しく結ばれて居た私達のグループは休み時間を待ちかねて校庭の片隅の花園の中に隱れた。其處には春ならばヒヤシンスの花が咲き、秋ならばコスモスが、をどろに亂れて居た。ひとりは薄田泣菫の「白羊宮」を朗讀し、一人は土井晩翠の「天地有情」を朗吟した。尾崎紅葉の作物がいつでも問題になつて居た。

厨川と私の實家とは可成り近い血縁だつた。その頃、厨川は、まだ角帽の大學生だつた。暑中休暇には長崎の私の家を訪ねて來て、その一夏を過すのであつた。ある時、厨川は私に訊ねた。

『紅葉の金色夜叉を讀んで何處に感心したの。』

私はあの歌留多會の夜に始まる書き出しのところがいいと思つて居たので、さう答へた。すると厨川は、晩年にもよくしたやうに唇を結んで、フフンと笑つた、何だか今から考へると私の理解力を試驗せられたやうにも思はれる。

其麼事で、厨川は東京に歸つて後も、文學雜誌や新刊の書籍を送つてくれた。私達のグループが花園の中に集まつた時私はそれらの刊物をとり出して皆と顏を集めて讀み耽るのが嬉しかつた。

キアマンの碧にも似て光り輝く南國の空の下に、小鳥の如く自由を樂ふ私達のグループが、鐵窓のやうな母校を離れて四散したのは、卒業にはまだ程遠い、それから間もなくの事であつたと思ふ。私は私の姉と共に、長崎郊外の丘の上に建てられた活水女學校に轉校して行つたのであつた。神近市子さんもその學校を出られたのだが、それは老嬢の外國婦人が校長をしてゐた宗教學校で、縣立女學校に較べると、さすがに明るく自由な校風がないでもなかつた。然し、そこにも私の暗礁があつた。

白晝の靜謐を破つて、丘の上の鐘がなると、生徒達は教室から會堂へと集るのであつた。そして讃美歌が合唱され祈禱と說教が繰り返されるのであつた。其の日々の勤行が、私にとつては空虛な倦怠に過ぎなかつた。私はしばしばチヤペルをエスケイプした。

ある日、こんな事もあつた。いつの間にか列を離れた私は丘の小徑を驅け下つて、その頃通つて居た畫塾へと向ふのであつた。ふと近寄る足音に振り返ると、それは私の姉で、姉

も會堂を逃れて琴のお師匠の家へと志す途中であつた。二人は顏を見合せて莞爾した。

あらゆる體内の細胞が歡喜に踊るやうな幸福な日であつた。徑の兩側に行儀よくたつた棕梠の並樹は、光の波の漲つた蒼空に、こだわりもなく梢を擴げて居るのであつた。姉は琴唄を口吟み、私は夢を描いて歩いた。その時、路傍の樹蔭から突然現はれた西洋人の先生が居た。遂々私達は捉へられた。私達の逃げ道を發見したその先生の爲めに捉へられた。

斯麼、たわいもない思出なら、私の女學校生活中には幾らもある。だが、最も華かな一場面を語れよ、と望まれたなら私は躊躇せずには居られないだ。すべてが押しなべて華かでそして全生活が一卷の繪卷物であるからである。

其の思ひ出の中に、くつきりと浮ぶ、あの若い厨川とその後私は結婚した。そして幾多の艱難を相擁して切り拔き。切り開き、やつと今日の幸福を見出すと間もなく、地震は私の全部を奪つて行つた。今は悲しい亡き人の面影も、私の女學生時代を背景として眺めると、矢張り明るく懷かしく微笑して居るのである。

十三人の女優志願

長谷川時雨

寺小屋式の尋常小學校を終へると、温習科とかいふ名がありましたが、生徒はたしか私一人ぎりでした。それも夏のはじめに校長なり私の受持ちの先生ともいふ肝心の方が痢病して歿なつてから、直にその學校も廢校になつたきり、それぎり私の學校への道は閉されましたから、多くの方が持つやうな女學校通學時代の幸福を知らないので、私の一生の、そこらの年頃の頁は淋しい單純な色彩でぬりつぶされて、取出して語る何物も持つてゐません。そのかはり、さうした變則の寺小屋式の小學校に通つたことゆゑ、そこには面白いことや、人間味の溢るゝ懷かしい記憶を多くとゞめてゐますが、それはこの場合のお話には適しません。その私が年たけてから、滑稽にも——悲慘にもほんの半年あまり築地のミツションスクールに通つた事があります。

私が留守勝ちな母から——箱根に多く居たので——末の妹を預けられたのは、その寺小屋じこみの乏しい知識と、學

問といふ學問も知らずに、知らぬ故に恐れげもなくひたすらに自身の行かうとする道へ志してゐた折でした。私はそれまで冬の野に踏みつけられた草の根のやうに、思ひがけない人生にばかりあつて來て、其上その年内には死ぬであらうと思はれたほどの弱い體でしたが、はじめて自分の自由といふものを見出したよろこびに心持ちはしつかりしてゐました。で、何處か私の氣持ちを喜んでくれてゐる父親ばかりなので、早速妹の教育について、よい學校へやつて貰ふ事を言出しました。私自身のかなしいあこがれを妹によつて癒さうとしました。そして女學校程度からでなければといふのを無理に頼んで、妹は、ずつと高等な專門の部まである、外國語を主にしてゐたところへ入校するやうになりました。其校には午後一二時間、初歩からの專科があつたのが、瘦せさらばつた廿才を遙か越した私を、紅顔の少女たちと机をならべさせる勇氣を出させました。私は父にあげるおひるの料理を早めに仕度させて、それがすむと大急ぎで出かけました。父は御酒家ゆゑ珍らしい客などあると午前から御酒になる事もあります。父は私の手料理をよろこんだので、大急ぎで佃島の渡しをわたる私の髪には白い灰がふわ〳〵してゐる事もありました。袴や洋裝の令孃たちからは不思議な飛入りに見られたことはよく感じてゐました。

なんといふ薄つぺらな私でしたらう、思ふ事を表現のしようもしらない苦しみ、それだけでも病弱なものには、一ぱいなのにとてもコンがらかつた頭に覺えられもしないものをあれもこれも學びながら――そこにまた何處にも生るところにある人間騷動もかなり感じながら、よろ〳〵と死にもしない執着を子供のころからの好きな道に這ひずつて行つたのでしたが、どうやらおはづかしい脚本が出來上つて丁度其折歌舞伎座で上演される事になりました。

何者が來てゐたかといふあしらひが變りました、校長が握手などしてくれたりする不思議なことになりました。妹もホツとしたやうに、やつと來てもよいと許すやうな顔を見せたりしました。何もそれが演劇熱をさそつたわけでもないでせうが、ヨンキヨル神父の謝恩會の時など宗教劇が催されました。

夜の余興がそれでした。私はその日まで何にも知らずに居ると、妹が、ぜひ用がある故早く來て夜もゐてくれと頼まれて來たからと言ふので、斷れば妹の迷惑と思ひ、望まれるままの用を辨じたのでした。「西教史」などにある武士の家族の殉教を脚色したものらしく隨分長いものらしかつたと覺え

てゐます。もとよりどんな筋であつたが覺いてもゐなければ見もしなかつたので、脚本は上級の人や其他でつくり、背景も花貞たちでつくつたといふことだけが知り得たのです。演者は附屬の孤兒たちの組でしたが、誰れの才覺か本衣裳や、小道具や、鬘などをかりてしまつたので手どちにおえなくなつて私が呼ばれたわけでした。

　馬鹿正直な私、困るのは誰もおなじ、これだけお客をよんでおいてと思つたので、そのあと二三日胸が痛みに痛んだほど右の手をつかひました。鬘を一々見せて貰つてから役者の顔をこしらへたいです。おまけに墨とお白粉が少々と、小さな紅ちよくがあるだけ——私は早速宅へ使ひをたてなければなりませんでした。それ老人、それ奥方、わたしは若樣、わたしは奴——驚いたこと／＼、猫の目のやうに場面が變るらしく登場人物の多い事／＼、息をつく間などはありはしません。私は途中から目がグラ／＼して火が出て來たほどです。が、私は無中になりました。それは役者になる子達があんまり可愛こうだからです。晝間の餘興はみんな立派な令孃たちばかりです、夜はみんなその人達まで見物です。綾の帶、錦の帶川もあざやかなおつくりの方ばかりですのに、この樂屋は——湯呑ひとつありはしません、火鉢もなし、衣裳は旅役者のそれのやうな古物！　私の前に肌をぬいで顔をつきだす少女たちの、どれもこれもが、十六七とは見られない蒼ざめやう、肌はザラザラして、そして今日のこの役をむづかしい言葉を一つでも忘れたら大變と目を据えてゐる哀れさ！　藝術的の氣分などすこしも醸しだされてゐない、あまりの眞劍さ、そのいた／＼しさ、私はあまりに自分自身がその折踏んでゐるみじめな藝術境とあまり似通つてゐるやうにさへ思つたのでした、そしてどうにかしてこの登者たちに、幕のあがつた瞬間だけでも、掛出しだけでもよいものにしてやりたいと力一ぱいに盡したのでした。

　そればかりでもありますまいが、幕があがるとワツと聲が上がるのが玆にゐても知れました。一人づゝ來てゐた衣裳屋と鬘屋が段々私の昂奮に誘はれて自分の事のやうに氣を入れ出しました。

　その結果がまた面白いものです。ある休みの期間に理事の方から來てくれといつて來ました。逢ふとその婦人はよほど言出すのに困つた表情で、什麼新たに組織された劇場の募集女優志願者に、この宗教學校から十三人の志望者を出した事が、今日の新聞の記事と寫眞によつてたしかめられた、そこでそれら志願者の誰彼を呼んできゝたゞして見ると皆無理も

ない一應の道理がある、學校としては願はしくはないが、各々人の家庭關係其他で無理に止める事が出來ない、よつて或る處を推すると、過日のあの演劇があまり好評だつた事に原因する、私にもあの人達以上にやれると知らず〳〵にした刺戟があるらしい。ことにどうも、貴女といふ人が一人交つてゐるので、なんとなく學校の空氣が異つた——といふ決議になつたさうで、女優志願者は退校といふのもおだやかでないが、なる可く自分からさがつて貰ふ事にしたところが、長谷川さんはそのままで好いのですかといふものも出來たので、このさい退校させたものに氣の毒だからと、體のよいお斷りでした。

思ひがけないとばつちり、寢耳に水でもあれば、呆れながらも他人ごとのやうに笑みが浮かぶのでもありました。十三人とは、全く思ひがけない數の反逆者を出したものです。私はその方達の前に灯をとつて立つたわけではないがそんな風に解されるものならば、とばつちりを甘んじて受ける事にしようと頷きました。勇しく新しく若い希望へと進んでゆく我劇壇の女優先驅者達の後に佇んで、暗い提燈をふつてゐるのも意味がないでもないと考へました。そして私は丁寧におじぎをして、あとに殘る妹が憎まれないやうな口をきいてともすれば出かゝる皮肉な苦笑を噛み殺しながら校門を出ました。

とはいへ、カトリツクの尼さま達が教へる靜かな僧院から華やかな女優志望者達を多く出したといふことを、重々しい建築物を見かへりながら門を出た時に、曾て眞つ黑な僧衣の下から赤い下ばきの裳を見た時と同樣にふと何ともいへぬ氣持ちを味ひました。押つけるにも押つけかねる時潮！　貞淑溫順なれと大聲をも出さぬ童貞たちの教へと何といふ心持ちのへだたりでせう。そして其光景はもはや十年あまり前となりました。その十三人の中で明星となつたのは森律子さん、河村菊枝さんです、佐藤千惠子さんや佐藤はま子さんは惜しいことに中途でやめてしまはれました。

震災後の 全國女子專門學校入學案内

東京

東京女子高等師範學校

所在地　東京市本郷區お茶の水氣付

本科

◇**學科及修業年限**　學科は文科、理科、家事科に分れてゐる。陳務定員は凡四百五十人。修業年限は何れも四ケ年です。

◇**入學に關する手續**　本科生徒は師範學校長、高等女學校長若くは專門學校入學者檢定規程第八條第一號の指定學校長の推擧者中より試驗の上選拔するものですから、入學志望者は其の手續に就ては各自出身學校に承合なさい。本校入學志願者は文科、理科、家事科を通し何れでも隨意に第一志望第二志望を申出られますから、推擧を請ふべき學校長に差出す書類には其の志望順序を明記なさい。學費はすべて自費とします。但し授業料を要しません。本科生徒募集の公告は毎年十月に之を官報に掲げます、當該學校長は推擧書類を所定の期日までに到達の日取を以て送附すべき豫定です。

（イ）入學志望者にして現に官職に在り又は服務年限中の者は監督長官の承認書を添付することが必要です。本科入學志望者は入學を出願したる後當校へ差出すべき願、届等の必要あるときは自己の氏名の上に必ず志望の學科前名を記載なさい。

（ロ）入學檢定料は金參圓です。

（ハ）**入試學驗**。本校入學試驗は文科理科家事科を通し左の科目に就き高等女學校卒業の程度に依り之を行ひます。

△國語　解釋、文法、作文。△英語　解釋、△數學　算術、代數及幾何初歩、△理科　植物、動物、物理、化學

入學試驗は一月中旬凡三日間之を施行します。依て推擧せられたる志望者は其の前日所轄地方廳若くは本校に出頭して指示を受けなさい。

（ニ）**合格發表**　合格者氏名は二月中旬官報を以て發表します。

（ホ）**健康狀態**　入學志望者は身體檢査書を提出し、能く在學中の勉學に堪へ卒業後の義務を果すに足るべき強健なる身體を有することを必要とします

（ヘ）**入舍**　本校生徒は寄宿舍に入舍します但自宅其の他より通學せ

んと欲するものあるときは適當と認むる場合に限り、或期間特に許可することがあります。

(ト) 生徒在學中學費月額概算

	文科	理科	家事科
食費舍費	一六、〇〇	一六、〇〇	一六、〇〇
圖書及學用品費	八、〇〇	八、〇〇	一〇、〇〇
修學旅行費	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇
雜費	八、〇〇	八、〇〇	八、〇
計	三五、〇〇	三、五〇〇	三七、〇〇

但し時價の高低により增減があります。入學當時諸般準備のために大凡五十圓を要します。

(チ) 本校入學者は卒業後、高等師範學校卒業者服務規則に依て定められた期間、服務義務のあることを心得ておかねばなりません。

研究科

◇同校所設の學科目中　一科目又は數科目を專攻せんとする者の爲に研究科を設けてゐます。そして研究科生たらんとする者は、本校卒業者若くは試驗によつて、これと同等の學力を有するものと認められたもので、修業年限は一ケ年以上二ケ年以下です。

選科

◇女子の中等教員たるの志望を有する人で、文科、理科、家事科の學科目中、一科目若しくは數科目を選んで學修をしようとする人に選科生としての入學を許してゐます。選科生の入學試驗は學年の始或は末に行ひ、在學期間は三年若しくは四ケ年です。外に選科生は授業料年額五十五圓を納める必要があります。尚詳細は同校についてお問合せ下さい。

日本女子大學校

所在地　東京市小石川區目白臺

◇學部及本年度募集人員　△家政學部　百廿人　△國文學部　六十人　△社會事業學部　△英文學部　五十人　△師範家政學部　六十人

(1)兒童保全科三十人　(2)女工保全科　三十人

◇願書受附期間。自一月十日至二月十五日

(但し遠隔の地と雖も十五日迄に到着するやう提出のこと。)

◇出願手續。入學願書、履歴書に檢定料金五圓と左の書類を添へて差出すこと。

(一)卒業若しくは在學せる學校の各學科評點及席次を記したる各學年成績表。(一)、最近の體格檢査證。(一)、卒業若しくは在學せる學校の人物考査及品行に關する證明書。(一)卒業若しくは卒業見込の證明書。

◇入學資格　は、高等女學校卒業又は專門學校入學の資格ある學校卒業生にして年齢滿二十五歳未滿。修業年限は各學部とも四ケ年。

◇出願後の檢定法について。

(一)、一般に入學試驗を課せず。學業成績、體格、人物品行等を考査詮衡の上順次優良者より編入す。但し英文學部の志願者に對しては右詮衡の上尚英語の學力を試驗す。その程度は左の如し。

讀解　ナショナル第四リーダーの程度
作文、書取、讀方會話。

(二)、右査定の結果は、三月十日頃各志願者に通知の豫定。以上合格せる者に對して、尙個人面會の上許可を確定す。

◇通學入寮　同校の學生は自宅以外よりは通學を許さず、すべて入寮せしむるを本則としてゐる。但し特別の事情により入寮すること能はざる者は、その事由を申出で豫め許可を受くること。

◇學費　(一)入學料金五圓　(二)授業料年額七十七圓(これを三學期に分納のこと)(一)校費　年額五圓五拾錢　△寮費　一ケ月二圓五十錢以上三圓五十錢　△食料及雜費　一ケ月十七圓五十錢　△寄着右規定の外、書籍費、實習費、學用品費及雜費、等合せて平均一ケ月約四十圓內至四十五圓位の學費を要する。

◇無試驗檢定　師範家政學部及英文學部の卒業生にして、成績優良なる者は、無試驗檢定により前者は家事科、後者は英語科の中等敎員免許狀を受くることを得。

東京女子大學

所在地　東京市外淀橋町字角筈

基督敎主義に基き文化敎育を旨とする女子の最高學府である。高等學部、大學部、英語專攻部豫科、英語專攻部とする。大學部を分つて文學部、社會學部とする。入學試驗は一月八日東京及び大阪名古屋以下全國の十七都市に於て執行する筈だが、入學願書差出期日が十二月十日までだから既に間に合はない。

女子英學塾

所在地　東京市麴町區五番町十六番地

女子英學塾は英語を主とし女子に高等專門の學藝を敎授する。

◇豫科　修業年限四ケ年以上の高等女學校卒業者及び專門學校入學者檢定規程に依る試驗に合格し其證書を有する者は豫科に入學する事ができる。豫科の修學年限は一ケ年である。

◇本科　豫科修了生、修業年限五ケ年の高等女學校卒業者にして國語及中學校卒業程度の英語の入學試驗に合格した者は本科一學年に入學する事ができる。本科の修業年限は三ケ年で、卒業者は文部省中等敎員の無試驗檢定を受ける特典がある。

◇選科　豫科修了者及び豫科入學志願者と同等の學力ある者の入學を許し修業年限は三ケ年である。

◇研究科　入學志願者は別に入學試驗を課せず、其の資格を考査して適當と認めたる者に入學を許可する、だが大體本塾、本科或は選科卒業と同等以上の英語の學力を有する必要がある。修業年限一ケ年以上。

◇別科　高等女學校卒業又は之と同等の學力を有する者に豫科入學に必要なる實力を養成するを目的とし修業年限は一ケ年である。

◇入學試驗　入學願書には受驗料金五圓を添へて二月一日より三月廿日迄に本塾へまで差出す、入學試驗の期日は三月下旬である。尙願書と同時に卒業證書寫、證明書、等を添へなければならぬ。

◇學費と寄宿舍　授業料は本科、選科、研究科は一ケ年金七拾圓、豫科、別科は金六拾圓。各學期に分ちて學期の始めより十日以內に納

付する。寄宿生は一ケ月合費金二圓（冬期は三圓）賄費十五圓。

東京女子醫學專門學校

所在地　東京市牛込區河田町

本校は、女醫を養成する爲に設立したもので、大正九年からは文部省の指定學校となり、卒業すれば醫師の免狀を與へられることになつて居ます。

◇入學者の資格　入學には入學試驗に合格することを必要とし、受驗者は四年制以上の高等女學校を卒業したる者、又は專門學校入學檢定試驗合格證を有する者に限る、從て只實科高等女學校を卒業した丈では受驗の資格がありません。

◇試驗科目　試驗の科目は國語理科數學の三科で高等女學校卒業程度に據り理科は物理と化學、數學は算術と平面幾何で幾何は本年から加へたものであります。此の外に口頭試問と體格試驗とが御座います。

◇體格試驗　本校の學科目及び其の程度は文部省令官立醫學專門學校規程に準據して居るもので、男子の醫學專門學校と同一である故に。身體の强健、これは最も必要條件でありますから、身體檢査は嚴重に致します。

◇學資　專門學校のうちでも醫學のやうな特殊の學問になると、學資を要することの多いのは勿論であります。

（入學に關する費用）（入學檢定料）五圓、（入學金）拾圓、（授業料）年額　百貳拾圓（教科書又は參考書）在學中凡そ貳百圓（被服費）學校には制服があつて總て之を着用させることになつてゐます。其の費用は夏冬で凡そ百圓、在學中に二度位調製する必要がありませう。（寄宿費）物價の高低で一定はしないが、只今の所では食費が月額拾六圓、合費が月額四圓であります。（學用品其の他の雜費）個人に專屬する小遣を除きて一ケ月拾圓乃至拾五圓

◇入學用紙　入學願書や在學證書には一定の書式がきまつてゐるから志願者は同校に請求するがよろしいでせう。

◇入學願書受理期限　三月三十一日

◇入學試驗期日　四月四日より六日に至る三日間

東京音樂學校

所在地　東京市下谷區上野公園內

◇本科　聲樂部及器樂部に分ち修業年限は三箇年以上五箇年以內。本科には豫科卒業者か若くは試驗に依り之と同等以上の學力ありと認められるものゝ入學を許可する。別に高等女學校を卒業して居なければならぬ事はない。男子部も女子部も此の學校では別に區分をしてない。卒業すれば勿論音樂敎員の資格も得られるが、また樂壇に立つ藝術家ともなれるわけだ。

◇師範科　甲種師範科は修業年限三ケ年、卒業すれば中等敎員の資格が得られる。乙種師範科は小學校の音樂敎師を養成するのが目的で修業年限は一箇年。

◇入學資格　本科には別に資格を定めないが、甲種師範科は中等學校の卒業生に限り且つ唱歌、樂典、器樂、國語、英語の入學試驗に及

第しなければならぬ。乙種師範科は高等小學卒業程度の學力を有し唱歌、國語の試験に及第せる者の入學を許す。

◇豫科　中學四學年修了以上の學力ある者にて唱歌、樂典、器樂、國語、外國語の入學試験に合格したる者の入學を許し修業年限一ケ年本科に進む事ができる。

◇入學志願者　は願書に受験料金五圓を添へて差出せばよい。期日は三月下旬の學年初めまでだが、本年はまだ定まつて居ない。

◇寄宿舍　女生徒に限り特に寄宿舍の設備あり、舍費三圓、食費十五圓。通學生は授業料、樂器使用料以外に一ケ月の生活費約四十圓あれば足りると同校では云つて居る。

女子美術學校

所在地　東京市本郷區菊坂町

◇科目と資格　中等學校の教員となるには各科の高等師範科に入學するがよい。刺繡科、造花科は手藝の先生に、裁縫科は裁縫の先生に何れも無試験檢定で資格が得られる。日本畫と西洋畫にはまだ其の資格がない。文部省の裁縫科檢定試験を受けるには高等試験科に入學するがよい。家庭向きの裁縫を學ぶには裁縫高等科（二年）裁縫選科高等科（一年）の二科がある。同じく家庭向きの手藝を學ぶには刺繡造花高等科（二年）同選科高等科（一年）がある。教員目的でなくて畫を學ぶには高等科（三年）選科高等科（二年）選科（二年）がある。

◇各科修業年限入學資格　各科高等師範科は修業年限三ケ年（但し日本畫科及西洋畫科は四ケ年）、女學校卒業生及び小學校本科正教員免許狀所有者は入學資格を有す。各科高等科、修業年限二ケ年（日本畫科及び西洋畫科は三ケ年入學資格は高等師範科に同じ。各科選科高等科、修業年限二箇年（刺繡造花裁縫科は一ケ年）本校選科卒業者、裁科は高等女學校卒業者の入學を許す。其他各科選科、裁縫科高等受験科、造花刺繡速成科あれど都合に依り紹介を省略する。

◇出願、入學　出願期日三月二十八日。入學願書には履歴書及學校長の成績證明書を添へること。高等師範科には配偶者のある人は入學を許さない。入學試験は四月一二の兩日に試験を施行する但し試験を行ふは各科高等師範科、日本畫高等科及び裁縫科高等受験科であつて其他はこれを行はない。

◇學費、高等師範科　入學料五圓、授業料年額七十圓、校費年額六圓、材料費年額十圓乃至四十圓。他の科も之れと殆んど大差がない。

青山女學院專攻科

所在地　東京市外澁谷町青山南町

ミツシヨンスクールの青山女學院では、高等女學校令に準據し、高等女學部に專攻科を置いてゐます。專攻科を分つて實務科、家政科、裁縫研究科とし、修業年限は各二ケ年です。その中毎年志願者の最も多いのは實務科で英語を主にして簿記、タイプライチング、數學等の教授もしてゐます。

◇入學資格

一、實務科及家政科に入學し得るものは當院高等女學部第一部及第二部本科卒業者（高等女學部卒業者を含む）及修業年限四箇年以上の高等女學校

（實科を除く）若しくは文部大臣の指定を受けたる各種女學校（實科を除く）の卒業者とします。但し當院第一部卒業者及修業年限五箇年の高等女學校若しくは同程度の女學校卒業者にして英語の學力堪能なるものは試驗の上第二學年に編入します。英語の學力不充分の者は實務科に入ることが出來ません。

二、裁縫研究科に入學し得るものは當院第二部本科卒業者及修業年限四箇年以上の高等女學校（實科を含む）若しくは文部大臣の指定を受けたる各種女學校（實科を含む）の卒業者とします、但し實科高等女學校及同程度の女學校卒業者には數學、國語等の試驗を要します。又裁縫の力不充分の者は裁縫研究科に入ることが出來ません。

◇入學受驗料　と入學料とは各貳圓宛で、授業料は年格五拾五圓です。入學者には寄宿の便があり、現今の食料は拾七圓で、會費が參圓です。

◇卒業後の特定資格　は現在のところありませんが、文部省の檢定試驗では毎年當科卒業生の中から合格者を出してゐます。

實践女學校專攻科及高等師範部

所在地　東京市外下澁谷町

實践女學校の專攻科は國文科、家政科、技藝科の三つに分れてゐて、その中國文科は凡四十人、家政科は百人、技藝科は四五十人入學を許可します。

◇專攻科入學資格　國文科（高等女學校五年卒業に限る。（研習科は許さず）家政科技藝科（高等女學校四年卒業以上）何れも女學校時代の成績を參考にして、口頭試驗のみを行ひます。主義は高等女學校の延長にありますから師範學校出身は一切入學を許可しないことになつてゐる。修業年限は何れも三ケ年で、卒業後の資格として、家政科と技藝科には中等教員の無試驗檢定を許可します。

願書の提出期間は三月上旬から廿五六日迄で、授業料は年格七十七圓に校友會費年格二圓四十錢です。

◇高等師範部入學資格（高等女學校本科卒業生は勿論實科卒業及小學校の教員免許を有する人を許可します）これも修業年限三ケ年で裁縫科の中等教員の無試驗檢定をえられます。昨年は四十人の許可者がありました。各科とも毎週の教授時間は三十時間から三十三時間以内です。

入學を許可された人は確實な保證人の許から通學を許可します。何實践女學校では、大震災後從來の校服を自由にして、和服なら何でも隨意になりました。

お茶水高等女學校專攻科

◇同專攻科では學部を英語部と國語部と裁縫部に分けて、高等女學校卒業程度の女子に國語、數學、理科、地歷の選拔試驗を行つたので入學を許可してゐます。修業年限は何れも三ケ年で、成績の優良なる者に限り、無試驗檢定を許可してゐます。願書の提出期間は二月末より三月廿日頃までで。授業料は年額五十五圓。詳細問合を乞ふ。

以上の外に高等女學校卒業程程度の女子に男女共學を許可してゐる

學校としては、東洋大學（東京小石川區原町所在）日本大學（東京市神田區三崎町所在。但し震災後は大塚窪町なる帝國女子專門學校內に假校舍を設く）の二校が有名であり、每年四月には多數の卒業生を送り出してゐる。尙帝國大學及早稻田大學に於ては各科に渡つて相應の資格ある女子に隨意聽講を許可してゐる。

關西

奈良女子高等師範學校

所在地　奈良縣奈良市北魚屋西町

本科

◇科目及び卒業後の資格　本科は文科、理科、家事科の三科に分れ、修業年限は何れも四箇年であります。

◇文科の學科目　は修身、教育、國語、漢文、日本歷史、外國歷史、地理、英語、音樂、體操であります。卒業すれば修身、教育（成績優良の者に限る）國語、日本歷史・外國歷史又は地理、體操（成績優良の者に限る）の教員たるべき資格を與へられます。

◇理科の學科目　は修身、教育、數學、物理、化學、鑛物及地質、生理及衞生、植物、動物、園藝、英語、音樂、體操であります。卒業すれば修身、教育（成績優良の者に限る）數學、理科、物理化學又は植物動物、體操（成績優良の者に限る）の教員たるべき資格を與へられます。

◇家事科の學科目　は修身、教育、家事、裁縫、理科、圖畫、園藝、英語、音樂、體操であります。卒業すれば修身、教育（成績優良の者に限る）家事、裁縫、體操（成績優良の者に限る）の教員たるべき資格を與へられます。

◇入學志願者の資格　本科の生徒は地方長官の推擧に基き本校で詮議をして入學を許すのでありますから、入學の爲には試驗の準備を要しません。高等女學校又は師範學校での成績が良く身體が丈夫で品性が宜しければ選拔によることが出來ます。但英語は高等女學校卒業程度の素養あることを要求しますから、若し高等女學校在學中正科として英語を學習しなかつた人は英語を學びたる經歷を委はしく履歷書及學科志望書に記入し其の學びたる書名及程度を明記する必要があります。

◇入學志願手續き　入學志願者は一定の書式に從ひ履歷書（本人自筆）に學科志望書（本人自筆）及戶籍謄本を添へ各自の卒業したる學校の校長を經て薦擧を地方長官に願出なければなりません。

◇入學及寄宿　四月初旬入學式を行ひ、卽日寄宿舍に入らしめます。寄宿舍は新舊生徒十二名乃至十六名を以て一舍を組織し家庭のやうにして生活せしめる制度に成て居ります。

◇學費　生徒は總て自費生であつて生徒一人の要する學資は食費衣服費學用品費舍費雜費を合せて三十五圓內外であります（本科生は授業料を要しません）

◇保證人　入學を許されたる者は本人身上に關し一切の事件を引受けるに足るべき父兄若くは親戚の中に就きて保證人を定め連署を以て

届出なければなりません。

◇服務義務　本校入學者は卒業後高等師範學校卒業者服務規則に依て定められたる期間教育に關する職務に從事する義務があることを心得て居らねばなりません。

選科

女子師範學校、師範學校女子部又は高等女學校の卒業者で文科、理科又は家事科の科學科目中一科目若しくは數科目を選びて學修せんとする者あるときは教授上差支へなき場合に限り選科生として入學を許す事があります。それには希望の學科目の學修に必要な學科目に就き高等女學校卒業程度の入學試驗を受ける必要があります。詳細は母校或は同校に就て御問合せを願ひます。

神戸女學院大學部、高等部

所在地　神戸市山本通四丁目外六十號

神戸諏訪山の麓、綠の樹の間に常春藤の美しく絡んだ赤煉瓦の幾棟は古い歴史を持た基督教主義の神戸女學院である。同院の組織と卒業の後資格。

大學部

大學部は專門學校令に依り高等の學術技藝を修めしむるを目的とし其修業年限は三ケ年で、大學部の學科は英文科とし之を第一部、第二の部二つに分つ。第一部は英文學研究に必要なる科目を正科とし、第二部は英文研究に必要なる科目の外教育に從事せんとする者に必要なる科目を加へたるものを正科とする。大學部英文科第二部卒業の者は無試驗檢定にて英語科教員免許狀を與へられる。

高等部

高等部は高等女學校卒業の者若くは之と同等の學力ある者で尚進んで學修せんとする者に須要なる學科を研修せしむるを目的とする。高等部の修業年限は三ケ年とし四ケ年の高等女學校卒業の者若くは之と同等の學力ある者は第一學年に入り五ケ年の高等女學校卒業の者若くは之と同等の學力ある者は第二學年に入る。

音樂部

ピアノ科七ケ年、オルガン科五ケ年、師範科三ケ年、

◇學費　大學部並びに高等部の授業料は年額七拾貳圓で四月に二十六圓、九月に二十六圓、一月に二十圓、宛徴收する。その他理科實驗費、樂器使用料、タイプライター使用料として一學期一圓乃至七圓を支拂はねばならぬ。

寄宿舍に入る者は食料月額十五圓、舍費年額三十圓、室料年額（舊寮）十八圓（新寮）三十圓を要する。

◇入學に關する諸項　入學願書は大正十三年一月十日より三月二十八日までに差出す。同時に履歴書、最近の學業成績、入學手數料金二圓、その他を添へる必要がある。

同志社女學校專門學部

所在地　京都市今出川通寺町西入

◇家政科　修業年限三ケ年、修業年限四ケ年以上の高等女學校卒業者にして右學年を通じて英語を履修したる者と女子師範學校の卒業生の入學を許す。

◇英文科　豫科一ケ年、本科三個年をもつて卒業する。豫科に入學し得る者は家政科の資格と同じ。本科は三年の修業年限で豫科の卒業生及び五ケ年間を通じて英語を修めた女學校の卒業生の入學を許す。卒業生は同志社大學に本科生として入學する事が出來る。

◇學費　△入學金參圓、△授業料　一學期貳拾貳圓、二學期同上、三學期廿一圓、△校費　一學期貳圓　△一學期教科書代　平均約拾五圓△寄宿舍　一學期金八圓　△食費　一ケ月金拾八圓、

以上に紹介した各學校以外東京、京都にて大凡、左の諸學校が洩れる事になつたのは殘念だが、是れは新年號締切期日の都合で調査が間に合はなかつたのである、讀者及び各學校當事者の御諒察を深む。

東京

共立女子職業學校（所在地　東京市神田區一つ橋氣付）

帝國女子專門學校（所在地　東京市小石川區大塚窪町）

東京裁縫高等女學校（所在地　東京府下瀧野川）

和洋裁縫高等女學校（所在地　東京麴町區九段坂上）

別に府立第一及第三高等女學校には二ケ年修業の女子高等部の設置がある。

京都

女子專門學校　本派本願寺の主宰する佛教主義の女子高級學府

（所在地　京都市下京區妙法院）

京都府立第一高等女學校專攻科　分類して國漢文專攻科と家事裁縫科の二つに分れてゐる。修業年限は二ケ年乃至四ケ年で、成績の優良なる者は無試驗檢定を受くるを得。

（所在地　京都市寺町通廣小路）



久米正雄の結婚

田中純

K君——

先日は、折角の君の旅立ちに、例の朝寢坊に祟られて、お見送りも出來なくて殘念した。今頃は、君はまだ船の中にゐるだらうが、何うだ、退屈はしないか？　毎日、はてしのない水と空とを見つめて居る生活は、隨分たまらないだらうと思ふが、それでも、この灰燼の東京にゐるよりはましかも知れないな。東京は相變らずだ。流石に一時のやうに、血なまぐさい記事で新聞が埋まると云ふやうなことはなくなつたし、バラックの數も、近頃めき／＼と殖えては來たが、それでもまだ、震後そのまゝの、落ち着きのない不安な東京だ。復興々々と、聲だけは大きいが、それもまだ一向緒についてはゐないらしい。すべてはたゞ、混沌雜然とした擾亂だ。何時果てるとも解らない、擾亂と疲勞だ。

がこの擾亂の中で、たうとう久米の結婚式が行はれた。實は、昨夜それが濟んで、二人は今、新婚の旅に出てゐるところだ。僕が今、それを君に報告するのは、一つには僕の限りない喜びの捌け口を求めたいからだが、一つにはまた、このことに就て、久米正雄の結婚について、君が全くの他人ではないからだ。しば／＼僕等の話題にも上つたし、實際に君が、それを心配してゐたことを知つてゐるからだ。

新夫人は、君も知つて居る筈の例の奥野艶子さんだ。この夏の久米で、君もうす〱知つて居る筈のあの人だ。あゝ、さう云へば、あの日、君たちは、海濱ホテルのバルコンで、洋行の計畫を話してゐたつけね、君がこの秋洋行するので、久米も一緒に洋行しよう、そんな話しが出てゐたではないか。

「しかし、僕は、もしかするとその頃結婚するかも知れないよ。結婚しなきやア、無論君と一緒に行くけども」

久米がさう言ふと、君が、

「なんだ、そんな話しがあるのか。對手は誰だ、誰だ」と追求したではないか。

が、實は、僕はその時、そばで君たちの話を聞きながら、ちよつと胸が迫つてゐたのだ。

「あゝ、久米の奴、今度失戀したら、外國に逃げ出す氣だな」と思つたからである。實際、あの頃はまだ、二人の戀は海のものとも山のものとも解らないやうな狀態にあつたのだ。勿論、あの頃でも、彼等二人の心持そのものは、可なり接近してはゐたらしい。しかし、二人の心持だけでは何うにも出來ないやうな他の事情も、ないとは云へないやうな狀態でもあつたのだ。

「おい、これア一つ、僕たち三人で、久米正雄結婚期成同盟會を作らうぢやないか」

或る夜、酒を飲みながら、里見弴がそんなことを言ひ出したのも、たしかにあの頃だつたと思ふ。一方に、その新らしい戀に浮き身をやつしながら、一方に洋行を考へてゐる久米を。僕はその頃として無理のないことだと思つてゐた、實際、或る女たちに取つて、「事情が」どれほど力强いものであるかを知つて居る僕、「事情」がどんなに多くの嘘を愛人たちの胸の中に作り出すかを、いやと云ふほど見せつけられて來た僕として、久米のこの態度は、淚なくしては見てゐられなかつたのだ。

幸ひに、その後、事件は幸運に進んだ。あの地震のために、一時ちよつと頓挫しやしないかと思はれた進行も、かへつて彼等の幸福を增したに過ぎなかつたほど、都合よく運んで行つた。そしていよ〱昨日、帝國ホテルで、專ら里見弴の骨折りの下に、長崎英藏氏を公けの媒介者として、結婚式をす

ることになつたのだ。
さて、これから昨日の話だが、實は、この結婚式の方式に就いては、かねてから僕たちの間で、いろ〱相談をしてゐたのだ。結婚の實質さへあれば、その方式なぞは何うでもよいとは、普通、吾々の仲間の誰もが考へることだし、大部分の仲間が現にさうやつてるのだが、何うも、久米の場合では、さうづる〱には濟ませたくなかつた。久米にだけは、何とか彼らしい表示をさせて見たいと云ふのが僕たちの願ひだつた。幸ひに、久米もそれを欲してゐたし、殊に奥野家では、その希望が強かつた。で、災後、萬事に不自由だつたに拘らず、出來るだけの方法で、所謂盛大な結婚式なるものを擧げることになつたのだが、さて何う云ふ方式に依るかと云ふ段になると、ちよつと困つた。普通ならば、日比谷の大神宮で神前結婚と云ふ方式もあるし、三々九度の盃ごとと云ふ形式もある。が、幾ら形式だとは云つても、信じもしない神の前で、職業的な結婚式執行業者の手にかかつて、嚴かなるべき誓ひを立てることは、吾々として何うにも我慢をしかねるし、さればと云つて三々九度の盃と云ふのも、地が飲み仲間であるだけに、却つて實感のこもらない、てれ臭い氣がする。で、いろ〱話した末に、結局僕等が選んだものは、結婚指輪の交換を、結婚のたゞ一つの表示にしようと云ふことだつた。で、少々莫迦らしいが、その順序を擧げるとかうだ。

場所は、帝國ホテル廊下控へ室の一部。づらりと金屛風を立て廻された格構は、見たことはないが、ちよつと御野立所と云つた感じ。午後二時。近親者着席。新婦の近親者六人が左側に着席し、新夫の近親者四人の外に、立合人として徳田秋聲、菊池寬、里見弴、芥川龍之介、僕の五人が右側に着席。やがて長崎夫妻に導かれて新夫新婦が入場、正面に着席する。席が定まると、長崎君が、二人の結婚は指輪の交換によつて表示せられる旨を告げて、直ちにそれを交換させる。再び長崎君が、これで二人が結婚した旨を宣して、短い挨拶を述べる。終つて、新郎と新婦とが、兩家の近親者と立會人のところへ行つて、一人々々挨拶を述べて式を終つたが、この間僅に五分。初めは、ひどくあつけないものになりはしないかと心配してゐたが、やつて見ると決してそんなものではなか

つた。全く水いらずの、生のまゝの眞情のみがその五分間を支配してゐた。そして、それを終つた時には、誰も彼もほつとしたやうに、寡びの顔を見合せたほどだつた。

「君、好いね。君もこの式でやり給へ」

芥川君が私を顧みてさう云つたほど、好い感じのものだつた。

引きつゞいて、午後三時から、同じホテルの一室で披露會があつた。時節柄、ごく簡單なりセプションの形式を取るつもりで、用意に不足なところもあつたが、兎に角、席が足りなくて、隨分澤山な客に、立つてゐて貰はねばならないやうな盛況だつた。

席が定まつて、長輪君の新夫婦の紹介が濟むと、小村欣一、徳田秋聲、菊池寛、芥川龍之介、里見弴の諸君が、つぎ／＼に立つてお祝ひをのべた。どれもこれもとり／＼に愉快な面白いもので、みんなが笑ひつゞけた。

「こんな陽氣な披露會は、ほかにはないね」

誰かゞさう云つたほど、實際、陽氣なものだつた。が、さうした陽氣さの中にも、さま／＼な眞實、久米や新夫人に對する友人や先輩としての眞實な感情が、卒直に語られたことも恐らく他に多くの例がないだらうと思ふ。

例へば、その中には、久米の人氣問題があつた。僕が結婚すれば、僕の人氣はなくなるだらう。――久米の奴、よせばよいのに、近頃何處かにそんな事を書いたらしい。小村君は巧みにそれを捕へて、いや、久米の人氣はこの結婚によつて高まるにちがひない、何故ならば、これほど人氣のある結婚は近頃ないからであるとやつた。すると、その次ぎの徳田氏は、「いや久米の人氣はあるひはこの結婚で幾らか落ちるかも知れない。しかし、そんなことで落ちるやうな人氣ならば、少々落ちてくれた方が好い。さうした浮華な人氣を得ることよりも、この際、質實に、藝術の本道に精進する方が望ましい」と云ふ意味のことを述べた。

僕は、その何れもが、如何にもその人の言葉らしいので、全く微笑を禁じ得なかつた。が、それは兎も角として久米のこの結婚が、非常な人氣であつたことは事實だ。現に、久米の結婚に就て何か長文の記述を書けと、雜誌社から注文されるほどの人氣だし、新婚旅行に出れば、その旅先での寫眞が、

東京の新聞に載るほどの人氣だ。これが何か、もつと不自然な關係の成立とか何かならば、一人の男と女との結合が、社會の廣い興味を呼び起すことも有り得るだらうが、久米の今度の場合では、決してそんなものではなかつた。結婚としては、むしろ平凡きはまるものだ。が、それにもかゝはらず、こんなに人氣があるのは、僕思ふにやはり久米その人の人氣が、特別に高いからに違ひない。

人氣と云へば、君も先日、その話をしてゐたつけね。久米が君を見舞ひに行くと、病院ちゆうの看護婦たちが、凄いほどの騷ぎ方をしたと云ふ話を。實際、久米の人氣は、文壇の七不思議の一つだ。これが一篇の「不如歸」でも書いたと云ふなら格別、別段人氣に上るやうな作品も書いてゐないし、財産家の息子でもなければ、公卿華族の息子でもない。せめて容貌にでも、人氣の種があればよいが、これがまた、實際より遙かに惡く、宣傳されてる彼だ。その上に、失戀と云つたやうな、餘り有り難くない勳章も持つてるし、その上に、道樂者だと云ふ評判も、相當には傳へられてゐるだらう。考へれば、こんなに不人氣であるべき男はない筈なのに、これが、日本一の人氣者なのだから、不思議ではないか。現に、君、最近には、（これは大きい聲では言へないが）或るお孃さんが、久米の結婚と聞いて、道つぱたで泣き出したと云ふ話しもあるくらゐだ。實際、人氣なんて云ふものほど、得體の知れない、不思議なものはないと思ふね。それをその人の潛在的價値の現れだとすれば、久米などと云ふ人には萬人にすぐれた潛在的價値があるのだと見なければならないが、君は果してこれを首肯するだらうか。まあ、アメリカ生活の宿題とでもして、考へて置いて呉れ給へ。

さて、話をまた、披露會へもどす。菊池君の演説は、例によつて痛快味たつぷりなものだつた。「地震で死んだだらうと思つてた久米が、ひどく元氣の好い顏をして鎌倉から歸つて來たばかりでなく、引きつゞいて、地震の原稿を七つも八つも書き飛ばした。（而もそれは、どれも同じやうなものばかりだつたが）これは不思議だと思つて居ると、實はその間に新らしい戀人を得てゐたのだつた」と云つた調子で、彼もまた、久米の藝術生活の復興を希望した。

芥川君のも、彼らしく、機智縱横と云つた調子のものだつ

た。久米が幸福人だと云ふことを説明するために、彼が微苦笑と云ふ言葉の説明者であることを述べ、如何に苦笑すべきことに對しても常に微笑を交へることの出來る彼は、よほどの幸福人でなければならないと論じたあたりは、何うしてもやはり芥川君だつた。

「しかし、この幸福人の久米も、これからいよ／＼幻滅の悲哀を感ずるに違ひない。吾々は、結婚によつて幻滅の悲哀を感ずるであらう久米正雄を考へることの中に。今、無限の悪魔的歡喜を感じる」

と、やつた時には、かうした文壇づきあひに馴れない人々はちよつと呆氣に取られたらしかつた。

最後に立つた里見弴は、これはまた芥川に輪をかけた悪黨ぶりだつた。「時事新報の報ずるところによると、今日の式には、善友側を代表して菊池君、芥川君、悪友側を代表して私と田中純とが列したのださうですが」とやり出した時には、僕もちよつと彼なにを言ひ出すだらうと思つた。と、彼つゞけて曰く。「只今の芥川君のお説によると、結婚は吾々に幻滅を與へるものださうで、久米君も今後それを味はれるのださうでありますが、その時には、吾々悪友がちやんと控へて居りますから」とやつた。勿論、これは大喝采だつたが、「多情佛心」以來、少々悪友度胸のつきすぎた彼には、實のところ、少々弱つた。

最後に、里見の發議で、萬歳の代りに「おめでたう」を三唱したが、平常「萬歳」などに口を開きさうもない連中に口を開かしたことも、僕等として、多少の悪魔的歡喜があつたし、新郎新婦が退場する時、場内に拍手が起つたことまでが、何だか愉快な芝居でも見てゐるやうで嬉しかつた。

くだ／＼と書いたが　これが先づ、久米の結婚の概略だ。結婚に至るまでの經過についても、大略は知つて居るし、君に報じたいと思ふこともあるが、これは多分、近々久米が自分で書くことだらうから止さう、詳しくは、それによつて知り給へ。

が、何と云つても久米がかうして、その落ちつくところへ著ちついたと云ふことは、僕として全く想像しなかつた歡喜だ。それは、これまでだつて、隨分、久米の結婚と云ふことは考へた。彼にだけは何とかして、滿足の出來るお嫁さんを持たせたいと考へてゐた。が、それにしても、それが、これほどの喜びを僕に與へてくれやうとは、僕自身も想像しなかつた。恥しい話しだが、あの五分間の嚴な宣誓に立ち會つてゐる間、僕は涙が出さうで仕方がなかつた。ぴく／＼と顔

ちゆうの筋肉が動き出すのをおさへるのに可なり苦勞をしたくらゐだつた。實際、あの夜、東京驛で、嬉しさうな彼等二人を乘せた汽車が、すらッと僕の目の前を動き出した時には、全く　長い間の重荷をおろしたやうな、さはやかな喜ばしい氣持たつた。勿論、これには、僕自身にこだわつた感情もあつた。二人が、可なり長い間、戀の苦勞を分け合つたと云ふ意識や、彼が今、その苦海を（さうだ、戀は苦海だ。）無事に一帳場乘り切つたと云ふ意識や、さまぐ＼なものが、僕の胸にあつたに違ひない。が、僕の喜びの、最も根深い理由は、何と云つてもやはり、彼等二人の最も深い愛を、僕が知つて居ることにある。同時に、泣くにも泣かれない、彼等の或る時期の苦しみを、僕自身知つてゐることにある。

　が、もう止さう。たいぶセンテイメンタルになつて來たし、江戸川べりを走る電車の音も聞え出したから。

新婚旅行は、蒲郡から京阪地方への二週間の豫定だと言つてゐたが、早く歸れば好いと思つて居る。どちらも、割れもののやうな健康だからね。

　何か好いものがあつたら、彼等の新家庭に送つてやつてくれ給へ。

香水に就ての考察

阿弗利加からの船がマルセイユの港に近寄る。一浬沖に來るし、港の人々は鼻を掩ふ。黑人の體臭が風の間に間に襲うて來るからださうだ。黑人は香料を塗つて體臭を補足する、それも異性の心を惹かんがためである。動物は體臭を利用して異性を誘ふ、だから動物性の香料は主として此の目的に使用されるそれとは全く異つた目的の香料は、つまり體臭を抑制するための香料は宗教的の意味で用ひられる。原料は主として草根木皮から採取する。祭壇でたく香、佛前の香、それらは木の根や幹を削つて用ひる。それでは果實から採つた、例へばベニラだのレモンだのは何うか、と訊く人があれば私は答へやう、それは味感を誘惑するためであると。

應募原稿のこと

――女性改造より讀者諸姉へ――

大正十三年の初頭に際して、全國讀者諸姉に御承知を願つておきたいことがあります。本誌はこれまで規定によつて亘に文藝物を募集してきましたが、今後は特別の課題の外に毎月期日を限らず、その種類を問はずに、廣く諸姉の隨意投稿を歡迎することになりました。そしてその中から綿密な鑑査の上、優秀なる物は誌上に推選發表して婦人同志の向上發奮を期したいと思ひますから、單に文藝創作に限りません、皆さんが今日までに或は今後研究された社會問題とか、思想問題、人物或は作品の研究、科學の話、自然物の研究、手藝の工夫其他何でも左記の規定によつて、隨意御投稿下さることを希望しておきます。

規定

一、原稿は四百字詰用紙のこと。
一、掲載洩れの原稿は要求により返却いたします。
一、推選發表のものには相應の報酬をお送りします。
一、住所氏名は原稿に明記のこと（但し誌上の匿名は差閊へありません。）

女性改造編輯部



春色江戸紫

正岡いるゝ

いまは昔、お江戸のにひ春——。

どうしたひとたちがとほつたであらう。——どうしたなりはひがあつたであらう。

私ののぞきからくりは、先づ春興太神樂にはじまる——。

太神樂

太神樂の囃子ほど、涙ぐましいものはない。ぢつと耳をすまして聞いてゐると、あの笛からか、太鼓からか、私はきつと歡樂のなかにふとく滲んだ人間の寥しい心もちをかんじる——何となくもう二どとは返らぬひとを思ふ日のやうな、華やいだ悲哀の念に驅られる。——「米洗ひ」とか「竹雀」とか、太神樂の囃子ほど世にやるせないものはない。

太神樂の衣裳をみると大江戸繁盛町家迎春。私はでもなく名所圖繪の歲旦を思ふ。——國貞が行燈の影に忘れられた去りやらぬ己が幼時の夢を思ふ。——紅紫亂れた太神樂のどんつくと太夫が着付ほど世に懷しいものはない。

古くからある太神樂は五階茶碗の積物、花籠二つ毬の曲、傘の曲。間もなく文明開化はナイフの綾取り、ビール瓶の曲藝、火焰の亂取り、西洋皿、葉卷に林檎にキユーピーを生んだ。

だがその太神樂の藝人もバンカラ辰三郎、壽家岩てこを失ひ、今は鏡味の仙太郎、小金、小仙、それからはげ龜、淡家小龜、海老一、海老藏、直造、鐵五郎、大丸で大次郎、巴屋寅子、助次郎、金太郎あるのみである。——さうして太夫も若いのが多くなつた。——どんつくも油ぎつたのが數殖えてきた。

僅にのこつたひとたちよ、どうかいつまでも末長くお前たちのあたまにのせた桃いろの手拭を「はい、あの通り！」と落さずにくれ。

鳥追

鳥追の女よ、何が哀しうてお前はそんなに美しい顔を笠でかくしては流してゐるのだ。

何が哀しうて軒から軒、とりとめもない三味をかゝへてはお前はひねもす追はれてゆくのだ。

ぱつと派手やかに装つてはゐるが、それはうはべの衣裳だけで、こゝろの衣裳はまだお前にはできてゐないのだ。――で、なければ、こうまで賑やかな大江戸の春の人ごみにゐて寂しい面輪でゐる譯がない。お前は强ひて微笑つてゐる。美しい笑を、卯の花のやうにふりまいてゐる。

けど、ふりはらつても〳〵なほとれやらぬお前の顔の、深い苦悶を何としやうぞ。

お前は何を哀しむのだ。

鳥追の女よ、お前は笠をかたむけて、靑いにひ春のそらに鳴る凧のうなりを聞いてゐるな。

どうか序に、その笠のむすんだ紅い紐も解いて、しみ〴〵美しい顔をみせては呉れないか。

ほんにお前は若い身そらでいつも面をかくしてゐる。

しつかり笠をかむつてゐる。

お前はのどにのこつた月の輪の、きづをみられるのが怖しいからにちがひない。

だが、いくらお前が隠したつて「鳥追にでるころ最早きづも癒え」――「柳樽」の作者は、もう、ちやあんと知つてゐるよ。

それより、昔のひとのはなしでも、黄色い三つの絲にあはせて、私にきかせてはお呉れでないか。

お前の戀ひた若人は、武士か、小姓か、若旦那か、それとも上野の雛僧か

どうしても一しよになれないと知つて、二人が突いた心中の、刃の一突きは男のみ殺してしまつたのか。――そして皮肉な運命は、徒らにいくとせを涙の絲にさせるため、お前ばかりを生き永らへておかせたのか。

二人ともが仕損じて、男もこの世に生きてゐるのか。

そしてこのごろその男が、やうやく原田伊太夫の綺語のやうに、増す花がほかへ出來たを苦にやんでは、さうまでたよりない面もちに、きゆつと唇を噛んでゐるのか。はかない

吐息をついてゐるのか。

鳥追の女よ、お前のうしろにはさつきから三人の惡武士がぢつと狼のやうに見守つてゐるぞ。――さうして見え隱れにつけてゐるぞ。

暮れやすい正月のそらはもう暮れて、いつかお月樣が水色にあがつた。――堀割から吹きあげる川風が、身を切るやうにほろゝ寒い。

お前はなるべく家路をたどるに、灯の多い街をゆけ。

暗い寺續きの練塀や、護持院ヶ原のやうな松並木の、石地藏のあたりをよぎつてかへるな。

この近所でも手のつけられないあの三人、勤番淺黄の惡侍は、きつとお前の身に忌はしい危害を加へやうぞ。その血のやうに朱い帯も、三人がゝりで解かれやうぞ。

だが、ありし日のお前は入山形に二つ星、丁で名立たる花魁衆か、それとも藝者か、日本橋に三日晒されない前の姿がみたいものだ。

それにしても、おゝ、もう日が暮れた。

お前も、もうあきなひはあるまい。

三味線を斜にかゝへた黒いお前の姿は、とこ〱淺草田圃の車善七までかへるのであらう。

そこで姥ヶ池のあたりでも、お前は重分かへりのみちに氣をつけるがいゝ。

獅子舞

やい、ふざけたことをぬかしやあがつて、八年前の正月のことをうぬは忘れたか。忘れたとありやあ仕方がねえ、一々乃公が聞かせてやるが、こう、よく覺えてゐなよ。

丁度それも大晦日のこつた。勘次の家へ遊びにゆくてえと寒中これが洗ひざらした布子一枚、お前は着たきり雀のすつてんてんで二階でがた〱ふるへてゐやがるんぢやねえかさうして乃公の面をみるが早えか、親方々々つてぬかしやあがるんだ。可笑しな野郎だたあ思つたが考へてみりや可愛想だ。八や、お前まあ俺ん所へきねえ。さういつて連れてくると、丁度あしたつから八百八町を廻る獅子舞が一人足りねえこいつはいゝ所だ。八公、お前、笛は吹けるかてえとふけねえ。太鼓はてえとこれも駄目だ。ちやんぎりもひとによるとよく鳴らしますがねえと恐しく恩に聞せやがるぢやあねえかちやあお前全體何をやるんだてえと獅子になり度うございます。――一體、お前はいふことが圖迂々々しいや。――けれどこつちは未だ何にも知らねえ。獅子なんてえ者は剛れねえ

と容易につかへねえもんだが當人望んで買つて出るからにやあ、きつと下地があるんだらう。俺はかう考へたんだ。いゝか。翌くる日には一陽來福、元日だ。獅子舞はぴゆうちやんぎりてえんで威勢よく、いゝ心もちだ！ 繰出したね。最初にいつたが大和屋てえ町內の質屋さんよ。二朱下さるからおい二朱だぜつて聲をかけるとお前はそれですつかりいゝ氣になりやあがつて、めちや〳〵に踊つてる內、大和屋の坊つちやんがいふにやあ、やあこの獅子は鼻の穴から煙りがでゝゐる――とかうぢやねえか。おや〳〵それぢやあ八のやつ何か趣向でもしやあがつたか、さう思つてひよいと覗いてみると手前は燒芋を喰つてるんぢやねえか。どこの國に獅子が燒芋を喰ひ乍ら踊るやつかあるがつてんだ。――さうすると手前はみつけられたのが口惜しいもんで、いきなり獅子の口から拳骨をだして坊つちやんのあたまを撲り飛ばしやあがつたぢやねえか。俺はまあ、あんな驚いたことはねえ。坊つちやんお泣きなさんな、これは獅子がおどげたんでございますつてやつとなだめたが、俺はすつかり冷汗をかいた。――その次にいつたのは魚河岸だ。河岸の方たちは景氣がいゝや。おゝ獅子、一分だぜ。さつきの二朱で氣がへんになつた手前ぢやねえかこんどは一分で目がみえなくなつたんだ。ぐる〳〵ぐる〳〵踊つてゐる內、大きな掘り下げた穴んなかへ獅子ぐるみ落つこちやがつて、途端に損料で借りてきた獅子の鼻をかいちまやがつたのを忘れたか。

右隣が頭、左隣がやつとうの指南楠先生。さうして挾まれたのが伊勢屋のお妾。――話は、頭の二階の喧嘩のくだり。

昔乍らの「三軒長屋」――。

私のすきな金原亭馬生は、いつも高座で歌ふがごとく、心もち首を前へつきだして、この獅子舞の啖呵をきる。

繪雙陸

音もない春の夜。――そとはしん〳〵と小ゆきがふる。――

圓い行燈。小暗いひと間。

お內儀の青い眉と、緋鹿の子の振袖長き十八娘、乳母やに小僧に下女のお杉。

「都路はいそぢあまりに三つのやど」

振出しの日本橋に、小團治の一心太助が立つてゐて、うしろに青い水のいろと、つゞく並藏がみえる繪の、初代豐國芝居見立、五十三次道中双六。

「ほら、もう一つ」

さいころ──「三」
「ぢれつたいねえ」
「くやしいよ」
「又、石部までかへつたもの」
「ぢやあ又、ほうら……」
さいころ──「五」
「畜生！ どうとも勝手におしだ」

あゝ音もない春の夜。

小止みもなく降る雪の夜を、娘はお京、錦繪の路考にそつくり生寫しのうすら寂しい横顔は、つひ二三年前までは、あがりにならぬと怒つたものを。蜜柑がとれぬと泣いたものを。

いつの間にかお京は女になつてゐた。

潤ほひがちな黒い瞳は、いつまでもあがりの蜜柑に そゝがれてゐなかつた。──さいの「一、二、三」を喜ばなかつた。

お京の瞳は、時々、そつと思ひだしたやうに少年宗吉の可愛いゝ前髪姿にうつる。小さい男雛のやうな、その 顔 にほれぐみ入る。

宗吉も時々は顏をあげる。

さうして二人は視線があふとさも幸福さうに微笑みあふ。

──だが二人がことはお内儀も乳母も下女もしらない。只表では雪がふる。

小さな淡いゆきがふる。
げに悩ましき春の夜の秘密よ。
美しく若きひとりが戀ごろよ。
そこで双六！
お前も、飛んだ罪つくりだぜ。

寶船賣

「おたから──おたから」

の聲が森とした正月のまちに聞えるのも寂しくなるほどいゝものである。

ほんとうに、寶船賣ほど世の中にいゝなりはひがあるであらうか。

夢を沽りにくる。

夢あきうど。

私はこれほどすきになれる稼業はないといつも考へてゐる。

いつか一どし私は、自分がお寶賣にさへなつてみたいと思つてゐる。

私は、あの長明の所作事にある「七變化」のなかのひとつの

「葛西金まち半田の稲荷、
ほうそも輕いな、はしかも輕いな」
あれを踊るひとのやうな吉原つなぎの浴衣姿で沽りたいもの
である——。もつとも正月のことである。
もし浴衣が寒いといふならば、あの「五斗兵衛」の竹田奴
「雀をどり」で歩きたいものだ。
さうして黒船のなかに脫ぎ忘られた蛇皮線を、秩序もなく
かき亂し乍ら、
「お寶——お寶」
と、とぼ〳〵歌つて廻つたらどんなに私はお正月を、ことし
までのやうな、へんに手持無沙汰な、あげおろしのつかない
氣もちでなく、こどものやうに指折りかぞへて心から待たれ
ることであらう。
——私はお寶賣になつたらすぐ、黒地に金で貫ぬきを縫つ
た、竹田奴のこしらへで、あのひとのすんでゐる町にゆかう
そして「お寶！　お寶ー」と涼しい聲でよんでやらう。
さうすると、二階で寂しい顔をして何か考へてゐるあのひ
とがすぐに小暗い紅がらの格子のとこまできて、
「お寶を頂戴なー
と蠟のやうな手をだすであらう。

「はい〳〵、一富士、二鷹、三茄子、初夢のお寶でございます」
私は、わざとそらとぼけて、默つて寶船の美しくかいた色刷
の繪を渡すであらう。
蒼い波、五色の船。
さうして七福神が、そこに竝んだ一枚繪には、
「長き夜のとほのねむりのみなめざめ、なみのりふねのおと
のよきかな」
お馴染の歌がかいてある。
あのひとはしげ〳〵この繪をみて、いつものやうに美しい
顔を曇らせ乍ら、
「船やさん、ほんとにこれでいゝ夢がみられるかい」
ときく。
「えゝ」
と私が答へる。
「ほんとにかしら」
「あなたに戀のつきないうちはね」
私がいふと「えつ」と驚く。——あのひとは始めて聲音に氣
付いて、うつむいてゐる私をのぞく。
「まあ、あなたは……」
なあんだ。これが私の初夢なんだ。

（終）



吾兒の成長を樂みて

感謝の吐息

鷹野つぎ

カアとかアアとか、ほんの單音でしか呼びえなかつた子供たちが、何時かお母ちやん母さんと、確り呼び馴れて行く順序は、私自身母親の身になつてみれば、實に瞭りとわかるのです、人樣はいかゞなものでせうか？　これは私たち大人のの遲々たる長い生涯に比べて、子供たちのそれは短時日のうちに、眼覺しい生育を遂げて居る、その瞭りとした行程を目前に見せられてゐるためではございますまいか。殊に此の片言から正確に物を云ひ始めやうとする頃の、子供たちを見るのは私たち親の身になりますと何んとも云へない悦びであると同時に、氣がゝりなものでございます。時には何時の間にか、どん〳〵自分の意見を發表する欲望を訴へる。子供なりに、物事に善惡の差別をつけて見せる。斯ういふ頃の子供を私たちの身ですと、もう一口に自分の子供といふやうな氣持から、盲目的な愛情にばかり賴つて居たでは、物が云へなくなるのでございます。

何時の間にこんな事を云ふやうになつたらう、と驚く頃には、親も深く考へさせられて居たり、また悦んでゐたり悲しんで居たり、時には切ない不安に陷つたりして居ます。

善いにつけ惡いにつけ子供たちの言行のすべては、私たち親の心によつて、必ず一度は濾過して見ねば止まないものだと思へます。斯ういふ風にしてわれと我身に、一々心を覺して居た事も、少し時日をはなれて見ますれば、すべて親自身の慰めとなつてゐることがわかります、これが親の心だと思ひます。子供をもつてみなければわからない、言葉のほかの心だと思ひます。

私は時に自分の今年十三歳になる息子をつれて、道を歩きますが、何時の間にかその發育した背丈や手足に、驚くのですさうして私と並んで歩いて行く子供が、何時いかなる時でも新な驚異となり、新たな悦びとなつて眼に映つてまゐります。

そんな時には行く道の空も地も、ほんとに惠まれたやうな廣々とした、氣持ちがします。思はず涙ぐましい溜息が洩れてきます。

子供をもつた親たちは、何誰でもそんな感じをお持ちになりませう。とても自分のことなどを思つてゐる餘裕もないやうな豐かな氣持ち——斯うした氣持ちは、矢張り言葉を絕してゐて、たゞ感謝に似た無言の祈りともたとへてみたい氣持ちではないかと存じます。

私はよく道などで行き合ふ、親子づれの人たちに眼を止めます。小さな子供の手を引いた、若くて元氣な親たち、大きな息子や娘を伴つた、年老いた親たち、さうした方々を眼に止めます。

私は何時の事でしたか、ある晩私の二人の息子を連れて買物に行きますと、ある一組の親子づれに出會つたことがあります。それは娘と老いた母親との二人づれでしたが、見ると娘の方は母親よりも、ものの五寸も背丈が高くて、いかにも伸々と大股に足を運んで行きます。それに其の身なりの確りした樣子などでは、さぞ新しい教育もある物のわかつた娘さんらしく見えました。が母親の方はといふと、髮を無造作に後に束ねて、なりふりも構はず着物をまとつた樣子は、いかにも涙もろい、人の好い、おふくろさんと云つた姿に見うけられました。その母親は娘に寄り添ふて、小股にチョコ〳〵と、歩いて行きます。それがまるで娘に置き去りにされてはならないとでもいふやうにいかにもいぢらしいほど、一心に歩いて居るのです。

時々思はず行き過ぎた娘が物優しく足をゆるめて母親を待ち合せます。そして何か小言で勞はるやうに物を云ます。そのたびにその老いた母親の顏には輝やうな微笑が浮ぶのです。私には斯ういふ母親から、此の娘が生み出されたといふことが、何んとも云へない驚異でしたといふばかりではなく、非常に晴々とした愉快な氣がしたのでした。

私は其の母親が時々、眞直ぐを向いて歩いてゐる娘の姿をわきからソッと眺めながら、溜息ついてゐるのを見ました。そして彼女の顏は何んといふうれしさうな樣子でしたらう。私は其の時これは上京させてある娘に、久方ぶりで逢ひに來た、田舍の母親であるに違ひないなどと推測してみた位でした。

私がどんな事を感じましたのは、たゞ漠然とそんな光景を珍らしく見たと、いふばかりのものではありません。私は實はあの母親を、彼女の心を、自分の心持ちにして見て居たのでした。事實私は其の時自然と、自分の連れて居た子供たちの方を、かへりみました。そこにはまだいとけない、それこそ親の權威をどれほど振りまはされても、文句の云へないやうな、私の小さな子供たちの姿が見えるばかりでした。

私はそのとき秘かに、あの母親に比較して、自分の道の遠いものであることを思ひました。あの母親に比較したら、自分の子供に盡したものなどは、その半ばには至らないだらうなどと思ひました。それは云はゞ自分がどれほど元氣で荒々しくありたいと希ふよりも、妙にあの母親の老いた姿に、心が惹かれて行くやうな氣持ちでした。

私は自然とやがて私もあの母親のやうに、自分の息子たちを見上げる日が、來るであらうと空想しました。そこに私がどんなに老い萎へた母親になつて居ようとも、それはどれほど氣持ちが好いことだらうかと、空想しました。私は其の晩はその母娘づれと、別れ去るまでは、さうした妙な氣持ちの魅力からはなれ去ることができませんでした。

只今私は斯うして何事につけても心にかゝるやうな子供を、四人まで抱へて居ります。幸ひにどの子も見上げるやうな子供になつてくれたら、と希はぬ日はございません。これも思ひ昂つた愚かな親心でございます。せめて人並に育ひ立つてくれたらと思ふさへ、私には身にあまる悦びとなるのでございます。

愛のかなしみ

原阿佐緒

何かの機會にわが子の齡を數へて、いまさらのやうに吃驚することがあります。遲生れながら、もう十七と云ふ齡をかぞへるわが子を思ふとき、大人の世界から全然切り離して取り扱つてゐた幼年から少年、少年から青年に近づきつゝあることをはつきりと意識させられるその子供の言葉などに出遇ふとき、いひがひもなくはつとさせられます。そしてさう云ふ青年とよばれるやうにはいつなるのだらうと待ち遠いやうに思つてゐたそれが、あまりに早く逼つて來たことに氣づきます。それと同時に、そこからまた新たに發する慾望はひとり立ちの年頃にいつなるだらうと思ひはじめることです。さうした矛盾にほゝゑましい思ひを抱きながらも、これからどんな人間になるだらうかと思ふわが子の身邊に、幸福の期待や不安や、希望や、信頼やらを絡ませながら、子供のすべてを見守らうとするのは親として當然なことだらうと思ひます。

子供が、親の生活内容を披瀝する詩文を讀むで、その中から親の生活をのぞき、それをいくらかでも理解することの出來る智識をもたくはへたと言ふことに、ある心強さとたのもしさとを感じさせられると同樣に、今までは無邪氣であつたこの子供にもいろ〳〵な危機の逼りつつあることを思つて戰慄なしには見すごせない私であることを痛切に感じさせられます。

過去に於ける「母さんのやうな不幸な人間を作らないやうにして下さい」とひたすらに祈り希ひたくなります。

私は他の母親たちのやうに子供に身近くゐて愛撫することの出來ない環境に居ります。けれども、世にはさうした親と子は私ばかりでもありますまい。併し、自分ひとりを取り離して考へてみると何だかそれが自分ばかりの不幸のやうにも思はれてなりません。けれど、それも自らが擇びとつたな

ら、それに對して何を云ふことが出來ませう。

子供は、云ひます。

「お母さんの幸福と、お祖母さんの考へるお母さんの幸福とは違ふのです。それは本來の思想が違つてゐるからで、お母さんも可哀さうならお祖母さんも可哀さうです。

私はお母さんを信じます。そして私は誰の誹謗にも耳を借しますまい。たゞまだ何もわからぬ弟が可哀さうです。お母さんが歸つて來るものと思つて待つてゐます。

それを思ふと私は泣きたくなります……」

これは私が母や子供たちを離れて、この漁村に來たばかりの時に、そして私の母が狂氣のやうに私に歸宅を逼つてゐた頃、中間に立つて惱むでゐた子供から私に寄せた手紙でありました。私は涙なしにこれを讀みえたでせうか。私は子供に同情を强ひたくはないのでした。むしろ責めて貰ひたいのでした。

然し、子供は過去に於ける母の寂しい生活、そして如何にして自分たちの兄弟が母親ひとりの手によつて育つて來たかを、またさうした寂しい生活をしなければならなかつた原因（それは祖母などが何かのはづみに云ふ父親のこと、などによつて、）とを、かすかながら知るやうになつたのでありませう。

けれど、子供にそれほどの信をもたせる何ものが私にあつたのでせう。私はさうした言葉をいぢらしくもまた寂しく思ふのです。そして斯うしたことが云へるやうになつた子供の齡を思ふとき、私はいまさらながら、常に刺戟をおぼえます。

今、子供は、みちのくの片田舍に、土に親しみながら藝術に浸らうとしてゐます。

東京の震火災の幾分を荷負つた子供は、やはり郷里へ歸らねばならない破目になつたのでした。

「私の農學校に移ることを覺悟したのは決して他からの强制や束縛から來たものではないのです。トルストイのやうな文豪が、斯うした自然の田園生活の中から生れ出たことを考へると、ほんとうの藝術と云ふものが、土と汗とから生ひ立つものではないかと考へたからです。私はいま、繪や歌を毎日書いてゐます。短篇小說をも書きたいと思つてゐますから、出來たら御目にかけます。」

斯う云ふ子供の心持ちは私を感激させずにおきませんでし

た。

幼ない心に、母のゐない家にのこされた祖母と、愛する弟とをまもりながら、都會の華さを捨てゝ、土に親しみながら、母親の辿つた藝術の道、そのまゝを子供が辿らうとしてゐるのです。子供が私の微小な藝術の芽をつぎ代つて、育てゝくれる日を、私はどんなに深い心で待つてありませう。そして子供のさうした覺悟に尊敬と感謝とをもつて、やがて子供のうへに絶大な力を與へられるやうにいのりつゞけませう。

母親としての自分の愛を表示するには、あまりに事を缺く現在の環境を、ある自覺のもとに容してくれる子供にすまなく思ひながら、しかもなほ、この生活から自分を切り離すことの出來ない愛のかなしみを、より以上に大人になつた時の子供に理解して貰ふ日をたのしみに、ひたすら子供の成人をまつことにして、來る年も、來る年も、遠い子供たちのうへに祝福をいのりませう。

小さな三人姉弟

子供好きといふ型から全く離れて居る私が、母といふ責任を持つ様になつてからの十何年はかなり努力の生活だつた。子供を本能的に可愛がる事が私にはどうしても出來ない。母といふ責任觀念に終始して自分の最善を盡さうとする事は母をおいて他に子供に母だけの愛をそゝぐものがないといふ絶對の信念に基いて居るのである。

三宅やす子

はじめて母となつた時の私の異常な不安と苦しみを思ひます。今まで自己に終始して居ればよかつたものが、寢てもさめても自分以外の一つの生命をみまもらなければならなくなつた過當の重荷に心はいためられた。

けれど、私の長女はすら〳〵と生ひ立つた。割合に無事に大きくなつた長女を別にして、私は三つで失つた健康だつた

男兒と四つで失つた病身の男兒のためにどれだけ心身を傷はれたであらう。殊に二男を育てて四年間はまさに地獄のくるしみだつた。絶間のない晝の勤勞に酬いられるものは夜を通して三時間と休養の出來ぬ不眠の夜だつた。それが四年續いた。

育兒といふためにこれだけの負擔を受けなければならないものだとすれば、私は人間の生れる意義殊に女性の生涯といふものにうたがひを持たないでは居られなかつた。けれどもいつも只思ひ返す事は「私の他に此子の母はない」といふ一事だつた。そして其事は凡ての事を解決してくれた。

とはいへ、三男の出生後別室に伏させた次男が一時間毎に泣くたびに牛乳を溫めてもつて行つてやる事は、三男の夜の授乳の間の仕事としてはめまぐるしいものだつた。上の子の眠るのと、下の子の起きるのとの間がなければ、次に上の子の起るまで私の勤勞は連續される譯だつた。私は寒中に一枚の敷蒲團に一枚の蒲團をかけて、わざと溫くない樣にして夜中に起き出た時の寒さに堪へる事につとめた。そして足袋をはき羽織を着て、まるで毎日此夏の地震の時の身がまへの樣な氣持で假睡をして居た。

そんな事が今では只遠い思ひ出となつて居る。

弱い子を育て上げるといふ事を私の第一の仕事にして、凡ての他の仕事は第二義において來た。子の健康のために夏と冬を自由に海岸に遊ばせて（學校は身體が第一であるから其間は長く休ませておく）次第に抵抗力を養ふやうにさせた。かつては冬中醫者の手を離れた事もなく又折々に病院住居の不自由を繰り返した私の家で此頃は漸く、自由に生き生きとした生活をする事が出來るやうになつた。

幼稚園にやつて傳染病を受けて死なせた長男をいたむ心は三男を學齡まで手許において日々の私の仕事に對してのかなり大きな邪魔をされる事にも甘んじる事を餘儀なくさせた。

其末の兒も來年は學校に通ふ樣になるから私の日常はやうやくこれから秩序立つ事が出來るわけである。此子が生れてまだ六年に足りないけれど其間此子を育てるために苦勞した事は、私の他の凡ての仕事に對する勞苦に何倍して居る。

私は自分の子供をいつも只自分の家に居る小さな人として扱つて居る。

私の家での母子關係は全然友人關係である長女の時は叱つた事もあつたが、考へる事があつて、三男を育てる時は今迄少しも叱らないで來た。

だから隨分我儘であるけれど、それは叱らないために我儘になつたのでなくて、此子の性格が左樣した性格だから叱る事の無駄をさとつたのである。

長女はよく弟の世話をして居る。私はもう此頃末兒の世話に手を下した事は少しもない。皆姉の子がしてくれる。末兒の健康狀態は長女が一番よく知つて居て私に報告してくれる私はそれで安心して執筆の時間を持つ事が出來るのである。

もう數日たつと長女が生れて滿十一年の誕生日を持つ。

霜月の寒い朝母となつた不安に戰いて居た若い私と、桃色木綿の一つ身にくるまれてガーゼのおしやぶりをチユウ／＼吸つて居た赤兒とが、十一年後の今、人の表情や動作などの觀察を共に語つて興じるまでにならうとは其頃豫期もしなかつた。

私の小さな助手が身も心も健かに生ひ立つて小くとも正しい自己に生きる生活をしてくれる樣に、只其事のために私は何の犧牲を拂ふ事も惜しいとは思つて居ない。

末の兒はまだ夢中である。毎日模倣の生活を續けて居る。現實とはまだ遠い詩の世界のみに生きる子である。私は其詩の生活の美しい完成がやがて現實への正しい第一步となる樣に、おどけたお相手となつて居る。私の斯樣して物を書くそばに「母と共に」居る安心をもつて今日も其子は日向をむいて紙を鋏んで遊んで居る。

避難生活の中に

土岐善麿

あの當時、いかにも殘念な、子供達に對して、本統に氣の毒なことと心私かに思つたことはかれらのために新しく建築し

た住宅が一塊りの灰になつたことではなくあの避難のとき、銘々に學校の鞄を持ち出させなかつたことです。もう火が近い、逃げた方がいゝと家族を促したとき、わたしは今夜は野宿をするのだから、蒲團を〳〵と注意したのです。猛火はもう新橋の川を越したといふ聲におびやかされてゐたのですが、子供達は手近かにあつた學校の鞄をブラさげて、きよと〳〵と兩親のそばに寄りそはうとしたのです。『それはいゝよ、持ち出さないでも大丈夫だ』と　わたしが云ひました。おそろしい火の子を空低く仰ぎながら、いよ〳〵門前を去るときも、家が燒けると迄は思つてゐなかつたので、たゞ危ないから芝公園へ、と辿つてゆくつもりで、わたしは玄關のドアに鍵をかけて出たくらゐです。(その鍵は今、着のみ着のまゝのわたしの洋服のポケツトに罹災記念として殘つてゐますが)、その一夜を新しいプールのそばの樹蔭に、佗しい、おそろしい思ひで過したとき我に返つたわたしは、なぜあの時、あの子供達の考へた通り、皆鞄を持ち出させなかつたかと、新築の家の燒けたよりも、快適な書齋を失つたよりも、家財一切を灰にしてしまつたよりも、あの突嗟の場合の、わたしの不用意な一言を悔しく思つたのです。學校に通つてゐる子供達、殊に學校のことが大好きで、その復習や豫習を最も樂しみにしてゐるわたしの子供達にとつて、避難生活にこの『學校のもの』の無くなつたことが、どんなに寂しい氣持ちをつゞけさせたことか。早速買つてあげようね、と慰めてみましたが、それが東京には一冊もなく燒失した事實を知つて、愈々不覺なことですが、わたしは、びつくりして、これは大變なことになつたと思ひました。

子供達のうち、麻布の府立第六高等女學校へ通ふ長女のサチ子(十四)だけは、あの蠟燭の光りでそこらを掻き廻す、どさくさ紛れに、わたしの不注意な注意が耳にはいらなかつたのか、逃げてからみると鞄をかけてゐたのでしたが、それでも恰度復習をしてゐた英語の讀本や地理歷史の教科書は机の上においてあつたゝめ皆燒いてしまつて、昂奮狀態のうちにも時々悲しさうにベソをかいてゐました。次女のチヱ子(十二)と長男の健兒(九)とは附近の神明小學校に通つてゐたのですが、この二人は文字通りに教科書も學用品も丸燒けになつてしまつたのです。

『お父さん、教科書は先生がすつかり揃へて下さるのですつて。新しくなつて、却つていゝわ。』

受持ちの先生達が親切に、避難先へ迄見舞に來てくれたとき、さう聞き知つて、チヱ子は晴れやかに、寧ろ『お父さ

ん』の方を慰めるやうに眞似ました。健兒にはランドセルにしよう、と其後それを市内に探し歩いて見ましたが、櫻田本鄕町の燒けのこりのカバン店に一つ、丸ビルの文房具店に一つあつたのが、どちらも疵物で、買つてやるわけにゆきませんでした。二人が學校から、粗末ながらも黑ズックの鞄を夫々貰つて歸つたとき、どんなにいそ〳〵としてゐたことか。夜になつて、わたしが歸ると、ガラス戸をあけるが早いかチエ子と健兒が寢床からあたまを上げて『お父さん、けふ鞄をいたゞいた！』と呼びかけました。教科書や學用品も一冊づゝ一種づゝとかれらの鞄の中に殖えてゆきました。サチ子の學校でも保護者會から、燒けたものだけを揃へてくれることになりました。

現在の學校敎育をわたしは無條件に承認することはできません、否寧ろ國語敎育の上における、國家としての不完全不徹底を第一に、大小種々な點に就て、不滿に思ふことも少なくありませんが、然し子供達各自にとつては、學校は家庭と共に最も樂しい大きな世界です。かれらの幸福な社會生活です。教科書や鉛筆やクレヨンを詰め込んだ鞄は、かれらの唯一な、大切な財產です。あのとき、あの鞄を持ち出させさへすれば、避難生活にも苦痛や寂寥は無かつたに違ひありません。この點に對して當局が逸早くそれの蒐集配與に努めたことは、極めて時宜を得たことゝ災厄に罹つた父兄達も十分感謝すべきことです。『學校のもの』が揃つたので、子供達は、のび〳〵と落ちつきました。もし今後また何かの變災に遭つて避難しなければならない場合、今度こそは眞先きに子供達の肩には鞄をかけさせることを兩親の第一の義務とし責任としなければなりません。

わたし達夫婦は借りたり贈られたりしたユカタを着て十月迄過しましたが、子供達の『復興』を第一と考へて、サチ子には規定の校服を註文させ、チエ子と健兒には運動服からズボン、ジヤケツ、スカアト、靴と、夏から秋冬へかけて粗末ながらも一切まづ整へました。五歲のミナ子のためには僅かに持ち出した行李の底からひどい普段着の手造りの洋服を着せてありましたが、これも餘りに見すぼらしいつて、十一月に入つてから三越に連れてゆきました。レデーメードの紺サーヂの洋服を選んで、『サア、これを着てみませう。』と云ふと、ミナ子は店内の雜沓にハニかんで、着ようとしません。ではあの外套を買つて、靴をはいて歸るのですから……』と云ふと、やつとうなづいて、物蔭に入つて、眞裸になつて、下着から上着外套まで小さな身に纏つて、下駄ばきで來た埃まみれの小さ

な足に靴を穿きました。『サア、これでミナ子さんが出來た！』と夫婦で笑つて、二三歩くると、また別の陳列棚にかわいゝシャツポがあつたので、無造作にそれも買つて、これであたまから足の爪先き迄、やつと一と揃ひだけはミナ子も「九月一日以前」に還つたわけです。

東京驛の方へ、ブラ下るやうに兩手を兩親に託して、ヒョコ〱と歩きながら、ミナ子は急に思ひだしたやうに、ませた調子で、

『お母さん、これでもうヒナンミンのやうでなくなつたわね。』と云ひました。わたし達夫婦は顏をみあはせて、一種の泣笑ひを感じてゐますと、ミナ子は唱歌をうたふやうに無心な聲で、

『行きはヨオフク、歸りはワフク……』とうたひました。わたし達は思はず聲を立てゝ笑ひましたがミナ子はすぐ氣がついて、

『あれはアベコベね。……行きはワフクで——』と直しました。』が、あとの『歸りはヨオフク』といふのが一字延びて調子がとれないので、この小さな即興詩人はいさゝか推敲に苦心してゐるやうでした。『行きはよいよい歸りはこわい……』といふ子供唄を思ひだして、自分の姿を樂みつゝうたふ小さな心に、そこらの雜然混然たる災禍の印象は、どんなに傷々しいものでせうか。ミナ子が九歳のときの大震大火の記憶はどの程度迄生涯に殘るものか。兒童心理の最も適當な研究資料になりうるものと考へてゐます。

洋風の服裝で統一したい、今迄このことを隨分妻とも語りあつたのですが、いつも不徹底な態度になつて、やはり友染とかお召とかいふものの綺麗な色調の誘惑にうち勝てなかつたのです。今度といふ今度こそそれらの不生產的な、非文化的な裝飾品が家庭のどこの片隅にも無くなつてしまつたので、今後は、すくなくも子供達だけは殆んど和服なしの生活を送ることができる筈で、これはわたしの家族達に與へられた今度の災難を『轉じて福となす』べき生活改善のいゝ機會と思つてゐます。

サチ子の學校は、假校舍も無事に殘つたのですが、授業ははじまつても、やはり一種のざわめきは免れまい、といふ思ひ遣りから、避難先きの主人の心盡しで、その廣々とした前栽から、朝いくたびかダリヤやコスモスや黃菊や白菊、紫苑などを截つて、一束にしては教室へ持つてゆかせました。花瓶にさしてはいさゝかでも級友達を慰めたことは、かういふ場合、かういふことをすることが、どんなに人に對してい

いことか、それを思ひさとらせるためにもサチ子にとつて、女性としての教養にもなつたことゝ思つてゐます。

健兒はもとから自由畫が好きで、よく學校でハリダシにもなりましたが、この郊外の避難生活を記念するために折よく友達のK君が製造してゐるピノチョクレョンを一打も贈つてくれたので、畫用紙を思ふ存分買つて、毎日附近の寫生をやつてゐます。前栽の向ゐにつゞく林業試驗場の綠林、隣りの畫家のNさん、文化住宅、競馬場の芝生、その柵の向ふの家並、丘のうへから望まれる朝夕の富士、やがて一帙のマツペがまとまりさうになつてゐます。特に、いろ／＼な天候や氣象に從つて種々に變化する林業試驗場の密林を、緣の上から幾枚も幾日もスタデーさせました。子供の自由畫はとても大人達の及びもつかない純眞な藝術品です。グイ／＼と力まかせに自分の眼を信じきつて赤く青く寫生するわたしの子供の樹木の生命に對して、わたしは心私かに胸のおどるのを禁じえません。そして一種の恐ろしさをさへ感じます。まだ九歳の子供に、さう將來の專門のことを考へることは『親馬鹿』と笑はれもしませうが、わたしは健兒に、建築家になつて貰ひたいと、もつと小さなうちから考へてゐるのです、わたしの妻も同樣の希望をもつてゐます。いよ／＼大きくなつて、健兒がどう變化してゆくものか、今から極めてかゝることは却つて弊害があるかも知れません、然し本統に藝術的教養のある建築家、自分で設計して、自分で材料を指定して、自分で監督し建築してゆくことのできる建築家の生涯の愉快さをわたしは常に羨ましく望ましく思つてゐます。健兒に、かういふ遺傳と素質の多少はあることを認めてゐる兩親として、さういふ將來の環境をも、つくりたいと考へてゐます。男の一人子に對するわたし達夫婦の、これが心賴みなのです。殊に今度の帝都の壞滅に際會して、その復興計畫にすぐれた『建築者』の必要を思ふとそこに子供のやうな自然さと力とを尊重しなければなりません。これはわたし達の健兒一人だけに云ふのでなく、『次ぎの時代』に呼びかけるべきことです。

燒あとにバラックを建てゝ住めば住めるわけですが、チエ子が來年の三月、女學校の入學試驗を受けるので、その準備をいくらかでも落ちついた氣分の中にさせたいために、近近この下目黑の避難先きを去つて、芝白金今里町の新しい住居に移るつもりでゐます。その頃になれば、元の住宅の附近もいくらか片づくでせう。あの大變災を子供達にも忘らせるな、と或る教育家は說いたやうですが、わたしは、あの變災を一つの全體の觀念として、自然と人生の交涉、人類生活の運命

といふやうなことを子供達に知らせることはもとより必要と思ひますが、餘りに小さなデテールに亘つて眼前に悲慘な事實を知らせ生々しい印象を殘させるとは、子供達の將來に徒らに厭世悲觀の心の芽をうゑることになりはしまいかとおそれてゐます。わたし達が、あの被服廠などのやうな、いたましい『哀話』の中の人物とならずに、家財を顧みず、逸早く避難したために、あの場合、人類生活における相互扶助の快よさ、美しさの方面を幾多の事實によつて子供達に敎へたことになりました。これも子供達にとつて得難い經驗と思つてゐます。

子供は自然の兒

秋田雨雀

親が子供を自分の考へどほりに敎育し得るものだといふ考方は、敎育といふものを過信することから生れる謬見の一つだと私は信じてゐる。

子供は、人間の上に課された自然力の結果として生れて來るもので、子供は子供としての存在の理由を持つてゐる。親のために、またある特定の社會の約束のために子供が生れて來るものではない。

子供は親に孝行するために生れたものでもなければ、子供は學問をして、豪い人間になつたり、出世をしたりするために生れたものではない。子供は生物として、人間としての自然の慾望と性質とをもつて自然に發達して行くだけである。

然らば親は子供の發達に對して何ういふことをすべきであるか？　何ういふことを望むことが出來るか？　親は子供の持つてゐる性質が自然に發達してゐるか何うか、また自然に發達し得るやうな環境に置かれてゐるか何うかを見てやらなければならない？　そしてかういふ子供に對する親の關心、誘導哺育を名づけて私達は親子の情愛といつてゐる。

人間の持つてゐるあらゆる感情、もしくは情操の內で、この親子の感情は可なり大事な部分を占めてゐる事も事實である。然しながら、私達はこの親子の感情といふものに對して

迷信的な澤山の性質を持つてゐることにも注意しなければならない。親は子供を所有してゐるといふ感情がその一つである。この所有感から、親は親の持つてゐる社會觀や、人生觀を持つて子供の生活を支配して行かうとしてゐる。例へ現在親のゐる社會生活が誤つてゐても、人生觀が誤つてゐても、その子供の生活を自分達の便利のために役立たせやうとする。この誤謬は今日の家庭生活では決して珍しいことでない。寧ろ今日家庭の殆んど全部はこの誤謬を土臺にしてゐるといつてい〻。

今日では生れる子供はすべて不幸であるといつてい〻。なぜなれば、子供は最も醜い不幸な環境に生れても、その環境を是認し、やがては、自分もその環境の一人としい醜い城塞を守るやうにされるのであるから。

子供の生れた時は、決してある特種の環境を選んで生れたものではない。子供は自然から與へられた力しか持つてゐない。子供の持つてる力がよく導かれ〻ば、その子供は幸福であり、從つて、その子供達の造る社會が幸福な社會であるべきである。

私達は子供を教へ導く時に、先づ第一に注意しなければならないことは、私達、親がほんとうの思想感情の上から望ましい狀態に置かれてゐるか何うかといふ事である。單に本能的な生活から親が子を養ふといふだけでない以上、何んな親でも先づ自分達の生活を反省してゐなければならない筈だ。もしこの反省がないならば、家庭生活といふことも、教育といふことも、既に私達の考慮の上にのぼつて來ない筈だ。

子供を親の所有だと考へる迷信は、私達の家庭生活を何れだけ苦しめてゐるか、また從つて何れだけ無邪氣な子供の生活を障げてゐるか知れない。その內に最も著しいものは、親の持つてゐる自由競爭の觀念を子供の生活に強いてゐることである。親は子供の生活によつて自己の生活を安易にし——人より多くの幸福を得やうとする、またそれによつて子供の生活も安固にされて行くだらうと信じてゐる。この自由競爭の觀念は今日の家庭を苦しめ、子供の生活を不具にしてゐるばかりでなく、ひいては人類の社會生活は、この自由競爭の生活の外にないといふやうな運命的な觀念を人間に強いてゐる。

自由競爭の觀念が子供を何んなに發達させて行つてゐるかは、私達の今日營んでゐる家庭生活、社會生活を見ると一番よく解る。子供は幼年期は親の玩弄物であり、大きくなると親の生活の資本にされる。そして其上に色々な道德觀が生れ

て來てゐる。子供は玩弄物であり、器物であつても、未だ嘗て人類として愛されたことがない。

人は今日の試驗制度が兒童に對して慘酷であるといふ。然しこの慘酷さは決して單に試驗制度ばかりではない。今日の自由競爭の生んだ道德にはすべてこの慘酷さがある。人は今日の試驗制度を徹廢しやうとするならば何故に、その制度を生み出す自由競爭の觀念に疑ひを懷かないのであらう？

今日の家庭生活の道德は何んであらう。その家庭が幸福であるといふことである。この幸福には多くの慘酷性が含まれてゐる。今日まで私達の生活を苦しめて來た家長制度の殘骸が家庭内における個人の自由を束縛し、また對他的には最も冷酷な競爭觀念を藏してゐる。この家庭の持つてゐる道德は同時に民族の持つ道德と同じものになつて行く。子供はこの環境の中に養はれ行く。自然の兒は不幸である。

民族の持つ迷信は家庭の持つ迷信に似てゐる。民族の持つ慘虐性——例へば自己の民族のためには他民族に何んなに慘酷でもいゝといふやうな誤つた觀念、または自己の持つ社會生活が絶對なもので、他の社會生活は誤つてゐるか、それより劣等なものであると思ひ込むやうな迷信、そんなものはすべて今日の家庭生活の中で立派に萠芽してゐるのである。

子供が自然な發達を遂げるためには人類の親達は、先づ第一に自分の人間生活の不合理を自覺しなければならない。そしに自分達のものだと思つた子供達を一旦『自然』に返却しなければならない。

子供を養つたり、子供を教育したりするといふことは、私達が子供の發達を障げる不自然と不合理を除いてやることである。親は子供の持つてゐる性質によつて導かるゝことがあつても、今日の親達の持つてゐる社會生活は子供を導くには餘りに曲みすぎてゐる。

僭越なのは親達である。今日の個人道德、家庭道德、社會道德の明かに誤つてゐるのを知りながら、それ等のものを再び子供の時代にも強いやうとしてゐる。昨日あつたやうに、今日あるやうに、明日もまたあらせやうとしてゐる。それを教育と名づけてゐる。

今日の社會に眞に子供の教育といふものがありとすれば、それはたゞ今日の教育から子供を解放するといふことでなければならない。（一九二三、一一、二〇）

科學の話

元日

石原純

私たち人間にとつて新らしさを求めると云ふことは意味ぶかいものでなければなりません。人間の心理にはかなりの惰性があります。物質の惰性がその重さを増すゆゑんのものであると同樣に、人間においても深く考ふるものはそこに執着沈潜する必要があるでもありませう。そして之がその性格を重厚に價値づけ、輕佻ならしめない一つの德を形づくる所以であることが出來ます。けれどもその固く動かないものは人間の永遠に屬する姿でなければならないのであつて、すべての思想、行動がその儘之に屬し能はないことは云ふまでもありますまい。人間に共有な或る根本思想を除いて、その外のあらゆるものは、社會的、時代的な色調をもつてあらはれてゐるのです。私たちが根本思想と思惟してゐるものですらも尚ほふかく反省思慮する場合には、或る社會若くは時代に適合したものとしての意味しか持たないものがあるであらうと思はれます。日常の行爲に對する習慣のやうなものに至りては、いづれも便宜的な意味をもつて始まつたものです。之が成立する最初に在りては、その本當の意味が自覺せられてゐるのでせうが、習慣として繼續せられ習俗として傳統せられるに及んでは、そこにはもはや無意味な形骸的模倣のみが殘るに過ぎません。私たちは之に對して傳統的な深い詩的趣味を味ふことは出來るでせう。けれども私たち自身が實際にその習慣行爲を行はうとする場合には、少くとも之を新らしく價値づけるか、又は之を更改しなくてはならないのです。若し然うでなければ私たちはその行爲の間は精神的に活きてゐると云ふことは出來ません。すべての模倣はたとへその行爲が積極的に惡ではなくとも、少くとも消極的には然うであるとせられなければなりません。又藝術的に論じても本當の傳統的な詩的趣味と云ふものには、その背後に傳統的精神が充分の程度にはたらいてゐるものでなければなりません。形骸的模倣には之の缺けてゐることは勿論です。

嚴格に論じますと、私たちは常時之に思慮を費さなくてはならない筈ですけれども、私たちがそれだけの精神的緊張を持續することは、或は肉體的にも可能であるかも知れませんそれ故に私たちは新らしさを求めると云ふことに或る機會の與へられることを必要とするのです。私たちはすべて進歩と向上とが芽ぐみ得るやうな在らゆる機會を見遁がしてはなりません。朝の眼ざめや、いろ〳〵な休養時の後は私たちにその恰當な機會をつくるでもありませう。

すべてのものの太初は、それ自から無内容であることに於て嚴粛であります。曉の黎明に浸るとき私たちは新しく神の世界に生れたやうな氣分をさへ感じます。神聖なる音樂がまさに演奏せられんとする瞬時の無聲の境、あるひは天地創造のものがたり、私たちはそこにいつも或る嚴粛に接するのを覺えます。そしてその嚴粛さのなかに私たちは靜かに生れんとするものを考へることが出來るでせう。私は寧ろ自然的な之等の初まりと共に、人爲的な若くは規約的なものの初まりについても之と同様な氣分を滿へたるものであらんことを期望せずにはゐられません。そこに新初なるものの本當の意味があるのでせう。

私たちの經驗する事象のうちで、それが天體運行に基づき又は之に直接影響せられるものはすべて循環的であります。地球が太陽をめぐり、月(太陰)が地球をめぐると云ふ樣な現象がすべて一定の週期をもつて繰返されるからです。私たちはその循環的なる過程を一週期毎に分つて、そのうちの適當な時期を週期の始めと解します。そして私たちはこの週期の始めに會する毎に、新初の氣分を感じ、依つて習慣反省の時機とすることが出來ます。暦に於ける日、月及び年は固より時日經過を算へるに役立つものではありませんけれども、暦の人生に對する意味は決してそれだけで終るものではないことを知らなければなりません。一日なる週期は特に人間の肉體的生理に重大なる關係をもつことは云ふまでもありません。一月なる週期は現時に於ては經濟的の或る役目をもつてゐるに過ぎないやうですけれども、一年なる週期は寧ろ思想的に私たちに多くはたらくことを感じなければなりません。

暦の上に於ける月の週期の起原はもと太陰の週期によるものであることは疑を容れないところです。併し太陰は潮汐干滿の外、現時の文明的生活においては私たちに多くの影響をもたないやうになりました。そして謂はゆる太陰暦の代りに太陽暦のみが用ひられるやうになつた今日では、暦に於ける月はもはや純粋に人爲的規約的の週期になつてしまひ、その

上に七曜日を單位とする週日週期と稍々重複する點があるので、漸次その役目を後者に譲らうとする傾向があります。日曜日安息日としての宗教的意味を超えて、一般に休養のための日として定められるやうになつてからは、一週の始めとしての月曜日に、私のさきに述べた新初の氣分を與へて私たちはそれぞれの仕事に從ふことが出來ます。既に英國などでは經濟的にも亦一週なる週期が多く用ひられてゐるのを見ます。七曜週日はもと全く人爲的な規約的な週期に過ぎませんけれどもそれが今日では殆ど自然的のものの如くに、私たちの日常生活に重要なものとなりました。

之に反して一年なる週期は、一日なる週期と共に最初から自然的の意味をもつたあらはれ、それが太陽に對する地球運行に基づくがために亦太陽暦に於ては重大な役目をもつたものでなければなりません。併し私たちは一日の始めをおのづから曉の黎明に於て感ずることによつて、黎明の極致としての夜半を一日の初更とする理由を見出すことが出來ると同樣に、一年の始めをどこにおくかは幾分の考察を要するところでありませう。なぜならそれは決して純粹に天文學的には決定されない事柄であるからです。

一年の最初たる謂はゆる元日を何れの日に選ぶかは、夜半を一日の始刻とするよりは、も少し複雜な考察を要します。なぜなら私たちが曉の黎明を感ずる如くに、單に太陽を眺めることによつて元日を感ずることは出來ないからです。之がためには私たちは人間自らの代りにその周圍にある自然を見つめなくてはなりません。それは恐らくは私たちが原始的生活から既に多く遠ざかつてゐるために一年を週間とする生理的變化を滅失してしまつてゐるからではないかと思はれます。併し私たちが眼を多くの草木に向けるときに、私たちは直ぐにそれらが春に於て芽を出して新らしい生長を著しくすることを見出すでせう。昆虫が生れ出たり、冬籠りの動物がその棲居を出るのも春です。春があらゆる自然的活動の始原期であることは云ふまでもありません。それならば私たちが一年の始めを春に求めることを至當としなければなりますまい。併し私たちは尚ほ春の最始の時期をどの日として決めるかと云ふことにもう一度考察を費さなければなりません。

春と云ふやうな氣候は勿論天文的、氣象的並びに地象的原因の重なつて起るものでありますから、たゞ私たちに感ぜられる結果だけでどの日を春の始めとしていゝかはわかりません。私たちが數日間の氣候の模樣を見て大體に於て春がもう來たなと感ずるのです。併し然う感ずる場合には實はもう春

は始まつてゐるので、その最初の日をそれによつて豫め決めることは出來ません。その上に氣象の變化によつて春らしい日の次にまたひどく寒い冬のやうな氣候が逆戻りして來ることもあります。ですから春の始めと云ふものを定めるには、たとへ實際の氣候とは多少の齟齬を來す事があるにしても、私たちは寧ろ天文學的の方法をどらなくてはならないのです。そして長い年數の平均に於て之は誤りのない結果を持ち來すでありませう。

天文學的の方法と云ふのは、晝夜の長さの變化によるものです。之は地球の南北極を結びつける軸が地球運行の軌道平面に對して傾いてゐるために起るのであつて、之は亦同時に太陽光線が地球の或る表面を照らす角度を定めるのですから地面に達する太陽熱の多少は專ら之によるのです。從つて地面上に於ける複雜な氣象的變化を取り除いたなら之は氣候の變化を起す主因としてはたらくのです。私は晝間の最も短い日、即ちこの主因だけから云へば、太陽熱をうけることの最も少なく、從つて最も寒かるべき日を名づけて冬至といひます。併し實際に於て最も寒い氣候は地球面の種々の物體の熱的効果のためにずつと之よりも遲れてあらはれることは私たちの經驗するとほりです。冬至から晝間がだん／＼長くなつて夜間と同じ長さに達する日を春分と名づけます。そして冬至と春分との中間の日が謂ゆる立春です。

冬至、立春、春分などと云ふ名をこゝに書くと、もうそのなかに私たちは冬とか春とか云ふ概念の含まれてゐるのを感じますが、勿論今述べた純粹な天文學的な定義のなかにそんな意味がはひつてゐるわけではありません。天文學的には之等は只地球の軌道上の位置を示してゐるに過ぎないのです。

さて私たちが春の始めをどこにおいたらよいかと云ふ問題に移りますと、之は地方によつて多少の氣候の相異を生ずる種種の原因があるわけですが、大體に我が國のやうな緯度のところでは、最も寒い時節が立春の少し以前に來ることが經驗せられます。そこで支那で暦をつくる場合には立春を春の始めと見做し、之に立春と云ふやうな名をつけたのでした。又支那では太陰暦を用ひて、太陰（月）の缺け終る日、即ち晦日を月の終りとし、その翌日たる太陰の滿ち始める日、即ち朔日を月の始めとしましたから、立春を最初として一年を二十四節に分ち、之を順次に、立春、雨水、啓蟄、春分、淸明、穀雨などと名づけ、そのうちの一つ宛隔てゝ取つたもの、即ち雨水、春分、穀雨などを含んでゐる月をそれ／＼一月、二月、三月と名づけて行つたのです。それですから一月は大體

に立春の日の近くから始まりますが、太陰の關係によつて或はその以前にもなり、又はその以後になることもあります。古今集の最初に載つてゐる「年の内に春は來にけり、一とせを去年とや云はん、今年とや云はん」といふ歌は、元日の以前に立春の來た場合を述べた一種の洒落です。併しともかくこの暦では大體に於て一年の最初たる元日は立春に近い日となつてゐるのでした。

　立春を春の始めと定めましても、之はまだなか〱寒さの去らない氣候をもつてゐますから、私たちが本當に春の感じをうけるのはそれよりももつとずつと後であつて、先づ春分を過ぎてからのことに屬します。それですから現に歐洲では春分を春の始めと定めてゐるので、私たちの通常の感じは寧ろ之に近いでせう。ところで歐洲で採用してゐた現在の太陽暦に於ける一年の始め卽ち元日が之と稍々隔たつた冬の最中におかれてゐる事實については、古歐洲における暦法の不完全さと、その數度の改正が與かつてゐるのではないかと思はれます。支那の太陽暦が太陽と太陰との關係をもつてつくられた甚だ完全な暦法であつたのに反し、歐洲の太陽暦はその起原を回々教國の純太陰暦に發したものであつて、之は最初は太陰の朔望のみによつて日を數へ太陽には全く關係のないものであつたのでしたから、熱帯に近い氣候の變化の少ない地方では不便はなかつたでせうが、歐洲のやうな地方へ來ると、一年のうちの同じ月日に氣候が同じに戻らないで、ずつてゆく不便がありました。ローマ人が之から改用した暦では一年を十ヶ月に分ち、その最初の月の名は現時の歐洲太陽暦が三月に對して用ひてゐる名の基づいてゐる Martis といふ軍神の名でありました。この事實は既にその當時の一年の始めが現在の三月頃、從つて春分に近い日に相當してゐたものでないかを想像させます。その後紀元前七百年頃ローマのポンピリウスが更に二ヶ月を補足して再び純太陰暦に改めましたが、月日が氣節と一致しないで、紀元前五十年頃のジュリウスの時代には春分が六月半ばになつてしまつたと云ふことでした。そこで一年の日數を改めてこゝに始めて太陽暦が行はれるやうになつたのでしたが、現在の二月が他の月に比べて特に日數の少ないのは、之が一年の終りであつてそこに端數をおいたからでありませう。現在の一月を一年の始めとしたのは、ジュリウスが之に次いで再び暦法改革を行つて完全な太陽暦をつくつたときに、冬至後に起つた最初の太陰の朔が偶ま新暦法のこの月の一日に相當してゐたからに依ると云はれてゐます。そしてこの月の名の起原Janus は門戸の守

護神であつて、一年の最初の意味するものでありませう。それ故このジユリウ暦では春分が三月二十一日に相當することになつたのです。

　私たちが現に用ひてゐる太陽暦の元日はこんな理由で定められて來ましたが、今日私たちは元日がこの日であつては不都合であると云ふ生活上の特別の理由をもたない限り、既に幾ばくかの習慣に從つて之を保存することは不可ではないでせう。尤も我が國に於ては太陽暦採用後五十年を經たに止まるので、習慣性の強い田舍では、まだ舊の太陽暦を用ひてをり、又農業、漁業などの生活上で後者の元日を用ひる方が多少の便利を見出すこともないではありますまいが、併しそれは太陽暦の他の便宜に比べて寧ろ僅小なものであると思はれますから、暫らく太陽暦によつてその元日を一年の始めとすることは適當であると思はれます。

　一年の始めとしての元日は、私の緒に述べましたやうに、寧ろ思想的に最も多くの意味をもつやうです。勿論經濟生活などの上にも多少の意味はあるかも知れませんが、之は私にはそれ程重大な事柄とは考へられませんし、又實際上にも四月をもつて始まる會計年度が行はれてゐることなどによつても、元日の意味の幾分がそこに分割されてゐます。之と同様に教育年度も今では多く四月に始まつてゐるので、學生生活などではそこに寧ろ一年の始めが移されてゐるやうですけれど、併し一般にはやはり暦面の元日が一年の始めとして思想的に多くはたらいてゐる事は疑ひのないところです。私はこの元日に對して、最初に述べたやうな、すべての習慣を新らしく考へなほす時機としての重大な意味をもたせたいと思ひます。このことは實に私たちの人生に取つて嚴肅なるものであつて、私は之がために元日を最も靜肅なる氣分を保ち得るやうな日にしたいと思ふのです。そしてこの目的は既に寒い氣候のなかに見出される現在の元日は必ずしも不適當ではないと信じます。より多くの理想を云ふならば、元日を極寒の時節に置いて、かやうな意味の日に當て、それから漸次新らしい思想のもとに仕事を手始めするに從つて氣候もゆるんでゆき、暖かさが芽ぐんで來るやうになつたなら、尚ほ適當であらうと私は考へてゐます。

　昔からの我が國の習慣で、年始は華美をきそうて樂しく遊びすごすといふことが行はれてゐますが、私は之に贊することを躊躇します。元日を「よろこび」の象徴とすることは、私は單に暦年の改新といふことに基づくものであると思ひます。恐らくは昔はこの暦年なるものを重要視したのであるど

思ひますが、それは支那の古代に星占なるものが行はれてゐたと同様な意味で、すべての天文學的事象を何か人生と深い意味のある關係で結ばれた神秘的現象であると解した一種の遺物に過ぎないと私は思ひます。之と連關して年號改稱といふことにさへも或る意味が歸せられ、大地震があるとか、彗星があらはれるとか、若しくは饑饉その他の天災があつた場合には、何等か天の人生に對する譴誡であると云ふやうに解して、年號改稱を行つて之から免れやうとする祈願の意味に當たのでありました。それですから歴年が改まると云ふことも之等の人たちには自然的な、且つ神秘的に意味をもつて解され、そこに含まれた人爲的な規約的な意味は全く忘れられてゐたのでした。現在多くの人たちは、新年を祝賀すると云ひ、新正を慶ぶと書き、おめでたうと云ひ交して少しも不思議がらないのを見ます。私は之をすべて上の迷信的思想に基づくと云ふことを憚りません。子どもたちは元日の朝、家族のみんなから

「新年おめでたう」

と言ひかけながら、恐らくは何が故に新年がめでたいのか、その理由を解するものはありますまい。たゞ皆がきれいな着物を着更へて、おめでたうと繰返すから、元日はめでたいものだと思ひ込むに過ぎないでせう。否、幾たりの人がこの習俗的なおめでたうの本當の意味を思考してゐるでせうか。

今日では私たちは既に天文的迷信に捉はれてはゐません。暦は單に私たちが日を記録するための便宜的な形式的な規約に過ぎないものであつて、それ以上の神秘的な思想を含んではゐません。尤も或る一部の舊思想に泥んだ人たちはすべての日にその干支なるものに依る神秘的意味を歸して、自分たちの生活行動の吉凶判斷を占はうとしてゐるものもありませうけれども、之等が頑冥なる迷信に過ぎないことは、識者の既に承知してゐるところであります。それにも拘らず私はひとり元日に關する迷信的思想の一般に行はれて、之を怪しむもののないことを不思議に感ぜずにはゐられません。

「元日早々からそんなことを言つては緣喜がわるいぢやないか」

然う云つて多くの無邪氣な子ども達が叱責されるのを私は餘りに屢々見うけます。抑も何が故に元日はそれにとつて相應はしくないのであるからと云ふ眞正な意味を說き聞かすことの出來る母親が幾たり在るであらうかを私は疑ひます。單に習俗に反すると云ふ逃避的理由は、眞理を求めやうとする子供の心に何の光明も與へはしないでせう。

元日をよろこびの象徴としやうとする思想のうちには、暦年の經過を意識して生長と云ふ觀念に到達すると云ふことの含まれてゐるをも、私は勿論認めます。そしてこゝには上の迷信から離れた自然的な理由を見出すことが出來るでせう。我が國では年齡を數へるのに、通俗的には幾たび新年を經驗したかと云ふ數をもつてする習慣は之と密接に關係したものです、この謂はゆる數へ年なるものは年齡を示すための最も簡單な方法として便利ではありますけれども、併しそれが原始的であるだけに多くの缺點をもつてゐることは云ふまでもありません。

「今晩一つ寢ると、明日はあなたは四歳になるの」

と數へられて、子どもは益々不思議な眼を見張らずにはゐられないでせう。それが元日である代りにお誕生日であつたなら、子供の頭には何ものかがより多く響いたかも知れますまい。併しながらともかく生長を意識すると云ふことは、暦年なるものの存在する以上、之れの改まるに伴れて自然に起ることは相違ないかも知れませんが、そのためのよろこびと云ふものは、現に元日から歸せられてゐる祝賀の意味の幾部分をも荷つてゐないことを私は信じます。若し元日に對する迷信的部分が取り除けられてしまつたなら、私は元日を、生長の喜びの象徴とするよりは、之を單に新しさの象徴として思想的反省の機會とすることに、遙に人生に取つて重大の意味をもたせることが出來ると思ひます。人口に膾炙してゐる一休和尚の門松の狂歌は前者に對する一種の皮肉とも見られませう。

私はこの意味で元日を、單に祝酒に醉ひつぶれる日とすることを廢したいと思ひます。祝賀のための日は他の之に相應はしい意味のある紀元節や天長節に見出すことが出來るでせう。樂しく休養するための日は春分や秋分の美くしい時節に之を求めることが出來ます。私は元日を最も嚴粛な靜思の日とすることに於てより多くの意味をもたせたいと思ひます。一年に一度は、そしてそれが始まる日に於て、すべての人が同時にさう云ふ機會をもつてもよいではないかと私は思はずにゐられません。

先年私は獨逸のベルリンで新年を迎へたことがありました。ジルヴエスターの夕べと呼ばれる大晦日の夕方からすべての

人々は街路に出て夜の更けるのを待つてゐるのです。どこの街々も一杯に人が充ちてゆるやかに歩いて居り、料理屋のなかもカフエーのなかも少しの空椅子もないくらゐです。みんな五色の長い紙切れをもつてゐて、その先端を行き交ふ人や向ひ側の人たちに投げやつては、あちらこちらに絡まるのを興じ合つてゐます。丁度今まであつたすべての爭ひが忘れられて、お互ひに親しい結合を形づくるかのやうに。やがて夜半に近づくとみんなが緊張して時刻を待ちます。寒い歐洲の冬の夜も、この夜ばかりは人々の外套がすれ合ひ揉み合ふほどの人混みで、押されながらに歩くと暖かさを感ずるのでした。丁度十二時にシルヴエスターの鐘が鳴り出すと、誰も彼もがそのすぐ傍の人たちと握手をかはして、「幸なる新年」をお互のために叫ぶのです。さうしてめい／＼が歸途に就くのです。翌くる元日はみんなどの家も戸を閉めてひつそりとしてゐます。日本の正月に慣れてゐる私たちには、それが何となく寂しく物足りない氣がしましたけれども、併し少しく考へなほして見ますと、私にはそれが却つて新年にふさはしいものに思はれ出してなりませんでした。そのなかで人々はどれ程落ちついた氣もちで新らしい心を芽ぐませることが出來たでせう。

私は大地震後の第一年を同じ新らしい心で始めたいと思つてゐます。迷信の亡ぶべき今の世に、もはや災變による年號改稱は行はれないことになりましたけれど、私たちはたゞ形式的な曆年改新をよろこぶ代りに、もつと思想的に内容的に眞摯なる新らしさをもちたいと思ふのです。固より單なる新らしさではありません。舊時代的怩習を逸脱して、事物の本來の意味を反省しやうとする努力に外ならないのです。そこにあらゆる進歩向上が芽ぐみ、生長があらはれるのでありませう。そして元日がかやうな思慮反省の機縁を與へることにその最も重大な意味があるのです。この意味に於て幸福なる元日が私たちに與へられんことを祈つて止みません。



マリイ・ロオランサン

堀口大學

千八百八十五年十月三十一日に、マリイ・ロオランサンは巴里に生れた。かの女は高等女學校を卒業した後で、ある私立の畫學校に學んだ。かの女は其所で畫家エンペエルの教を受けた。丁度その頃、かの女は畫家のジオルジ・ブラック・パブロ・ピカソ、詩人のアンドレ・サルモン、ギイヨオム・アポリネエル等と相識つた。この四人が最初にあらはれたかの女藝術の憧憬者であつた。昔から大きな才能を發見するのは何時も大きな才能である。かの女の作品が始めて公衆の前に現はれたのは千九百七年のサロン・デ・アンデパンダンの展覽會が開かれた時であつた。その後、かの女は自由に自分の研究を續けて今日に及んでゐる。千九百十二年の五月に巴里のガルリイ・バルバザアンジで行はれたかの女の個人展覽會がかの女の畫家としての世評に新らしい一時期を劃した。歐洲大戰の始まる少し以前にかの女は獨逸の畫家フォン・ワッツエンと巴里で結婚した。その結果、歐洲大戰中は敵國人として生國を追はれて南の方西班牙に難を避けてゐた。かの女のこの不幸によつて筆者はかの女と相識るの幸福を持つたのであつた。休戰條約の後でかの女は夫と共に獨逸へかへつて暮してゐたがその後今ではまた巴里へかへつてゐられる。現今ではかの女は世界最大の女流畫家として到る所にその名を知られその作品に對する熱心な愛好者を持つてゐる。以上私が書いたやうなことは本當はどうでもよいのである。重要なのはかの女の藝術の世界である。

マリイ・ロオランサンの藝術の世界を眺めよう。

このエデンの園は地上のものではない、さうしてまた尚更天上のものでもない。それはそのあたり、おお、われ等の世界から、かくも遠く、かくもまた近く、星と星との間に介在する世界である。そこにはおびただしい數の少女等が住んでゐるのだが、かの女等は手にするマンドリンとギタアルに合せて古き世のロマンスを歌ふのだが。そこにはかなしげな目つきの、さうしてすさまじい口の奥さんたちが住んで日ねもす桃色の幽霧を眺めながら夕暮の來るのを待つてゐるのだが。そこには男たちは詩人ばかりが生きることを許されるのだが、さうして彼等は皆詩人なのだが、さうして大きな丸い驚きの眼をかつて眼ばたきをした事がなく、見はつてものを見つめるのだが、そこには多くの獸がゐて、人々を防ぎ、人々に使へるのだが。それは忠實な犬であり、上品な犬であり、愚かな犬であるのだが。犬たちは詩人の足を舐め、少女等の玩具となり、非詩人を噛み殺すのだが。それは美くしい身ぶりの熊であり、悧巧な熊であるのだが。熊たちは後足で立つて、西班牙太鼓を手に持つて、少女等の歌とギタアルに合せて手を繋ぎ合つて輪踊を踊るのだが。それはまたやさしい敏捷な猿なのだが。猿たちは木の葉と草花とで花輪をあんで幽霧な額の美くしい奥さんに捧げるのだが。それはまた身がるな鳩なのだが。鳩たちは少女等のギタアルの柄に來てとまりかの女等の口紅をその尖つた舌でなめるのだが。それは馬であり、顏は正面向きの、脚は横から見た、何所かの曲馬團から逃げて來た訓錬のつんだ、よく人の言葉を聞き分け、よく人の無言を察する、前生は詩人であつた馬なのだが。馬たちは奥さんたちの手の中でご飯を食べ、奥さんたちを乘せて散歩にゆくのだが。然しそれにしてもそれは女人の君臨する世界である。

この樂園では、川はリボンのやうに流れ、小鳥は蓄音機のやうに歌ふ。樹木は五月の郊外のやうに、見る目に酢つぱい緑の木の葉を持ち、曇り日の空氣は灰色であり、晴れた日の空氣は水色であり、雨は曾つて一度もふつた事がない。さうしてこの樂園では艶美が唯一つの法律であり、歌が人々の宗敎である。それはまがう方なき女人の君臨する世界である。

私が文章にしてかの女の藝術を說明すると先づこんなことになるのだが、然しこんな風に書いてゐては幾程書いても限がないのである。

要之に、マリイ・ロオランサンの繪畫は、かの女の獨得の藝術境であり、極めて女性的なる世界である。嚴密なる繪畫上の約束から云つたなら、かの女の作品の如きはむしろ詩歌の部類に入る種のものであるかも知れぬのである。そこに人人は描かれた造形美よりも、より多くの抒情美を發見するのである。かの女の作品は繪畫であると同時にまた抒情詩なのである。それかあらぬか、かの女の藝術は最も多く詩人等に愛されるのである。現時佛蘭西詩壇に名のある若い詩人たちでかの女に對する頌歌を作らぬものはまれなほどである。死んだジヤン・モレアスは

笑ふ時
マリイ
ロオランサン
黄金の輪がうかぶ
かの女の美くしい
瞳の中に

と歌つてかの女の明るい瞳を讃へた。ダダイズムの詩人フイリツプ・スウポオルはマリイ・ロオランサンと題して、

籠の中のこの小鳥
これが墓の中でのあなたの微笑です

木の葉が踊つてゐる
永雨がふるだらう
この夕　立ち去る前に
私は木々に花の咲くのを見るだらう
女鹿が一匹しづかに近よつて來るだらう

雲の色は　桃色と靑だ

と歌つてゐる。私もかつて「マリイ・ロオランサンの扇」と題して左の如き詩を作つたことがある。

女狐の轉身

マリイ・ロオランサン
灰色がお前の空だ
紅と紫がお前の虹だ
おお　消え行く虹よ
幻の美くしさ

珊瑚の櫛は紅く
少女は犬の顔をして
犬の首輪をして
青いうす絹に裸形を包んで
女の顔をした白馬にまたがつて
雲の中をとびまはる
小鳥のやうに

犬もいつしよに
小熊のやうな犬もいつしよに
女のやさしい顔をして
雲のはな畑を
ああ　とびまはる
月のやうに

また死んだギイヨオム・アポリネエルはマリイ・ロオランサンの藝術を論じて
「かかる女の藝術は時代の名譽である。」
と云つてゐる。
ロダンが初めてかの女の作品を見たとき、
「これ等の畫の作者は世の常ならぬ工人である。かの女は優美の何ものであるかを知つてゐる。」
と云つて賞嘆したと、その當時ロダンの秘書であつたマリオ・ムニエは傳へてゐる。
實にかの女の藝術は昔から今に傳はる佛蘭西の女性の特質である優美さの最もふさはしい表術である。私は憚るところなく斷言し得るのである、かかる才能は英國にも獨逸にも露西亞にも及びその他の何所の國にも決して生れはしないと。
マリイ・ロオランサンは佛蘭西に咲いた極めて佛蘭西風な花である。

かの女の才能は繪畫以外にもしばしばあらはれる。巴里の婦人時裝商のポオル・ポアレの求に應じてかの女はしばしば女の衣裳を考案した。一時婦人流行界を風靡した觀のあつた東洋趣味に對する反對運動として長くロオランサン風なる一式樣を流行界に殘すに到つた。またかの女の圖案になる壁紙は巴里のグルウルの店で賣つてゐる。

かの女はまたよく詩をつくる。假に一家の風格を備へた所謂ロオランサン風な抒情詩である。後世二十世紀初頭の佛詩の詞花集を編む人があつたら彼は必ずやこの時代の色珍らしく匂ひ奇しき珍花としてこれ等の如何にも女性的であり、蛇のやうにしなやかなムウヴマンを持つたマリイ・ロオランサンの抒情詩をその花束の中に加へることを忘れぬであらう。左に二三、マリイ・ロオランサンの詩を譯してお目にかけませう。

鎮靜劑

退屈な女より
もつと哀れなのは
かなしい女です

かなしい女より
もつと哀れなのは
不幸な女です

不幸な女より
もつと哀れなのは
病氣の女です

病氣の女より
もつと哀れなのは
棄てられた女です

棄てられた女より
もつと哀れなのは
よるべない女です

よるべない女より
もつと哀れなのは
追はれた女です
追はれた女より
もつと哀れなのは
死んだ女です
死んだ女より
もつと哀れなのは
忘られた女です

獅子

おほやうな獅子よ
お前は私の親類だ
私もあの人たちに云ふのだ
私にはちつとも彼等がこはくないと

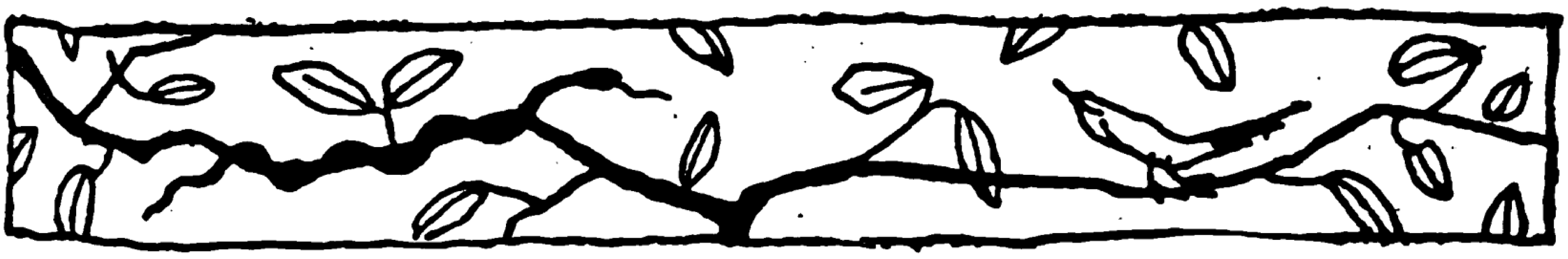
馬

傷いた馬は聲も立てずに死んで行く
やさしい馬よ
私はお前の死ぬのを見に來よう

斑馬

ニコルよ　お前は思つてはいけません
斑馬も馬と同じい獸だと
斑馬は西班牙ダンサアです

編者註　本號口繪「ゼヌヴイエエヴ」は、好んで牝鹿を描いたマリイ・ロオランサン夫人が、牝鹿と共に暮すゼヌヴイエエヴの傳説を描いたものです。



土にしたしみて

原阿佐緒

昨日の雨に水みちし小田の光り見ゆ風あらき日の霜月晴れに

硝子戸の外の面風あらく陽の明かき窓掛けにふと鳥影のさせり

あけがたの黒くかさなる山々のあひまあひまゆ霧たちのぼれり

震災あととだえ久しき汽車の音この夜ゆくりなくわがきゝしかも

もの書くとふと氣づきたる爪先きに土のはさまるをなつかしみ見る

女なれど土に親しみ鍬とればわがたなぞこに肉豆いでにけり

人ら寢ねて落ちゐしづまる卓の邊にしみじみとまもる掌の肉豆を

掌の肉豆を灯のもとに見つゝこほろぎのこゑにきゝ入るこの夜のふけを

吾を責むる母の手紙の遠ぞきて何か安からぬ寂しさ湧くも

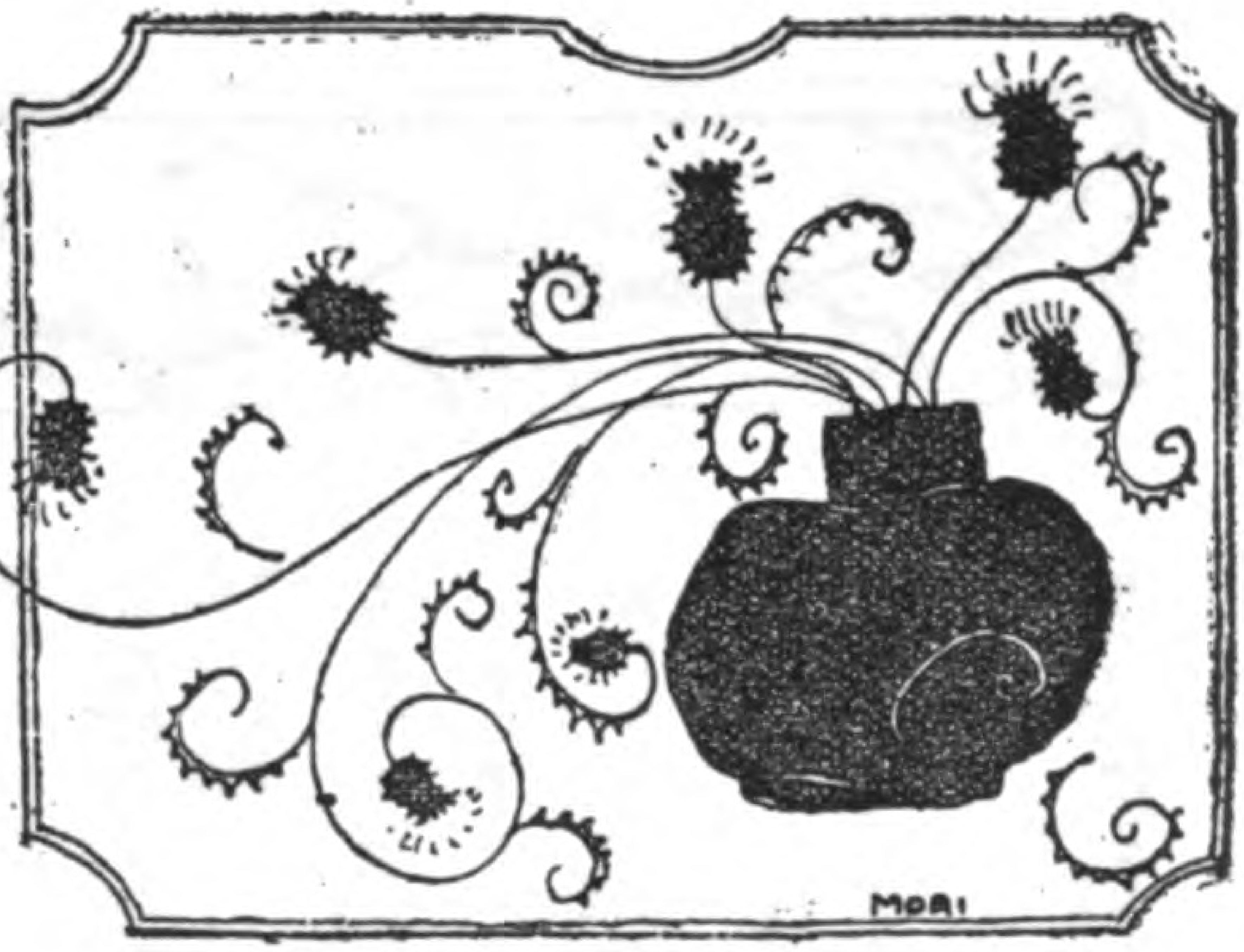
言に出でてわが訴ふべきにあらぬをとひそかに堪へていつまでかあらむ

さきはひの全からめやはゝそはの母もあが子も吾に遠く住むを

わがいつか君がめぐしみに馴れ足らひ母をかなしく思ふ日の來しか

つねの日は堪ふべくも思ふうつし世のひとりの誹謗われにかなしき

うら泣ける吾とも知らず君が言やさ〱しきにいや苦しかも



春宵戀を思ふ（應募原稿）

寂しい心

水道十九

さむ空の星を仰いでは憧憬れ、囀る小鳥を聞いては美しい私語を思ふ。春宵、ジイツと瞳をつぶつてけなげに合掌もして見るけれど、漸やう春の心に訪れてきた淋しみを感ずる今日此の頃、恵みなき物思ひに沈むのは私だ、靜かに辷り行く水面を打ち眺めて流れ寄るオフエリヤはなきかと待ちあぐむ愚か人は私だ、終日、窓邊に椅つて道行く若人達の幸福を祈る聖者は私だ。名も知らず顔も知らぬ幻の處女の上に慈悲あれかしと念ずる僧は私だ。郵便配達夫が、やがて何處からかの戀の手紙を投げ入れてくれるであらうと信じようとする馬鹿者は私だ。人妻とも知らずに何とか言葉をかけてくれるかも分らぬと若く美しき女の瞳を盗み見る心の罪人は私だ。戀の藝術を觀て悲しく打沈む寂人は私だ。春宵、淋しさに、しのび泣きする若者は温い火鉢を抱擁して靜かに戀を思ふ。

戀！　戀！　戀！！

それは何といふ不思議な曉の彩雲であらう。その雲を見入つては聖い美しい桃色をどんなに憧憬れ思ふことであらう。あこがれれば、思へば軈て彩雲は、幻のように名残なく消えてゆく。呆然、思ひに沈む私達の仲間の可哀さうな影が其處

に殘る。併し太陽は惠み多き光條を私達の上に放射してくれる。「お惠み下さい」と我等は魂を投げ出して哀訴する。

時折は寂しさに堪へ得ず、曾つての日、瞳に映じたありとあらゆる女を一人々々自分自身の戀人に當てはめて見る。さうだ。みんなが戀人――けれど考へても〳〵思うても〳〵果敢なく消えてゆく幻ばかりである。そゞろ寂しくなつてくる。

寂寞に心は日一日と乾燥してゆく。小さいハートに貯へられてゐる血が燃えて心は日一日と渇してゆく。一滴の水が慈悲深き『えにし』の手から惠まれるなら、と、路を行くにも寢に就く時にも屹度思ふことを忘れない。戀なき者が美しき戀に憧憬れる時、淋しき男は最も強く最も純で最も美しい。

世界の總ゆる女の中の誰か一人が自分の戀人になるに違ないと信じてよい。道ゆく度に瞬間々々に會つては又別れてゆく幾多の女を見る時、その中の誰かが、何日何處でどういふ風に私と戀するようになるかも知れない。さう思ふと、どの女も〳〵が一人々々皆んな尊く〳〵私の胸にうつつてくる。更にそれが延長して世界の汎ゆる生物がみんな愛すべきものに見え、又どの生物にも愛してゐられるやうな幸福を感ずる。

一人寂しく公園を彷徨時、幾組かの戀人の仲のよい散策を見る。かうした時、心から其人達の幸福を祈らずにはおけぬ。

あてもなく街を歩み疲れて歸つてきた私の頭にはその日幾人も逢つた若い女の顏が、こんがらがつてボーッと煙のやうに映じてくる。しかし、やがてそれは曾つて私が一度でも言葉を交へたり、會釋をしたりした隣の若い奥さんや女中、小學時代の可憐な女生徒の顏に變つてゆく。夢に入るもの、それは又悲しく寂しい。覆面の女が忍びよつてきたかと思ふとそれはいつもくる八百屋の爺やであつたり、洗濯婆さんであつたりする。

私の周圍は寂しい空氣にとり圍まれ、心は淋しい呼吸に喘いでゐる。思へば思ふ程寂しくなつてくる。けれども思はずには居れない。この寂しさ――充實した寂しさが謂はばせめてもの慰めだ。寂寞なくては自殺でもしさうな若人だ。

戀！　一切が分らない私の戀。一夜川邊に佇んで三日月の梳る銀髮の流れに見入つてゐる時、その流れ、その髮が、岩間にすゝり泣いて人を待つてゐる寂しき乙女のもののやうに思へる。流れを逆上れば、戀しき女の顏を求めて上れば、曠い野原へ――淋しき森へ――人なき里へ――遂に悲しいすゝり泣きする山奥の岩間へ。そして、遠きせゝらぎと合する私自身のすゝり泣き。あゝ！　私の戀――それは一切が分らない寂しい悲しいそして嬉しくもある戀。

春宵、美しき戀を夢みる純な若人達は、かうして私のするやうに、温い火鉢にさへも、心からの接吻を捧げることが出來るのである。

戀の唄、失戀の唄を口ずさむ寂しき聲が、自分ながらそゞろ憐れまるゝ程デリケートな調子を帶びた淡い燈火に溶けてゆく。戀を思ふて一人涙ぐむ春宵である。

髮は血に咲く花

大村節子

何がなしものなつかしい初春の宵が私はなやましい。昔貰つた手紙の中の文句がふと蘇つても來る。輕卒には開かれなかつた其の唇からの、無駄の無いいつくしみの言葉のあれこれが、有りし乍らに心の扉を撫でたり、たたいたりもする。胸の帳の奥深くへ「私の王樣」と大事にまつつて來た人は、あんまりもろく散つてしまつた。人生の秘義でなぐりつけられたやうな心持に、ぼんやりした時から明けて二とせ、この頃は漸く神をも世をも恨まなくなつたけれど、其の代り心の限り泣ける日が多い。戀の心の濃過ぎた罰かと、あきらめようとしてもあきらめ切れぬもろい花の散りやうであつた。

命がけで思つて居る人から、一生懸命に想はれてゐる嬉しさに、宇宙の幸を殘らずわが身に盛つた心地がして、瑞々しい五月の朝には、家を巡る花の豊かな花壇に下り立つて、花うらなひをしたりした私は、明るい小雲雀ちやあなかつたか。其れは雨上りの朝だつた。花壇の中を行くと、ナスターシャムはなよ〳〵とした莖に不似合な大きい派手な姿の金色の花を一ぱいつけて居た。露にぬれてゐた。カーネーションは狂亂の花瓣を、いた〳〵しい迄に土に近くうなだれてゐる。露を一ぱいのせてゐた。矢車艸も、スヰートピーも、自分と丈比べをする程にのび〳〵としてゐる。ペチエニアは、柔いラッパを碧い空へ向けて、數限りなく竝んでゐる、ダリアの隣にマーガレットが、朝の風に折々ゆれ乍ら、氣高い群をなしてゐた。私はふとその傍に足を止めてほゝゑんだつけ。そして其の一花を摘むだつけ。片想ひのいぢらしい戀をする西洋の娘達が、マーガレットで花占をするといふ話を思ひ出して、占ふ必要もない私だのに、つひ手すさびがして見たかつたので。瓣の一枚をぬいて土にこぼし乍ら「ヒー　ラブス　ミー」と云つた。私は云ひ知れぬ快さにほゝゑまれた。次の瓣を一ひらぬいてこぼし乍ら「ヒー　ラブス　ミ

ナット」と云つた。其の次の瓣にはまた「ヒー　ラプス　ミー」と云ふ運命をしおはせて土にこぼした。其の次の瓣は「ヒー　ラプス　ミー　ナット」と悲しい運命を抱いて土に散る。純白の車のやうな花から、嬉しい言葉に、悲しい言葉に代る〴〵をもつて一枚一枚瓣がぬかれたが、最後の瓣は勿論「ヒー　ラプス　ミー」と好い言葉の表にこぼれたので、可笑しい程小躍したのもたつた昨日かと思はれる。たのしかつた。嬉しかつた。東と、西と、海山幾百里を隔てて住んでゐても、素直によつかかつてくるいとしい者を、いとしんで暮す日の幻を逐ふ魂と、なつかしい人の胸に凡てを捧げて、優しくかしづく日の嬉しい幻を夢見る魂と、二つはいつでも燃えるやうな輝きを、彼方、彼方へ放ち合ふ二つの崇高な星であつた。不断の愛のツウヰンクルに美しく輝き合ふ星であつた。

私のその彦星が、學業半で病を得て、暖かい濱から濱へと保養の旅を續けるやうになつた時に、私達はどんなに悲しかつたらう。身のなやみよりも、彦星は戀のなやみにひしがれた。病床で、失望と、熱情とが、絶えず入り亂れて心の中にうごめいてゐた。其の身の弱さをかこつと共に、此の弱い體へ一生懸命身を寄せるあなたを、どうしてやればいゝかと涙ぐましいと云つた。自分の心を犠牲にして、一日も早く――一日早ければそれだけあなたの胸に描かれる自分の繪姿はうすい筈である――優秀な人手に託して、あなたの幸福を見て安心しようか。あゝ何と云ふ寂しい諦めだ。しかし遠からず腐れ行くかも知れぬこの身は、よし破れる程の淋しみに沈んだとても、長いことでは無からう。あなただけは、長く〳〵明るみと喜びとの中にひたらせてあげねばならぬ。腐れ行く一つの肉體は致し方ないとしても、遺す一つのいとしい魂を、一たいどうすれば好いのかと毎日考へつゞけると云つた。法科の下田になら安心してあなたが託せさうな氣がする、自分にくれる其の純眞な心を、彼れに與へることに努めてくれないかと云つた。其の時返事の代りに捧げた歌も、私には忘れられない。

十とせさめぬ戀とも云はじわが命ある日の限り君に燃えなむ

病みませど永劫消えぬわが胸の光の君よ命の君よ

花うらなひをした頃のやうな明るい心は消えたけれど、背戸の藪に椿が咲くと

君にもる愛の証もさと云はん深き形にやぶ椿さく

と初花のたよりに書き添へて病める人の枕邊に送つた日もあ

る。

（あなたのキングはみじめな健康の破産者だ。其の敗者のいとしい片割れよ！　あなたは心勞に打ちたふれはせぬか。）

と送りこされたたよりの文句も思ひ出される。私は、王樣の戀の心のゆるがぬ限り、たつた一人の方人がなくとも、どんな時にも心勞にくづ折れはしなかつた。

君をしたひあづま乙女となりにこし雨にぬれつゝ來し浪華より

宵を降る春のこさめにわがぬれて病の君にまゐるあづま路

住み馴れた西の國から、かうした見知らぬ國への初旅は、娘心におど〳〵し乍らも、どんなに嬉しかつたらう。小さい田舍の停車場から、ひそ〳〵雨の野路を、王樣の家――この家――に來た時に、雨のしぶきでうすじめりした袖のあたりを抑へて見て、「いとしい王樣」と涙ぐんだ日の、あの面影が忘れられぬ。

（あなただけのお母樣でなく、私も「お母樣」と呼んでかしづくと云ふ事は實に不思議なほど嬉しいこの世の出來事では御座いませんか。あなたを産んで、そしてあなたをかうした今に育て上げて下さいましたお母樣が、私は勿體ない程なつかしうございます。あなたを大事にして、こんなにあなたにたよつて行く私を、お母樣もきつと可愛がつて下さいませう。）

と書いたのは、かうした旅を待つ頃に、あづまへ送つたたよりであつた。紀伊の沖から流れて來る暖い潮が、生垣の外の白砂へ、朝な朝なみるを打ちあげたのをふるさとの家で、（築地のくづれから「れんぎよう」の花の散るのを一人で每日見てゐる。早くおいで――。）

と書かれたたよりを見て、許されて上る日の嬉しい旅を、どんなに待つたであらう。

病床に侍して半年。「あなたは寂しくはないか」と幾度聞かれたことか。「自分が丈夫だつたら、あなたはもつと〳〵嬉しいことが多いけれど……しかたがない。東エビスはこんなに弱かる可きではなかつた」。淋しい微笑を幾度見たことか。自らに「東エビス」と云ふむくつけき名を冠らせても、西の國の娘に、優しい、美しい戀を敎へて、かうして育んできた人を「東エビス」と呼ばれようか。西國の人の夢にもよう見ぬ優しさをもつて、みやびを西國の娘の心に培ふ人が、何で「東エビス」であらう。

尊い私のお星樣よ！！

「三年たてば忘れ果てるのが世の中の習ひだと云ふけれど、何年も〳〵忘れないでおくれ」と云つて、もろ〳〵散つてしまつた。淺間山の灰が、風のたよりにはる〴〵と、しきりに庭へ降つて來る日の朝。

冷いむくろを抱き上げて、この身のぬくもりを分けたいものだと泣いたのは、一握の粉土さへも、柩の上に投げ落すにしのびないと、土をふりかける手眞似をして、人足共の荒々しい土のかけさまに泣いたのは、たつたこの程のやうに思へるけれど、盛り上げた土饅頭に、二度目の土筆ん坊がやがて出よう。

髪は血に咲く花に見える。永劫をかけて燃ゆればと、何時かまみゆる日の手入に、この黒髪を朝な朝な梳る空しささへも嬉しい。

愛人への言葉

石渡靜子

今日の私の滿身はあなたに對する信賴に充ち充ちてをります。

おゝそれは何といふ輝かしい歡ばしさでございませう、あなたの大きい腕のうちにあなたの海のやうに湛へられたうるほひの中に私は丁度その浪の泡沫のやうなたよりなさに滿足し安心しきつて息づいてまゐります、おゝ稚性によつてその戀人の強さに浸りながら生きて行くといふことは何たる幸ひでせう。それは私の思ふ人生に於ての最上の愉悦なのでございます、かうして新しい年を迎へ私達の上には再びの春である今日、しみじみ過去一ケ年を追憶せずには居られません。幾變轉の苦しみや、悲しかつたくさぐさの想ひも今となれはみんな私を育くむ糧なのでした。

人、一人を信じきるといふこと、その容易さは私にとつては驚きでもあり、苦しい努力でもありました、私はほんとうにあなたを信じきつてゐるのか……………自ら自らを責むることの幾度でしたでせう。こんどこそもうゆるぎはしない、と思ふすぐあとからあなたのおつしやる一つの言葉の端を捉へてまで私は惱んだのでございます。あなたの眉や眼にふと漂う色や、あなたの沈默の唇のうちからまで何かしらを讀もうとしてあせつたのでございました。

あゝでもとうとう苦しい喘ぎ〳〵の中から私の心の芽も伸びたのでせう、かくも晴々しい光の降りそゝぐこの新春にこ

の心に何の不自然も悲しみもなく全く融和した流れを感じられるのでございますから。

あなたはいつも何といふ大いさのうちにやさしい同情と、熱情を以て愛して下すつたことでせう、それまで私はこんなにも空の輝かしいこと、空氣の甘く地のふくよかなことも新緑の麗しいことも知りませんでした、おゝこの限りなく湧き出づる喜びを感謝を何をもつて報いたらよいのでせう、私はいま小さいながらにたゞ思ふまゝを申し上げませう、それをきつとあなたは歡んで下さることを私は信じますから。

いくらあなたが愛して下さつても私が空虚であつては遂には幻滅の悲哀を見ねばなりません、私はあなたの陰に覆はれながら貧しくとも私自身なる芽を伸ばして參り度うございます。

私はあなたのいゝ戀人である前に、いゝ人間として生きなければなりません、そうすることは私としても理想への追求であり、其處に人生の意義を見出してゐるのでございます。

あなたのお生活の上に、私あるがためにその自由を侵したり、伸展への道をお妨げするやうなことの決してあらぬやうに。

それは私自身を伸すことによつて實現されることでございます。それがたとへ自らの力の及ばぬことを知りながらも不斷の努力を致すことがほんとうであると信じます。あなた御自身を完成遊ばすこと以外露ほどの煩ひもあらぬ爲にはこの身も心も砕くるまで奮鬪する覺悟をもつて居ります。

どうぞ安心して突進して下さい。私は今明かにかう申し上げてしまつても悔ゆることのない力を内に感じてをりますから。

精神の上ばかりでなく物質生活に於きましても自分で出來得るかぎりの努力は致さねばならぬと考へてをります。

そうしてその限りを知らず伸びてゆくところのあなた御自身であり私自身である二つの生命が全き調和を造り出すことによつて、私の永遠への憧憬は一つ一つ靜けさの中に顯はれてゆくのでございます。

このやうな歡喜のうちにもかげに潛む不可抗な運命に對する不安は絶えません。これはまだまだ新しく刻みつけられた、人々の悲しみでございませう。いつあなたとの上に大きな鐵鎚を下されないともかぎらない、そんな悲しみをまで私は描けるほどに恐怖に戰いてゐるのでございます。もしもそうした悲惱に會つても、(思ふさへこれは堪へられない、私にとつての一番強い嘆きに相違ないのですけれど)其の時、自分を亂

すまいとする用意と覺悟とを、幸福なよろこびの中にも失ふまいと思つてをります。

何時の日か私達にめぐまるゝであらう輝やかしい光よ。その時あなたの豐かなる腕に、廣いお胸の中に小さな魂を抱擁して下すつて、あなたの瞳と、唇とを、もるゝ微笑は私の在ることを滿足して下さるそれであるやうに——それこそ私の願ひなのです。

おゝあなたの内なる私の魂は、何といふ高らかな歡呼と力強さにみなぎつてゐることでせう。

新春の此の日。建設への第一歩として、此處に若く健康に燃ゆる生命は大氣を吸ひながら、如何にいそいそと歩み行くことでせう。

募集原稿の中「新年にふさはしい小話」の中には掲載したいと思ふほどの佳作がありませんでしたから

そのことをお斷りしておきます。

（編輯部）

佳作者

（春宵戀を思ふ・新年にふさはしい小話）

手塚鶴代	岸悦夫
木犀の花	阿部靜枝
みどり	天野藏一
川島廣	野山文雄
與志野	飯村冷光
長谷川	岩尾やい
富澤とみ子	枯柳
八田瑠璃子	てるを
中山文麿	吉田龍一
野の花	倉橋茜子
海麓	山賀武雄
熊本醇	ゆかり
清滸	山口さみ

家庭のためのペエジ

兒童のために選擇すべき繪畫

(Estelle M. Hurll による)

泉甲二

兒童のために示すべき繪畫を選擇するには、私達は兒童の立場からその選擇に關する考察を進めてかゝる必要がある。大體、兒童の繪畫に對する興味は、藝術そのものに存在するのではなくて、その繪畫の題材に依るものであることは事實である。その繪畫が美しいか、或は手際よく取り扱はれてゐるか、又は有名であるか珍らしいものであるか、かうした問題に兒童の繪畫を見る心理は能くものではない。彼等は決してそれを知らうとも注意しようともしない。兒童が最初に知らうと欲するところのものは、先づ何よりもその繪畫には何が描かれてゐるかといふことである。若しその繪畫に、何か兒童を歡ばすやうな對象が表現されてあるとすれば、その繪畫は、兒童にとつては、それだけで充分であり滿足させられる。恁うした事實は、それは明らかに極めて單純な心理現象ではあるが、兒童は自から彼自身の取捨選擇の理由を有つてゐることを證明する。從つて、恁うした兒童の選擇力を研究することは私達にとつては、更により高級なる鑑賞力を養成するの一階梯を、兒童のために與ふる所以に外ならぬ。

繪畫に於ける兒童の最初のお氣に入りは、兒童の玩具やその環境に於て、主題から最も直接に、親しく兒童の心に反響するものに存在することが言明出來る。この點に於て、線の複雜は兒童の眼を混亂させる。人の姿は明かに區別されるために、背景からうまく浮き出てゐる必要がある。從つて、印象派の繪畫などは兒童のためには理解されない。然し凡て兒童の心に於ては最初描かれた印象から實物そのものに對する如き滿足を與へられない。何故

かといへば、繪畫は結局實物であり得ないからである。描かれた赤兒は抱きしめられるものでもなければ、亦描かれた動物は床の間を引張つて廻はられるものでもない。然し乍ら、時日を經過するうちに、繪畫に對する認識力は、兒童の感情のうちに確乎した位置を占めるやうになる。おもふに繪畫は、すべての兒童の遊戯の最も安靜なる休み場所ともなるであらう。確かに繪畫は、兒童に極めて靜謐なる享樂を附與する。それは正しく母親の愛撫を兒童が感受すると同じやうに。

兒童が繪畫を認識する心理過程から次いで來たるものは、好奇心の要求である。兒童は永久に疑問を追求し、理想を高めようとしてゐる。而して、繪畫は他の物象と等しく、この理想への目的に對して貢獻するであらう。非常に容易く親しまれてゐた家庭的愛物の繪畫から、兒童は恐怖と好奇心とをもち乍らも、かへつて見たこともない野獸の繪畫に心を惹れてゆく、又、兒童は彼自身が日々眼にしてゐる家屋とか教會堂の繪畫から、探求してやまぬ眼を以て、かつて見たこともない立派な公共的建物へと心を惹かれてゆく、尚、又、兒童は自分のやうな着物を着、外貌をしてゐる仲間の子供から、他の時代の、或は他の國の子供の生活を知らうと心を惹かれてゆく。かうした場合に。新しい物體乃至事實は素晴らしい勢を以て兒童の興味を刺戟する。然し、知識を求める兒童の餓えた心は、往々不理解の何物かに對して妙味を發見することがある。

兒童が一度に一つ以上の對象を把握し得れば、尚之を換言すれば、一つの構圖の種々なる要素を理解し得れば、直ちにその兒童は單純なる對象から物語を有つ繪畫へと進め得る。かくして兒童の喜悅は、單なる認識或は好奇心より以上の高級位に位することになる。それは想像の眼覺めである。一度かうして覺醒されたる知識は、兒童をして、直ちに鑑賞の樂園へと惹き入れる正當なる橋渡しを形造る。そこで、いい物語を有つ繪畫が非常に必要となつてくる。いづれの場合にしろ、兒童の生々とした想像力は、繪畫のうちに物語を讀み、或は物語のうちに繪畫を見ることの多くの練習を見出すことになる。

兒童の階級の興味を外れた繪畫は、どんな繪畫でも兒童に迫る力を有たないことは明である。若し兒童が熱心なる兩親乃至教師に依つて、兒童が理解

しさうもない對象を過重につめ込まれたとするならば、或は又、兒童の選擇を無視して、それが爲されたとするならば、恐らく兒童は頭を反向けて相手にしないであらう。然し、兒童が聞くことを好み、讀むことを好み、その兒童の眞實の生活に於て見ることを好むものは、すべて何でも享樂する。それは繪畫に於いても勿論さうでなければならぬ。茲に於て、私達は兒童に共通なる彼等の經驗と、自然に關聯する對象のすべてに對して心眼を開く必要がある。そして、私達はその對象を充分なる變化に分類すべきである。

すべて、男でも女でも兒童のすべては、皆各自の異つた興味に從つて、それぞれ異つた趣味を有つてゐる。然し、總體的に言へば私達はすべての兒童が動物の繪を好み、又、彼等の生活の繪を好み、更に興味ある物語を有つ繪畫を愛するといふ事實は確實である。そこで、私達はかういふ見解から、家庭や、學校のために有効なる材料を集めなければならぬ。然し、私達はこの材料を選定するに關しては、秀れた藝術を選擇するといふことを忘れてはならない。兒童は彼自身その喜悦を、繪畫が何を現はしてゐるかに見出すのであるが、私達はその選擇する繪畫が、單に今日價値あるばかりでなく、永劫に於ても生命を有つであらうことを記憶しなければならない。又、すべて最初に見る繪畫は少くとも全生涯を通じて其自身のうちに、生命を永續するやうな繪畫たらしめたいものである。さうすればすべての人は自分の兒童時代に得たる貴い寶を失ふやうな慚愧を決して經驗しないばかりでなく、常に繪畫をよりよく味つてゆく上に、藝術に對するより高い鑑賞力を增進することとなる。



流行の新傾向は 復興色と復興柄

鹿島英二

流行と云へば、贅澤や派手の先導者として、實生活とは縁遠い事の樣な感じを持つ人があるかも知れませぬが、贅澤に限らず、派手に限らず、流行は要するに其時の人々の心持の總括した考へであるのだから服裝ならば之に關係ある圖案家、染織家、其商品を取扱ふ商店等に於て、其時の一般の人心が如何なる風に向つて居るかを考へて置く必要があります。乃ち作品商品が役に立つか立たぬか、賣れるか賣れぬかの死活問題であり、是非共流行を豫想して置かねばならぬ、然し豫想としても單に其心持に盲從して若しそれが惡傾向にあるにも構はず、唯御氣に召す樣に御機嫌を取つて作るべきではない。心ある作家商人としては色々の惡傾向は之を制御すべく、一般が若し贅澤に向ふならば之を實用に向はしめ、華奢を轉じて質素に、鄙猥を轉じて高尚に進ましむべきであります。

然らば其豫想を立てるには如何なる題材に依るかと云へば、古くは呉服店等でヤレ天平式とか桃山式とか元祿風にするとか、勝手に定めて、品物を作つてそれを無理に勸めたこともありましたが、肝腎の御客の方で其氣分になつて居ないでは、なか〳〵それが一般の流行とはなつて行きませぬ、亞米利加で古代埃及の發掘物が新聞雜誌等に盛んに評判になつて居て、それ等の色や模樣が埃及式として、色々な者に盛んに應用さるゝ樣になつたからとて、それを埃及の評判も何もない日本に流行させようとは、聊か無理であります。

本年はかう云ふ風の物が賣れたから來年はかうした方がよからうと云ふ、大體の見當を附けて製作の方針仕入の方針を立てゝ行くのではあらうが、それは一小部分の考へになり易いから、矢張大きく政治、文學、宗教、音樂、美術等より之等各般の言動行動の表はるゝ各般の施設企圖、出版物等アラユル人心の傾向に注意し、且つ之は東京

としてはどうか、關東として如何、關西として如何、日本全國として如何、大にしては世界一般として如何等其依て來るべき諸種の事項に注意して、思想の進んで行く、其潮先きを見て居て之に依て色とか形とか模樣とか云ふ者を定めて行く方が良いのであります。

斯うしたわけから大正十二年秋より十三年の春に至る流行を、大正十二年十一月の御慶事による一般人心の傾向を考へ、呉服店等でも之に相應した色や柄行等を定めて居て、それ〲準備して居たようですが、今回の大地震大火災前古未曾有の大變事があつて思想の大轉換が起つたから、當然流行は之から新たに生れて來ねばならぬと思ひます。

そこで私は今後來るべき一般人心を觀察するに一般の人心は震災の爲に、悄氣てしまつたようには見えぬ、悲觀してしまつたようには見えぬ、寧ろ惰眠より覺醒に、靜より動に、死より活に、サー進まうと云ふ活動の意氣が充分表はれて居ます。戰場に旅立つ時の意氣がある、贅澤を止めて實際的にしよふ、舊習を廢して眞文明を作らうと云ふ意氣が表はれて居ます、之は震災前から幾分動きかけては居ましたが、之が急速に眞劍味を帶びて來た、之乃ち復興氣分で色も形も模樣も此氣分から來ねばならぬのです。

此氣分は、餘りジミではない、暗い方でなく明るい方で、陰ではない。陽である派手や贅澤は止める氣持ではあるが、沈んだ氣持ではないと思ひます。且つ婦人も餘程活動氣分が滿ちて來たようではありますが、活動と云ふても矢張婦人は婦人らしく行くべく、ライオンの樣な強い者でも矢張女性は男性よりも柔らかで之は自然の天性であるから、マサカ萬事を男と同樣にするわけには行かぬ、從て服裝其他も其心持を失ふてはなるまいと思ひます。

故に私は差當り流行の當然來るべき傾向として左の數項を考へられます。

色數少なく調子は深く(單色深調)パツトしたもの　今後は一般が餘程多忙である、複雜なる者を悠々と細かに見て居る餘裕はないから、色數は少くして調子は深く、パツとしたもの、單に色數を少くしただけでは、堅くなり易いから調子は深く複調でなくてはならぬ、從來の如く御座敷で手に取つて觸つて見て初めて感心すると云ふ樣な者は不向きで要するに遠見の利く者たるべく又

一色又は同種色の濃淡の調和　など

がよろしからう。友仙などでも餘り複雜な澤山の色があると遠見には何が何だかサッパリ分らず面白くない、却つて爺臭さく人間がケチ〳〵小さく見え、ユッタリと大きな氣持に見えませぬ、假りに女學生の服裝に例を取つて見れば、彼上下一色で着物羽織袴皆同一色の服裝の人と色々な色の交つた友仙物の着物着た人と一緒に並んで歩いて居たとすれば、遠見には必ず一色の方が引立つものである故に、一般の服裝としても成るべく似寄つた樣な色の濃淡によつて變化を作り、或は之に最淡最濃乃ち明暗を作る爲に白と黑を交へ、其柄の大小によりて子供向き若向きと區別を作り、又は同種色の內に至極僅少なる反對色を飛び模樣式に用ゐる、其色の遠近に依つて幼長の區別が出來て行くと云ふ風の物が頗る時代に適應する事と思ひます、之は震災前已に此傾向を持つて居て、彼市松や絣式など盛んに染物織物にも流行したのは其傾向の先驅であつたと云つても良い、乃ち其キッパリした處が現代の氣分に合ふたのである、然しアレのみでは餘りに單調で變化がなさ過ぎるから、此氣分だけ殘してモット深味を持つて複雜に進むべきであると思ひます

絣銘仙　の絣の變化など、昨年初夏より伊勢崎銘仙など驚くべき進歩が表はれて來た、此絣の織り方は經糸緯糸を段々引き摺つて從來の絣が直角に交叉されたのを、或は斜に、或は急に、或は緩やかに屈曲を作り、斜立涌、斜山道等色々な柔か味ある形狀の模樣を作り、且つ捺染や拔染を應用して、從來の几帳面なる絣を一變さして非常にキッパリした且つ柔か味を持つた物を作り出したもので、之は現代に適る適した者と思ひます。

繪銘仙　從來多く十六七歳以下迄の物であつたが、之も二十代程度に使用して面白き者が、最近織出される樣になつて來て居るから、萬事節約主義の今日從來の高價な御召などの代りに、銘仙級の者の使用は、最もよい事と思ひます。

縞柄　縞物の柄行きは餘りに細線を用ゐぬ方がいいだらう、用ゐるにしてもそれが集まつて大なる棒に見えるか、大なる瀧縞に見えるか、大なるボカシに見えるか、兎に角集まつて大きく働く柄行きとなつて、それで縞巾の大小變化がつくと云ふ樣な者が今後の氣分に適してゐます。

無用なる精巧を避くること　餘りに技巧に捉はれ、織代や染代が馬鹿にか

ゝつて居る爲め高價となり、一寸見た處はそれほどでない者がある、そしてかゝる無用な手間のかゝつた者は不必要な事で、之を買ふて高價な者だとして喜んで居る人も多かつたやうですが、之からは斯樣な事は無意味な事で實際今日では同一の着物を幾年も着る必要もなく、又着もしない着物を簞笥の底に仕まい込んで着物持として喜んで居るなどはイザと云ふ時却つて荷物が重くなるばかりで無用の事であるから、色や素地等の保存に付てもさう無暗に堅牢な必要もなく、相當に保存が出來れば良いのであるから、技巧の爲めに無暗に金をかける必要はないと思ひます。

無用な裝飾は廢すること　一般の服裝もですが、殊に子供の洋服や帽子又は洋傘下駄等其他の雜貨などで無暗に裝飾を施して、それが全體の調和の上に利いて居れば良いが唯無暗に代金を高くするばかりで、高く賣ろうとして作つたのではないかと思はるゝ程、全體に調和の取れなくなつて見苦い者があります、之れ却つて金をかけて惡くしたので、斯樣な物は一切買はぬ事、又洋服など自分で作るにしても裝飾や形や配色の調和を取る爲めに至極必要な裝飾だけ施して他は必ず廢すべきであります。

小兒に適する菓子

一歲——衞生ボール。フイガビスケツト。花ボール。ウエフアース。衞生ビスケツト。磯部せんべい。トースト。リース。

二歲——カステラ。レーデイースフインガー。玉子せんべい。カルヤキビスケツト。春の友。ニレツトビスケツト。貲味ボール。アルロードビスケツト。

三歲——ミルクケーク。ビクトリヤサンドヰツチ。水飴。カルヤキ。松葉燒。君が代。バナヽ。栗羊羹。軍用パン。花カステラ。ちどり風船あられ。うずまき。洋製クラツカー。日本製クラツカー。クリームサンドヰツチ。マシマロ。チヨコレート。ビスケツト。翁飴。葡萄飴。

家庭副業を始める婦人の心得

家庭職業研究會 龜井孝

家庭の副業と云ふことに就いては、日本婦人――殊に一家の主婦は色々な方面から充分考へて見て頂きたい。勿論副業はよい事であるが、主婦の本職を捨てゝまで副業に從事すべきものではないことも考へたい。けれども時間といふものは整理の仕やうで餘暇は澤山出來るものである。昔と違ひ水はひねれば出る、火は扇がなくとも起る。ランプの掃除はしなくともよいといふ風に、家庭の用は少くなつてゐるにも拘らず、昔と同じやうに一日中臺所や着物の事にかゝつて居ては昔の人に對しても恥しい。勿論生活は昔に比べて複雜ではあるが、そこから生ずる貴い餘暇を自分の向上とか、研究とかに費すのも結構であるが、其の時間の一部を生産的に働くといふ事にも心掛けて貰ひたいと思ふ。それでは家事の餘暇僅かな時間に生産的に働くといふ事がどれ程の効果があるかと言へば、簡易な生活をして居る家庭、或は小人數の家庭では生活費の補助となる事は云ふまでもないが、一方にはまた金錢の價値を知ることが出來る。卽ち今まで十錢や二十錢の金を何とも思はなかつた人でも、自分が働いて十錢を得ればその十錢も却々使ふ氣になれない。その上、汗になつて一ケ月働いて得た總額から推しても、良人の働きに對する同情も出來るであらう。又自分が製作してこれで出來上つたと思つて持つて行つても、注文者から見れば色々缺點があつたりして、時には小言を云はれる。家人の前で、恥しい思ひもする、腹の立つ思ひもする。氣も挫けさうになる時もあつて、小さいながら苦しみを味ふ。その小さな苦痛から推して職業に働く者に對する理解が立つことにもなる。母親が少しでも暇があれば、副業にいそしんで居る有様は、子女の將來に對する活きた教へでもある。又製作に熱心な時は趣味がひとりでに湧いて精神が自ら統一される。又其の趣味の爲めに時間を得やうとする心から自然

家事を整理する良い習慣がつくことにもなる。これ等は皆五年前から私の會に働いて仕事に興味を持つてゐる會員達が感謝をしながら話しあつてゐることである。

西洋諸國では人間に內職までさせるのは虐待だといふので、排斥論も一部に起つて居るさうだが、それは主に掃出すことも出來ないやうな屋根裏の部屋に生活する人等が、工場工業を家庭の內職にしては衞生に害あるといふ點から出た論が主であつて、日本の內職はそれと性質が違ふ。それに又國情も違ふから衞生に害もなく、自分達の趣味の向上を計る一助となるやうなものを選ぶなら大いに奬勵してもよい。然も一旦働き出した人は、止める事が苦痛な位樂しんで働いて居るのである。假りに副業は排斥せねばならぬとしても、今日のやうに物價は騰る一方、一家の收入はそれにつれて增さず、常に生活に脅かされてゐる間は、主婦も共に生活戰の第一線に立たねばならぬ時であるから、社會施設の完全する迄はどうしても奬勵して行かねばならぬ事である。

家庭の副業でも、農村漁村の副業と都會地の副業とは又差がある。階級に依つても自ら差がある、普通に家庭內職といへば、數百種もあるがその中、中流向と思ふものばかりでも二三十種はある。例へば刺繡類（日本刺繡、ミシン刺繡、フランス刺繡、リボン刺繡、マーベル刺繡等）編物類（毛糸、レース、絹糸タツチング等）裁縫類（日本、ミシン、紐ぐけ等）佐賀錦織り、のし折り、封筒はり、砂糖や果物の袋はり、荷札はり、紙風船をつくること、つまみ細工、おし繪、絞り、パテン等がある。

東京婦人の內職と地方婦人の內職

私達の會ではよく地方市街地の婦人方から切に仕事を望まれるのであるが、今のところ地方へはお世話の出來ない狀態にゐる。なぜかと云へば、東京から地方へ仕事を出すには先づ重量のかゝらぬもの、容積を取らぬもの、一種類が長くつゞくもの、そして通信で習へるものをと云ふやうな難問題があるから、これは輸出でも回復されなければ不可能なことである。然も奬勵は東京人よりも地方人の方がし易いので、其の理由の一つは都會人には仕事の種類が餘り多いので氣が迷ひ易く、これに一日、あれにも二日といふ風に轉々として仕事が移り、何れも熟練の

域に達せぬ内にいやになることや、都會には娯樂機關が多くてつい心をそれに引かれること、交通便利の爲めに來客や外出も多く、一日落付いて居る時が少い、それに生活の程度が高く、少しの收入では役に立たぬなどの理由である。これ等が地方人であると、全部反對の現象を呈することになるから奬勵がし易いのである。しかし震災後の今日・東京と雖も最早奬勵ではなく直ちに實行に入つて居る。

仕事を求める前の注意

製造業者が、内職に出す品と云へば高等作品でなく、數物と云つても需要の多い品であつて、主に價の安い品である。從つて工賃が安いから多くの時間を費さねば相當の收入を得る事が六ケ敷い。收入が少なければ働く氣になれぬ。そこで先づ出來るだけの生活改善をして、時間を作ることをせねばならぬ。次にこの仕事をして見やうと思つたなら少くとも一週間位は決して迷はず續けなければいけない。或る人が内職の仲介をする所では、何れも日收一圓以上のやうな事を云ふが、自分の實驗に依ると三四ケ所を何れも二三日づゝ試みたが、日收十錢位よりならぬと申されたが、其の方が三四ケ所で實驗された日數を一ケ所で經驗してみたなら成る程と肯かれたであつたらう。熟練と云ふものは、恐ろしいものである。一個の工賃十五錢の帽子を初めて習ひだした時には、不出來なのをほどきながら作り上ると一日かゝる、次の日には二つ三つになり、一週間の後には八つも九つも編むことが出來る（勿論時間にも依るが）初日の時、一週間後には自分の腕が十倍の能率をあげ得るやうになると誰も思はないのであるが、しかし實際はなるのである。何等の資本を要せずに初日から十錢二十錢得られ、僅々一週間か十日の熟練で日收一圓になる仕事は隨分割のよい仕事である。何作間専門の教育を受け、或は年期を入れて、漸く一人前になつて勤める時、其の初給は二十圓とか三十圓とかいふ事は有勝ちの事である。一週間か十日の辛棒はせねばならない。

製作する時の注意

いよ〳〵仕事を初めた時には、常に自分は今は商品を作つて居るのだと云ふ氣持を忘れてはならぬ。自分用のものとか、只人にあげる品を作つて居る時と同じ考へでしてはいけない。自分の物なら少し下手に出來ても思つた寸

法より大きすぎても、小さく出來ても作り直す時間を思へば辛棒が出來る、又少し材料がかゝり過ぎても諦められる。出來上りの日が遲れても差支がないけれども、商品を作る場合はそれでは宜しくない。製造者の心になつて働かねばならぬ。製造者に氣に入らぬ者を作るのは卽ち自分の失業を來すので、直接小賣店へ納める品なら買手は大小樣々であるから、少し位の形の差はよいが、問屋へ納める品はさうはゆかぬ。一ダース入の箱にキンチと納まる寸法の物が出來なくては商賣が仕惡いのである。商人は何れも資本を早く回轉させねばならぬのに、一人の手に長く材料を止められては又困る。そして仲介する所の檢査役は忙しいから多い中には目こぼしがある、それを製作する個人が檢査役の手許さへ通過すればよいといふやうな氣で、不良を胡麻化して出し、誤まつて檢査を通過して商人の手に行けば、其の仲介所は製造者から不信用となり、仕事を出さなくなつて一人の不正行爲が全員の失業を招く原因になるから、共同の責任感念を持たねばならない、以上の事を心に置いて働き、尙且つ檢査役にも同情して頂きたい。皆さんが幾日もかゝつて數多く作つて持つて來られる品は、不良であつて、戾すことが實に辛いのである。戾せば働く方からはいやな顏をされる、通過させれば商店からは何の爲めの檢査役だと云はれるし、一尺の標準に對して五分長いものと五分短いのとを大目に見て通過させれば一寸不同の品が出來る。それ故仕事する時にはよく注意して敎師から聞いて行き、途中で不良と氣がついたら早速、作り直すことに心がけねばならぬ。

製作品が店頭に出るまで

私達はたま〱次のやうな不平を耳にする。それは商店に出て居るものは高い。材料費と工賃は半分位だのに餘り商人が儲けるから働くのがいやだ等といふが、それは商店に出る迄の順序を知らぬからです。其順序といふのは先づ一般の場合製造業者から全部引受けの所へ渡り、それから仲介者を經て、內職仲介所へ渡り、それから働き手に渡るのである。この仲介をはぶけば働く人に多くの勞銀を與へられるので、私共は其の爲めに今日迄務めて來て、漸く製造業から直接受けられるやうになつたのだが、製造業者は何故働き手に直接仕事を出せぬかといふに、其處に數人の敎師、事務員、敎室、事務室

が入用、外に色を取り合せて整理したり化粧したり（マークをつけるとか帯をかけるとか）箱に入れたりの世話がやける、材料費をねかす上に、敎員事務員の費用迄ねかす事は出來ない。又直接の請負者が直接數多い働き人に仕事を出すことは同じやうな理由で出來ない。それに家庭の人を働かすのだから土地の關係があるので一ヶ所では多く扱ひ難い處から又仲介者の手に渡るのである。

一方製品は逆に戻つて、更に再び製造業者から問屋、仲介商、小賣店となり、大規模の小賣店は問屋から直接とれる次第である。かうして少なくも四段多くは七段も八段も手を經るのであるから其の間の手數料によつて、原價の倍位になるのは當然の事になつて來る。そしてそれ等の機關は皆多賣る品でも春から活動してゐるので經費がかゝるし、金利がかゝるものだから相當の手數料は又止むを得ぬ事である。

ついでに私が會の將來に對する抱負を申せば、少し望みが大き過ぎるやうだが、働く人に充分の勞銀を得させ、又需要者に安い品を提供しやうとする爲に、どうしても前述の階段を減じてゆかうとすることである。働く人と直接の仲介所が、製造者から直接受けられるだけの力になりさへすれば、製造者も喜んで其の世話役即ち當今のやうな所へだすのである。今一歩進んでは會其のものが或る意味の製造業者をも兼ねて製品を直接問屋や或は小賣店へ出したなら、需要者は實に安い品を手に入れる事が出來、又働く人はよりよい日收を得られるのである。今日では相當熟練した者で一日八時間位の時間があれば日收一圓或はそれ以上になる。毎日續けて働けばそれでも一ヶ月三十圓になる譯だが、主婦は色々の故障により續けられないから十五圓位になる。若し私の希望する設備が整ひ日收をもつと上げる事が出來れば其の收入は十分生活の補助となり得るであらう。けれどもこれには先づ第一に大きな資本が入用だし、經營の力が伴はなくてはならぬ。其の經營の力が實に多年の經驗を要することで、その上製造業を兼ねると云ふ事は別な意味に於ても必要なことである。それは製造業者から仕事を出して貰つても色々な事情から短期の中に品が切れ、其の材料の切れた時働く人を休ませる事になつては奬勵上非常に損な事である。それが若し自分の方に其の間をつなぐだけの材料を用意して置いたなら大變都合が

よいのである。増して製造業者は年末には仕事を澤山出すが、其の時は家庭の人は各自に家の仕事に忙しい時だし、春になつて家庭の用が暇になつた時は、製造業の閑散な時期で仕事が澤山出ないといふ譯で、どうしても其の間の調節がうまくゆかない。此の場合にも仲介所に材料の用意さへあればそれを調節してゆかれるといふので、私の處では微力ながら、其のことに努めてゐる。そして出來上つた品は、バザーで賣るなどしてこの會をもつと有力なものにしたら多くの方々に働いて頂かれるのであつて、製造業者から直接に仕事を受け、一方資金を以て製造にかゝり、精練された流行品を世に送り出し、進んでは手藝に特徴ある日本婦人の作品を直接海外に送り出す程度にまで進めたいと願つてゐる。

左の御寄稿を願ひます

郷土手藝

郷土手藝と云ふ言葉は充分に意味を表はして居ません。あなたの村、あなたの國に行はれ傳へられて居る特殊な手工、例へば草の葉を編んで籠を作るとか、樹の果を綴つて玩具にするとか、その他木片を彫んで人形を作つても、材料と方法は何であるとも、それが家庭の副業となり、家庭の娯樂となるやうなものを歡迎します。之れは單に讀物としてゞはなく、一地方にのみ行はれて居る手藝を廣く全國に紹介したい爲めなのであります。

郷土料理

他國では捨てゝ顧ない樹の實や草の葉を、ある地方では珍味佳肴として貴びます。魚肉、野菜類でも地方々々の特殊な料理法では他に較ぶべくもない美味となる事もあります。他國に例のない思ひ切つて特殊な料理法を御知らせ願ひます。

投稿規定

右は二種とも、二十字詰の原稿紙で紙數は制限しません。なるべく一種類五枚以上に亘らぬやうお願ひします。宛名は女性改造家庭部。締切は一月十五日。掲載の分には相當の原稿料を差上げます。



お餅の美味しい食べ方二十種

中川浪子

雑煮

お餅は人間の氣勢を増し、腹中を温める効能があり、臓腑を保養するので保臓と名付けて足利時代から吉事に食用されました。又支那に於きましては、春餅と名づけて一千年前から行はれたと云ふ事で御座います。

いづれにしても雑煮は昔から行はれて來た事は事實ですが、どの仕方が正式だといふことは餘り傳へられてゐません。同じ内地であつても、地方〳〵に依り或は國々によつて其の材料も方法も一様ではない樣で御座います。例へて申せば東京は主に清汁仕立にしますが、關西の方はお味噌仕立にします。又同じ御味噌仕立の中でも甘味噌とか白味噌とかいつた樣なわけで、好みにより色々に工夫しますので、色んな珍らしい變つた雑煮が出來る譯です。それでこゝには種類と品すより實際に食べてみて美味かつた料理法を書いてみますから、試して御覧下さい。

雑煮餅

材料(五人前)

餅、鶏肉五十匁、大根四寸位、にんじん一寸、かまぼこ一寸位、三葉又は芹一把

すまし仕立

料理法。鶏肉は軟い身を求め、そのまゝ三四分位のころ〳〵切つて置きにますが、老人の方にはよくたゝいて煮切味淋を少々混ぜて丸め、拇指大位にして鍋の煮出汁とほんの少々の醤油とを煮立てそれで下煮をします。大根とにんじんは纖に切つて茹でて置きます。

かまぼこは短册形に切り三葉は洗つて一寸位に切て置き。切餅は炭火で燒き、ほんの暫く煮湯の中に入れて軟かにします。

別に美味い煮出汁を取り、右の材料をその中へ入れて煮立たせ餅をまぜて又少し熱くして椀盛りにします。

此の外材料にはこんにやく、燒豆腐、海老、たこ等好みによつて、お使ひになることは結構です。

鰤餅

材料(五人前)

餅、鰤四十匁、里芋十個、菠薐草一把、

すまし仕立

料理法。里芋を縦に薄く切つて軟らかに茹て置きます。鰤も薄く切つて茹で、菠薐草も茹て一寸位に切つておく。別に清汁を作り皆その中へ入れて一寸あたため、軟かに煮た餅を椀に盛つて、前のすましと鰤をのせて出します。

鮭の子餅

材料――生鮭の子半分、海苔一枚、みつ葉一把、切もち、すまし仕立

料理法。三葉を茹て、一寸位に切つておき、鮭の子を大根の端でこくやうにして、一つ一つ離してざるに入れ、熱湯の中へ一寸つけて色の變つたときにすぐに湯からあげて椀の底に少し入れて、其の上へ軟かに煮た餅をのせ、又其の上に少しかけて三葉を附合せ、すましを注ぎ、燒海苔を適宜に添へます。此の雜煮は新潟の方によく行はれるものですが、新潟地方ではこのほか鯣、鹽鮭等も用ゐてゐます。

味噌煮餅

材料――切餅、小かぶ五個、白味噌二十匁、赤みそ二十匁、鰹節三十匁、

料理法。白味噌と赤味噌を一處にしてよく摺り、煮出汁でゆるめ、鍋に漉し込んで味噌汁を作り、薄く輪切りにしたかぶを入れて軟かになる迄煮ます。銀杏は外皮を去り、ホーロクで煎つて薄皮を取り、湯煮にして花の様につぶします。鰹は薄く切つて茹で銀杏と共に汁に入れて、それが煮立ちましたら椀盛りにした軟い餅に盛合せて供します。

牛鍋餅

材料――切餅、ヒレ肉百匁、葱十本、白瀧二合、煮出汁、砂糖、醬油、

切餅を綺麗に燒いておき、別に牛鍋に脂を入れてとかし、肉をいためて少量の水と、砂糖醬油にて適宜の味をつけ、斜に切つた葱(雄らち)と白瀧を一寸位に切つたのを入れて煮ます。それから中へ前の餅を入れて煮るのです。好みによつて胡椒等を入れてもよろしう御座います。

蓑餅

材料――切餅、かつをぶし、だし醬油、

料理法。切もちが軟かになる迄湯煮し、鍋に入れて薄い醬油で又煮て味をつけ、それを器に盛つた上へ薄く削つた鰹節をかけて出します。好みによつては砂糖をかけても結構です。

此の外不意の來客がありました時や、急ぎの場合、即ち即席雜煮の必要な事も御座いますが、そんな時には鰹節を薄く卸して、椀に盛り、それに醬油をつぎ、煮湯をさして軟かい餅を入れ、海苔もみをかけたり、時にはとろ昆布を用ひたりしても、さつぱりして結構です。

おしる粉

甘黨方への御馳走としては、先おしる粉でせうが、いつも〳〵おなじ仕立では面白味がありませんが、之も雜煮と同じやうに工夫さへすれば色々上品な趣味のある美味しいものが澤山出來ます。それでおしるこの土臺になる小豆と餡の拵へ方とから申しませう。

普通赤小豆の煮方と餡の拵へ方

赤小豆を清水で洗ひ、釜に入れて水を充分に加へて火にかけます。煮立つたら水を少し加へて皺をのばし、又煮立つた時に小豆汁共に笊に汲み出して澁汁を去り、再び釜に入れて軟かになる迄煮ます。

若し此の時小倉、金時、大納言等の場合でしたら水を入れて一度煮立つたら火力を弱

くして氣長に注意し、豆の裂けない様にいたします。漉粉にする時には小豆が煮崩れる先に煮まして、火を止めてから稍々むらして桶に汲み出し、清水を加へて少し冷し、其の暖いうちに他の桶で目の細かい笊の中に掬ひ入れて摺木で摺りながら水をかけ、小豆の皮を取り去るのです。それから又別桶に細かい毛篩を當て漉し、しばらく沈澱させてから、上水を流し、清水を加へて洒すこと僅二三回、あくがすつかり流し出してから木綿袋に入れて袋口をねじ、しぼつて水分を去ります。此の漉粉六百匁と粗目糖三百匁と合せて充分に練れば餡が出來るのです。寒い季節になりますと一週間位は充分に保存する事が出來ますから、來客等がありました時にも即席で、おしる粉の御馳走が出來ます。白あんの拵へ方も之と同じで。原料には白小豆、鶉、白いんげん等を用ゐます。

白あん汁粉

材料―白餡百匁、水、砂糖、レモン、切餅

料理法。白あんを水で薄め、甘味の少ない時は砂糖を入れ、煮焼きした切餅を入れて一寸煮て出します。中へレモンを一二滴加へますと大變に味が引立ちます。

挽茶しるこ

材料―白あん百匁、挽茶大匙二、水、砂糖、切餅

料理法。之は一名常盤じる粉とも申します。白あんを水で薄め味加減を見てから餅の焼いたのを入れ、そこへ湯でよくとかしておいた挽茶をまぜて、すぐ鍋をおろして供します。

栗あんじるこ

栗餡じるこは一寸變つてゐて珍らしいものです。白あんを用ゐて、普通のしるこより少し薄目に作り、其中へ栗を柔かに茹で、裏漉で漉したものを入れよく交ぜ合せ、そこで普通の濃さに致します。椀に拍子木形の求肥二つと、もろこしを拇指程に丸めたものを三つ程入れて上からあん汁を注ぎ入れます。栗の代りに薩摩芋の裏漉した物を代用にしますと安くてそれに似た物が出來上ります。

小倉汁粉

材料―並あん百匁、小豆五勺、水、砂糖、切餅

料理法。並あんを水でゆるめ砂糖の加減を見て、小豆のふつくらと皮の破れぬ様に煮たものを入れて、煮たて、焼いた餅を入れて椀盛りにします。同じ仕方でつぶしあんにしますと、田舎しるこになります。

甘酒もち

材料―甘酒三合、水二合、砂糖二十匁、鹽、生姜、切餅

甘酒をゆるめ、砂糖と鹽とおろし生姜とを交ぜて火にかけ、よく煮立つた時に切餅の焼いたのを入れて、熱くなつたときすゝめます。

落花生しる粉

落花生を炒つて、莢殻、澁皮を去り、細かに突き砕き、擂鉢に入れて能くすり、水を適量に加へて砂糖と食鹽少量とで味をつけます。餅は焼いて用ゐましても、中に入れて煮て用ゐましても結構です。

其他お餅を美味しく頂く工夫は色々ありま

すが、珍らしくて風味のあるものをもう少し話してみませう。

粕餅

材料——切餅、酒粕、醤油

料理法。切餅を酒の粕に漬けておき、二三日過ぎて金網で焼き、醤油をつけて皿盛りに出します。好みによつては砂糖醤油でもよろしいと思ひます。

山椒もち

材料——白味噌三十匁、山椒少々、砂糖五匁、切餅

料理法。切餅を焼き、山椒をよくすり、白味噌を加へて砂糖に味をつけ、それを餅にぬつて供します。

柚子もち

材料——醤油、砂糖、柚子少々、切餅

料理法。醤油、砂糖、おろし柚子を混ぜ、それを焼いた餅につけ、再び焼いて皿に盛ります。

海苔もち

材料——醤油、海苔、切もち

料理法。切もちをよく焼いて、それに醤油を一度つけ又焼いて、よく火に焙た海苔と餅と同じ巾に切つて一巻きして盛ります。

からみ餅

材料——大根五寸位、醤油、切もち

料理法。大根は皮をむき、おろしてかるくしぼり、醤油で味をつけておく、別に切餅を軟らかに湯煮し、水氣をよく去つておろしの中に入れ、混ぜて供します。

納豆もち

材料——納豆一苞、醤油、切もち

料理法。納豆をよくかきまぜ、糸を出し、醤油で味をつけおき、別に切餅を軟らかになる迄湯煮し、前の納豆に入れてよくつけましてすゝめます。

鱈の子餅

材料——鱈の子三つ、味醂二勺、醤油三勺、砂糖三匁

料理法。鱈の子を縦に二つに切つて中から子を出し包んだ皮を去つて鍋に入れ、味醂、砂糖にて味をつけ、ぱら〳〵になる迄煎ります。別に切餅を軟らかになる迄湯煮し、水氣を去つて前の鱈の子をまぶし、皿盛りにして供します。

くるみ餅

材料——くるみ一合、砂糖三十匁、水少々、鹽

料理法。くるみを熱湯に入れてすぐにあげ、皮をむき、擂鉢に入れてよく〳〵すり、砂糖と鹽を加へて湯を少し入れてどろりとし、焼きたる餅を熱湯に入れて軟らかにして水氣を去り、くるみをつけて器に盛ります。

鯛のうり煮と餅

材料——鯛二百匁、松茸五匁、蜜柑小三個、豆腐一丁、菠薐草一把、醤油、餅、昆布

料理法。先づ鯛を骨付のまゝ薄く切り、次に松茸は鹽水でよく洗ひ薄く切つて置き、豆腐を小賽に切り、蜜柑は輪切りにして露をしぼつておきます。そして小さい鍋に水を入れて中へ昆布をまぜてわかし、右の材料を入れてよく煮るのです。そしてよく煮えたつた時分に別の丼に蜜柑の汁と薄口醤油とを等分に合せておきます。餅は軟かになる迄湯煮して、前の材料と一緒にして餅をかけていたゞきますので、これは全くの珍料理としておすゝめしたいと思ひます。



家庭にも出來る苺の促成栽培法

坂野房子

人々がまだ寒い寒いと云つて居る二月の上旬頃から四月上旬に掛けて、滴るやうな紅い色澤を出して所々の果物屋の店頭を彩り、頻りに私共の食慾を唆る早熟の苺はどうして出來るものでせうか。一家の消費經濟を取扱ふ者も取扱はぬ者も、如何してこのやうな早熟の苺が得るれるものであるか、又どうして斯く高價に賣捌かれなければならないかと云ふやうなことを一通り知つておきますと、その他の蔬菜栽培の參考にもなると思ひますから、これから苺の早熟栽培の大體を書いてみます。もと苺の早熟栽培といふのは靜岡縣の三保で、牆壁栽培といふのを始めたのがもとで、それから色々に改良されて今のやうな早熟栽培(石垣栽培)が行はれるやうになつたのです。三保の牆壁栽培といふのは、巾六尺、高さ三尺の牆壁を造り、其の斜面に苺を栽培したので、これは全く人工なしに自然の温度を利用したのです。この方法はたとひ冬であつても、西北の冷風を防ぐ地形を有してゐる、南西の地に、最も適當します。從つて其の栽培地域は東京より以西で、海岸に近い而も北部の風を防止するやうな山麓で、靜岡縣の三保とか、久能とか、兵庫縣の峰尾等にはこの栽培法が非常な發達を見るやうになりました。

私がこゝで一般的におすゝめしたいと思ふのは石垣栽培の方で、これの起りは、三保の牆壁栽培を久能で行つた際、斜面の敷煉瓦の代用として、石を用ゐて、栽培した所が、次の年苺の走り蔓が石垣の中に繁殖し、而もこれが他の煉瓦を用ゐた所よりも餘程成熟が早かつたので、それから石垣を利用するやうになつて、山の裾等の南國の暖かい傾斜面に栽培されるやうになりました。これが今日園藝家の間に偶然と言はれて居るものの起りです。

石垣栽培の造り方

石垣栽培は毎年五月になれば石垣を取り壞して苺を拔き取り、直に他の畑地に移殖して母苗とし、それから出る走り蔓に次の年花をもたせ、實を結ばせるのであります。即ち五月に畑地に移殖した苺の母苗からは、夏中に澤山の走り蔓が出る、それを秋の彼岸頃になつた頃丈夫に發育したものゝみ撰んで前記栽培した傾斜面に坪八十本位の割合に植ゑつけて、其の上に敷石をするのです。併し、此の石垣栽培が石垣の如く敷石をする事には非常に手數がかゝり其の上大石のみを撰ぶと云ふ事はかなりの大仕事ですし、一方には大石を用ゐる爲に乾燥に失したり、種々

な困難を伴ふので、最近では石垣の代用に小石を敷いた斜面栽培が一般に行はれるやうになつてゐます。此の栽培には斜面六尺以内、傾斜度は四十五度を有する盛土を造るので、それに使用せられる用土は荒め土一坪に對し、堆肥五貫匁、油粕及び木灰一升の割合に混合した土を用意し、九月中旬から十月中旬頃迄の豫定で斜面を造つて、それに新しい苺苗を採る。大體六寸五分位のぐの目植にして坪百本位植ゑるのです。

かうしますと、斜面の土の流れる心配も少く、更に其の表面に小石を敷く時は殆ど土の流出を防ぎ、他方には晝間の石の暖味で苺も多く暖められることになり、大いに利益となる譯であります。而し此の敷石をすると云ふ事は以上のやうな長所もあるが、又同時に非常な短所もありますので、太陽の直射熱の烈しい時、即ちよく晴れた日の晝はそれ自身太陽熱の爲めによく暖められて充分の熱を保持することが出來ますが、反對に天候の悪い日や、非常に寒い夜分等は敷石のない所以上に冷却されるのです。それが爲めに晝間は可成り温暖であつても夜間の寒さが甚しい時は、晝夜の温度の差が著しいので苺に非常な害を及ぼします。それですから收穫を早く仕やうとするには寒さの強い日や夜間等には斜面上に被ひ物をしてやり、更に早熟を望む時は油障子を用ひ、夜間には其の上に又菰を被してやることです。此の被覆物といふのは極めて簡單で、只斜面床上々部に一尺位の高さに一本の竹を長く横に渡し、それに斜面に添つて何本かの長さだけの竹を前の横竹に丁字形になるやうに適宜の間隔で結びつけて、菰障子が苺に觸れないやうに、菰の一端を結び付けておき、晝は下から上に卷き揚げ、苺に太陽を充分當て、夕方や日沒前には再び菰を下すやうにします。

灌水に就いて

冬には灌水の事ですが、生長盛りの時には必ず一日一回の灌水を行ふこと、、それが三月にもなると陽光も強くなり、其の上敷石のある爲めに斜面上の暖かみは他の部分よりも非常に強いので乾燥も甚だしいのですから、雨上りの跡でない以上は、一日二回の灌水を行はなければなりません。又灌水の時間或は其の方法等も何でもないことのやうですが、少しづゝの不注意が恐ろしいのですから注意が必要です。それで灌水を行ふ時には必ずジョーロで斜面の上部から下部の方へ向つて撒水し、其の分量も上部には多く給水し、下部は上部より流れ來る水分でかなり潤されるからずつと控目にやる方がよいのです。又灌水の時間も一日の内何時でもよいと云ふ譯にはいきません。これから暖かくならうと云ふ午前の十時頃に灌水を行ふのが最も適當です。それは一寸考へて見ると誰でも判断の出來る事で、夏のやうに晝夜高温を示す時には却つて夕方灌水を行ふ方がよい事もあるが、苺は栽植場所に定植してからは段々寒さに向ふのみで、殊に十一、十二、一、二月と云ふ苺の早熟栽培を行はれる時節は、夜間は

可成りの寒さを感じるのですから、何の注意もなく午後等に灌水を仕やうものなら、切角の灌水も何の効もなく却つて土地が凍りで凍つたりして大切な根を損ずることがありますから、灌水は必ず一日の内これから暖かくならうとする午前の十時頃にやることです。それから三月頃になつて、一日二回の灌水を行ふやうになつてくると、陽光もかなり強くなり、從つて一日一回の灌水では乾燥に失するため、苺の發育が不良になりますから、その頃は午前十時頃に一回と午後は乾いた程度に依つて一時を中心に其の前後に灌水すればよろしいのです。

定植後の肥料について

肥料は如何なるものを施したらよいかと云ふと、元々遲効性肥料が可成り充分に原肥として定植の際、土に混合して置いたから再び原肥と同様の固形物を入れる必要はありません。その代り一ケ月に約一回の割合で百匁の硫酸アムモニヤに對し、水一斗と云ふ割合に溶したものを灌水時と同様上方から下方に撒水するのです。然しこの肥料を施した後には必ず常時の灌水用々水で葉の表面に附着した肥料分を充分洗ひ落さなければなりません。

元來この硫酸アムモニヤは可成り強い所の化學肥料で、溶された肥料の内のアムモニヤの中の分が、或る形に變つて根より吸收されるので、殘りの物は土中に入つて豫て土中に含まれて居る鹽類のものと作用して、作物は直接害のないものと變つて行くのですが、葉の上へ硫酸アムモニヤがかゝつては、大切な同化作用はなくなり傷まれますから、硫アンを施した後には丁寧に灌水して葉面にかゝつた肥料分は是非洗ひ落す事が肝要です。又追肥には速効性のものがよいと云つて此の際に屎尿は絶對に施用してはならないので、その理由は説明する迄もありません。

苺の促成には如何なる品種が栽培されるか

最後に苺の早熟栽培には如何なる品種が一般に適當なものとして當業者間に栽培されてゐるかと云へば、概して草の強健な中早熟の收穫の點、又永續性のものが撰出され、栽培されるので今日でもビクトリヤ及びクラークスシードリングの二種が多く栽培されてゐるやうです。クラークスシードリングの方は米國が生産地で、形は短い圓錐状で粒は極大であり、色は濃赤色です。品質は極上品草の性質も強健な方で、最も有望品種とされて居ります。

ビクトリヤは歐洲が生産地で形は稍圓形で粒はクラークスシードリング程大粒ではありませんが、或は歐洲の本場で栽培したらクラークスシードリング程の大きさになるのかも知れません。現在の日本物では大して大粒と云ふ事が出來ないやうです。色は鮮紅色で品質は中、熟期は前者同様、中熟收量は中々多くて收穫期も長いのです。肉質は柔軟でこれも有望品種とされて居ります。併し此の方は肉質が柔軟な丈けに前のクラークスシードリングに比して、輸送し何時までも店頭に置く品物としては少々前者に劣りはしない

かと考へます。未だ生産の少い時期に一箱三十鉢足らず小箱に入れて賣物とするには矢張り大粒のものが見榮えがあるから、先づ早熟物としてはクナータス　シードランダが適品であらうと思ひます。

以上述べたやうな栽培法で二月上旬から、そろ／＼市場に出るのですが、十一月、十二月、一月は培定殖時期です。暖い土地に住む方々は娯樂的にも營利的にもやさしみのある女にふさはしい仕事ですから是非一度でも試作なさることをお奬めします。少々寒い所であつても、娯樂的のものとして一家が召上る位なら、栽培面積も澤山取れませんし、適當な設備さへすれば充分栽培が出來るのですから試して御覽になつたらいゝと思ひます。其他促成物として一月中旬頃から收穫する温室及びフレームの栽培もありますが之に又あとの話にします。

チユーリツプの温浴咲

チユーリツプ、ヒヤシンス、アネモネ、リリース、フリージア、アマリンスなど球根から双葉を出して花を咲かせる草木には、みな温浴咲きを試みることが出來ますが、その中で一番效果のあらはれ易いのは、チユーリツプです。双葉の出たチユーリツプの鉢を、鉢ごと他の器にいれて、それを上から綿で吊すか棒を渡すかして器の底を熱い湯（温湯でもいい）に浸しておき、日中陽の當る時などは戸外へ出しておくやうにしますと、三四日の中に美事な花を開きます。風呂の湯をわかしたあとなどに浸しておけば、何でもなく出來ることで家中に春の花を樂しむことが出來ます。ついでに球根の培養法を申しますと、球根は肥料のある土に植ゑつけて、時々[illegible]肥料（あぶら粕を水でうすくとかしたもの）を與へて泥をぬらしておきさへすれば双葉が出てくるのです。双葉が出た頃はもう肥料を與へる必要がありません。

切花を貯へる新奇法

切花を貯へるには花の未だ滿開しないものを取り、別にアラビヤゴムを水に溶解して、莖を約三寸ほどの部分まで十分間程浸しておき、それを取つて乾かせばよろしいさうです。

鉢植の松を培養する方法

松の盆栽ほど素人に持ちにくいものはありませんが、これを次のやうな栽培法によると、容易すく成長するばかりでなく美しい光澤が葉に出ます。それは毎年十月頃に鉢から掘起して根を扱つて、舊土を去り、屋根板などのほど經て朽ちたるものをえらんでこれを揉み粉にし、それに砂と黒壚土を混合して植込むのですが、この時、根の周りを二三寸根瀬つて、腰を二三寸折入れるのが秘訣です。かうして植込んだ後には、毎日一度づゝ、灌水して、日光のあまり強く當らぬやう注意をし、一方北方の烈しくあたらぬやう注意をしなければなりません。

『文藝論』連載

人と書と

芥川龍之介

二月號より芥川氏の一大心血を瀝げる文藝論「人と書と」を連載します。芥川氏が我文壇の第一人者であることは誰でも認めてゐる所です。そして氏の藝術論が特絶の名香を有することも否み得ない所です。氏は本題の下に作家と作品を通して見た文藝論を、毎月執筆して下さることになりましたことは本誌の光榮とする所であります。

女性改造



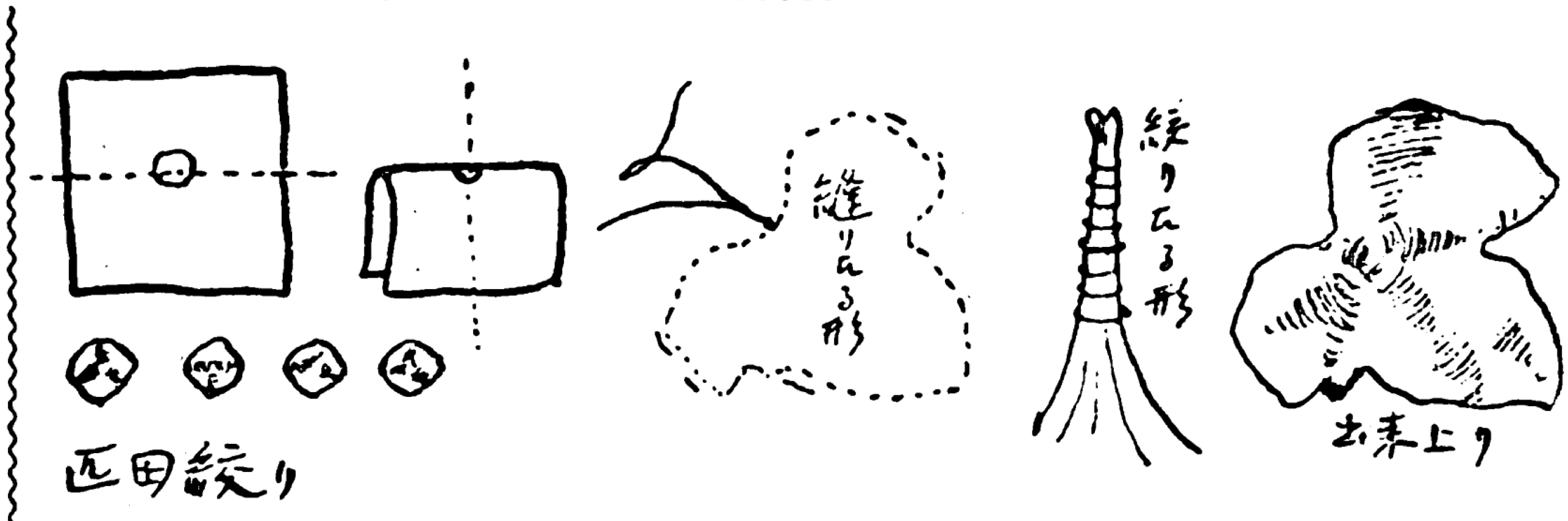
實用と趣味を兼ねた廢物利用の染色法

上坂りう子

震災前には衣類の整理を夫々專門とする職業の人々に依頼するところが多いやうでしたが、震災後の今日では、これらの家も多く失はれましたし、勢ひ家庭内ですべてを行はねばならぬ様になりました。この際にのぞんで衣類の整理に直接當つてゐる婦人は當然いろ／＼の工夫を要します。殊に不要になつた衣類、例へば褪色した袴地とか流行後れになつた帯地其他いろんな地質の小切れ類などを利用して、單に之をおなぐさみ的なものでなく、もつと實際的なものにして人にも與へ、自分も使用するといふ事は時期に應じて必要な事だと存じます。

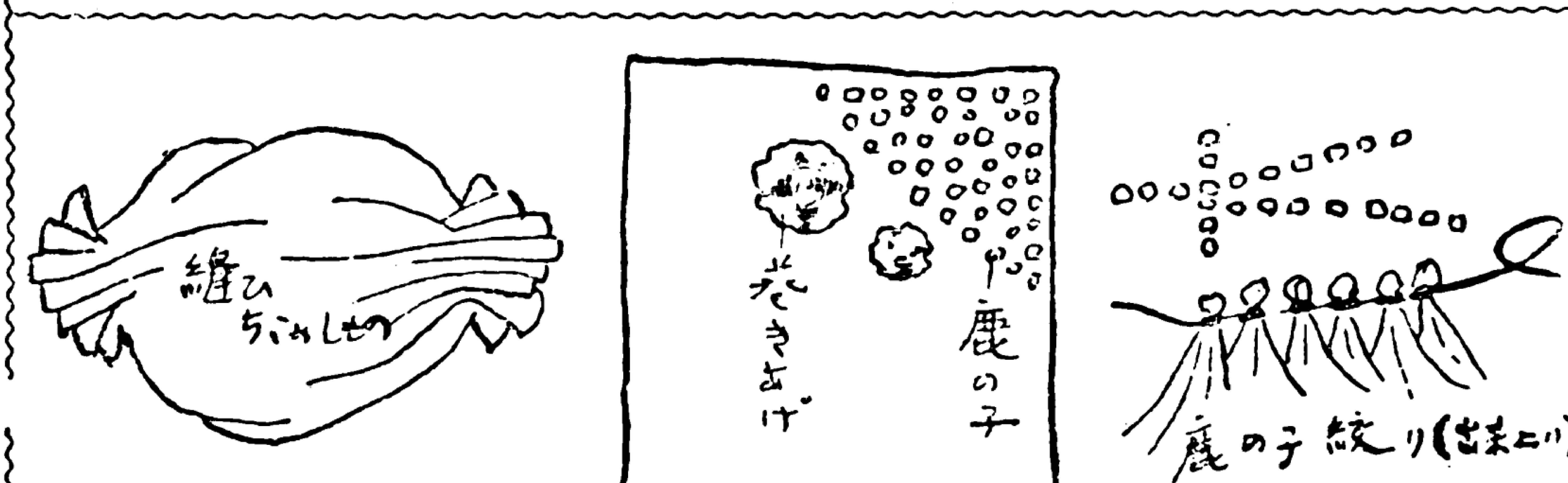
一、染色方法

絞り染　最初に圖案を工夫するのですがこれは夫々自分の好みに應じて考へます。それから青花を筆に含ませて布地に圖案を畫き、それを圖のやうに卷き上げ、絞り鹿の子、絞り縫ひ絞り、疋田絞りなど好みによつて隨意に之を絞ります。絞り終へましたら布地が充分に浸る位の温湯にしばらく浸し、中へ少し許りのアンモニヤ液を加へて十分許り煮ます。この工程は染色の際に平等に染料を吸收せしめる爲めと、今一つは布地について居る青花の色素と汚れを取る爲めです、次ぎに別の器に好美の色の酸性染料をその濃度に應じて五分から一匁、又は二匁内外を溶かしておきます。その外に助劑として硫酸ナトリウムと硫酸とを用意しておき、一方に瀬戸引き鍋又は洗面器に布地がゆつくり浸る位の水を入れ、之を火にかけて熱を加へ、更に染料と助劑を加へて、液が煮立つまで温度を昇らせます。一方には布地をアンモニヤ液から上げて、よく水洗ひをしたものを擴げて入れ煮沸します、三十分位煮てから引き出し、そのまゝ漸次に冷して水洗ひをし、よく乾かしてから絞りを解きます。



○●注意　絞りは半乾きの時解きますと絞つたところが擴がつて絞りとしての趣味を失ひますからよく乾いてから解く事と、絞り染の時はあまり長く煮ない事が大切です。之はあまり長く煮ると染料液が絞りの中に浸入する恐れがありますからで、液が煮立つてから布地を入れます。尚染料液の吸取がをそい時は布地を一度引き上げておいてから硫酸を加へます。

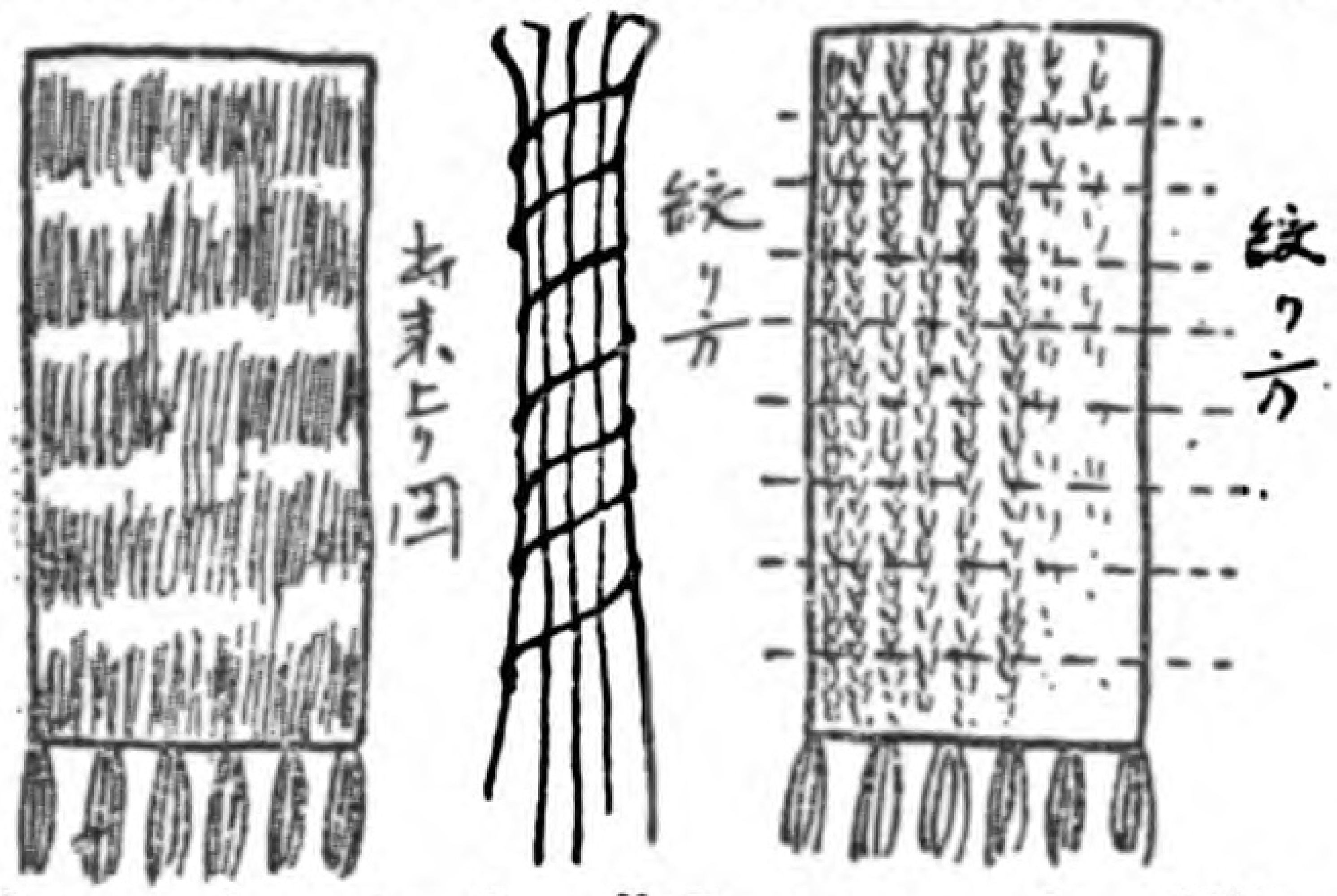
　この絞り染を應用して白の毛糸や色糸で編んだ古い肩掛や帽子をそのまゝ解かないで、つかみ洗ひをし、よく汚れをとり、水洗ひをしてから乾かし、次ぎに次頁の上圖に示した樣に肩掛を横に、縫ひ絞りを致します。それから配色を適當に考へ、幾度も異つた液で染め



てからよく水洗ひをしてかはかし、絞りを解くのです。更に之を湯のしにかけて、布巾を直し光澤を出して仕上げをします。それを次頁の下圖の如く裁つて、ジヤケツトに作ると面白い廢物利用が出來ます。この方法で、帽子等にも應用出來ます。

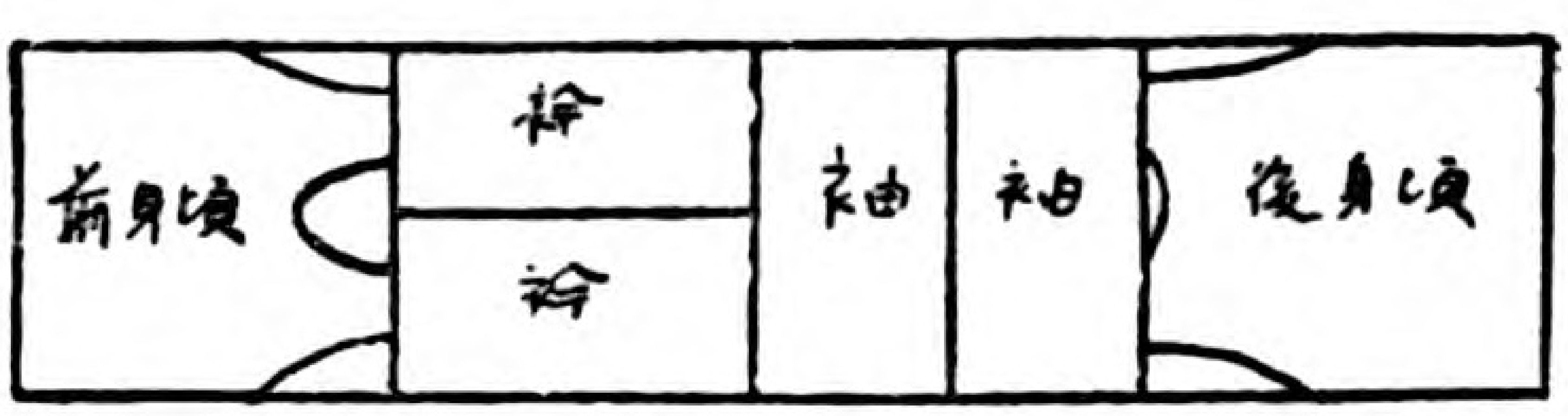
注意としては毛織物洗濯の時は、決して強く揉まないことです。之は表面の毛羽がもむ事によつて互にもつれ合つて非常に巾を縮ませる恐れがあります。又仕上げとしては、湯のし仕上が最もよいと思ひます。之は少し大きな御飯蒸しがあれば充分出來ます。蒸せば伏せた毛羽が起ち、光澤が出て來ます。又毛糸を解いて編みかへる時など、

にこの仕上にすれば、編みくせが取れますし、毛織物染色の時は温度が高くないとよく染料を吸收しません。次ぎに古い袴などを解いて、そのまゝ無地染をする時は袴一着分に對して酸性染料五匁之は濃度によつて適宜加減すればいい。硫酸ソーダ十匁から二十匁、硫酸一匁から四匁位を溶かした染料液の中に、汚れを取つた袴を入れ、次第々々に温度を加



へて、煮立つてから更に一時間位煮て、自分の望む色になつたら引きあげて水洗ひをし、半乾きの時に鏝あてをして、次頁上圖の如く裁つと、スカート又はドレス等に作れます。次頁第一圖の帽子は絞り染をしたメリンス風呂敷一枚分で、夏の麥稈帽子に被せて作つたものです。ジヤケツは古い肩掛、スカートは古い袴地を染め返して袋はビロードの衿の古いのに小切で糊流し染めにしておき、一寸はす切れに使つたものです。

尙第二圖の寫眞は古い縮緬の羽織を染め返して洋服に作り直したものです。そして背景の衝立も木綿の切れ地を利用して描き染を施した素人づくりの廢物利用です。



羽織で作つた縮緬の洋服の染め方は、最初布地を染める材料として、鹽基性染料をテースプンに輕く三杯（色は濃い海老茶）醋酸を同じスプンに一杯、冷水五升許り、まづ染料を別器に溶かしておきます。之を冷水五升許りの中に少しづゝ加へて、その中に布地を入れ、染料を吸取らせます。之を引きあげて更に染料を加へて、布地を入れ、四五回に染料を分けて吸取らせます。この鹽基性染料は他の染料に比べると非常に吸取が早い爲めに、一度に之を行ひますと染斑が出來る恐れがありますから、面倒でもこの工程を經なければなりません。次ぎに全部の染料が加へ終りましたら更に布地を染料液の中に入れ、之を火にかけて次第に温度を高め、攝氏六十度位の温度でしばらく煮こみます。望みの色合になりましたら引きあげて水洗ひをし、乾してから之れを湯の

し仕上げてよく布の巾や長さを充分に伸して、圖の樣に裁ちます。

後	前	バンドウ
		仝
		仝
		仝

仕立て方は初めに身頃二枚を脊縫ひにし、次に衿を横に二分して之を縦に襞を作り、凡そ巾四寸位にし、衿下り二寸五分位にして圖の樣に縫ひ合せます。袖は同じ布でもよろしいのですが、之は別切れか又は圖の樣にレースを別につけても珍らしいものが出來ます。子供物も同樣で、その巾や長さを子供仕立に準ずれば可愛らしいものが出來ます。尚ジヤケツの仕立て方は初めに身丈を其の子供の大きさに準じて裁ち、他の寸法も之に從つて裁ちます。この時身丈が短い時は端について居る房などを其のまゝ利用しますと一層面白味があります。衿のところは眞中で接ぎ合せ、裁ち目には袖つけの所から裁つたものを圖の樣に接ぎ合せて、衿と袖を寫眞のやうにつけるのです。



（第一圖）

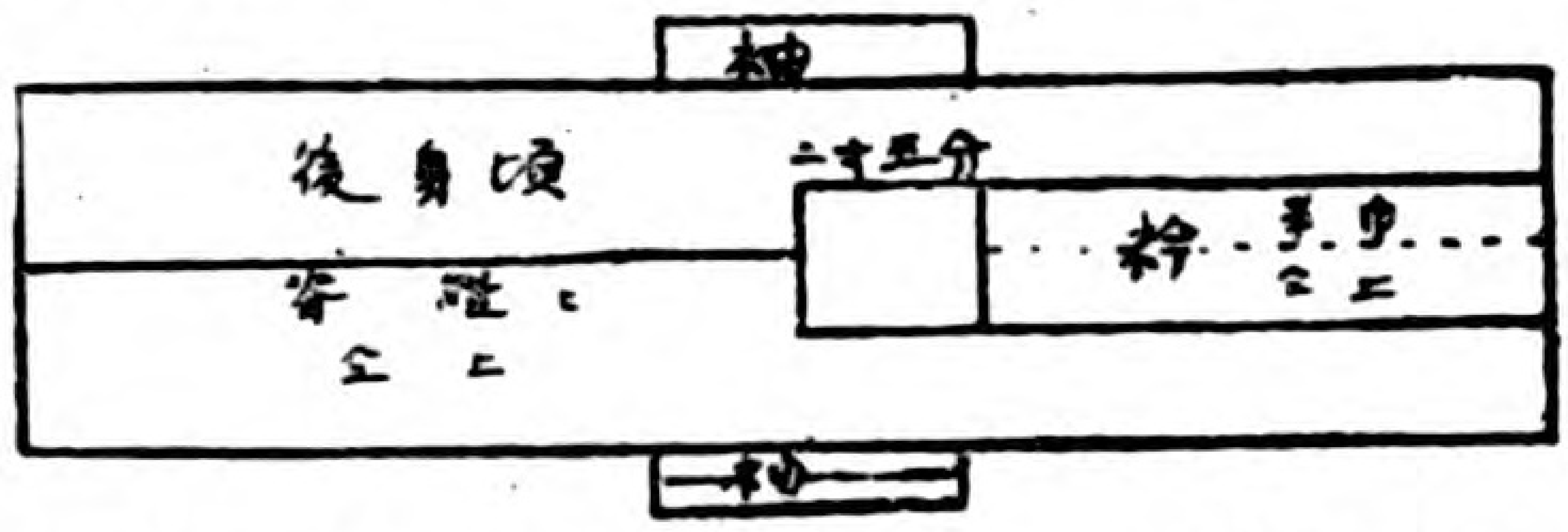
一、袋類の染め方

初めに糊を造つておきます。この糊は生麩糊米粉布海苔、メリケン粉色々ですがこの中のどれを用ゐてもよろしいから、まづ糊の粉一合許りをよく水に溶いておきます。一方には鍋に湯を二三合許り沸かしておいてこの中に溶いておいた糊を少しづゝ加へてよくかきまはしながら、塊のない樣にどろりとなるまで煮ます。之をブリキで造つた流し箱の樣なもの又はとたん板一尺五寸四角形位のものゝ上に流し、その上から好みの色の染料を二色又は三色位別々に溶いておき、この色で所々に一二滴づゝ滴らして、更にそれを箸の樣なもので思ふまゝにかきまはします。この時種々の色糊が互に入り亂れて圖にある樣な模樣を表しますこの時に皺をよく伸しておいた布地を靜かにその上に押し當てる樣にして置き、ブ



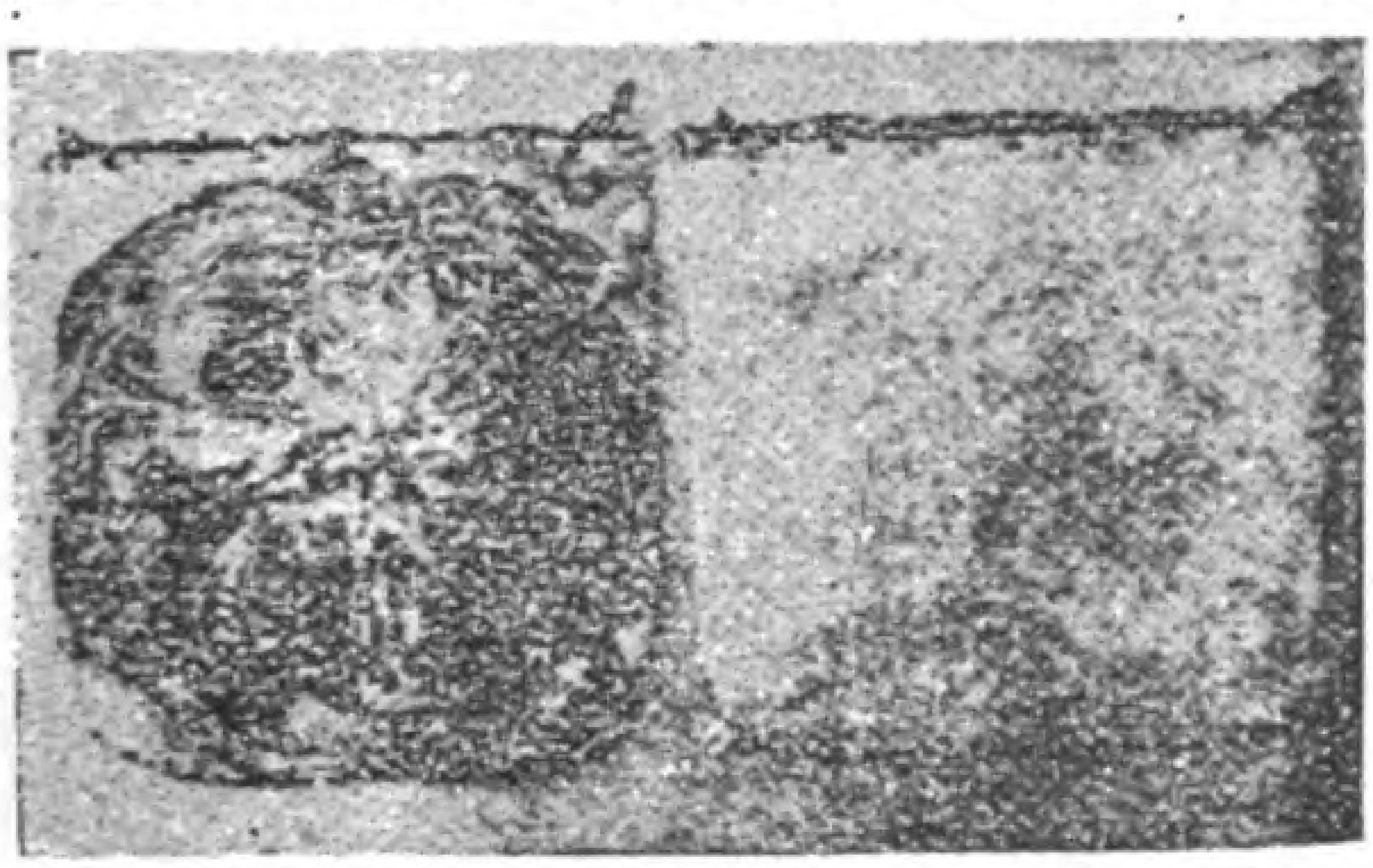
（第二圖）

リキ板と共に煮立つた湯の上に（鍋又は釜の中で湯を煮立ておく。）のせて十分から二十分間位蒸して、布を糊から外してすぐに水洗ひをし、糊を布の面から取ります。　又この時に草花などの模樣をこの中に造らうと思ひましたら、始めに原紙を種々の形に切り抜いておいて、之を適宜の位置に散らしておいてから、糊流し染を行ひますと、又面白い模樣が出來上ります。　之は袋の外に帽子の飾りやネクタイ、テーブルクロースなどに應用して面白いと思ひます。　次に袋の(2)に示してあるのは今一層手輕に出來ます。　材料は菜種油又はテレビン油、ごま油など種類はどれを用ゐてもよろしいから、まづこの油を盃一杯位と、その外に染料少々（之は直接酸性鹽基のどれを用ゐてもよろしい）を用意します。　分量はその濃度にもよりますが、大低半匁位（テースプン一杯）之を最初湯一升許り、洗面器に入れて煮立せてある中に少しづゝ加へてよく攪拌し、更にこの中に油を落して、之を箸の樣なものでかきまはすと、液



面に波紋形又は細かい粒形の模樣を浮かしますから、この時靜かに布をその上から押しあてる樣にして、そのまゝ暫く置きますと、油の部分だけは染料をはぢいて白くあがり、他の部分は染料を吸收して地色になります。　充分に布が染料を吸收した時、靜かに液面から引き上げて、之を揮發油で布面の油をふきとります。

尚この外に布地の上に布海苔をその形のまゝあてゝ、更にその上から好みの染料液を霧吹きに入れて、霧吹きしてから布海苔をとり、蒸して水洗ひして乾かします。



(1)　(2)

上圖右の袋は油流し染めであります。　左は糊流し染めで、どちらも布地は羽二重の半衿の古物を利用しましたが、尚この方法でいろ〳〵の地質の端切れ類で試みましたものをふくさ、帶じめ、煙草入れ羽織の裏地などに作りますと、可成り氣の利いた物になります。

一、テーブルカケ、衝立・クッションの染方





（テーブルかけ）

上圖の右は布地は麻の端切れを用ゐて之を半晒しにし、描き染を行ひ、テーブル掛に利用したものです。

上圖の左はやはり麻地の端切れで作つたテーブル掛です。

染め方は右と同様ですが、之は配色の上に一種の滋味を持たせる爲に布地を晒さずに生地其のまゝを用ゐたものです。

左の圖もやはり前同様に描き染を施したものですが、布地は羽二重の端切れを用ゐたものです。これはクッション、ふくさなどにつゝれますが、額の中に入れて室内の装飾に用ゐても面白いものです。用布の地質の相異によつて同じ染め方でも自ら變化が出來てきます。衝立の染め方も之と同様で、布地は木綿地を用ゐたものです。

次に染め方を説明します。

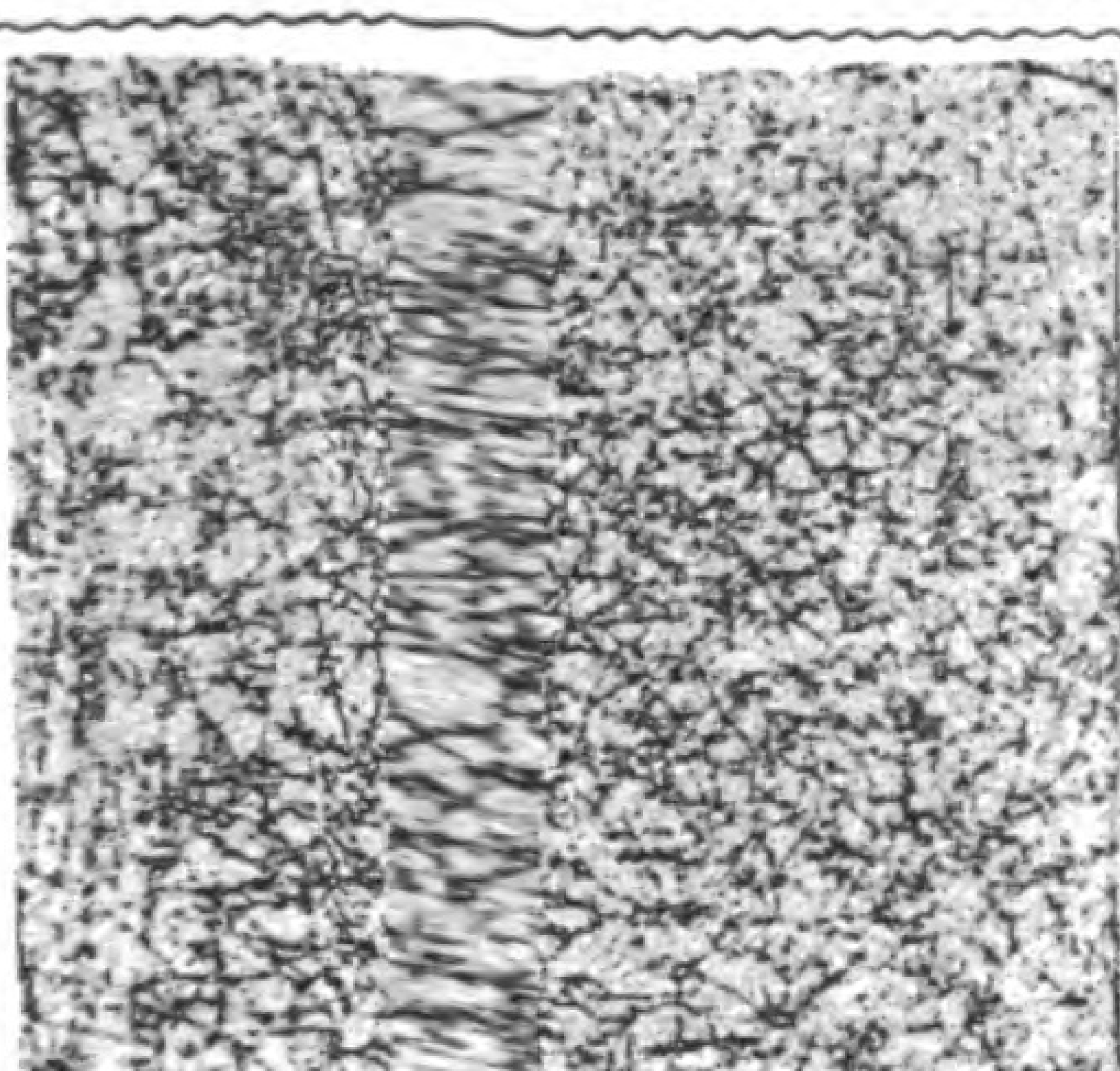
テーブルクロース及び衝立は何れも地質が木綿と麻の植物性纖維ですからどれも染料としては直接染料か硫化染料ならば、そのまゝ染めつきますが、鹽基性の染料は染めつきません。そしてこれらは皆室内装飾が目的ですから、圖案及び配色の關係上、幾分所々にはでな色彩を要します。從つて他の染料よりも最も美しい鮮明さを持つた鹽基性染料を用ゐなければなりません。それにはどうしても染色する前に、地質にタンニンの媒染が必要です。その方法は、木綿百匁に對し、タンニン酸二匁から十匁位を用意して、次ぎに布地が浸る位の湯の中に之を溶かします。その中に木綿を振り入れて三、四回振りながら平均に藥品を布地に浸みこま



せて、そのまゝ三時間から一夜位は漬けこんでおきます。之をそのまゝ水洗ひせずに、今度は吐酒石一匁から三匁位を以前と同量の湯に溶かし、この中に布地を入れて三十分間位で取り出し、よく水洗ひをして乾かしてから鏝あてをして布面の皺をよく伸ばして　きます。　次ぎに染色し様と思ふ圖案模樣を考へておいて、青花で大體の下圖を書きます。それから圖案の配色に必要な染料を夫々溶かして、筆や刷毛で普通の繪をかく樣に濃淡自由に彩色して行くのです。　この工程が終つたならば之を蒸し箱に入れて一時間許り蒸してから取り出して水洗ひをします。　之を乾かしてから更に布面の皺を鏝で伸します。　尚近頃市中に賣り出されてゐるくづまゆで織られた富士絹などを用ゐてこの染め方をしますと、布の面に凹凸がある爲に光線の反射が異つて配色の上にも一種異樣な妙味を出します。　尚こうした地質のものはくづまゆであつてもやはり絹地ですから、染料は直接酸性鹽基の何れでも媒染なしに染めつけられて、　非常に便利だと思ひます。　次ぎに蠟燭の燃え殘りなどを集めて、染める簡單なパラフイキン染めについて申上げます。

一、パラフイキン染

最初皿に蠟燭を一二本か又は之と同量位のパラフキンを入れて火にかけますと、すぐに蠟が熔けてまゐります。之を刷毛につけて、布を伸子張りにして上から、むらのない樣に刷毛で塗つて行きます。　塗り終へましたら布を伸子から外し、之を手でつかむ樣にして、布の全面に思ひのまゝに皺を作ります。　一方に好みの染料液を作つておきまして、この中に以前の布地をよく擴げて浸しておく事凡そ三十分から二時間位で取り出し、よく染料が吸收しましたら引き上げて一度水洗ひを致します。　之を揮發油に入れて、布面の蠟分を取り去つて蒸箱に入れ、蒸す事十分許りであとはそのまゝ乾かします。

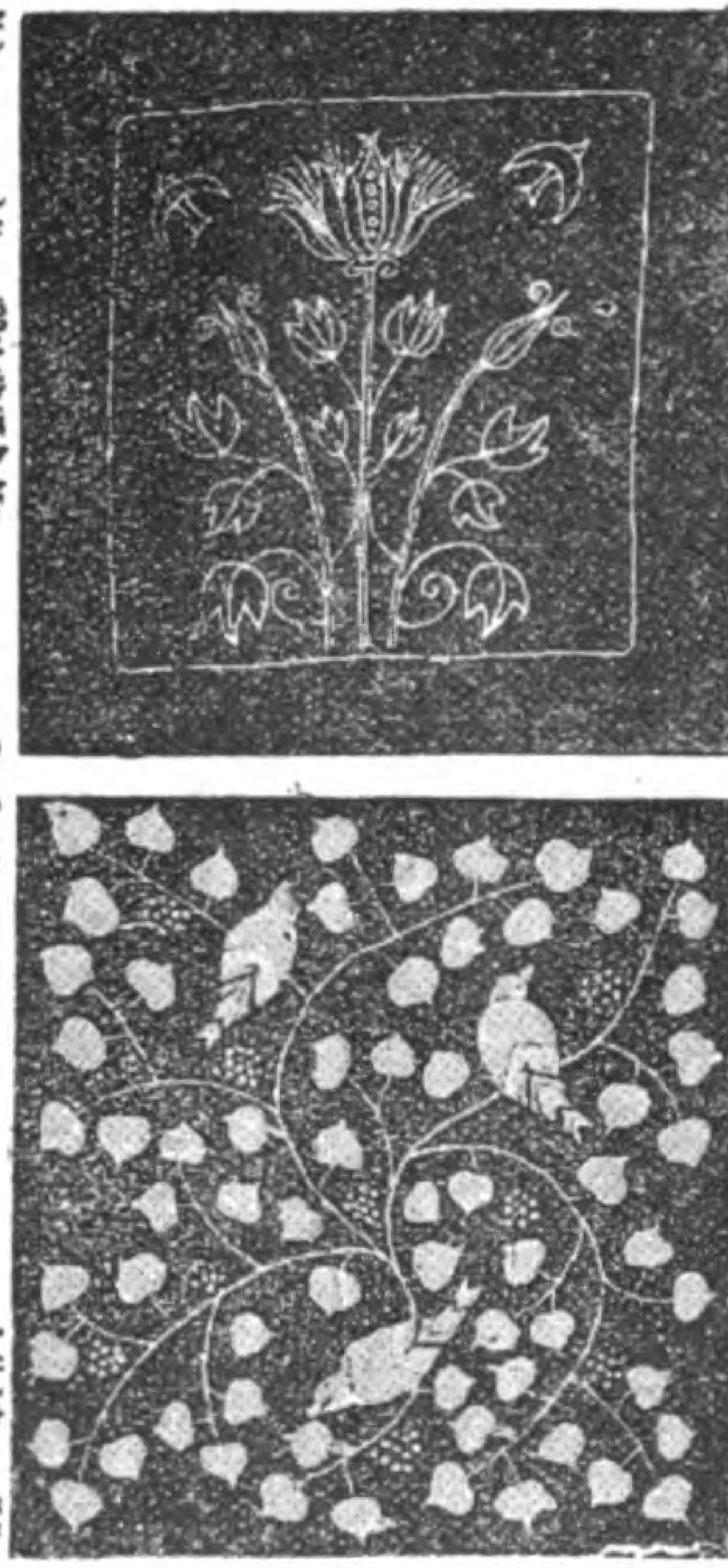


上圖ははもと袖裏になつてゐた古い白絹地にパラフキン染めを施したもので、配色は茶色です。子供物でしたらえんじなどに染めて、帽子の飾り又は夏帽を臺にしてその上に被せてもよ

いと思ひます。その外、洋服の袖や、胸の飾り切れ、又は日本服の八掛や肩掛（ビロードと半々に接ぎ合せて）にしてもいいでせうし、布地が一種の防水性を帶びてゐますから、蝙蝠などに利用しても面白いと思ひます。

一、バッセン染

この圖の上も下も染め方は同じ抜染めですが、上は單色抜染で、下は着色抜染です。ふくさやクッション、肩掛、帶地などに用ゐても面白いものです。布地は羽二重、木綿、新しいもの、古い物、どちらを用ゐても結構です。



この染め方は最初布地を木綿ならば直接染料、絹地ならば直接か酸性の染料で、好みの色に地色を染めます。卽ち布地を染料液の中で煮染にし、之を水洗ひして乾かし、よく皺を伸しておきます。別に藥品としては、抜染劑ハイドロサルファイトか酸性亞硫酸ソーダと、亞鉛末小量とを用意しておき、別記の糊を作つておきます。この糊の中に抜染劑ハイドルを糊盃一杯に對し、茶匙一杯位（もし酸性亞硫酸ソーダ液ならば茶匙三四杯に亞鉛末を茶匙一杯位）入れてよく混ぜたものを作ります。一方布地の上には刺繡の時に用ゐる型紙か、模樣ぬきの原紙をおき、その上より抜染糊を裁縫用のへらで平等におき、型紙を靜かにはがし、しばらく乾かしてから之を蒸します。三十分位蒸してから取り出し水洗ひをしますと、抜染糊をおいた部分のみが地色を脱色して布面に白い摸樣をあらはします。尚この外に圖案と地色とを二色に出したいと思ふ時は、最初の地染めを藥品によつて抜染されない鹽基性染料のローダミンなどでしておき更に直接染料か酸性染料で染めて、以前の方法を行ひますと模樣と地色とが別々の色で表はれます。この方法が卽ち單色抜染であります、次ぎに着色抜染と言ふのは着色と同時に抜染する方法で、卽ち最初の地染を直接か酸性で行ひ、次に抜染劑の中にローダミンかミシリンブリウ、オーロミンなどの樣な抜けない染料を加へた糊で以て、以前の方法を行ひますと、地色の

ほかに赤、青、黄色など夫々異つた模樣の色が、同時に出來あがつて目の覺めるやうなものが出來ます。尚別記の糊の作り方について申しますと、材料としては糯米粉六十匁に、米糠四十匁(之は石灰を含まない極く細かいもの)食鹽十匁、水五合以上の分量のものを用意してから最初に水をよく煮立たせておき、一方糯米粉と糠とをよく交ぜたもの〻中へ湯を少しづゝ加へてよくねりきす。それからこの練られた糊の中に殘りの湯を加へて火にかけ、食鹽を加へ、時々かきまはして、更によく練るのです。この時糊がこげつきましたらなるべくそのまゝにしてあまりこげを起さぬ樣に注意する事です。(糊が汚れますと布地も汚れてまゐります)次に火から下ろし、更に練つて之を鉢にうつし、表面に皮を張り易いから少し水を入れておくか、又は濡れ布巾をかけておき、必要の際に少しづゝ取り出して用ゐればいいと思ひます。

一、額の繪又は夏向きの白地の帶などに利用して面白いうつし染の方法

下圖は羽二重の端切れにうつし染めを行つたものです。他の染め方と異つた點は、圖案に光線の工合や、葉脈や花瓣の切れ目などの氣持ちを十分に表はすことが出來ることで、これは額の繪にはさむにもブックの表紙などに張つても面白いと思ひます。

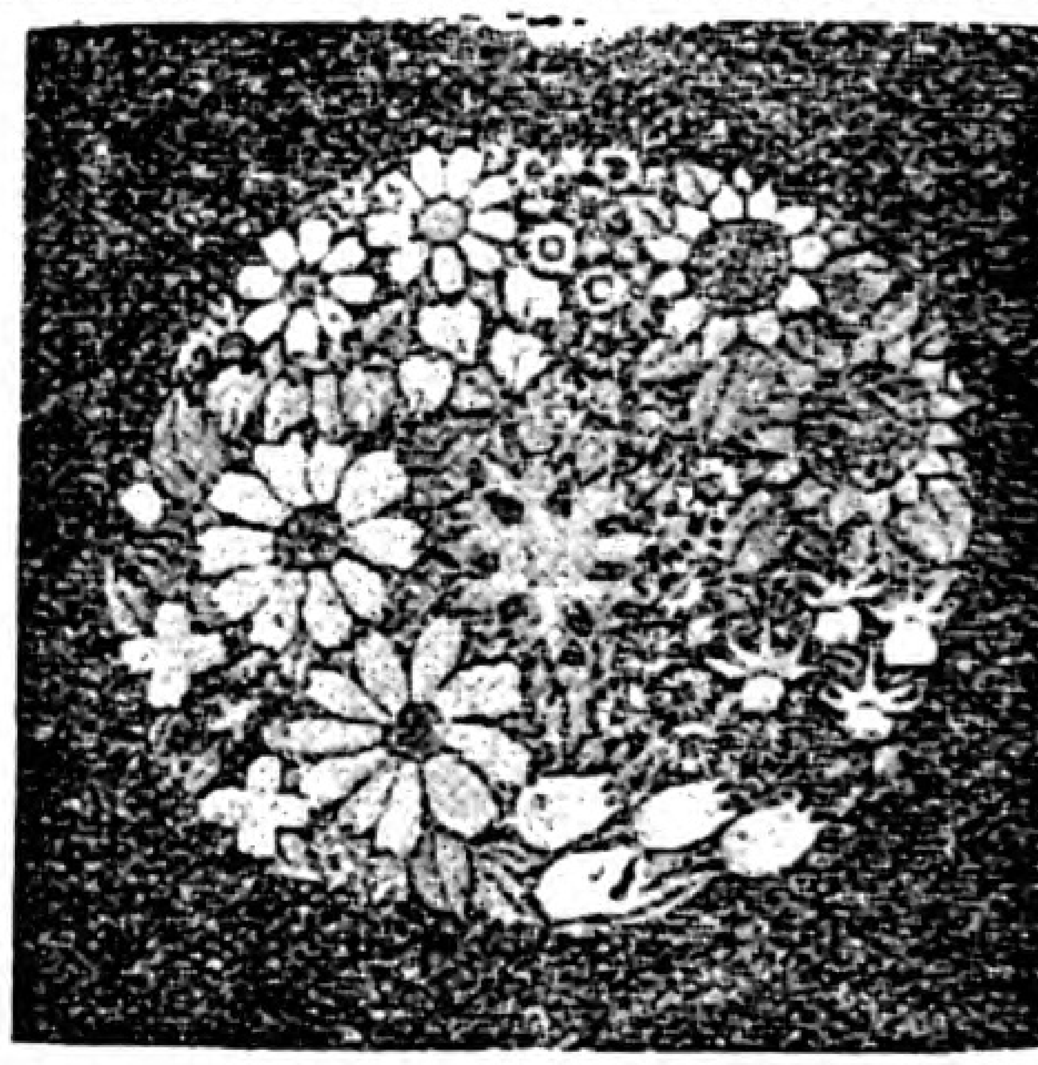


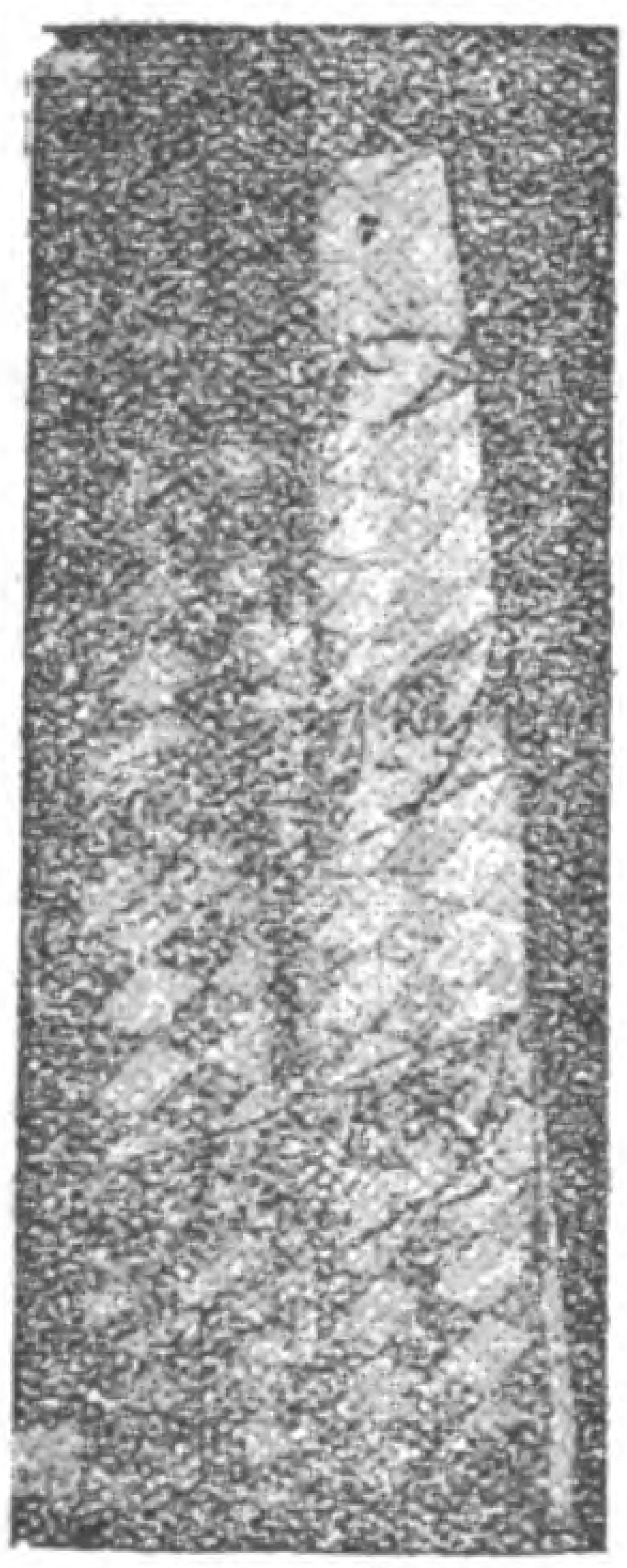
方法としては別に述べた糊を少し薄目にのばし、之を刷毛につけて畫洋紙に平等に塗ります。之を乾かしてから、好みの染料で濃淡自由に筆で模樣を書いて行きます。しばらく乾かしてからこの上にさつと細かい霧を吹き その上へ染めやうとする布地をあて〻皺のない樣に注意して、更にその布地の上から強く熱したアイロンをかけます。次に布地と紙とがついたま〻で之を蒸します。三十分位してから取り出し、水の中で布地と紙とをはがしてから丁寧に水洗ひして糊氣をとつて乾かします。(畫洋紙に染色したものを布にうつす前に、光線を受ける所や、葉脈の所をピンの先き、又は錐の先で細く糊を削りますと、その部分が深く彫られる爲に、幾分強いかんじを與へます。)

一、ナッセン染めの方法

最初型紙か又は圖案を切りぬいた原紙を、布地の上におき、之を動かない樣にピンで止めておきます。一方には圖案に要する色糊を種々に作つておきます（糊は以前のうつし染めに用ゐたものでよろしい）之を型紙の上から注意して、葉は綠に、花はピンクに、空色にと配色を考へておきます。しばらく乾かしてから更に模樣以外の地色を染めるために、布の全體に豆汁を引きます。　之を乾かしてから好みの色の染料液を刷毛で、むらのない樣に二三囘から四五囘引いてよく乾かして蒸し、それから水洗ひして糊を取ります。之は着色捺染の方法ですが、今一つの方法は型紙又は切りぬいた原紙を布の上にのせて、色を交ぜない捺染糊をおき、乾かしてから地染を以前の樣に行ひます。　蒸して水洗ひをしますと模樣の部分が白く出ますから、これを後から染料で種々に彩色して更に今一度蒸します。

下圖の右は着色捺染を羽二重の小切れに行つたもので、中の圖案には可成り派手な色彩を用ゐ地色は黒にしましたが模樣が浮き出た樣に鮮かに見えます。　なほ左の帶は模樣を白糊でおいて、その上から彩色したものです。どれもクツションや羽織の裏地帶などに試みて圖案と配色に少し工夫をしますと却々すてがたい趣きがあります。





注意　（染料を買ひ求める時は染料屋で必ず染料の性と色合とを明瞭に言つて買ふ樣にしませんと、よく見當違ひのものを買求める事がありますから注意をしなければなりません。　糊米糖は染料屋で求められます。其他拔染劑や漂白粉染色の時の助劑などは大抵普通の藥品屋に行けば求められます。　蠟や揮發油はあまり火の近くで取扱はぬやうに注意を要します。　なほ「女性改造」を通じてお分りにならないところや其他染色上の御相談に應じます。

時評

理想ある復興

千葉龜雄

明治初期の政事家と、明治中期から大正の現代までの政治家をくらべていちぢるしく目につく事は、前者が曲りなりにも或る種の理想によつて政治をやつて行つたのに、後者は理想によつてたゞ現實に卽した政治をやつて行つたことにある。明治初期の社會情態にあつては、當時の政府人は民衆の間の俊良であつた、そして民衆の知識なり、洞察なりが、みな政府人よりはよほど遲れて居た。政府人は明らかにそれを意識する故に、理知にさめ切らない民衆が何を云はうと、それに構はずどしどしその理想を實行していつた。彼等にはまた、それを有力にうらづける意志力があつた。それは勿論その理想の目標にも、本質にも、徑路にも或は多少の誤りがあつたにしても、大體において創業維新の時代としては、相應にすぐれた見識を持つたものだと許され得る。また恐らく日本の歷史で、實行の意志力と執着の強い點において明治初期のやうに多數の人物を生んだことはなかつた。故にわれわれが今日、何ほどかでも、新日本の文化を味ふ部分があつたならば、それは明治初期の政治家達の血と意志と、理想に殉ずる達識によるものであることを想はざるを得ない。大正までの文化は、云はゞそれらから來るところの、物理**でいふ墮力に過ぎないとも云へるであらう。**

といふのは、明治末期から、大正現在までの社會情態は、民衆の力が進んで、政事人の知識なり、經世眼なり、民衆の幸福に對する熱情なりが、民衆よりもずつと後れた時代である。その時代では、理想をもつものが民衆で、政府人の方がかへつて理想を忘れ

て居た。さらば理想とは何であるか、理想とは現實によつて創造する現實の至上價値である。理想はもとより現實のあなたにある。けれどもその現實を土臺とせずに、理想の價値が創造されぬところに、そこに理想の尊とい現實味がある。つまり人類が、現實を足場として、その現實を、價値の創造までに引き延ばさねば止まないとするところに、人類進步の鍵があるのだ、然るに理想を忘れた政治家とは、現前の事實を至上として、たゞ現實だけに卽し、それだけに執着するものである。そして東洋の傳統は、その哲學も倫理も、政治も、また思想も、すべてが證實主義によつて裏付られて居ることを語る。

現實主義、もしくは今日主義の政治家には二つの型がある。一つには始めから全く理想をもたない。故に全く理想の嚮面に目を閉ぢやうとするものであり、他の一つは、云つて聞かせられれば、どうにか理窟はわかつても、何分現實の方に心一杯の働らきが囚へられて居るために、理想に邁進する勇氣を出し得ないので、明治末期以後の政府人は、取りのけなしに、大抵その何れかに屬する。强ゐて分ければ、官僚政事家が前者に屬し、政黨政事家が後者に屬するが、理想を忘れた點では、どちらも同一線上におかれる。現代政治家の悲しみと落伍がそこにある。

が、政事人の無知が、どんなに大理石のやうに固いにせよ民衆はどんどん自己の生活に目覺めた。彼等は自分達の生活目標を、現實の理想化である價値の創造に置いて、その將來の幸福のために　、どんな犧牲を忍んでもその至上價値を遂成しやうとする。そこに政事者と民衆との衝突がある。民衆はあらゆるイズムの一線を沿うて進む政府人はあらゆるイズムを打ち斃さうとする。けれど彼等は、到底それが成し遂げられないものであることに、微かながらも目覺めた場合において、彼等が探る得意の政策は卽ち倣しくづしである。バラック的建築である。彼等は決して男らしく白旗を建てゝ、そのまゝ陣地を讓り渡すことをしない。たゞ一步々々づゝ地步をすてて行く。デモクラシイ、社會民主主義、家族制度、普通選擧、自由教育、高等女子教育、文化主義、自由戀愛。エトセトラ、みなそれである。もし彼等にしてそうしたものが、止み得ない、またどうしても來らねばならぬ民衆の要求であり理想であることが始めからわかつて居たならば、或ひは中途でも氣づいたならば、彼等はなぜ一步一步と女々しく氣まづさうに退却せずに、始めから勇敢な聰明をもつて必然に來る

べきものの用意とより好き退陣と遂成策とを考へることを敢てしなかつたか。それをすることは、或は不慮な體面を重んずる彼等にとつては、堪へ得ない誇りの棄權であつたかも知れない。けれども、その卑怯未練な倣しくづしから來る民衆精力の徒勞と費用を考へて見たならば、それ位の棄權は何でも無く忍び得る筈のものだ、殊に世界の公理である普通選擧が、今日まで實行を遲らかされて居た理由が、政友會もしくは原敬氏、もしくは憲政會一部の無理想と現實の唯一執着にすらもあつたといふことは、この事實を最もよく暗示するものでなければならぬ。

東京驛停車場が出來た當時に、大抵の人はその規模が、馬鹿べら棒に大き過ぎることを批難した。しかし今日は何の態であるか、現實に卽して、未來に盲昧な人の考へは大抵こんなものだ。近代の政治家では、故侯大隈と子後藤が、やゝ理想政治家の面影を持つて居る。たゞ侯大隈は、理想と現實が全く無交渉に取扱はれて居た。また至上理想を現實化するだけの熱意と手腕を缺いで居た。次に子後藤が脫線政事家といはれるのは、子の心理そのものに、確かに統一し得ない一つのケオスがある。それが突拍子もなく、隨時隨所に飛び出す傾もあるが、また一方に、子がすべての政治を、子一流の理想にそうて行はうとする聰明と嗜味とにあることも斷言される。もとよりその理想の本質には議すべきものもあるが、兎に角我等が子の上に、近代政治家の俤を見るのはそれである。

東京は今ま復興の營みに忙はしい。しかしそれは復興でなければならない。斷じて復舊であつては行かぬ。復舊ならばたゞ舊現實に卽するがよいので議論はいらぬ。しかし復興には大きな理想がいる、その主發者たる子後藤は、少くとも大きな理想の持主だ。その大風呂敷が單につかみどころのない空氣だけを滿たしたものであつたか、それとも復興一切の必需品を一杯に包んだものかはわからぬが、少くとも、そこには理想がなければならぬ、或は遠大過ぎるほどにも遠大な理想によらねばならぬ。然るに昨今の形勢を見ると、その大風呂敷の風袋が段々としぼんで來る。もとより子の脫線らしい脫線を抑へることはよい。けれども、その純良な理想さへをも、例の周圍の現實哲學だけで抹殺しやうとするならば、有望な首都の建營は決してそこに生れないのだ。思ふにこの大災は或る意味で、現實生活と現在民衆の過去を離緣して、理想追求の生活に轉廻することを暗示するものとも云へる。現

在の首都民は、まさしく光榮ある戰鬪を始むべき、第一戰線のその上に立つ機會を攫むものでは無いか。

「相模灘深海の斷層に起つたところの、僅か震幅四寸の移動が、あれだけの大災を與へるのだ。大自然の發動が一寸してもいかに大規模であるかを考へたなら首都の民衆は自然にすらも耻ぢねばならぬ。要するにあまりにケチケチするな。

軍隊生活の原理

上官が人を殺せと命令した。軍隊にあつては、上官の命令は至上の鐵則である。その間に善いか、惡いかを撰擇する自由をゆるされて無い。殺人はわるい、けれども殺人といふ惡い行動を敢てしなければならなかつたといふのが、大杉事件に從屬してひき起されたところの、森曹長以下宗一慘殺事件の批議される所以だ。しかしそれによつて、軍隊内の命令や法則の形式や法條をかへよといふのは姑息な話である。またそれによつて、上官が命令した場合にも、自由意志によつて撰擇して、イエスとノオを斷言する權利を部下に與へよなどと云ふならば、これも成つて居ない論理だ。こゝではそれよりも、ずつと溯つて上官そのものが、人を殺すといふやうな考へを、起さないやうな敎育、また部下に、あるまじき命令を下すやうな、そんな考へを養はぬやうな敎育をする方がずつと捷徑なのだ。さうすると、問題はどうしても、軍隊敎育精神の大宗までに還元されて來なければならぬ。

軍隊が、この平和と人道が叫ばれる現代に、存在して居るのが既に矛盾してゐるから、それにどんな敎育を施したところが、それが是認されないといふことも考へられぬではないか、少くとも、現存する軍隊敎育の精神が、もつて自由なものにならねばならぬことは當然過ぎるほど當然である。なぜなら軍隊は、軍隊といふ特殊な階級が棲んで居るのでは無いそうした組織を作つて居るものはみな民衆そのものである故に、その民衆に行はれて居る精神を、軍隊の塀內だけで遮斷することは理由にならず、またそれは望み得ない。これまでの軍隊精神は、その理窟も考へずに塀內にさへ民衆に流通する思想を持ち込まねば、それだけで特殊敎育が成功し得られるものと考へて居た。また軍隊は民衆である故に、凡ての民衆のやうに、それを同一知識の地平線に置き、自由な思想から統一した批判を得させるべき筈であるのに、こゝでは凡ての知識を遮斷し、たゞいはゆる軍隊敎育といふ、一本調子の單純な、原始的な訓練のみに力を入れて居た。甘粕大尉を中心とし起つたあらゆる非合理な事實が現はれて來たのは當然

過ぎるほど當然な話だ。

華族から平民へ

戀愛に落ちた華族の娘が、同族仲間からの、面倒な諸種の批判を馬鹿々々しいものとして、平民になつて好きな男性と結婚する。また華族と平民の結婚が面倒なために、平民に除籍し平民と結婚する、かういふ事實が最近に二つも起つて多少とも評判の種になつた。

われ等はこんな事實がなくとも、華族のほこりが、今は決して民衆の羨みの的ではないばかりか、華族達自身にとつても大した誇りを感じなくなつた現象を明かに見て居る。こゝに人力のいかんともし得ないところの、自然の社會層の推移があるのだ。華族階級が特權階級であることは疑ひもないが現代のやうな社會では、この特權を事實に誇り得るには、それに富を附屬して居るのでなければ何にもならぬ。然るに現代の華族階級は、已にその肉體と知識において、長い時代の風化をうけて、頽廢した一種の階級である故に、肉體をもつても、知識をもつても到底新興民衆との接戰に堪へ得ない。その上彼等の頭腦にやどる歷史的種族の誇りが、事實は空虛なものであるにかゝわらず、容易にそれを打ち捨てて、民衆に交はらうとする決意を持ち得たいために、その知識と肉體はますます頽廢する。或はたやすく民衆に交はらうとするところの、その決意を持ち得ない事さへも、彼等の頽廢した意識と氣分から來るものと思はれる。その結果から彼等の生存を第一に脅かすものは、彼等が、生活において、殊に經濟生活において、落伍者の運命を擇び取らねばならぬことである已に經濟生活において、一般民衆よりもよく脅やかされてある一方に、彼等はその空虛な誇りを持ち續けねばならぬと思惟するだけに、その苦しい經濟を、外面においては、出來るだけ苦しくないやうに見せかけねばならぬ。虛榮である。だからすべての救濟、寄附といふ場合にあつては、彼等はいつもその金額を、富の特權階級と等しくするのでなければ世間が承知しない。全く苦しい犧牲に相違ないが。また彼等の空虛な誇りの報償だと思へば尚更諦めのつかぬわけでもないであらう。

が、それがいつまでも續くものではない。わが國華族階級の潰崩が先づ何よりも、經濟的生活の包圍から起つて來つゝあるのは事實である。かういふ苦しい特權階級の生活に生き

て、その上歴史が傳統的に縛りつけて居るところの、家風、舊道德、同族といふやうなものを、同窮屈に保守することは、恐らく現代の空氣を呼吸して居るところの、若い兩性の堪へ得るものではない。そこで斷然そうした空虚なきづなを斷ち切つて、自由な民衆の天地に放たれやうとする人々が生れて來るのは當然な理窟だ。すべての特權も、事實上の特權である場合ならば誰もその特權を喜ぶ。しかし今日のやうな特權を、華族自身がうんざりして持てあつかつて居るのは事實のない特權はもはや特權でないからだ。そして現代にあつては、眞の一切の特權は民衆の手に移つて居るからだ。かくして舊社會組織の潰崩は いろんな方面から芽ざして來る。そこに社會の進んで行く面白味がある。

全國公娼廢止期成同盟會のこと

震災救助及び帝都復興の問題を中心として立つた東京婦人聯合有志會では新たに全國公娼廢止期成同盟會を組織しました。その綱領は

一、燒失せる遊廓の再興を許さぬこと。
一、全國を通じ、今後貸座敷及び娼妓の開業を新たに許可せぬこと。
一、今後半ケ年の猶豫期間を附し、現在の貸座敷業者及び娼妓の營業を禁止すること。

の三ケ條で奴隷や囚人にも勝る苛酷な監禁に身を委ねてゐる暗闇の女性を救ひ、進んでは一般婦人の地位改善によつて賣笑婦の發生を防止するため、女子敎育の改善や婦人の職業的訓練の普及、失業救濟、勞働條件の改善、婦人及び兒童保護の社會的施設等を認めて、公娼全廢の運動と共にあらん限りの力をつくして着々實行に講じてをられます。そして同盟會では婦人を會員にすること、事務所を東京におき、全國の大小都市に支部をおくこと、委員七名を擧げ、委員長會計等を互選すること、毎月會費拾錢を徴收すること、會計部、出版部、宣傳部をおき、講演會の開催、會報(月二回)及びパンフレット等の出版、基金募集等に當ること、及び顧問辯護士依頼の件等は既に決定されました。今や舊き東京を葬りさると共に、幾百年來の國民的汚辱を葬るために、此際本誌の讀者も大いに活動して下さることを要求します。

東京聯合婦人會の組織と其の活動

守屋東

焦土と化した帝都から生れ出た東京聯合婦人會は、實に生々とした發達を以て成長してゆく、其班に加はる私は少しも遠慮せず卒直に此會の發育についてまた使命について語る事が出來る。あらゆる婦人の各階級が眞實な思で其長を見出し短を補なつてゆく有樣は、自分等の事ながら涙ぐましい心地がする。斯うまで女性一般に通して共力一致の必要を思ふ事が考へた時もまた不用意なときも底深く流れた泉として持つて居たのかしらんと思ふ程である、時代の要求！　時機が來たのだ！　などといふ言葉ではまた使はなたらぬやうな思がする程凡てが一つになつて居る、全く私は震災の賜と思ふ。それがいくら各人の努力による處が例へあるとしても、努力では創作し得ない生命が流れて居る。通ふて居る。我東京聯合婦人會には。

一、社會事業部

大震災後に於て各方面に顯れた事の中最も大なるものは各地からの同情と、全世界の等しい愛の贈物であつた、不思議に助かつた東京市民の心に此二の頂ききれぬまでの賜物は、今日の復興の意氣を無言の中に甦らせた、豐な人々の情はあやふく失望と驚きとまた悲しみにとざされんとした東京市民をして、人生の行路に希望の星を輝かせた、男、女の別更になく、初めて地を足にして高い一點を眺め得た。悉く其一點に歩みよつた、即ちそれが婦人にとつては聯合であつた、救護に、後援に、馳せ參じた、やがて復興に至る機楊としてまた新に各方面について考察は巡らされた。ともあれ此時、なしうる力を集めて慰問につくさんとした、そこに生れ出た枝が社會事業部にあつた、一般社會事業の婦人團體より職業團體各女學校の同窓會、教會寺院の婦人會、町村の有志婦人によつて組織さるゝ婦人の團體等其數は四十三に達した、土曜毎に集合して報告し協議し決議して進行して居る、此會の發端

は東京市の後援として煉乳の配達を二週間やつたのに初まる。

二、授産部

第二の枝は授産部である。此部は初め職業部と稱した其示す通り職業婦人の團體であつた、然し後に授産部とかへた、十二の團體が基調となつて婦人職業についての元締の格をなして居る、曰く、家庭職業、和洋裁縫、編物レース等、今日有利な婦人職業の大部分は此部の占むる處となつて居る、從つて此部は面倒な規則の制定、內規の編制等、委員の苦心は一通りでない、後には聯合婦人會の財源は此部で引き受けたい迄の覺悟が部の人々にかくしきれぬ表情となつて見えるさへ心地がよいが、今震災後の失業者へ職を與へん爲、家財を失ふて働かんとする婦人等に働く道を開かん爲に日夜苦心されて居る樣は眞劍なものである。一枚五十錢の蒲團縫に此部の仕事は初まつた、五十錢といふ公定賃銀も震災の後の蒲團縫によつて此部が發表したものであつた、毎水曜日の夜會合は開かれて居る、團體本位で加盟する事になつて居る。

三、勞働部

第三枝は勞働部である、此部も初めは職業部の第二部となつて起つたものであつたが、中頃に至つて全く勞働部となつた、婦人運動の歴史は我國でも早や此部の働に入つて居る、まして工場勞働の多い且主である我國に於ては此部の奧行は深いものである。今は其一歩である、婦人が眞に責任を以て勞働をする事から着實に初めて、與へらるゝ限りの權利は立派に得、豐に生存し得る社會を希望して居る、勞働を與へられて初めて其尊さは味ふ事が出來る。精神勞働でも筋肉勞働でも「婦人だから」といふ一句は先づ第一に此部では責任を全うする上から取りさるべき言葉であると皆は言ふ。第一着の手初めとして婦人の職業相談所が九ケ所に設立された、其中央部を牛込納戸町の女子青年會に設けた、木曜日の夜、毎週集會を續けて居る。

四、政治部

第四番目に其枝となつて發表されたのは、政治部である、個人を本として全員とする、浮濫な行動は全く避けて集中した問題をひつさげ會毎に討議もする、問題にもする、全國公娼廢止期成同盟會はこの部から生れた、十一月廿五日には公娼廢止デーを守つて強く此運動の宣傳につとめる、婦人の立場と

して無言で居られない問題は此部から次々と出て來る事と思ふ、宗一殺しの如き、母として、女として、どんなにしてもだまつては居られない問題である、滿足が出來、了解が出來るやうしなければ半數を占めて居る婦人は、其子を安んじて育ててゆく事が出來ない、加州の土地法の如きも日本婦人と米國婦人と先手をとつて交際し研究し話し合ふべき事であらう、婦人聯合會の政治部の使命はまた廣く國際的に世界の婦人の團結一致を示されて居る。而も其鍵は「平和」によつて初めて全うせられるものであると此部の人々は信じてうたがはぬ、金曜日午後二時から三時間毎週心おきなき討論と研究に時を過すのである、政治とさへ言へば何か家庭と遠い事のやうに思ふ人もないではないが、此會合に出席して家庭にも社會にも政治なしに生活の出來る處一つもない事を識るのである。

五、教育部

最後の枝は教育部、我國の女流界は殆んど教育家を以て占めて居るといふてもよい。其先輩の諸家が此部の部員となららるる順序になつた、今迄或る場合を除いてはあまりない此會合が震災によつて最も平易にとり行はれた、また平信徒格の母親、教育に熱心する一部の人々もともに此部に加はつた。興味は增した、教育者のみにも出來ず、熱心家のみにも出來ない、調和した教育運動現實味のある教育主義が此部から流れ出るやうになつた。兩者相呼應するといふ處に子女は幸福な教育を受け得る、人格養成が教育の本義ならば眞に內外共に手をとつた家庭學校、學校の家庭が出來上らなければならない、此部はそこをねらつて居る。男子の德操教育また國際教育、其源を尋ねては、完全な市民教育より初まつて國民教育——國際教育と其輪廓は廣大するのである、教育に男女の別はなし、進み行くものには登る迄登る力を出させ、道を開いてやりたい、入學試驗の如き虐待は此部の最も苦痛とするものゝ中の一つである。金曜日の夜六時から此部の會合は開かれてゐる。

東京聯合婦人會の內容と活動の狀況は以上に大體を盡した。最後に今後の希望を述べると、各地に既成の婦人團の聯合會がある。そうしたものと更に聯合してゆきたいのである未だない處は、設立さるゝやう希望してやまない、我日本の改造は婦人の覺悟と結束とによつて出來る、半數であると共に、婦人は全日本の母である第一人者である。須く奮起し且つ結合せなければならぬ。

文藝欄

長篇 出世五人男　宇野浩二

長詩 日記の中より　武者小路實篤

小說 うすぼんやりのお咲（應募）　草川信子

亡き妻に書き送る　荻原井泉水

童話劇 春　竹久夢二

小說 百年の戀　里見弴

「出世五人男」前號までの梗概

或年の春、小石川區高田町の入井といふ素人下宿へ、文科の學生とはいひながら、一向學校に行く樣子も見えない、赤木阿珂丸といふ、二十歳の青年が下宿して來た。

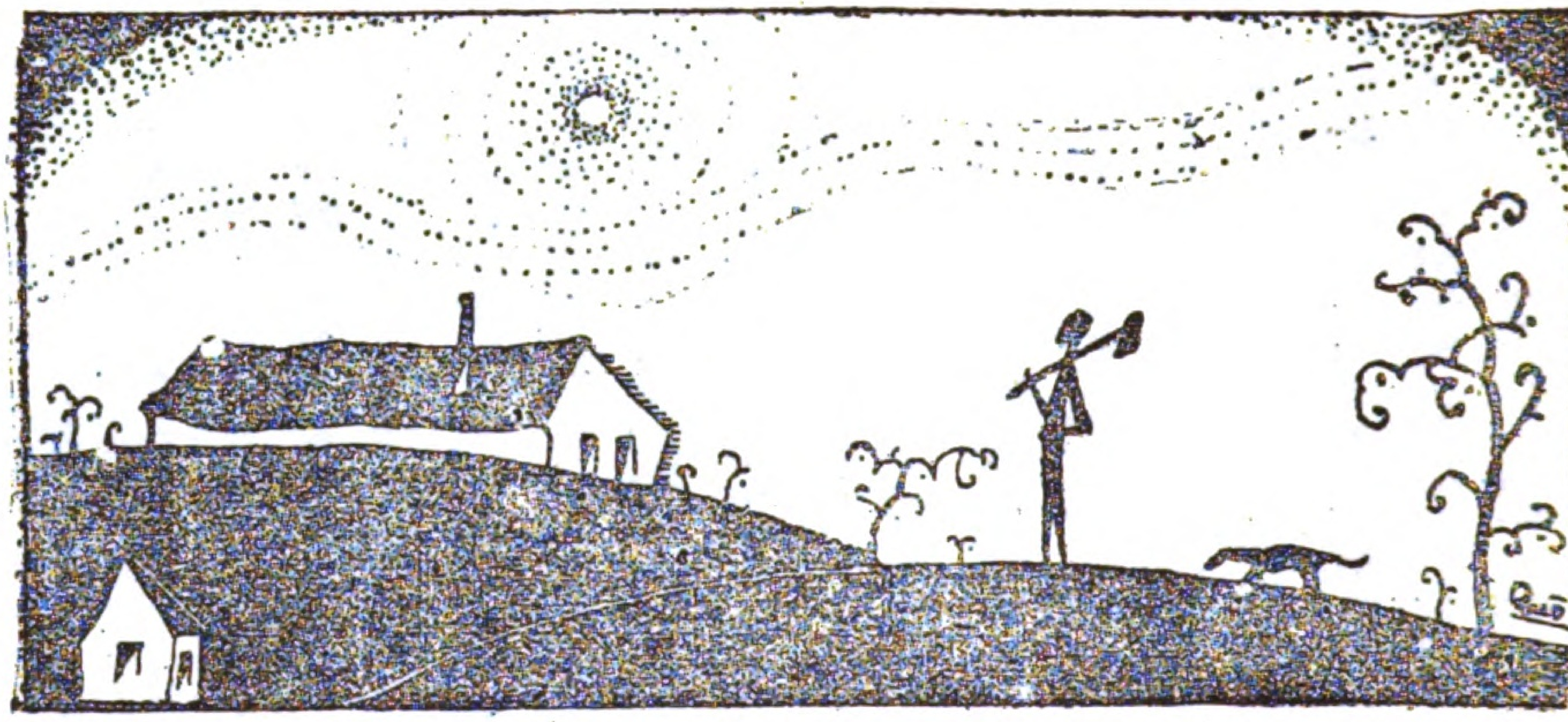
すると、十日程後の或日、突然同宿の者だと言つて、厨戸夏生といふ、畫家になることが志望の、當時失戀で惱んでゐた男が彼を訪ねて來た。厨戸といふ男は單純な、極く鈍な生れつきの、然し正直な男であつた。

その厨戸の話によると、これも矢張り同じ下宿にゐる、已武良夫といふ、高等師範の學生で、當時ストライキの爲に退校になつて、一高の入學試驗の勉強をしてゐた男が、厨戸の生活に困つてゐるのを見兼ねて、自分も貧しいながら、彼を養つてゐる、といふことであつた。

偶然に赤木と已とは中學が同窓で赤木がいつも怠けてゐて、大抵首席であつたのに比して、已は一生懸命に勉強することに依つて、常に二番の成績をとつてゐた。が、それは少年時代のことで、今や結局勉強家の已の方が眞直にがむしやらなりに、彼の道を進んで行きさうなのと對稱して、阿珂丸は次第にぐれて行きはしないかと思はれた。

さて、當時赤木は彼仲間だつた、彼同樣に頽廢的な文學に沒頭して、だらしのない生活を送つてゐた友達に愛想を盡かして、孤獨に親むつもりで今の下宿に越して來たのであるが、半月も經つにつれて、元々寂しがり屋である彼は、孤獨に堪えられなくなつた。それで、ふと思ひついて、不斷は餘り交際してゐなかつた、子供の時分の友達である伊能猪之吉といつて、或横綱力士の弟子になつてゐる男に遊びに來ないかといふ葉書を出した。この男は小學から中學の中頃までもずつと赤木と一緒だつた。彼は一見愚鈍なやうに見える中に、何處か狡猾で、物の考へ方などに變に實際家的なところがあつた。つまり赤木などと違つて、感情家の反對の性質を持つてゐた。

その外にもう一人赤木の文科大學での最近の友人として、反子半四郎といふ俳優志願の男の話もあるのだが、彼のことは今度の筋に關係しないから省いておく。



出世五人男（長篇小説）

宇野浩二

季節は四月から五月へと移りつゝあつた。小さい素人下宿の入井の家にある、わが赤木阿珂丸の部屋の前の三坪の庭の、三本の櫻の若木も、それが彼の部屋の障子を少暗くする程に、いつの間にか黑い青葉に裝はれてしまつた。この季節は多くの神經衰弱的な青年にさうであるやうに、わが赤木阿珂丸をも息詰まるやうな憂鬱に連れて行くのが常であつた。でなくてさへ心の髓から怠け者で氣無性者である彼は、近頃は學校に通ふことはおろか、散歩に出ることも、錢湯に行くことさへも殆どなしに、毎日朝その萬年床の中で目を醒まし、そこの枕元に置いてある揚子で寢たまゝで歯を磨き、うがひをしにだけ洗面所に立つて、後は朝飯も、晝飯も、そして夕飯も悉く床の中で認めた。そして一日中でのその外の彼の仕事といへば、讀むか、空想するか、もう一つ眠るか、この三つの外の何にもでなかつた。

"Hope's clad in April green——

Trommelommelom, trommelommelom,
Tender it's vernal sheen――
Trommelommelom; trommelommelom,"
「希望は四月緑の衣を着て――トロンメロンメロン、トロンメロンメロン、春の光とやはらかく――トロンメロンメロン、トロンメロンメロン」(前田晁譯)

彼はいつか讀んだ西洋の短篇小說集の中に、斯ういふ歌の文句があつたのをどういふ譯か覺えてゐた。そして讀むことにも倦き、空想することにも疲れ、さて眠ることにも醒めてしまふと、いつでもこの文句が口の中にひとりでに浮かんで來るので、それを無意識に三度も五度も繰り返してゐるうちに、初めてその文句の意味に思ひ及ぶのが常であつた。Hope's clad in April green(希望は四月緑の衣を着て)か。――だが、詩人のやうな言ひ方ではあるが、彼には、今この世は間違ひなく緑の衣裳に裝はれてゐるにも拘らず、彼自身の希望は冬枯の中に曝されてゐたことに違ひない、されば何のトロンメロンメロンの囃子ぞやであつた。そこで、彼はそれを考へると、溜息を吐いて、頭から蒲團を被つて、蒲團の中で芋虫のやうに身體を煩悶させた。

すると、彼の目の前に先づ初めに浮かぶのは別れて來た神樂坂の三階建の下宿屋に毎日煙草と酒と雜談とで、鯨のやうにごろ〳〵してゐる頽廢派の友達等の姿であつた。それは彼等と共に朝から晩まで鼻を突き合はしてゐると、(お〻、それは阿珂丸にとつて鏡部屋に閉ぢ籠められたやうな思ひであつた)何方を見ても彼自身の樣々な呪ふべき姿を見せられるやうな氣がして、彼は次第に彼に堪へられなくなつたので、離れて來たのではあるが、斯うして離れて來て彼等を思ひ出すと、それは彼自身の愛人よりももつとの懷しさで彼の心の扉を叩くのである。彼等は今寢てるか起きてるか？(極く幼ない子供の頃の遊戲に、兩手の指をそれ〳〵手の平の內側になるやうに組合はして、その隱された指を猫と見做すのである。

「猫寢てるか起きてるか？」とさうして互ひに尋ね合つたり當て合つたりする。即ち組合はされてゐる指が片々の手の平にぴつたりくつ附いてゐる時は猫寢てるのである。でなくて、兩手の指を絡み合はせて手の平の中で尖立てゝゐる時は即ち猫起きてるのである。時とすると、非常に子供らしいことを考へる癖がある阿珂丸は、この馬鹿々々しい遊戲を時々思ひ出して、相手なしに彼の大人の手を組合はしてやつて見ることがある。）猫寢てるか、起きてるか？　彼等も寢てるか、起きてるか？――彼は指を組合はせながら考へた。

　阿珂丸は心の中で彼等に呼びかけた。――おゝ、山根一進！　君とは暫く物を言はないが。相變らず三年前だか五年前だかに作つたといふ未完成の詩の句（而もたつた二行切りの詩の句！）を口ずさんでゐるか。文學などはつまらない、文學はいつでも繪畫の後を追つてゐるに過ぎない、それよりも繪をやらうではないか、繪を、――斯う言つて、或日二人は町に出たことがある、そして二人の財布の許す範圍で繪の道具を買つて、さて神樂坂の下宿に歸つて來ると、「初めのうちは互に銘々モデルになり合はうぢやないか。君の部屋の障子を開け給へ、僕の方のも開けるから。そしたら見通しだ、君は君の窓の邊の適當な場所へ畫架を据ゑ給へ、僕は僕の部屋の都合のいゝ所へ置くから、唯どつちからも見えるところでありさへしたらいゝ。さあ、君は僕の方を見て描き給へ、僕も描くから。あゝ、それでは君の顏が畫架の蔭に隱れて見えない。――うむ、さうだ、僕は君の横向きの圖を描くことにしよう。」――けれども、或晩、彼等は二人とも豚料理か何かを少し食べ過ぎで、重い氣持で雜踏の町を歩いてゐたことがあつた。彼等は彼等の目的である文學上の野心に就いても、それの充たされさうな望みとは遙かに緣が遠かつた。文學が彼等を見捨てたのか、彼等が文學を見捨てようとするのか？そして繪畫をやらうと思ひ立つたのであるが、それは未だ始めてから一週間と經たないのに、それが又彼等を見捨てようとし、彼等も亦それに愛想が盡きようとしてゐると見える。

「所詮、文學とか、繪畫とかいふものは藝術の中の第二流第三流のものぢやないだらうか。僕等のこの胸の中にある何物

かを現すには、それ等のものはどうも間拔なやうな氣がする。僕は考へた。音樂だよ、音樂こそ藝術の中の司ぢやないだらうか。」「僕もさう思ふ、僕もさう思ふ。だが、畫よりももつと、音樂は彼等に馴れないものに違ひなかつた。自然、彼等は益々空想的になつた。「ピアノが一臺欲しいな。僕は僕の持つてゐる總てのものと、一臺のピアノとを換へてくれるものなら換へたいよ。そしたら、僕は屋根も蒲團もない野原で、裸のまゝに置かれてもいゝ。」「と言つても、誰もピアノと換へてはくれないよ。だつて、僕等の持物の全部でも、どんな安いピアノの五分の一の價もないだらう。」「ないだらうな。」考へて見ると、ピアノどころか、現在彼等の財布の中には、二人のを合はしても、そこらのカフエーに這入るだけのものが覺付かなかつたし、活動寫眞の木戸口もくゞれなかつた。ふと彼等は口を噤んだ。そして、人込の中を無言で離れ離れに歩いてゐるうちに、阿珂丸はその不機嫌の矢を一進に、一進はその憂鬱の罪を阿珂丸に向けた。すると彼等は互に仇敵のやうに憎らしく、肉親のやうに負擔に感じられ出した。そして五分間ほど步いた。阿珂丸はふと一進が雜踏の中に一瞬間まぎれて見えなくなつた途端に、つと踵を廻らして、大急ぎで横町に走り込んだ。そしてその晩は如何にも一進と顔を見合はすのがばつが惡かつたので、麻布の方にゐる友達を尋ねて二三日泊つてしまつた。その事があつてから、彼等は下宿屋で向ひ合つた部屋にゐながら、何方からも初めて顔を見合はした時笑ひ顔をし損なつた爲に、口をきく機會を失つてしまつて、それから二週間ほどして、阿珂丸はこの高――町の方へ一人で越して來たのである。彼は今その山根一進を懷しく思ひ出すのである。それから江木遠三を、それから賀田惣太郎を、それから島木島吉を。――彼等、それは時は四月の綠に裝はれた世界に廻り合ひながら、そして年も赤緣の時代であるべき頃でありながら、矢張り赤木阿珂丸同様、希望が冬枯の中に曝されてゐる人々のことを。すると、阿珂丸は頭から蒲團を被つて、おうくと子供のやうに泣けて來るのであつた。

次に彼の頭を不意に訪れて來るのは己武良夫であつた。彼には希望があるだらうか、と阿珂丸は考へた。さうだ。彼に

は確かに希望があるに違ひない、と即座に答へられた。唯、裝彼のは四月の綠にはれるといふやうな生優しいものではなくて、四月が來ても、或ひは七月になつても、さては冬枯の頃になつても、いつも變ることのない松の木の樣なものであらうか。否、彼には希望といふやうな空想味は少しもないやうにさへ見えた。彼は唯中學時代の綽名そのまゝに、「不屈」とか、「螢雪」とか、或ひは「時は金なり」といふやうな格言と角力を取るやうにして每日を生きてゐるだけだらう。すると、どういふ譯か、その間にちらと反子半四郞の姿が彼の目の前を通り過ぎて、次に厨戸夏生の存在が思ひ出された。

厨戸夏生、――あの男こそ何だらう？　彼の希望は何だらう？　彼を置いてきぼりにして逃げた輕子が、いつかは歸つて來ると心賴みにして待つてゐるのだらうか。それとも流石に今は最早や輕子のことを忘れて、その日その日の三度の食事を、誰に氣兼ねもしないで、腹一ぱいに食へる日の來るのを待つてゐるのだらうか。或ひは誰か仲に這入る者があつて彼を國の家に歸れるやうに取計らつてくれるのを心待にしてゐるのだらうか。いや〱、多分あの男も亦實は何の希望をも持たない一人かも知れない、阿珂丸自身のやうに。さう言へば、あの男は阿珂丸に初めて會つた時、書を勉强してゐるとつた、そして近頃はそれを止めて小說を書いてゐると言つたではないか。して見ると、俺と厨戸夏生との差は幾何だらう？　と思つて、阿珂丸は悲しくなつた。――

その時、廊下にばた〱と足音がした。それは音だけ聞いてゐると、如何にもしとやかな美人のやうに聞えるところの女中のお蘭のそれに違ひなかつたが、阿珂丸がいつになくそれに聞耳を立てると、果してそれが珍らしく彼の部屋の前で止まつた。

「赤木さん、お客樣です、」とお蘭が障子を開けない前に斯う言つて、くす〱と忍び笑ひをする聲が聞えた。

俺のところへ珍らしく客が尋ねて來たのを可笑しがつてゐるのだらうか、と阿珂丸は考へながら、成る程、彼自身も考へて見ると、をかしいな、俺のとこへ客なんて、誰だらう？　と思ふと、長い間客を迎へたことのない彼は、まるで女の客

が來でもしたやうなに、胸のわく／＼するのを覺えた。

「誰だい、お客は？」と阿珂丸は尋ねた。

「お角力さんですよ、」とお蘭はやつと笑ひを抑えた顏を障子の間から出して言つた。「大──大何とかつて……」

「大淀か！」と言ふなり、阿珂丸はゴム人形のやうに跳ね上つた。その瞬間、彼は近頃の、そして又昔からの猪之吉に就いて抱いてゐたところの、友情の上から見て多分に飽き足りない點などのことを悉く忘れてしまつて、唯舊友に對する懷しさの情に爆發した。彼はお蘭に返事することも忘れて、いきなり廊下に飛び出した。彼は玄關の土間に、西鄕隆盛のやうな紺絣の着物を着て、この前見た時よりも一層恰好は角力取らしくなつたが、何處かその赤黑いだぶ／＼した顏が元氣なく見えるところの、大淀猪之吉を見出すと、「おゝ、しばらく。上り給へ、さあ、」と言ふより早く、いそ／＼と彼の部屋の方へ客を案內して行つた。

「相變らず萬年床だな、」と猪之吉は彼の部屋に這入りながら言つた。

「まあ、坐れよ、」と阿珂丸は掛蒲團を後にはねて、自分は床の上に坐りながら、「よく來たね、忙しいかい？」

「うむ、ちつとも暇がなくつてね、殊に場所前だもんだから、」と猪之吉が言つた。

その間にも、阿珂丸は慌しく手を叩いては茶や菓子の用意を命じたり、かと思ふと突然無意味に立上つて押入の唐紙を開けたり、入口の障子を開けて外を覗いて見たり、──といふのは、別に何の用がある譯ではなく、唯思ひがけない嬉しさにちつと落着いてゐられないからに違ひなかつた。實際、彼に客が來たといことは、彼がこの下宿に來てから初めての出來事に違ひなかつたので、大井の者たちにはそれだけで既に珍しい話題である上に、而もその客がたとへ褌擔ぎにもせよ、角力取といふやうな變つた種類の人間であることや、さてはそれを迎へた阿珂丸に就いて言ふと、この人がこんな大きな聲を持つて居たか、そしてこんな人並な快活らしい行動をとることがあるのか、と好奇の目を見張らすに十分であ

つた。

が、時間が經つと共に、少しづつ氣持が落着いて來ると、阿珂丸に穿鑿的な心掛が頭を持上げて來て、先づ猪之吉がこの前會つた時と比べて逆境の位置にあるらしいなと觀察された。

「隨分修業は辛いもんだらう？」とこの前に會つた時阿珂丸が聞くと、

「それや決して樂なもんぢやないよ」と然し猪之吉は昂然とした態度で答へた。「然し、お蔭で中學にゐた、つまり中學敎育を受けたといふことが大變得になつたよ。それや、君、角力道の我々時代の境遇といふものは、君等の想像の外だからね。いや、そんな大將なんかとの交渉は、唯ほんの稽古をつけてもらふだけのもんで、嚴格でも何でもさう困りやしないがね、僕等は大將から言ふと、弟子の弟子の、第何番目の弟子に當るか知れないだらう、つまり僕等は新兵だとすると、その上の伍長とか、少尉とか、さういふ奴に角力の外に揉まれる譯なんだよ。それが辛いんだ。」

「角力の外に揉まれるつて、どういふ風に揉まれるんだ？」

「それやいろ／＼だよ」と猪之吉はつづけた。「いや、いろ／＼だよ。褌を洗濯させられる。それもしみの附いたやうに汚れたやつを、鬼が洗つても落ちさうもないやつを。而もそれをやつとこさで洗濯すると、その挨拶にこれで洗つたのか、水に浸けたゞけでは洗つたといふことになるんぢやないぞ、なんてやられるんだ。かと思ふと、芋を五錢で買つて來いと言はれて、買つて來ると、それは高いといふ。一錢位上前をはねたらうなんて侮辱するんだ。さういふ事を、つまり僕は餘りやらされないで濟むんだ、そこが中學のお蔭なんだ。」

「どうして中學のお蔭で褌洗ひや芋買ひが免れるんだ？」

「その代りのことをしてやるからだよ。まあ、大抵は手紙だね。それや同輩のも書いてやるし、伍長や、少尉連中のも書いてやるよ、角力取で字の書けるやうなのは滅多にゐないからね。だから稀に褌洗ひが僕に廻つて來ても、同輩の奴が

『昨日頼んだ手紙を書いてくれ、ね、洗濯は俺がやつとくから』と來るんだ。その代りまあ色んな手紙を書いたり讀んだりしなけれやならないよ。中でも、女郎の手紙が一番多いね。そしてひどい奴はその女郎からの手紙が讀めないのがあるんだ。それを讀んでやつて、おまけに返事を書いてやるんだからね。その外、國の親のところから來たのや、それの返事や、借金の催促や言ひ譯や、實際いろ〳〵あるよ。」

「なる程、時によると褌洗ひと餘り辛さの變らないのがあるだらうな。」と阿珂丸は同情して言つた。「が、君も餘り能書家の方ぢやなかつたが、それで通用するかね？」

「ひやかすなよ、それで十分なんだから。」と猪之吉は苦笑して、「だけど、僕は稽古だけは一所懸命にやつてゐるよ、君等の名前を、中學の名前をはづかしめないだけにやるつもりだよ。だから、僕は外の連中よりも朝は一番早くから起きて、少々の怪我なんかは隱して、人の倍も三倍も稽古を勵んでゐるつもりだ。あゝいふ連中だから、大抵の奴は酒を飲むし、女を買ふし、それをしない人間は一人もないと言つていゝ位だが、僕は業がなるまでは一切さういふ誘惑に負けないつもりだ。君は知らんかも知れないが、中學の校長なんてひどいよ、僕を二度落第さしておいて、つまり退校さしておいてさ、それで僕が角力取になるといふと、そんな不心得な考へを起すやうなものは、今迄ゐた籍からも除名してしまふなんて言ふんだからね。つまりさういふ正業でない方面をやる者は、俺の學校の生徒ぢやない、縁を切つてしまふといふんだ。僕はあの時の校長に斷言した手前でも、屹度番附に名の出るほどの者になつて見せたいと思ふよ、僕は一所懸命にやつてゐるよ。」と彼はその鈍感に見へる顏を珍しく緊張させながら、涙聲で言つた。

「やれ、やれ、大いにやつてくれ。」と阿珂丸もそれに應じて斯う言ひながら、心の中で日の丸の扇を開いて、彼の爲に振つたものであつた。——

が、この日の彼の話振りはそれとは大分變つてゐるのに、阿珂丸は氣が附かない譯に行かなかつた。

「どうだい、近頃は？」と先づ大淀の猪之吉の方から聞いた。

「相變らず、」と阿珂丸は答へた。「君の目の前に見る通りだ。」

「學校は？」

「教師の顏も忘れたよ。」

「おや、君は畫かきに變つたのか？」とその時猪之吉は部屋の中を彼方此方見廻して、そこらに枠に張つたカンヷスや、木炭紙や、繪具などが散らかつてゐるのに注意しながら、「それとも、誰か繪を畫く人と一緒にゐるの？」と聞いた。

「僕だよ。然しもう畫も止めたよ、」と流石に元氣のない顏附で阿珂丸は言つた。「時に君、君の方はどうだい、希望はあるかい？」

「ないこともないがね、」と猪之吉は言つた。「やるのは大いにやつてるよ。柔道の手などもうまく應用すると成功するからね。……」

「柔道なら然し、中學時代は僕は君に負けなかつたぢやないか。力は君と僕とではあの時分から比較にならなかつたが、勝味は確かに僕の方に八分はあつたぜ。へゝゝ」と阿珂丸は笑ひながら言つた。

「だつて、」と猪之吉は一瞬間むきになつて、「君のは、あれや、例外だよ、君見たいなのは別だよ。」と言つて、「君のは腰がねばり強いとか何とか言ふんぢやなくて、どういふのかね、妙に輕いんだよ、だから始終綿のやうに飛んでる癖に、それでゐて、何といふかな、五重の塔の建築のやうなものなんだよ、幾ら搖れても倒れないんだね。」

「だつて、負けなければいゝんぢやないか、」と阿珂丸も思はずむきになつた、が、氣がついて、忽ち持前の餘裕あり氣な調子に戻つて、「どうかね、今ぢやもう君に負けるかね、」と言つた。そして心の中で、今だつて若しかすると負けないかも知れないぞ、と思つた。

「當り前だよ、」と然し相手は益々生眞面目になつて、「角力だつて、芝居だつて、落語家だつて、どんなものだつて、たとへ僕等のやうなものでも、人間一人が一生を棒に振つてやる仕事には違ひないんだよ、又それでなければやれないものなんだよ。僕だつて、これでもう三年間毎日角力ばかり取つてる譯だ。……」

「ほお！　三年間毎日角力を取つてゝこんなものかな、」と阿珂丸は心の中で思つた。

「それや尊いとか卑しいとかの區別はあるかも知れん、」と猪之吉は殆ど泣き顏になつてつゞけた。「然しそれや君が勉強してゐる――何？　小說か？　畫か？――何にしたつて同じこつたと僕は思ふよ。君のやうな人に僕がこんな事を言ふのはあべこべ見たいなことだがね。然し、さうだよ、さうぢやないか、ね？」

この時、阿珂丸は相手の話とは何か全然別のことでも考へてゐたと見えて思ひ出し笑ひのやうな、變なにや〳〵した微笑を浮べてゐた。が、猪之吉はそれを見ると、少し氣持を惡くして愈々躍鬼になつて、

「僕は思ふんだが、君は餘り才人過ぎるんだ、君は君の才を賴み過ぎてる、才人は才に倒れる――ね、確かさうだつたね――さういふことがあるぢやないか。君は僕が今言つたやうな事を、角力でも、芝居でも、小說でも、畫でも、何でも彼でも、それ一つづつで人が一生掛るものを、一二三年づつ位でやつてしまはうといふやうな人なんだ。君にはそれが一寸出來さうなんだ。だけど君、昔から、僕等見たいな落第坊主は、歷史などまるで知らないが、一人で角力も、芝居も、小說も、畫も、軍人も、商人も、一人で何でも出來たといふやうな人があつたことは聞いたことがないぢやないか？」

「あるよ、」と阿珂丸は言つた。然し彼は心の中で、こんな馬鹿のやうな男ではあるが、三年すれば、自分ではそれ程とは思つて居ないかも知れないが、大した理屈が言へるやうになるものだな、と感心した。が、それが間違ひなく、彼の缺點を突いたので、彼は甚だ不愉快にされた。で、彼は夢中で反對して斯う言つたものゝ、一寸いゝ例が思ひ付かなかつたので、「日本では一寸思ひ出せないが、外國にはいくらもあるよ。」

「どんな人だい？」と猪之吉も反抗的に聞き返した。

「それは早い話が伊太利のリネエサンス時代だよ。その時代には、さういふ一人で何でも出來る、色んな方面の天才を兼ねた人が現れたといふ話は君も歴史で聞いたらう。」と阿珂丸は言ひながら、相手の赤黒く太つた、頓馬な顔附が、それでも不昭さうな表情をして居るのを見流して、心の中で、『お前のやうな落第坊主は知るまい。』と云ひながら、そしてつゞけた「つまり世の中の文化が極端に進んで、それが爛熟して來ると、さういふ人間が出て來るんだ。日本の今は伊太利のリネエサンスほどではなくても、兎に角稍々それに似た時代なんだ、無論、僕見たいなものは駄目だがね、昔で言へばつまり元祿時代がさうだよ、柳里恭などといふ人は、文學、武術、醫學、音樂、詩歌、書畫、人並以上に出來たものが五十幾つとかあつたといふ位だよ。……」

「その人は角力はどうだ？」

「さあ、柳里恭が角力を取つたといふ話は聞かないがね。」と阿珂丸もいつか興奮で顔を眞赤にしながらつゞけた。「その伊太利のリネエサンス時代は素的だよ。ダヰンチなんていふ人は、大畫家で、大科學者で、その時分にもう飛行機の發明をして居る位なんだ。その外、ミケランゼロだつて、ラファエルだつて、みんな四つ五つの天才なんだ。チエリイニなんていふのは彫金の大家で、又泥棒の天才なんだ。それでさういふ人たちは今の藝術家たちと違つて、みんな力が強いんだ。そのチエリイニといふ人の日記が本になつて居るんだが、中で誰だつたか誰だつたかとが往來で出遭つて喧嘩をするところがあるよ、その喧嘩が勝負が附かなくて、三日三晩ヹニスの往來で組合つたまゝだつたといふやうな話もある位だよ。ミケランゼロはチエリイニに毆られた爲に、一生鼻が曲つてしまつたなんて話もあるよ。……」

「さうかね。」と猪之吉はすつかり烟にまかれてしまつた形で、元より相手の話が出鱈目かどうかを探索することは出來なかつた。が、この話のお蔭で、一時多少險しくなつた彼等の話が緩和されたことは確だつた。すると、

「然し、まつたくだよ、」と阿珂丸は暫く默つて居た後で、沁々した調子で言ふには、「それはみんな天才の話だよ。君の言ふ通り、我々凡庸に生れついたものには、一つのことに、それがどんな卑いことだらうと、そればかりに生命を賭けて取組み合はなければ嘘だね。君には多少さういふところがあるよ、ところが僕のやうな浮氣な生れ質のものにはそれが出來ないんだ。」

「それは君が才人過ぎるからなんだよ、」と猪之吉が言つた。「さうなると、却つて僕のやうな愚物の方が、何をしようつたつて外に出來ないんだから都合がいゝ。だけど又、僕はこんな、裸になつて角力を取ることより外に、幾ら考へても何一つ出來さうなことがないと思ふと心細いよ。それや今のうちこそ食ふには困らないよ、然しいつ迄も褌洗ひや煙草買ひには行けないからね、行きたくつたつて、だん／＼後から後からと、若い、もつと適當な褌洗ひが詰めかけて來るんだから。上には大勢の伍長や少尉が居るんだらう、それに僕等の先輩の褌洗ひが未だ無數に居るんだ、そして又下にはもう新手の褌洗ひが無數に這入つて來て居るんだ。つまり頭が支へて居て、下が押して來るんだもの、たまらないよ。……」

「それやたまらんね、」と阿珂丸も同情して言つた。「褌を洗つてゐるうちに、浦島太郎のやうに白髮になつてしまつたら。だけど、君はいつかの話ぢや、そんな褌洗ひや、芋買ひはしないで濟むと言つたぢやないか。」

「それやいゝんだよ、」と猪之吉は然し一向晴れない顏附で言つた。「然し褌を洗つたつて洗はなくつたつて、位置には一向變りはないんだもの、兵隊で言ふと、一卒の歩兵か騎兵かといふ違ひと同じことさ。それに、近頃は、僕が初めといふ譯ぢやないかも知れないが、中學を半分位出たのがぽつ／＼這入つて來るんだよ、以前はそんな事はなかつたさうだがね、だから褌洗ひの代りに手紙の代筆をする者が多くなつて來たんだ。」

「なる程、さういふ競爭者が出て來るのは困るね。然し、そんな事で競爭するのは君等としては本當ぢやないんだからな、競爭は矢張り力の競爭でなくつちやあ。」

「それや無論だ。だから、僕の口からこんな事を言ふのは何だか、僕はそれや人より早く起きて、人の倍は稽古をしてゐるお蔭で、同輩の中では強い部なんだよ。然しね……」

「然し、何だい、」と阿珂丸は言つた。「強くさへあれば申し分はないぢやないか。その點では角力ほど公平なものは、君、この世の中にないよ。外の者は官吏ならやれひきだとか、役者なら家柄だとか、實業家なら財産だとか、それ〲條件があるよ、その條件に缺けてゐるものは餘程図抜けた才の外に、運の手傳ひがなければとても頭を出すことが出來ない、現にもつとも公平で、才分次第である筈の僕等の仕事、──文學とか繪畫とかでも、多少さういふ弊害が伴ふもんだ。そこへ行くと、實力さへあれば、誰に遠慮もなくずん〲出世の出來るのは、君、角力だけだよ。」

「ところが、それが矢張りさうばかりは行かないことがあつてね、」猪之吉は一層悄然とした樣子で、「矢張り親に金があるとか、人間が才走つて居るとか、男振りがいゝとかするものには、何彼につけてかなはないんだ。實際、他所目から見ると、智惠の少ない大男が寄つて、體を打突け合つて居るだけ見たいに見えるかも知れないが、大勢の者が集まつてれば、犬でも噛み合ふんだもの、少し位馬鹿者ぞろひとしても、矢張人間なんだから、それや厭な事が隨分あるよ。僕だつて、君のやうに何でも出來る才人だつたら、もうとつくの昔にこんなちよん髷を切つてたかも知れないよ。」

「そんなものかね、」と阿珂丸は身につまされたやうな聲で言つた。いつになく、と言ふよりも彼が初めて聞いたと思つた程、猪之吉の言葉は眞實がこもつてゐて、(それは逆境にあるものだけが持つことの出來る眞實味であるのかも知れなかつた、)その上、言ふ者自身は無意識であらうが、いつになくその言ふことが賢く、傾聽に値するのに(それは悲嘆する者だけに與へられる智惠であつたらうか、)阿珂丸は感激させられた。「おゝ、友よ、舊き友よ!」と彼は心の中で叫んだ。そして手を取り合つて、この世のいびつさを、生きて行く辛さを、見えない何者かに訴へたいやうな氣持さへした。

「酒でも飲まうか、」とそこで阿珂丸が言つた。實は彼はその言葉を、唯歌でもうたふやうなつもりで言つたゞけで、それ

は殆ど内容なしにであつた。何故と言つて、彼は性來酒を嗜まない方で、東京に來て間もなく、例の三階建の下宿屋に居る友達と交際した初めのうち、二三度彼等に附合つて飲んだことがあつたが、その度に激しい頭痛に罹つて苦しくなつた經驗があるのと、殊に近頃では彼等が唯酒を飲みさへすれば藝術の神に氣に入るかのやうに、そして飲んでは止め度のない議論をするのとに反感を抱いてゐた折柄だつたので、尙のこと、彼は酒とは他人であつたのだつた。

「あゝ、」と相手の猪之吉も乘り氣のない返事をした。彼は阿珂丸の場合と違つて、さう酒が嫌ひといふ方ではなかつたがせめて幕下十兩の位置を得る迄は、斷然それを飲むまいと心に誓つてゐたからだつた。

が、そこへ、もうさういふ時間になつたと見えて、お鍋が夕飯の膳を運んで來たので、

「ぢやあ、後で、君を送りかたがた散歩に出ることにして、兎に角飯を食はう、」と阿珂丸が言つた。そして女中に「客膳を一つ、」と言ひつけた。

　同じ日の晚、もう餘程夜が更けてからのこと――正しく言ふと、それはその翌日かも知れなかつた。背は相當に高かつたが、痩せた赤木阿珂丸と、太つた、大きい岩のやうな大淀猪之吉とは、絡み合ふやうになつて、兩國橋に近い濱町河岸を歩いてゐた。彼等は文字通り正體もなく醉ひどれてゐた。彼等は始終何か彼か喋つてゐたが、それは到底文字にする事が出來ないほど混亂したものであつた。彼等は二人とも殆ど同じ程度に酩酊してゐた。が、二人の人間が醉ひつぶれると必ずその何方かゞ幾分その程度が少なくて、その少ない方がより甚しく酩酊してゐる者を介抱する役を勤めるものである。然し、それは兩方が酒好きであるか、でなくてもこれ迄に何度か飲み合つた仲間にだけ見られる例で、この場合はその何れの部分にも當て嵌まらなかつた。が、強ひてそれを分けると、未だしも赤木の方が幾分か醉ひ方が少なかつたと言へた

かも知れない。彼は多分これから何時間かしたら死んでしまふだらうと覺悟した程、頭の痛さと、動悸の激しさとに惱まされてゐた。

それは季節から言つても少し溫度の高過ぎるほど、六月のやうな蒸し暑い晩であつた。彼等は宵のうちに高――町の入丼の家を出て、電車通へ出るまでに阿珂丸が行きつけの質屋に寄つて、それから銀座へ出かけたのであるが、そこの四つ角のあるカフエーに這入つたまでをしか、後になつても思ひ出すことが出來なかつた位であつた。それから何でも三四軒のカフエーを廻り歩いたのであるが、初めのうちは矢張り晝間のつゞきのやうな、「いや俺は碁だけはこれから少し勉強してつゞけて見ないつもりだ」とか、「まつたく、人間は一つの事に生命がけで熱中しなければならぬとはよく言つた。」とか、「然し、それだ、一つの事にこんなに夢中になれない性質に生れたとすると何とする？」とか、「俺は實際自慢ぢやないが不斷稽古の時は俺たちの仲間の中で一番強いんだ、それにどういふ譯か、場所に出ると成績が惡くて、俺より實力の弱い奴にどん／＼番附で越されて行くんだ」。とか、「そは結局弱いからだ、天成の角力取でない證據だ」とか、――そんなやうなことを話し合つてゐた。そのうちに、初めこそ赤木の氣持を惡くさした程躊躇してゐたが、大淀は心の誓ひを破つて到頭一滴を口にし出すと共に、元來嫌ひでない上に、長い間それと離れてゐたのと、胸の中の煩悶と、次第に廻つて來た酒の勢と、友達の無理強ひとで、鯨のやうに飲み又飲んだ。

Hope's clad in April green——

Trommelommelom, trommelommelom, ……

「希望は四月綠の衣を着て――トロンメロンメロン、トロンメロンメロン……」

到頭、赤木は例の歌を初めた。そして彼の場合は全然自棄の調子で飲み又飲んだ。

彼等は十二時頃に最後のカフエーを閉め出されて、濱町河岸に來た迄、何處をどう通つて、何の爲に、何處へ歩いて行

くかをさへ知らなかつた。そして、こゝへ來た頃、忽ち廣々とした大川の彼方に、王冠のやうな恰好をした國技館の建物が、それだけが無數の電燈に裝飾されて輝いてゐるのを發見すると、

「萬ざーい、」といきなり酩酊した阿珂丸が叫んだ。叫んだ拍子に、彼は歩きながら又少しばかり食べたものを吐いたが、そんなことには頓着なく、「大淀！　國技館！　わーッ！」

そして彼等は相變らず四本の足を絡み合はせるやうに見える足取で、河岸の、洗濯の爲だか、船着きの爲だかにこしらへてある、一寸した出張りになつた、欄干のついた臺のところへと歩いて行つた。

「川へはまつて死んだろか？」と酩酊した大淀は、國訛りを丸出しにして叫びながら、その臺の上に行かずに、そこから水際へ下りる段々の方へ行きさうになつた。

「待て待て！」と大淀の肩にぶら下るやうにして歩いてゐた赤木が叫びながら、その後を何か「う、う、う……」といふやうな譯の分らない發音の言葉を言つたかと思ふと、ばたりと、幸か不幸か、川の方へでなく、張出しの臺の上に俯伏しに倒れた。すると、それを助けに行くつもりで、大淀は彼の方へ手を延ばしたかと思ふと、彼の十九貫幾匁の俵のやうな身體が、赤木の上に倒れかゝつて、その拍子に穿いてゐた下駄を片足川の中に飛ばしながら、一旦赤木の上に落ちた身體が、元よりその上で安定を得る譯もないので、ころりと彼と並んで、狹いその臺の上を一ぱいにした。大淀の身體が上から落ちて來た時、赤木はうんと一つ大きく呻つたが、それで別に息も止まらなかつたと見えて、そのまゝ小刻みな呻り聲をつゞけてゐた。そして大淀も倒れた時のまゝの、俯向きの姿勢で、赤木の傍に鯨のやうに轉がつて、矢張り苦しさうな呼吸をしてゐた。が、そのまゝ彼等は眠つてしまつたのだつた。

が、それから一時間半と經過しなかつた。だから、短い夏の夜も未だ明けるには少し前であつた。その時！

ドドーン、ドンガドンガ、ドドーン、ドンガドンガ……

斜めに二百間の大川を隔てた、兩國橋の向う袂に突立つてゐるところの、注意すると夜目にもはつきり見透かせる高い塔の上から、夏場所第一の櫓太皷が、心地よい程澄み渡つた音色で響いて來たのだ。

ドドーン、ドンガドンガ、ドドーン、ドンガドンガ……

亂醉して寢てゐた大淀猪之吉は、その太皷の何番目かの音と共に、むつくりと俯伏してゐた頭を持上げた。眞暗な、然し遙か彼方ではちら〳〵と螢のやうに國技館のイルミネーションを反映してゐたところの川の面を眺めた彼の目は、不斷のどんよりした上に、それは酒の爲に充血して一層醜く腫れてゐたが、その光が次第に緊張して來た。と見る間に、彼は清水一角のやうに立上つた。

その時もまだ、彼の傍に轉がつてゐた赤木阿珂丸は、眠つてゐた。が、彼が立上つて、ふら〳〵とした足取で、多分に夢中の狀態で、二三歩歩き出した時、阿珂丸はふと目を醒ました。が、彼はそれを夢の中のつづきのやうに感じてゐた。だから、彼は「おい、おい、何處へ行くんだ？」と言はうとしたが、口がきけなかつた。然し、彼はむつくりと上半身を起した。と、その時は、彼の友達は裸足のまゝで、河岸を兩國橋の方に向つて一生懸命に走つてゐた。

ドドーン、ドンガドンガ、ドドーン、ドンガドンガ……

この音を赤木は初めから聞いてゐた。が、その最初のうちは確に夢の中に於いてゞあつた。何故と言つて、大淀の猪之吉が泥醉した罰で、師匠の茨木山から角力を取ることを禁じられて、櫓の太皷叩きにさせられた。それで阿珂丸が櫓の下に立つてゐると、遙か上の方で、猪之吉が頻りに太皷を打つてゐる。それ迄が即ち夢の中に違ひなかつたので、然し彼の打つ太皷の音は確かにドドーン、ドンガドンガと聞えてゐたのである。して見るとそのドドーン、ドンガドンガだけは夢と現とに共通してゐたらしく、光景だけが忽ち變つて、氣がつくと、今言つたやうに、猪之吉は裸足で河岸を走つてゐたのである。そしてこれは現實の世界に違ひなかつた。

「おーい、大淀ー 伊能君ー」と初めて阿珂丸がすつかり夢から醒め切つて、驚いて、未だ醉のふら〳〵するのを感じながら、立上つて斯う叫んだ時は、既に富の猪之吉は一町以上離れてゐる兩國橋にさし掛つてゐた。兩國橋はまだすつかり夜の景色で、橋の彼方此方に輝いてゐる電燈の光の下を、大淀猪之吉の影畫のやうに見える姿が、一散に向岸へと走つてゐた。

おゝ、出世に向つて走り去る大淀猪之吉ー

ドドーン、ドンガドンガ、ドドーン、ドンガドンガ……

"Trommelommelom, Trommelommelom——

Hope's clad in april green……"

『トロンメロンメロン、トロンメロンメロン、——希望は四月緑の衣を着て……』

そして一人取殘された赤木阿珂丸はその場に、力の拔けた人のやうべつたりと尻餅を突いてしまつたのである。

（つゞく）

日記の中より

武者小路實篤

○

いぢけて他人にすかれるよりは
欠伸して他人に嫌はれるなり
夏の日

―（七、二九、叡山にて）

○

我こそ仕合せものである
よき友
よき兄弟姉妹
我が生てゐることをよろこぶものを持つ
我こそ仕合せものである。

―（八、三、汽車宇部に停れる時）

○

お前のやうな
圖々しい恥ぢ知らずは
有島のやうに
首でもくゝつて死んでしまへと云ふハガキをもらつた。
僕の死ぬのをよろこぶ人間よ
いつか死んであげる。
氣ながに待つておくれ
私も人間だから死なゝいわけには
ゆかないらしい。

（八月七日頃來たハガキを　ひ出し）

○

私は大きな岩だ。
たゝいても
ついても
どうしても
自分のゐるべき處に
ちやんと立つてゐる、
私は大きな岩だ。
手をいためてもいゝなら
私をぶつといゝ
手をいためるのがいやなら
私をさすらなければならない。　――(八、一六)

○

唐詩選をひろひよみする。
李太白の
美人捲珠簾。深座顰蛾眉。但見涙痕濕。不知心恨誰。

王維の
終南有茅屋。前對終南山。終年無客長閉關。
終日無長自閒。不妨飲酒後垂釣。君但能來相往還。
などひろひよみして支那の古い畫を見るやうな氣がした。
感心した。他にも勿論いゝものが多い。
自分も何氣なく歌つて、其處に無限の味のある詩をつくりたく思ふ。　――(八、一六)

○

自己擁護はいやである。
悠々と生きたい。
他人にある先入主で見られてゐると思ふと其處にあるこだはりが出來る。自分はさう云ふことにこだはらず、すなほに本當のことを見てゆきたい。

○

男子、一たび、決心したことはやり通す。
死ぬまでやり通す。
もつといゝことが考へつくまでやり通す。

あとへはもどらない。

○

俺が百人人を殺しても
なほ俺を信じられるものが
本當に俺を信じるものだ。
しかしよし俺は百人の人を殺しても
人殺をいゝとは言はない。――（八、一九）

○

昨日鯉の子を見に行つたら、少し大きくなつて皆で蛙の死骸を突ついてゐた。一疋ずぬけて大きくなつた奴がゐる。一寸した處で生長の仕方がちがつたのだと思ふ。仲間はづれしてゐる。皆の三倍以上大きい。

○

俺は覺りの道を歩く
生長すること
すなほに見ること
そして自分の力以上のことは
何かに任せて安心すること
自分の生きたいやうに生て
辯解しないで安心してゐられる道を歩く事。
俺にはそれがもう少しで出來さうに思ふ。――（八、一九）

○

何となく心うれしき哉
このよろこびは
何處からくる
人々に愛せられるからか
又人々を愛するからか
又もつと深い生命の泉からか
何となく心うれしき哉。――（八、二四）

○

雨やんで蟬もなき出す夏の朝。

○

自分の仕事を忠實にやりぬくことが自分の生命を生かすことだ。

それだけが自分に出來ることで、それさへ出來れば萬事よくゆく。虫のいゝ望みを出すと罰をうける。謹めば又事が順調にすゝむ。

○

人類の生長
それに役立つ道を歩く時、
人は樂天家にならないわけにはゆかない。

○

俺は戀愛至上主義者ではない。
渇へた者には水こそ至上で
餓えた者にはパンこそ至上だ
私は愛するものを失ふことは
たまらない。
だが渇がとまれば水を忘れ
腹がはればパンを忘れる。
私は今愛する者のことも忘れて
たゞよきものをかきたく思ふ。

○

一刀又一刀
きざみこんで
美の神の姿を
彫りあてやうとする
彫刻家。
その者こそ
今の私の心を知つてくれるであらう。——（二三、八、二四、）

○

俺が死ぬと不幸になる人がある
長生きしたい。

○

俺にとつてすべてが空であるにしろ
俺を信じてくれるものゝ
運命を守護することは
空ではない。

○

何事があつても
こはれぬものが俺の内にある。
それを信じてくれるものゝみ
俺を知るものである。

こはれるものはこはれる
其處から何かあらはれでる
もうこはれないものがあらはれる。
男子はさう云ふものを持つて
この世に立つてゐなければならぬ。

勿論、俺はこわれるものも持つてゐる
だがいくらこはれるものはこはれても
こはれぬものをもつてゐる
自分の仕事にたいする忠實と自分を信じる者にたいする
愛だ。

それだけは失はない。

○

僕を信じ切れるものは幸だ
その人は人間を信じることが出來るだらう。

○

鉛は鉛で
至つて結構。
だが鉛りが白金の顔をしたら
至つて氣の毒。

○

夜中ふと目がさめる
氣にかゝること何にもなし
心うれしく
心たのしい
何かに祝福されてゐるやうだ。
ありがたい

ありがたい。

○

お前達の心のよろこびが
俺の心につたはるのだらう。
この心のよろこび。

○

二人娘を持つ父
夜中ふと目がさめて
近頃結婚した姉娘のことを思ふ、
よろこんでゐる姿がうかぶ。
それでよし、それでよし。
次ぎに都に勉強してゐる妹娘のことを思ふ。
よろこんでゐる姿がうかぶ。
それでよし、それでよし。
父はよろこんで
神に感謝する。

○

俺のこの心のよろこび
無線電信となつて
人々の心にしのびこめ。

○

叱られると
一寸はよはるが
すぐ又元氣にならないではゐられない
健康な子供のやうだ
俺の心は。

○

だまつてほつたらかしておくと
いつのまにか
元氣になつてよろこんでゐる
俺の心の香氣さ。

○

この心のよろこび
俺は何處かでいゝことをしてゐるのだらう。
この心のよろこび。

○

心と云ふ奴は
餘程よろこびたがる動物なのだが
人々はあまりに
いろ／＼の重荷を
負はせすぎるのではないかな。

○

誰の心でも
無心になれば
自づと
よろこべるものでは
ないのかな。

○

俺の心は
よろこぶことの名人
天下一品の代物かな――
心うれしく
心たのしい。

○

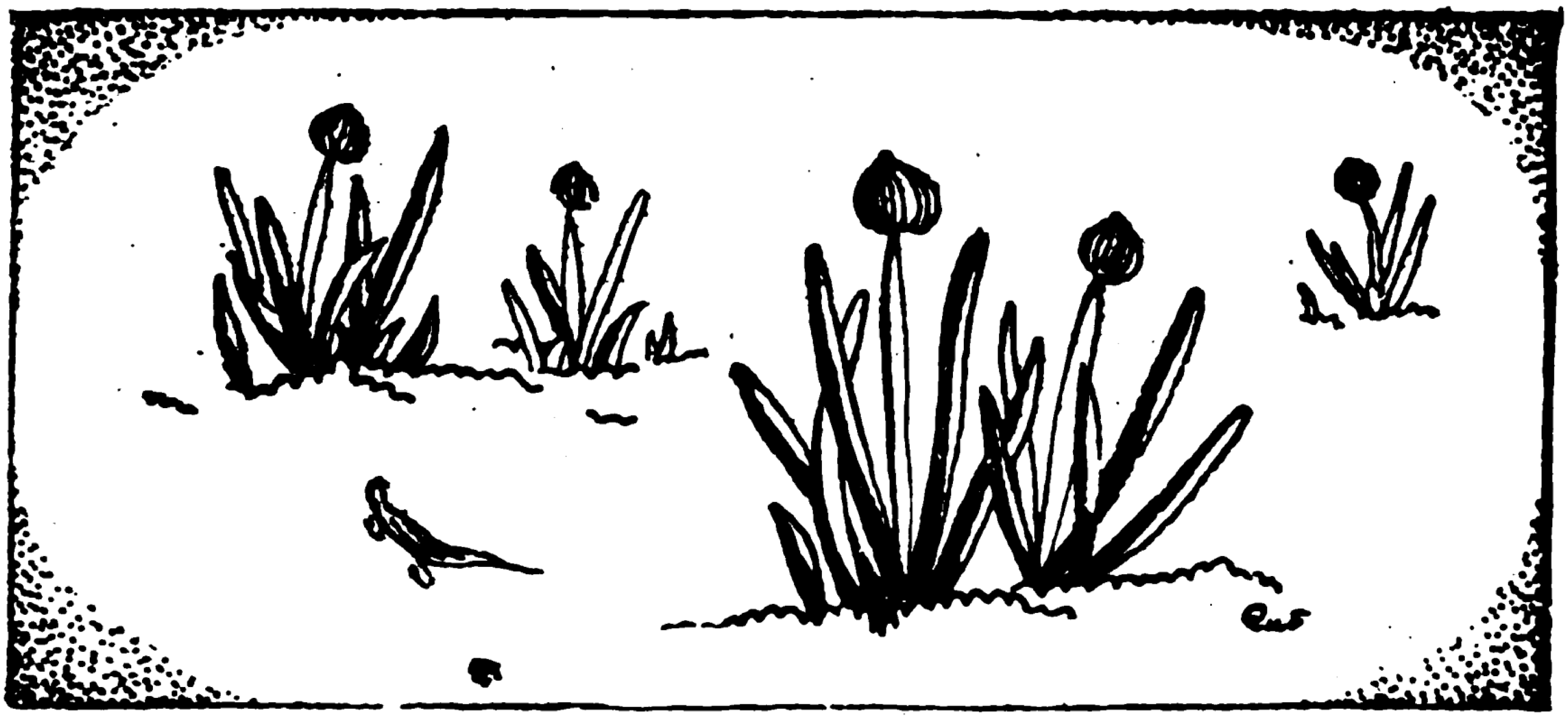
晴天に日光うけて
平氣で立つてゐる
家の前の
四本の小さい松
お前は香氣ものだな
うれしいのだらう

○

のどかな空氣
ほがらかな空氣
今の世にそんなものを
呼吸して生てゐるのは
すまないね。
だがつい呼吸する
のどかな空氣、
ほがらかな空氣。

○

病氣のなほりかけの
人類、
お前は餘程よろこんでゐるにちがいない
そして希望をとりもどしたにちがいない。
まだ方々痛む所があるのに
お前は心の底からよろこんでゐるね。……（二三、八、三六）



うすぼんやりのお咲（懸賞小説）

草川信子

十一月なかば、瀬戸内海沿岸の在は、一面に明るすぎる程に晴れ輝いて居た。お咲の目には、燃えるやうな眞赤なダリアや雁來紅が、またしても焔のやうに見えた。

こゝは東京ぢやないんだ。あれはとうにおしまいになつた事なんだ。と思ひ直してみたが、九月一日以來、紅いものを見るとすぐ火事を聯想する妙な習慣が、お咲の少し鈍い頭からまだぬけずに居るのだつた。そして恐ろしい光景がまたいやといふほどはつきり描き出されさうになつた。

何もかも忘れて、地震も火事も、それに續いた出來こともみんな忘れてしまつて今日から人の妻になるんだ。

お咲はさう思つて、強いて心を落ちつけて何も思ひ出すまいとした。

欽哉とお咲の結婚式が、廣島の町はづれの牧師の家で、きはめて簡單に、可哀相

な程お粗末に、今始まつた所だつた。

お咲は、室に飾られた赤い花を見て居るのだつた。

お咲は、氣を落ちつけるために、式の濟むまで、もう赤い花の方へ目をやるまいときめた。今は大事な時なんだ。彼女は何といふことなくそんなひきしまつた氣分になつた。

式が進んだ。

お咲は欽哉の手をとつた。

『我この男に嫁ぎ――』

牧師の聲が太く靜かに響いた。

お咲は下を向いたまゝ少しふるへる聲で

『我この男に嫁ぎ――』と牧師の後をつゞけた。

『――すこやかなる時も、病める時も――』

『――すこやかなる時も、病める時も――』

お咲の少しふるへる聲がいかにも可憐にひゞいた。

指環がお咲の指にはめられ、ともかくも式が無事に濟んだ。

たゞお咲だけがますます不安になつて來た。

赤い花の方に目をやらないことにしたお咲は、式の終るまで自分の腹部ばかり見つめて居た。それは周圍の人たちの視線が皆そこに集まつて居るやうに思はれたからだ。その腹部を見る人は誰も彼も、お咲の心を苦しめて居る秘密をすぐに感付くやうに思はれたからだ。

地震と火事、とそれに續いたお咲のその出來ごとと——。それはもう世界中の人が知つて居る。お咲はそんな氣がしてならなかつた。

海の色を思はせる青味がかつた着物の所々に出來た小さな皺が大小の波のやうに見えた。その中の一つの波が丁度腹の所でいやに高く膨れ上つたかと思ふと、可愛らしい赤兒の笑顏が波の上に浮いたり、それがゆがんだ醜い泣き顏になつたり膿と血でたゞれた汚い顏になつたりするのだつた。その顏はいつの間にかだんだん國雄の顏に變つてゆくやうにも思はれた。

『いつたいお前は誰と結婚したんだ。お前は男でさへあれば誰でもいゝんだらう、神の前でキリストの名によつての神聖な誓ひも何もあつたもんぢやない』

その顏がニタニタ笑ひ作らさう言つたやうだつた。

『でもかういふ風に運命をはこんだのは私ぢやないんだ。私はどうすることも出來なかつたんだ。かういふ風にしたのは神なんだ。こんな式は人間同志の小刀細工で神聖でも何でもないんだ。』

お咲は自分をなぐさめてみた。

『何といつたつて己の方がその男より先にお前を自分のものにしたんだぞ』

冷笑を浮べた國雄の顏が力みかへつて消えた。又もとの大波小波がゆらぎ、それはすぐに何事もない小さな着物の皺におさまつた。

こんな息苦しい幻影になやまされどほしだつたお咲は、どうやらかうやらまちがひもなく式が濟んだ時、ほつとして自分と並んで立つて居た欽哉の顏を見た。欽哉はまだ恐ろしい程眞面目な顏をして居たが、牧師が白い式服を次の室に脱いで

『ヤー、おめでたう』と勢よく言ひ乍ら踊つて來た時に、やつと安心したやうにお咲の方を見た。いつもより青く引き緊つた顏が、黑い紋付の羽織によくうつつて、お咲には何か神々しいものゝやうに思はれた。

二人は意味もなくたゞ目を見合せて微笑した。

それからお咲は又自分の腹部を見た。彼の女は一寸の間でも目を放すと、その間に異常な變化がそこに起るのではないかと思つた。しかしお咲の腹部は何の異常もなくいつもの通りの大いさに着物に包まれて居た。

一同が別の室で祝ひの菓子をたべたり、紅茶を飲んだりして休憩した。

少しキョトンとした無邪氣なお咲の樣子は可愛らしくはあつたが、何處となく間がぬけて物足りなくも見えた。けれども欽哉はお咲のそのぼんやりとした所が大好きだつた。

まるでロシア人のやうな體格の、怖い顏をした牧師も、やさしさうなその細君も、神經質の欽哉も、彼の友人たちも、誰一人お咲の腹部などに目をつけて居る人はないことを知つて、お咲は急に陽氣になつた。

周圍の人たちが自分を處女と信じて、神の前に此の結婚を祝福してくれる氣持を、自分が當然受けていゝやうな虫のいい氣分になつてしまつた。お咲は神だの信仰だのといふことについて、まだ一度も眞劍に考へたこともないし、又考へて見たくもなかつた。ずつと幼い昔、何も知らずに洗禮を受けてしまつた。大きくなつてお咲は別にそれを不平にも幸福に思はれなかつた。そんなことはどうでもいゝやうに思はれた。

お咲がまだ五つ位の頃――。

外にはまつしろに雪が積つて居た。

お咲の前に一人の男が立つて居た。その男の年も顏ももう覺えては居ない。たゞその黑い着物とうめくやうにつぶやいた聲だけが、氣味わるくいつまでも心にこびりついて居た。

地の底へひつぱりこまれるやうな歌の聲がまはり聞えて居た。お咲はその歌の調子があんまり沈みきつて居るので氣持がわるくなる程だつた。彼の女は幾度か母の手から逃れやうともがいたが無駄だつた。

お咲の頭の上につめたいものが流れた。

誰が何を頭の上からかけたのかそれさへ覺えて居ない。

お咲を抱いて居た母や親の手がその時一層強く彼の女を抱きしめたやうだつた。

お咲は早くもその窮屈な所から逃げ出して、自分勝手に遊びたかつた。幾度か身をもがいたが母は放してくれなかつた。

お咲はそこで泣いたかどうかそれも覺えない。その後のことも知らない。その前のことは勿論知らない。くはしく知つて居るその母は今もう生きて居なかつた。

その夜も時々お咲は母に手をひかれて、陰氣な歌を歌ふ人たちの間にまぢつて居たことを覺えてゐる。立つて居たか坐つて居たかそれさへ覺えて居なかつた。

歌がやんで急にひつそりと靜かになる時があつた。すると誰か一人がブツブツと低い聲で何か言ひはじめて、母やその他の人たちはまるで泣いて居るやうな格好をして居るのだつた。そんな時はお咲も泣きたくなつた。

お咲は育つた。一人で日曜學校へ行くやうになつた。

母親に手をひかれて夢の樣に經驗した陰鬱な、おさへつけられるやうな出來ごとの意味が、お咲にだんだんはつきりと分つて來た。

お咲はまた育つた。

男といふものゝ顏をよく見たこともなかつたお咲は、キリストの繪姿が美しいといふことをぼんやりと意識するやうに

なつた。
お咲はキリストの繪姿をヂツと見つめて居るのが大好きになつた。
『自分の好きな男のために』そんな氣分で、彼の女は度々教會の集りに出席した。お咲が、教會に集る男たちの中に、もしやキリストに似た人はないだらうかと、細かい注意をはじめるやうになつたのは、つい二年程前からのことで、うすぼんやりしたお咲の姿態も、その頃からどこか人をひきつけるやうになつた。
お咲が露骨にうるさくつきまとつて來る武骨な國雄をきらつて、どこか内氣な沈んだ欽哉の求婚に堅い約束を結んだのもその頃のことだつた。
『どうして國雄さんはいけないのかね』と、父にきかれてもお咲はたゞだまつて笑つて居たが、實は『欽哉さんがキリストに似て居るから』と、思つたからだつた。
お咲の身體は今年になつてからめつきり發育した。
三月の頃お咲はふと夜中に目がさめた。
ぼそぼそと春の前の雨が陰氣な音をたてゝ降つて居た。しかしその音は秋の雨に聞くやうな淋しい音ではなかつた、たとへば快活な人がわざと陰氣に裝つて居るやうな、どこかに春の賑はしさを響かせて居る音だつた。お咲はその音を聞いて居ると、身體のどこかに今まで動かずに居たものが、むくむくとふくれて來るやうに思つた。
お咲の身體は宵に寢床に入つた時よりも、ずつと暖くなつて居た。彼の女はその柔かな肉つきのいゝ兩脚を、出來るだけ力をこめて、腿から爪先まで。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。自分の肌と肌との感觸ながら、その暖かさと、柔かさとにある心地よさを感じた。彼の女はまた手で強く強く乳房を壓しつけてみた。新しいクツションのやうに壓すに從つてずつと深くはいりこむやうに感じるが、手をはなすとまた元にかへる。

お咲は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

それから彼の女は兩腕を胸に組んでぐいと胸をひきしめるやうにしてみた。それも亦いゝ氣持だつた。

こんな〇〇〇〇〇〇、〇何故二十になるまで知らなかつたんだらうと、お咲は不思議でたまらなかつた。

その後は、度々夜中に目がさめて、こんな種類のたはむれをくりかへしてみた。しかし何だか物足りなかつた。幾度くりかへしても充たされない、空虚を感じた。日がたつにつれてその空虚はだんだん大きくなつたが、どうすれば充たされるかをお咲は全然知らなかつた。

さう云ふことについて、お咲は全く無智だつた。

どうしたら充たされるかわからなかつたお咲の慾望が、九月一日の地震の後で思ひがけなく急激に、しかも婚約の欽哉によつてではなく、大嫌ひだつた國雄によつて充たされることになつた。

九月一日、京橋が一面に火こ包まれた時、郊外から危くなつたお咲の家に第一に馳けつけて、必死になつて働いたのは國雄だつた。

お咲はその時程、國雄を頼もしく、男らしく感じたことはなかつた。遠く廣島に働いて居る欽哉が、すぐに馳けつけることは出來ないとわかりきつて居ながらも、欽哉が助けに來て與れないことが物足りなくて、恨めしくて仕様がなかつた。

燒跡にバラックを建てゝ、そこで商賣をはじめるまで、お咲の一家は國雄の家に立ち退くことになつた。

お咲はその半月ばかりの間に、それまではあれほど拒んで居たことを、不圖した機會に、きはめてたやすく國雄に許してしまつた。春以來どうしていゝかわからなかつた慾望がそれによつて何の苦もなく充たされたのだ。

お咲はそれをちつとも惡いことだとは思はなかつたばかりか、さうするのが、いゝことのやうにさへ思つた。

女學校の教室で、しかつめらしく、形式的に、抽象的に敎へられた貞操などゝいふことについて、具體的のことは何一つお咲にわからなかつた。

あの九月一日、天も地も一度にゆらぎ出した時に、お咲は、『何もかもその大きな力にまかせてしまはう。どうにでもなるやうになるがいゝ。自分がどうしやうたつて、それが何の足にもなるものか』といふ氣分になつたが、國雄の熱しきつたはげしい情熱の前にも、それに似た感じを抱かせられてしまつたのだ。

實際、國雄は何事もお咲を中心にして行動した。お咲はこれまであんなに嫌つたのが濟まなくなつて來た。

『いつまでもこの家に居るのならいゝのにね。もうすぐバラックが建つてまた京橋へ行かなきやならないわ』

お咲は國雄に對する好感で充たされて居る時はこんなことまで言ふのだつた。

『だつて咲ちやんは欽ちやんが迎へに來ればすぐ欽ちやんの方へ行くにきまつて居るんだもの、僕なんか――』

うらみがましいやうな、あきらめたやうな國雄のこんな言ひ草が、何かの調子でお咲をすつかり涙ぐませてしまふこともあつた。

お咲はこれ程に自分を愛し、自分を求めて居る國雄に從ふのは、神の目から見て大きな罪ではあるまいとさへ思つた。

お咲は國雄との關係を欽哉に知らせずに濟めばそれでいゝんだと思つた、欽哉に知れなければ、欽哉が怒つたり、悲んだりすることはないんだ。けれどももし國雄が自分からこの關係を欽哉に話すとしたら――。

その時は欽哉の氣のすむやうにどんなにでもして責められやう。

それがお咲の覺悟だつた。

『誰も惡いんぢやない。仕方がないんだ。』

彼の女はさう思つた。けれども心の底ではお咲はどうしても欽哉の方がほんとうに自分を愛して呉れるんだ、といふこ

とを否定することが出來なかつた。

やがてお咲の家ではもとの場所へ、バラックの店を出した。

丁度その頃から省線の電車が復舊し、また地方からの通信も復舊した。

廣島の欽哉からはお咲の父親にあてゝ、

『こちらですつかり婚禮の仕度をして、十一月になつたら迎へに行くからそのつもりで居て呉れ。今は勤務の都合で上京が出來ないがわるく思はないで呉れ』といふ意味の通信があつた。

お咲は父親からそれを言ひ聞かされた時、當然のことのやうにも、また遠い未來の事のやうにも考へられて、別に嬉しくもなかつた。

だんだん大膽に露骨になつて來た國雄は、お咲がバラックに移つてからは、一週に一度は缺かさずにお咲を誘ひ出してしかも練馬、中野だの、澁谷の小料理家に通つた。鈍感なお咲は何の羞恥も感ぜず元氣で國雄の後について料理家の門をくぐるのだつた。

二人はたいてい中野か澁谷の驛で待ち合せた。國雄が先に來てぽつねんとお咲を待つて居ることが多かつた。電車から吐き出された群衆の中に、ぱつと花でも咲いたやうに派手なあどけない顔のお咲を見つけると、彼は我知らずその方へ歩みよつた。

『今日はどこへ行くと言つて來た？』

『お友だちの所へ行くつて言つて來たわ。』

お咲の家の者は誰も、お咲が國雄を嫌つて居たことを知つて居るので、まさか國雄に會ひに行くとは思はなかつた。

生垣をめぐらした、御料理旅館と書いた門燈のある小粋な家の奥まつた狭い室——。

二人はいつもそんな所へ行つた。
料理家の女中といふものが、皆さうなのかどうかは知らないが、お咲にとつては、こうした家の女中はどれも皆同じやうに親切だつた。
まだ地震の名殘で壁など所々落ちた所もあつたが、二人にとつては、そんなことは何でもなかつた。世間から隠れて二人きりになつて居るのが妙に嬉しかつた。世の中とは全く沒交渉な、いかにものんびりした氣持になつて、めんどうな約束だの義理だのといふものをすつかり忘れることが出來た。
『僕もうこれで死んでもいゝや』
投げ出すやうに國雄がそんなことを言つて、それから二人で、月を見合はせて涙をこぼして居ることがあつた。
何故悲しいのかお咲はちつとも分らなかつた。たゞ國雄の樣子を見ると、とめ度なく涙が流れるのだつた。
十月も夢の間にすぎた。
東京は少し落ちついて來た。
お咲は十月に月のものを見なかつた。
十一月になると間もなく欽哉が廣島からお咲を迎へに來た。
『どうにでもなるやうになれ』
さう思つてお咲は欽哉に連れられて廣島に來たのだつた。
とにかく二人の結婚式は無事に濟んだ。
すべてを知つて居て、默つて許してくれたのか。それとも何も知らずに、たゞお咲を信じきつて居るのか、その夜も幸

醜に過ぎた。

お咲はかへつて少し氣味わるくなつて來た。

けれども彼の女は相變らず、

『何もかも神にまかせきつて居るんだ。自分で何一つ支配することも出來ないんだ』といふやうな考へ方を續けて居た。

『いつたい人間には自分のほんとうの夫だの妻だのといふものがきまつて居るんでせうか。もしきまつて居るなら、それをちやんと探し出す力があるんでうか』

お咲は無遠慮にこんな質問をして、牧師を困らせることがあつた。

牧師のあたらずさはらずの返答は、何だかお咲の氣に食はなかつた。

『自分の夫や妻を間違はずに探し出す人は天才なんだ、天才なんてさうやたらにあるものぢやない。だから結婚式なんていゝ加減なものだ』

お咲にはどうしてもそんな風に考へられた。

お咲には、牧師が男と女を夫婦にしたり、人間に洗禮を受けさせて神の子にしたりするのが、潜越に思はれてならなかつた、

平常敎會に行くのをなまけたつて、それは牧師に對して濟まないだけで、神に對しては別に濟まないとは思はなかつた。

實際お咲にとつては、百ぺんの御說敎よりも。あの一ぺんの大地震の力が、しみじみと神の力の偉大さを感じることが出來たのだ。

欽哉と暮すやうになつてから、お咲は以前の出來事をケロリと忘れたやうに思ひ出さなくなつた。

國雄からははがきが一本も來なかつた。

十二月の始め、欽哉が休暇をもらつたので、お咲をつれて久し振りで上京した。

上京して、まだ幾分か震災當時の面影を思ひ出させるやうな光景を見ると、お咲の心には、昔の夢が思ひ返された。

お咲たちは勿論國雄の家へも行つた。

國雄はたゞ沈默して居た。

お咲は廣島へ出發した時、後で國雄が何を始めても、どんな騷ぎになつても、なるやうにまかせやうと決心して居たが何事も口外しなかつたらしい今の國雄の樣子を見ると、當がはづれたやうでもあり、物足りないやうでもあつた。又非常にすまないやうな氣もした。

一週間ばかりの滯在中、お咲は二三度國雄と顏を見合せたが、國雄はその度に、通り一ぺんの挨拶をして、いかにも優越を示すやうな笑ひをお咲に與へるのみだつた。

その笑ひの中の皮肉は、鈍感なお咲にもよくわかつた。

『でも私ばかりがわるいんぢやない』と心の中でその笑ひに答へた。

新夫婦は、ひからびた東京の一週間にすつかり神經を鋭くした。

どこともなくみづ／＼しい南國の冬の生活と、新婚のたのしさを追うために、逃げるやうに二人は廣島に歸つた。

殊にお咲が早く歸ることを主張したのだつた。



亡き妻に書送る

荻原井泉水

お前が、とう〳〵息が絶えてから、もう二日になる。先がた、お前の柩を送出して、ほつとして、私は今、机の前に坐つた所だ。側を見ると、亂れ籠の中には、お前が四五日前に、病院へ行く支度をして揃へて置いた寢間着や手廻りの物などが、そつくり其儘はいつて居る。私にはどうしても、お前が永久に去つてしまつたとは思はれない。勿論、知性の上では、さう思はない譯には行かないが、感情の上では信じられないやうだ。病氣とは云ふものゝ、其朝までは元氣好くしてゐたお前が、其夕方には此世の人でないとは、どうして信じられやう。其晩はいつものやうに、お前の床に並べて私の床を敷いて寢た。私が原稿の爲めに夜更しをして、獨り床にはいらうとする時、お前はよく、ふつと目を覺まして、「今おやすみなの、何時、十三時でせう」と云つたやうに、此時もお前は私に言葉を掛けはしまいかとさへ思つた。然し、其枕元に灯つてゐる蠟燭と線香と、お前の顔に掛けてある白い布とが、

何といふ惡魔の惡戯であらう。私は幾度か其布を取つて見た。お前の顏はほんとうに、すや〳〵と眠つてゐるやうだつた平生はあれほどに苦しみ續け、悶えぬいて、實に苦惱の一生であつたと云つてもいゝお前が、今はこれほど安らかな顏をして、如何にも安心しきつたといふ樣であるとは――。平生、お前はよく惡い夢を見てはうなされた、其時で私が氣付いて見ると、お前はきつと胸の上に手を載せてゐるので、そつとおろしてやるのだつたが、其手を今はしつかりと胸の上に組合せてゐる、お前が事切れて後に、其手を組合せてやつたのはやはり私だつたのだが、其時はもうお前は何も知らなかつたらう。

おゝ、私は痴愚のやうだが、お前と再び逢ふことが出來なくなつたものとは、どうしても思はれない。そこの亂れ箱を見ても、お前は今、遠くの病院へ行つてゐて、私はこれから、お前の殘して行つた物を持つて訪ねて行かねばならぬやうな氣がする。一昨年、お前がお產の後に病院へはいつてゐた時、私は訪ねて行く度に、うちで書いて行つた手紙を渡しなて來る事があつたね。それは、看護婦などが居る所では口で話しにくい事もあつたし、又、口よりもペンの方がこまかい心持を傳へることが出來るやうにも思つたから……。私は今、机の前に坐ると、物に憑かれたやうに、ふら〳〵とペンを採つて、此手紙を書初めてしまつたのだ。お前に宛てた此手紙をお前が讀む事の出來ないのは知つてゐる。でも、私は是を書かないでは居られないのだ。何處かふしぎな所で、是がお前に通ずるやうな氣もする。いや、私が是を書いてゐる間は、お前といふ對象が何處かに實在してゐるやうな氣がする。さうした氣持が幻想的に私を慰める爲めであるかもしれない。どつちにしても賴りない事だ。然し、お前の位牌の前で、お前が實際に享ける事はないと知りながら、お前の好きな花や果物を供へてやられずには居られないやうに――私は此手紙を書く。

お前の短い一生はほんとに不幸だつた。お前はよく云つてゐた。お前が私の家に來たために私の家を不幸にしたのだと然し、私もたび〳〵云つたやうに其は反對だ、私がお前を招いて不幸に陷れたやうなものだ、どうして私がもつと早く

其に氣付くと共にお前を救ふ事が出來なかつたか。私の無策と無力とは、後になつて如何に悔いても及ばないのだけれども、斯うなるまでは、いまに、いまに、私達の上にも幸福が來るであらう。さもなくては餘りにみじめすぎるとお前も私も考へてゐた。一昨年、お前が非常に遲いが初めての妊娠をした時は、私達の爲めにも、又、所謂「家」の爲めにも幸福の扉が開かれさうに見えた。其の豫期のある間だけでも、お前はせめて幸福らしく見えた。しかも、嬰兒が死んで、其幸福が裏切られると共に、お產後の病氣が再度の妊娠の可能性を非常に少くしたと云はれてから、お前は極度に悲觀し、所謂私の「家」(其頂點には昔風の私の老いた母が居る)の爲めに、と云つて非常に苦惱してゐた。斯んな事は、今更、爰に書くまでもない事だが、其場合でも、私の心の愛の深さ一つで、如何やうにもお前を慰安する事が出來る筈だつたのに、つまり、私の心にあるものが淺かつたが爲めに、お前を苦しむまゝにさせてゐた風であつた。其私は、今になつて見れば全くお前に濟まなかつたと思ふ、と云ふより、私は取返しのつかない大きな罪を犯したやうに思ふ。然し、其場合の私はお前の幸福を開く鍵は、再度の妊娠といふ事より外にないと思つてをり、お前も亦さう信じてゐた。で、お前は好んで病院へも行き、痛い、いやな手術を一度ならず受けた。そのお前の心を考へると涙ぐましくなる。しかも其末に、幸と云はうか、不幸と云はうか、再び妊娠の疑があると診斷され、若し其が異常であれば、何時急に入院手術する必要があるかも知れぬと云はれてから、僅か數日の後に、お前は卒倒した。而して、醫者から其が致命的だと斷言された時こそ、初めて其が妊娠の爲めだといふ事の判明した時だつたのだ。これは何といふ皮肉な自然の運命であらう。それとも、私達が自然の運命に反して、自分に惠まれないものを强て得ようとしたが爲めに、天罰を受けたのであらうか。或見方に依れば、私がお前を死に誘導したのだとも云へる。尤も、お前はよく死にたがつて居た。「死」か「子供か」、其何れかをお前は撰びたがつた。その何れともつかぬ中間に居る事がお前の苦惱だつたのだ。時としてお前の氣分が狂はしくなる折には、私の手で殺してくれ、それが本望だ、ともお前は云つた事があるが……結果に於ては(たとへ私にそんな意志が勿論あらう筈は

ないか）さういふ事になつてしまつたのではないか。さう思ふと猶更、私は取返へしのつかない大きな罪を犯したといふ氣がする。――兎も角、今の私は、淋しいとか悲しいとか云ふ氣持よりも、私が惡かつた、私の心が淺かつた、其爲めにお前を本當に生かしてやる事が出來ず、こんなに若くして死ぬ事がお前の天命だとも知らず、其短い生涯を苦しみに終へしめた事を悔いる心持で一ぱいなのだ。

お前は以前に「淘宮術」で、自分の運勢に就て、二十九までは苦しまなければならぬが、三十になると大さう安らかな境地にはいれる、と判斷せられ、お前自身も其に希望をもち、私も其を信じたかつた。其安らかな境地とは、子供が產れて、「家」の人としても安定を得るといふ意味に、私達は解釋してゐた、實際其より外に解釋の仕樣はなかつたのだが、今にして見ると、此世の凡ての苦勞から離脫して、永眠するといふ意味であつたのか、隨分と是も皮肉な豫言だつたが、やつばり或る「定められたるもの」をお前は負うてゐたのではないか、といふ氣もする。私達は自然をも、運命をも輕んじ過ぎてゐた。何につけても、自分の都合のいゝやうに解釋して、漠然とした希望を以て將來を待たうとした、而して「無常」といふ眞實を忘れてゐた。その淺はかなうつけさは私一人の事だつた。お前は時として、死を眼前に見て居た。お前が餘りにしうねく死の事を口にする時、私は不機嫌になる事すらあつたが、それもお前には或豫感だつたと見える。其豫感を私が少しでも尊重することが出來てゐたらば、私が平生のお前に對する感じも、もつと切なる愛惜の心に深められて居たのであらうに……。此事も、今更私を悔恨に引き入れる。

あゝ、私は思はず愚痴をならべてしまつた。今はたゞ安らかに眠つてゐるお前は、斯んな愚痴などは聞きたくなかつたかも知れぬ。さうだ、私が此手紙の中で、是非お前に話さなければならぬ事はお前の遺言に就てだ。お前は臨終の少し前にも、私に囁くやうな最後の言葉をいろ〳〵云つたが、其前日、お前は冗談のやうに、病院で手術して若し死んだらばと其後の事を云つたね。それは以前に病院に居た時に、お前が云つたのと同じ内容なので、私は腹では「又か」位に思つて

聞いてゐたが、やつぱり其が「遺言」だつたのだね。――御前も知つてゐた通り、お前のお母さんと姉さんと私と看護婦とが、お前の臨終を見守つてゐた。その少し前に、義兄さんと裕ちやんと、鍛冶町の叔母さんとが急を聞いて來てくれたさうだが、大勢の顏を並べると、お前に惡く感ずるといけないといふ姉さんのはからひで皆な歸つて貰つた。その時、裕ちやんは狸坂の下まで行つたが、どうしても歸るのがいやだと泣いたさうだ。新堀町の母へは急變が起つてから後に初めて知らせたのだが、母もあゝいふ病氣で寢てゐるのだから、此不意の事を報じたが爲めに、惡い影響でも與へると困ると思つて、漸次的に、其夜は危篤といふ事を、翌朝に死を傳へる事にした。朝、お前の義兄さんが出直して來てくれた時は葬式の事がさし當り話題になるばかりだつた。其時、私はお前の遺言として、「中野のお寺へ埋めて欲しい、赤ン坊の骨も一緒にして……」を傳へた。すると、お前のお母さんは、「へエ、あれがそんな事を遺言しましたか、あれの氣持にしたらば自分の父親の側へ行きたいといふのでせうけれども、それでは此家とまるで緣を切るやうになります。それにこちらのお母さんが何とかおつしやいますか。赤ん坊の骨はこちらの墓にちやんと納めてあるのに、今更掘り出して移すなんて、其はこちらのお母さんが承知なさりはしないでせう。いくらあれの遺言だとて餘り我儘過ぎます。若し私が前から知つてゐたならば、云つて聞かしてやりますのに……」と云ふのだ。お前のお母さんは、お前が死んだ御父さんや身内の側に眠りたいといふ事を遺言の唯一の理由として考へてゐるらしいが、お前の眞意がさうではなく、女らしい、寧ろ潔癖なお前らしい道德的な感情に起因してゐる事は、お前の平生の言葉からも、又、お前が私の身の爲めに、其に添へても一つ別な遺言をした事からも、私には解りぬいてゐるが、其事を私が說明する場合でもなし、必要もなし、私は其氣分にもなつてゐないので默つてゐた。お前の義兄さんは、然し、其事を云含めて、「つまり將來の爲めを思つて、さういふ遺言をなさつたのでせうが、正當といふ點から云へばこちらの家の墓に入るのが正當でせう、けれども結局はこちらのお考できまる事です。又、こちらのお母さんの御覺召もあるでせう」と云ふのだつた。私の考としては、一體、祖父母や父のはいつてゐる

其墓のある所を私は好んでゐない、そこは町中のごちやごちやした所にあつて、地域も狭く窮屈さうだ、私自身は何處か波音の響いて來る砂山の松の下にでも埋めて貰ひたい、と思つてゐるところへ、お前が先に行つてしまふ事になつたのでそれならば私は獨り何れ自分の墓場でも尋ねたいと今は考へてゐるので、お前を私からも離し、且つお前とは生前親しみのない私の祖父母達の所へやるといふ事は淋しく思はれた、其上、お前の遺言でもあるのだから、遺言通り中野の寺がよからうと考へた。然し、私の母に相談した上で決定する、といふ事になつて、私が新堀町へ行くことにした。

私は毎日のやうに往來してゐる新堀町への道を、此日は俥を走らせたのだが、家の近くへ行くと、瞼が熱くなるのを感じた。老いきつた上に長病で寢てゐる母が、此時は既に事實を知つてゐる筈だが、どんなに力を落してゐるかといふ事が、よく解つてゐた。お前が初め私の家へ來た頃こそ、私の母の氣分や言葉がお前の苦惱の種になる事があつたに違ひない、又その爲めにお前がたび〳〵或決心をした事もあるに違ひないが、病氣以來の母はすつかり性格が變つて、お前に死水をとつて貰ふのを願つてゐた事はお前も知つてゐる通りだ。だから、お前も臨終にさし迫つて「新堀町へよろしく」といふ言葉を忘れなかつた。其言葉を私は、母のベツトに身を寄せながら傳言した。お前の死因が姙娠にあるといふ事をも母に明かした。お前と同樣に、ひどく子供を望んでゐる母に、此皮肉な事實を告げる事は、私にとつて實に苦しかつた。母はほんとうに泣いてゐた。「先へ死んでゆくものはいゝが殘る者はつらい」と母はたゞ其だけ云つた。それから、私はお前の遺言を話したところ、母は「なんでも云ふ通りにしておやり」と云つてくれた。赤ん坊の骨を移す事をも念を押したが、其にも母は異存を云はなかつた。お前も實に不幸だつたが、私の母もほんとうに不幸だと思つた。ずつと以前には、お前の爲めに私は自分の母をうらめしく思つた事もあつたのだが、今はお前の爲めに私は母に感謝したいとさへ思つた。これで、お前の遺言通りに凡て決定した譯になつた。然し、私の家の過去帳からお前を削るといふのは不條理であるし、不自然でもあるので、お前の遺髮だけは私の家の寺へ埋める事にした。而して告別式の讀經や供養も萬端、私の寺の方で行

ひ、初七日に遺骨を持つて、小野へ行く事にした。其日に赤ん坊の骨壺を取出す筈だが、其には警察署から改葬許可を得ねばならぬといふやうな面倒がありさうだが、お前の意志通りにはしてやるつもりだ。其につけても、お前が如何に、あの死んだ赤ん坊を愛惜してゐたかといふ事が考へられる。私が赤ん坊を惜んだ心よりも、幾十倍か强く、お前は惜んでおゐたのだね。お前は今自分も死んで、赤ん坊を抱けるといふ事が、せめてもの喜びなのだらう。あの子を生かして置いて、前に抱かせたかつたね……。又、愚痴になるからもうやめる。

其晩は通夜した。之もお前の遺言通りに、ほんとの親身の者だけにして、近所の人達が來てくれるといふ好意も强て斷つた。お寺から通夜僧が來てくれた。戒名を書いた紙を持つて來て、白木の位牌の上に貼つた。「德泉院妙行日貞信女」、お前もとう／＼さういふ名前にされてしまつたのか。戒名といふものは、ほんとに親しみのないものだね。——通夜の僧は法華經のうちでも、女人成佛の證を說いた提婆達多品を長く長く訓讀にして誦した。私はその後ろで、じつと聞いてゐたお前の爲めに讀まれた經をお前も聞いたであらう。其經文の意味は娑竭羅龍王の娘が善く衆生諸根の行業を知つて陀羅尼を得、慈悲仁讓、志意和雅にして能く菩提に至つたといふのを、智積菩薩が之を疑ひ、釋迦如來でさへもあれほどの難行苦行をされて後に初めて菩提道を成じられたのに、此一女人が左程の修業もせずに正覺を成ずるとは信じ難い事だといふ龍王の女がそこに現はれて、兎も角、自分が解脫したのは眞實だといふ、そこに舍利弗も居て、どうも自分にも女人の成佛は疑はしい、女身は垢穢にして法器でない、且つ女人には五つの障がある、と述べる。其時に龍王の女は一つの「寶珠」をもつてゐた、其値は三千大千世界に等しいものだが、其を捧げて世尊に獻じて、世尊が之を受けた。龍王の女が智積菩薩及び舍利弗に云ふに、之を見られよ、自分が持つてゐた唯一の「寶珠」を世尊が親しく納受された、此間にはめんどうな道程もなく、又、女身男子の差別もない、此事が眞實であるならば自分の成佛も亦眞實である、と云ふや、忽然として身を變じて、菩薩行を具し、寶蓮華に座し、等正覺を成じたといふ話である。此の譬喩的な、といふより象徴的なお經は

私には大へん有難く思はれた。お前の死んだ赤ん坊は「寶珠水子」といふ戒名を得て居た。さうだ、此子こそお前の有つべき唯一つの「寶珠」であつたのだ。其寶珠の値はお前にとつては三千大千世界にも等しいものだつた、其をお前は佛に献じてしまつたのだ。而して今こそお前は、忽ちに身を變じて、佛土に移つてしまつたのではないか。それならば、お前は經文にあるやうに、「卽往南方、無垢世界、座寶蓮華、成等正覺」の佛果を得たに違ひない。お前のこんなにも安らかな——生前はあれ程に苦惱したにも似ず、今は全く滿足しきつたやうな——死顔をしげ／＼と見るにつけて、お前の死は、死ではなくて、ふしぎな國に向つて出發した一つの生だといふ風に私は信じたい。赤ん坊の「寶珠水子」といふ名が決して偶然ではなくて、お前の此の因緣を語つてゐたものだと信じたい。さう信ずる事に依つて、初めて、此悲しい事實に、幾分かの慰めが得られやしないかとも思はれる。

夜が更けてから、通夜の折には、二階で少し睡つて貰つた。私はます／＼眼が冴えるばかりだつた。裕ちやんもふしぎにねむがらずに、姉さんに抱かれて、眼をくり／＼させながら、珍らしいもの〻やうに御經を聞いてゐたが、床にはいらせた。それからお前のお母さんと姉さんと義兄さんと鍛冶町の叔母さんと私との五人で、柩の中に入れる爲めの法句を書いた。こちらの寺が法華宗で中野の寺が淨土宗なので、「南無妙法蓮華經」と書く者もあれば、「南無阿彌陀佛」と書く者もあつた。「どちらにしても同じ事ですわ」など〻云ひながら、澤山書く程好いといふので、半紙に細かい字でびつしり書いて、さうした紙を何枚かづつ各自に書いた。もう夜が明ける頃から、カーテンを引寄せて見ると、黑い美しい空には大きな星が澤山、ぎら／＼と光つて居た。

いよ／＼、柩に納めるといふ時、私はお前の肉體を最後として抱いた。其時、お前の顏は大理石の彫像のやうな白さだつた。その重さも大理石の重さだつた。こんなに確かに、私はお前の死に觸れてゐながら、お前を柩に納めてしまふことが非常に惜しいやうな、いや不道理のやうな、後になつて蘇生つて來はしないかといふやうな、奇妙な感じがしてならな

かつた。

告別式の時、來てくれるべき人は大抵來てくれた。是もお前の遺言の一つで、廣く知らさぬやうにとの事だつたが、生前にお前が世話になつた人などには成るべく知らした。其が禮であり、さうした禮にはきちようめんなお前だつたから……。然し、其等の人に一緒に逢ふにつけて、お前の生活の夫々の時代と場所とが、一度に追憶の波濤となつて私の胸に迫つて來た。又しても、此十年の間のお前の苦惱がまざ〳〵と明らかになつて來た。私は其等の人に禮をかへしながら、お前の棺側に坐つて、最後の棺前で誦せられる經を聞いてゐた。けれども、如何にありがたい經文も、お前をほんとうに浮かばせるものにはならないらしく、此時の私には思はれて來た。——さうだ、ほんとうにお前を浮かばせるものは唯一つしかない。それは私自身がお前に對して犯した罪の懺悔をする事、而してお前の苦惱の一生を一篇として書く事だ。其に依つて、お前の生涯は「苦惱の藝術」として、初めて清淨なるものになるであらう。此の藝術化を外にして、お前が菩提を成ずる道はない、さうだ、私にとつては不馴れな道だけれども、其内に私はお前の生涯を一つの長篇として書かう。と、其時堅く心に思つたのだ。

頭が惡く冴えてゐる爲めか、いろ〳〵の事が考へられたり、責められたりするだけで、ほんとうの淋しさはまだ私にのしかゝつて來ない。斯うやつて、机に向つてゐると、家の內は實に靜かだ、弔問に來た親戚の人達も皆引取り、お前の姉さんや義兄さんは柩について桐が谷に行つてしまつたし、下の座敷にはお前のお母さんが獨り殘つてゐてくれるのだが、私には、お前がいつものやうに裁縫をしてゐる布地の擦れる音が聞えるやうな氣がする。然し此家も、お前が居なくなつた後では、私獨りでゐたとても仕方がない。私はいづれ此家を捨てゝ、ひとり旅にでも出よう——。何處かの海に近い宿で、冬の夜の浪音を聞きながら……、其時になつて、初めてほんとうの淋しさが、私の心にのしかゝつて來ることであらう。（一二、一〇、三〇）



春（童話劇）

竹久夢二

時

ある春の晴れた朝

所

花咲ける丘

人物

少年（十三歳位）

少女（十一二歳）

先生（小學教師）

獵人（若き遊獵家）

兎（十二三歳少女扮裝）

舞臺は、櫻の花など咲いた野外が好ましいが、室内で裝置する場合には、緑色の布を額緣として吊り、地は、草の芽を思はせるやうな、黄土色の布か、緋毛氈を敷



童話劇"春"舞臺面

きつめる。背景は、神經質な電氣の反射を避けるため、空も山も花も草も、それぞれの色の布を貼りつけたものを用ふ。すべて舞臺の裝置も、演出も、神經的でなく、子供の本能と情操とが想像した、愛らしい朗らかな春そのものの創造であること。

扮裝は、少年少女は平常着のままでも好い、その他は子供の空想の産物で好いが、先生は威嚴を損じない程度にのどかな人物であること、獵人はづんぐりしてゐて意氣なあはてもの、兎は白フランネルのマスクを被る。

第一景

幕が明くと、舞臺裏から左の唱歌が、だんだん近づき、舞臺下手から少年少女が歌ひながら登場。

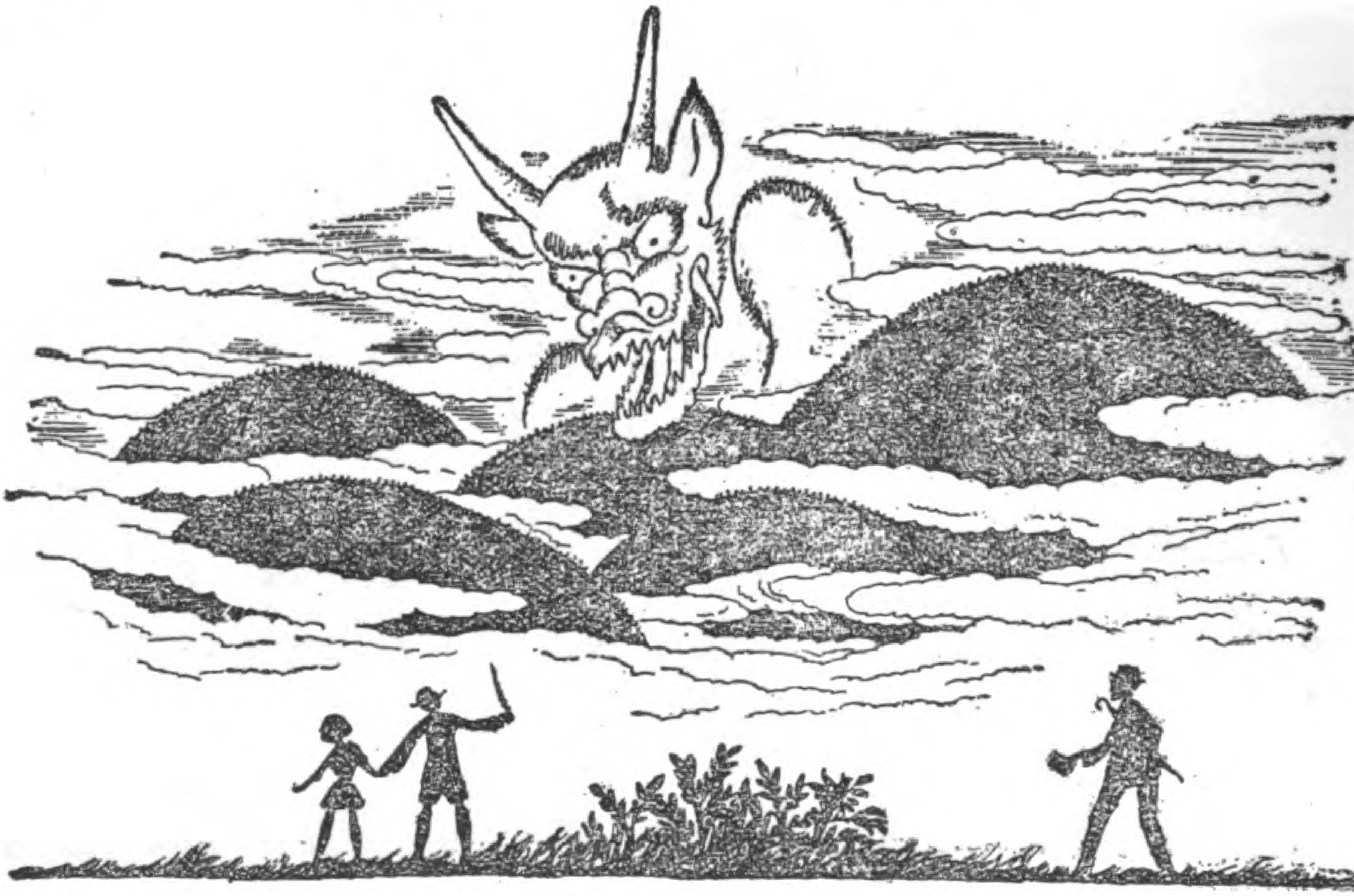
さくら　さくら
やよひの　そらは
みわたす　かぎり
かすみか　くもか

少年少女が登場すると、舞臺裏でもその唱歌を少し遅らせて、山彦の心持でうたふ。

少女「おや！　兄さん、誰か山の向ふでも歌つてゐてよ」

少年「うそだよ、きつと夏ちやんの空耳だらう」

少年歌ひつづける。少女耳をすます。



にほひ　ぞいづる
いざや　いざや
みに　ゆかむ

少女「いいえ兄さん、よく聞いて御覧なさい……ほらね」
少年「ああ、ほんとだ、誰だらう」
少女「ね、兄さんもつと何か言つて御覧なさい」

さくら　さくら
やよひの　そらは

少年歌ひながら首を傾く、舞臺裏でも歌を眞似る。

少年「誰だ！」
山彦「誰だ！」

少女おどおどと少年に寄添ふ。

少年「眞似をするのは誰だい」
山彦「眞似をするのは誰だい」
少女「兄さん、あたし怖くなつたわ」
少年「怖かあないよ。誰かきつと悪戯をしてゐるんだ」

少年勇敢に力みながら

少年「人の眞似をするのは失敬だぞ！」



山彦「人の眞似をするのは失敬だぞ！」

少女「大丈夫兄さん？」

少年「大丈夫だよ」山に向ひ「馬鹿野郎」

山彦「馬鹿野郎」

少女「兄さん。向ふの人きつと怒つたのよ」

少年「さうかなあ」

少年も少し怖氣づき、妹をかばふ。

上手より吉野先生登場

少女「あら先生よ」

少年「あ、吉野先生、こんちは」

先生「今日は」

少年「先生、先生は先刻、山の方で唱歌をお歌ひになりましたか」

先生「いや、歌ひませんぞ」

少年「でも先生、ぼくたちが唱歌を歌つてゐたら向ふの山でも唱歌を歌ひましたよ」

先生「なるほど」

少女「それからねえ先生、あんまり眞似をするからお兄さんが誰だつて仰言ると、向ふでも誰だつて言ひましてよ」



春第一景

先生「なるほどね」

少年「あれは山の婆が歌つたんですか」

先生「はははは、それはね山のお婆さんでも神様でもない、山彦といふものぢや」

少年「山彦がものを言ふんですか」

先生「さうぢや、こちらの聲が向ふの山へ響くと、向ふの山がそれを返してくるのぢや、だからこちらの言ふ通りに向ふでも答へるのだ」

少年「だからぼくが馬鹿野郎つて言つたら向ふでも馬鹿野郎つて言ひましたよ」

先生「さうだらう。だからこちらで何かやさしい事を言つてやれば、向ふでもやさしい事を返してくるのぢや」

少年「おもしろいなあ」

少女「兄さん、何かやさしい事を言つて御覧なさい」

少年（山に向ひ）「こんちは、ごきげんはいかがですか」

山彦「こんちは、ごきげんはいかがですか」

少年少女顔を見合せて笑ふ。

少年少女「あなたは好い方ですね」

山彦「あなたは好い方ですね」



先生「どうだね、山彦は正直だらう。どれ私は行かう、仲よく遊んでおいで」

少年「先生、さやうなら」

少女少年「さやうなら」

先生下手へ去る。

第二景

舞臺は前景のまま、少年は木の杖など振りて歩きまはる。少女摘草などする。

この時舞臺裏から左の歌が聞える。

ころ　ころ　小山の　小兎は

なぜに　ころ　ころ　お泣きだえ

お母さんがないか

實がないか。

お母さんは　そばに　ゐなさるし

木の實は　お山に　あるけれど

九十九人の　獵人が

九十九谷を　とりまいて

母子もろとも打つわいな。



少年「山彦がまた歌ひ出したよ」
少女「さうね」（耳をすます）
　歌が終ると、下手から一匹の兎が呼吸を切らしながら走つて出る。
兎「助けて下さい、怖い獵人がわたしを撃ちにくるんです」
少年「その獵人はどこにゐるの」
兎「あれあの坂をいま上つてます。もうぢきここへ來るでせう。どうぞわたしを助けて下さい」
少女「まあ、可哀さうね。兄さんどうしたら好いでせう」
少年「よし、きつとぼくが助けてあげるよ」
兎「ほんとに、坊ちやんありがたう」
　獵人打方の構へに銃を持つて、下手より急ぎ登場。
少女「あら兄さん」
少年「あ、來たな」鋭く少女に「はやく、かくして、かくして」
獵人「坊ちやん、兎を知りませんか」
少年「なんですか」
獵人「兎を知りませんか」
少年「知つてゐますよ、おぢさん」



この對話の間に、少女は兎をほどよき叢にかくす。

獵人「たしかこの邊へ逃込んだんだがなあ」（獨語をしながら四邊を見廻す）

少年 獵人の注意を自分の方へ向けるやうにあせりながら 「おぢさん兎の毛は白いんでせう」

獵人「ああ、その白兎、白兎」

少年「耳が長いでせう、おぢさん」

獵人「さうさう耳が長いね」

獵人、銃を杖にして話しだす。

少年「ね、おぢさん、兎の尻尾は短いでせう」

獵人「短いとも、これんばかりさ」

少年「それから、前脚が短くて、後脚が長いでせう」

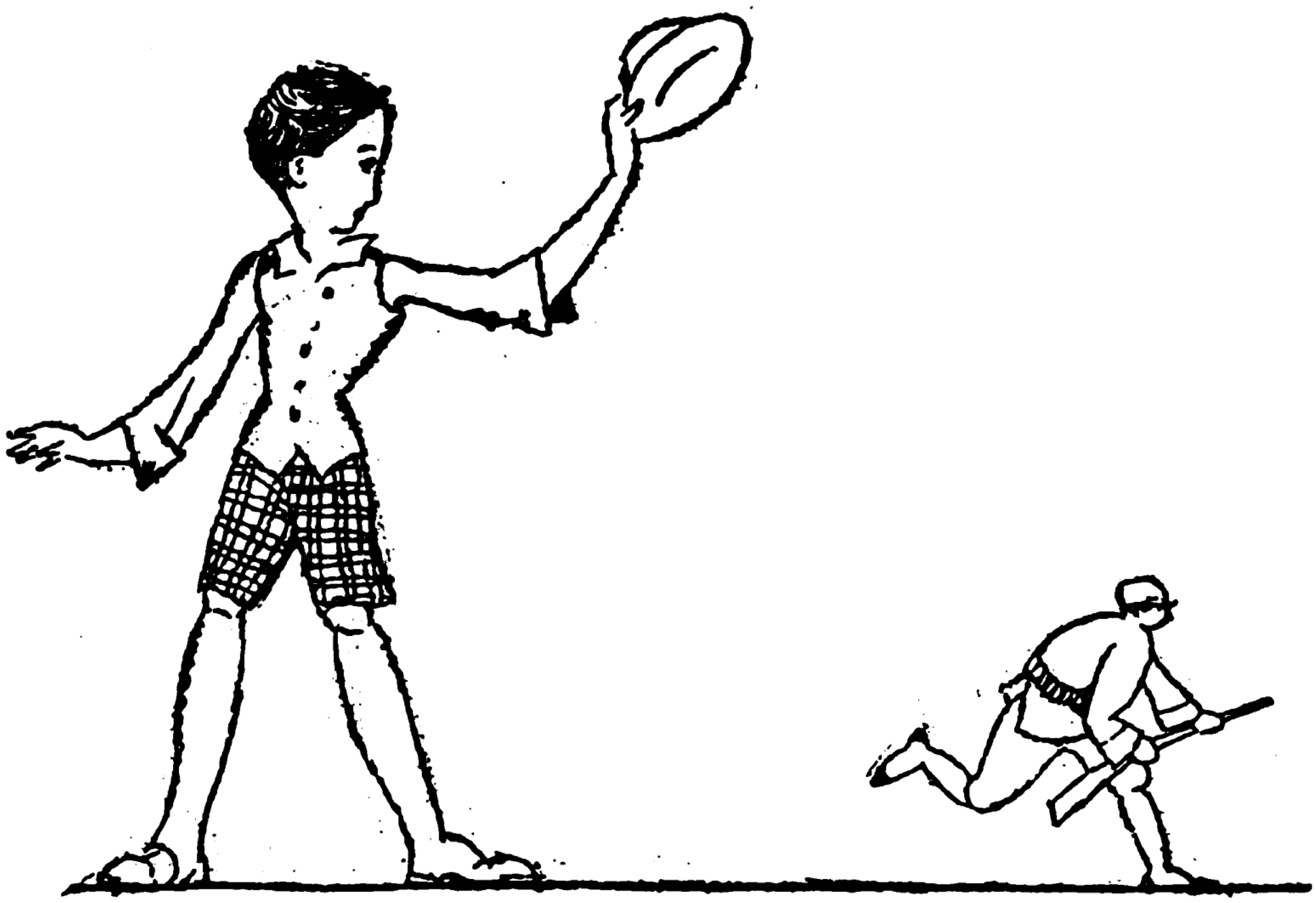
獵人「短くつて、長くつて」 獵人は、自分が何をしてゐるかを思出して「坊ちやん、ぼくはその兎を探してゐるのだよ」

少年「おぢさん、その兎はやつぱり赤い眼を持つてゐるでせう」

獵人「ぼくは、坊ちやんの博物の復習をしてゐるんぢやないよ。一體この、兎は……」

少年「白兎ですね、おぢさん」

獵人「白兎ですよ。何遍それを言へば好いんだ。そんな事を言つてゐるろう



ちた、氣の利いた兎は、穴の中へもぐつて晝寐をするだらう一獨言のやうに「この子は、よつぽど呑込のわるい子だな」

少年「なあんだ、おぢさんは、その白兎を撃ちにきたの」

獵人「さうさ」

少年「だつておぢさんは、いきなり兎を知らないかつて言ふんだもの、だからぼく、學校の復習をしちやつたのさ」

獵人（目をぱちくりやつてゐる）

少年「ああ、その兎なの」

獵人「さうさ」

少年「その兎なら、もうよつぽど遠くへ逃げました。あの道の先の、ほら左側に赤松があるでせう」

獵人「あるある」

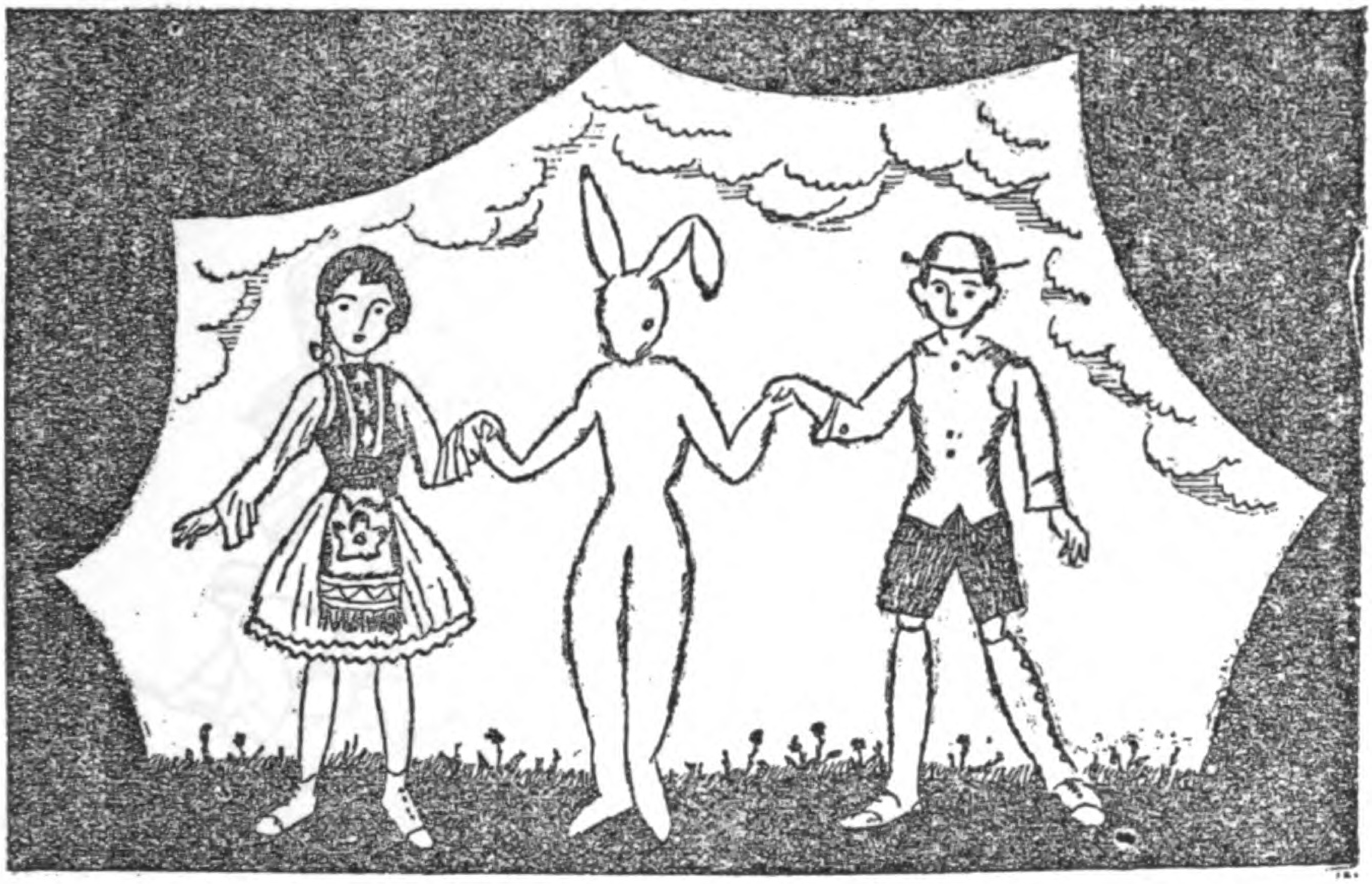
少女は獵人の方を見て笑つてゐる。兎も出てきて見てゐる。

少年「あすこを左へ曲つて、櫻の木が見えるでせう」

獵人「ああ、見えるね」

少年「あの木から一本、二本、三本、四本、五本、六本、十三本目の櫻の下へかくれましたよ」

獵人「いや、どうもありがたう」



獵人あたふたと、上手へ走つてゆく。

少年「おぢさん、早く走らないと、また兎が逃げますよ」

少年兎に近づきながら「萬歳 萬歳。兎さんもう出ても好いよ」

少女「ずゐぶん心配したわ」

兎「やれやれ、ほんとに危い所を助かりました。どうもありがたうございます」

少女「よかつたわね」

少年「うまくいつたね」

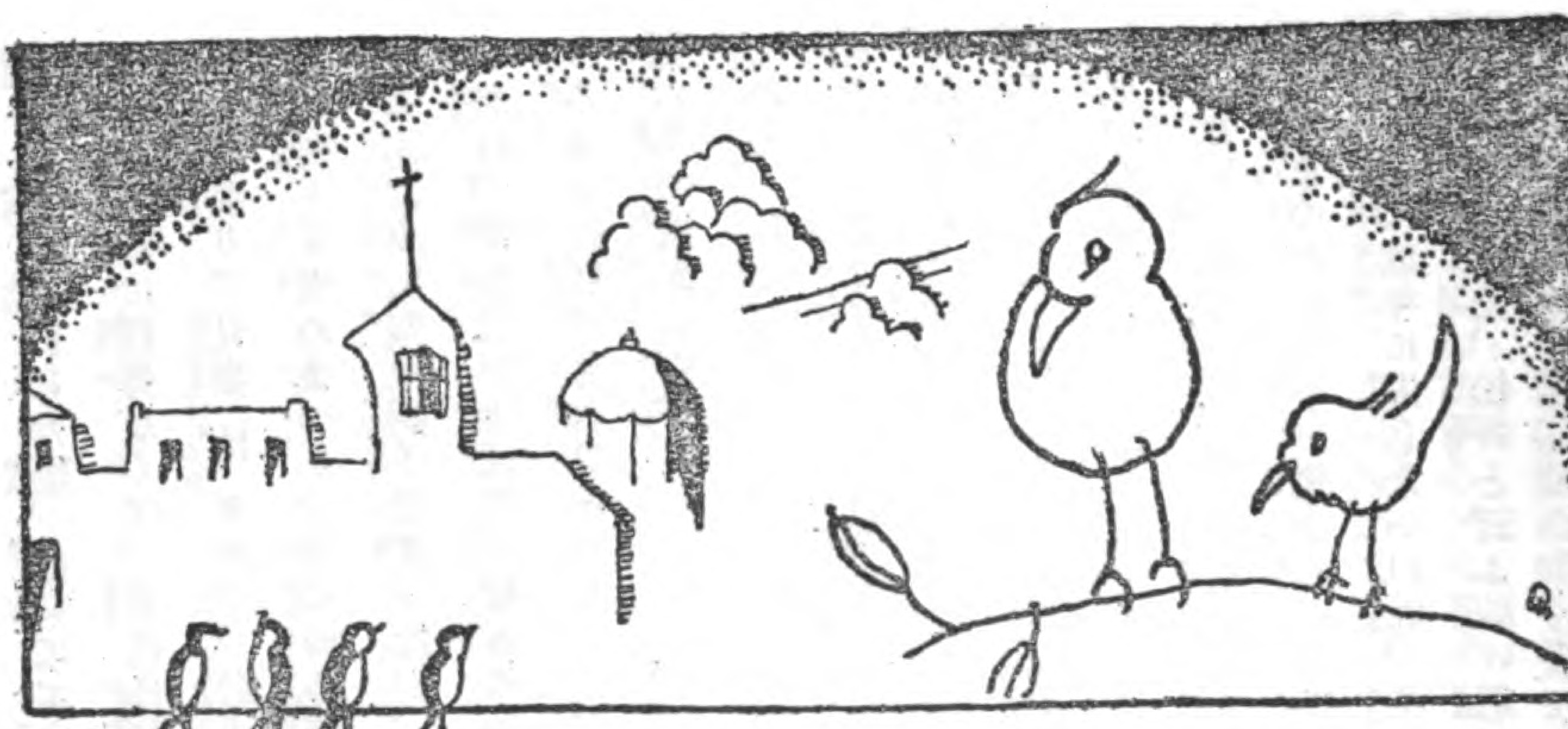
少年を上手に、兎をまん中に、三人手をつなぎ舞臺の前へ進み

兎の挨拶

御見物のお孃さま坊ちやま方、わたしはまあ何と言つて皆樣にお禮を申して好いやら、あんまり嬉しくて、申上げる言葉も知りません。

これはみんな、この賢いお坊ちやまの勇氣と、親切なお孃さまのお蔭です。けれどあの草むらの陰にかくれてゐる時、皆樣はほんたうにうまくわたしをかばつて下さいました。もしも皆樣のうちの誰かが「兎はあそこにかくれてゐるよ」とでも仰言らうものなら、わたしはまあどうなつてゐたのでせう。お蔭樣でわたしはこれから懷しい親や兄たちの許へ歸つてまゐります。皆樣もどうか御機嫌よろしく、ではさやうなら。

（幕）



百年の戀

里見弴

一

日本畫家、弓山閑鄕の、七日頃になつて屆いて來た年賀狀の末に、
「貴兄には、十年以前、祇園の舞妓何某に繪日傘を贈られし御記憶ありや。篤と御勘考の上、若し御心當りも御座候はゞ、早速の御入洛偏に御勸誘申上候」
とあるのを見て、暇人の杏誠吾は、すぐ返事を書く氣になつた。賀狀は、印刷した葉書で、去年のうちに出して置いたので、常用の五雲紙を展べ、今時の若い者に似合はぬ逹筆で、冒頭からその件に就いて書き出した。
「扨も思ひもかけぬ御方より、思ひもかけぬことを承はるものかな。妓名はうかと御洩し申すまじ、さりながら、面影いまに忘れず、色は、京女には珍しくも淺黑き方にて、眉のかゝり、目もと、鼻筋までは型の如き京風なり。即ち眉は東山の圓味ゆかしく、目もと切れ長くしてやゝ吊れり。鼻は穩かに厚味ありて、一歩を誤れば「團子」と譏られんも計りがたけれど、口もとに至つてはやゝ京好みならぬ締りの强さ、いと利口げに見ゆべし。總じて顏の下半、口、顎、みな小さく、玉子ならば

尖つた方を下にした形、懇口にて申さば楔型なり。

右人相書に相異なくば、正に日傘の當人にて、拙者十年來の迷夢いまに覺めやらぬ意中の人、いかなる身の上ともあれ飛んで參りて見參仕りたく、武士の情、御引き合せ給はらば、生々世々の御高恩、必ずあだには致すまじ。八雲たつ出雲の神とも崇めまつり、以來御賽錢、奉納金緩怠なく、きつと信心仕るべく候……」

こんな巫山戯た調子で書いたが、その實芯の心持は、もうちつとは眞劍だつた。

杏は、明治三十年代に大藏省に勤めてゐた役人の一人息子で、夙くに兩親に死別れ、三十五にもなる今日でも、獨身のうるさい親類づき合ひとてもなく、亡父の代から住み馴れた牛込左内坂上の古家に、女中と、老つた夫婦ものを置いて、五六萬の遺産で利食をしてゐる遊民だつた。現代の日本畫家の作、謂ふところの「新畫」なるものに、多少の趣味をもつてゐるくらゐのことで、これと云つて金の使ひ道もなく、氣樂も氣樂だが、その代りまた孤獨と退屈とで、ほと〳〵我が身をもてあますやうな時間も可なり多かつた。それには、讀書の嫌ひなことが、大きな原因をなしてゐた。どんな永い汽車の旅にも、講談雜誌はおろか、新聞にも碌に目を通さないくらゐだつた。ものを讀むと云ふことが、書かれた意味を理解すると云ふことではなくて、活字の行列を眼で追ひかけて行くやうな氣がして來る、さう云ふ厄介な性分だか習慣だかをもつてゐた。もしさうとすれば、活字の行列などは、誰の眼にも決して快い筈はないのだ。では、碌な教育をうけたことのない男かと云ふに、東京帝國大學で植物を專攻した理學士だつた。相應洋書も讀みこなすだけの學力もあつて、それでさうなのだから不思議と云へば不思議で、「活字嫌ひ」とでも云ふ一種の病くらゐに考へて置くよりほかはなかつた。

彼がまだ成年に達しない以前、法律上の後見人に立つてゐたのは、亡父の同僚で、質素儉約を通り越して、けちん坊と蔭口を利かれた、松井と云ふ頑固爺さんだつた。十八九にもなつて、いくら當時の金にしても、月の小使五圓止りと云ふのだから、杏も中々骨だつた。その後、後見が解けてからも、財産に關することゝ云ふと、細なところへまで干渉された。

二十二三でそろ〳〵道樂の味を覺えかゝつてからは、顏を合せるごとに小ツぴどく叱り飛ばされるので、松井と云ふと逃げ隱れるやうにしながら、それでも、なんとかかとか誤魔化し〳〵、あんまり景氣のよくない遊びをしてゐた。仕舞には窮餘の一策として、關西から九州方面の大旅行を企て、少し纏つた旅費を引き出し、その實は京都大學へ行つた高等學校時代の友達と一緒に、祇園あたりでいゝ心持にふやけてゐた。日傘を買つてやつたのも、云ふまでもなく、この時知り合つた舞妓の一人なのだ。

その樂しい旅から歸つて來ると、松井の閻魔顏が待ちうけてゐた。特別念の入つた怒り方で、いつになく亡父の棚卸しまで始まつた。——お前の親爺は無能な男で、字を能く書いたゞけが取柄で、どうやらかうやら一生大藏省に喰ひついてゐられたのだ。これが今の時勢なら、半年だつてもたない首なのだ。そのくらゐだから、死んだときには、遺産と云つても、この邸を除けば、一萬かそこらのものだつたのを、今日これだけになつてゐるのは、みんな俺の力だ。その苦心も思はずに、まるで、ひとりでに湧いてでも來た金のやうに、碌でもない遊びに使ひ果さうとする。それアお前の金だから、要らなければ滿に捨てようとどうしようと勝手だが、それではあんまり冥利に盡きると云ふものだ。こゝで魂を入れ變へて、ちつとしつかりしなければ、僅かばかりの遺産でいつまで續いて行くと思ふ。いよ〳〵その日にも困るやうな身の上になつてから、いくら俺をたよつて來たつて、その時こそは知らないぞ。——で、それから金の有難味を、諄々と小一時間も說き聞かされ、五萬の金を、年いくらの利に廻せばいくら〳〵と、面倒な復利の計算を、額を皺だらけにしてちよつと目をつぶるだけで、すら〳〵とやつて退け、お前が大學を出たらすぐ學校の敎師でもして自分の食ふだけのことをして、元金に手をつけずに五十になるまでほつて置いたとしてみろ、分の惡い銀行の定期にしても、その間にこれ〳〵の額にはなつて了ふのだ。もうさうなつたら、一生懷手で遊んでゐても樂に暮せるし、暮しやうによつては、まだその上にも刻々と殖えて行く、どうだ、それを考へてみたら、うかとは金も使へないものだと思ふだらう、——大體さう云つた意味のお談義だつた。

成程おそろしいものだ、とは思つたが、吾も年齢は若し、おそめと云ふ繪日傘の女の幻が目の前にちらついてゐる最中だつたので、馬耳東風と聞き流して了つたが、その後まもなく大學を出てから、就職口のことやら何やかや、永年の蟠りが破裂してたうとう松井の爺さんと喧嘩をして、それぢア もう俺は知らんからどうともお前の勝手にせい！ えゝ、勝手にしますとも、もと〳〵あたしのものだ、今が今あなたの目の前で燒き捨てやうとどうしようとほつて置いたらいゝでせう、よし、その口を忘れるな、まだそれほど耄碌はしません、この恩知らず！ ば、ば、馬鹿野郎！ で、疊を蹴立て蹴つて行つたきり、永の關係が絶えてみると、口にこそ云はね、身よりもたよりもない吾には、俄に浮世の風がしみ〴〵と冷たく感じられたのだ……。 よそごとを考へながら、たゞしびればかりを苦しがつてゐた頃には、屁とも思はなかつたお談義が、或る郊外の中學校に、動植物の教師として通ふ雪の朝、雨の夕、木枯のなかで汚穢屋車の行列をやりすごす道ばたに、生意氣盛りの生徒の惡戯に、生活難の國から宣傳のため態々渡來したその道の猛者揃ひで、始終一貫國故を説いてゐるやうな教員室の泣言競に、折にふれことにつけて、しみ〴〵思ひ出されるやうな氣持になつて來た。或る夜ひそかに、松井老人が暗算ですら〳〵とやつて退けた復利の計算を、しかつめらしくも机の前で、乘けては加せ、乘けては加せするやうな氣になつて來ては、いよ〳〵もつて郊外の霜どけ道に、スポ〳〵とオーヴァ・シユウスを吸ひ取られてゐる境涯が馬鹿らしくなり、一學年きりで退いて了つてから、やがてもう十年にもならうと云ふ、金箔附の遊民だつた。大體似たやうなものにしろ、例の松井老人には、それでも積極的な氣分が汪溢してゐたが、この弟子に至つては、消極も消極、利子一杯に食つて行ければといふ、惨なことになつてゐた。でも、自ら嘲つて、嫌世庵無志と號するくらゐの微な反撥心は生き殘つてゐたので、どうかすると、素敵に腕の凄い女でもあつて、いゝ具合に騙くらかして、素ッ裸にむいて抛り出してくれたらさぞよからうな、などゝ、柄にもなく痛快がつた空想を描いてみることもあつた。

三角洲型にくつきりと塗つた襟足を五寸とは離れないあたりから、だらりをブラン〳〵させ、金鍔ほどもある定紋のパ

チンをつけた巾の廣い帶止に褄を挾んで、こつぽりをカパポコ〳〵と鳴して行く可愛らしい姿よりほかには、どんなおそめをも思ひ描くことの困難だつた杏として、まさかに、かの、腕の凄い女に裸にむかれる空想を、そのまゝこゝへ結びつけて來るわけにもいかなかつたが、然し弓山の手紙は近頃になく、——どころか、近年になくと云つてもいゝほどに、珍らしくも彼の心をときめかせた。たゞ十年ばかりで知つた人に逢ふと云ふだけでも興味のあることだのに、それが女で、妓籍にゐた女で、而も最初の晩大勢來たなかに、目にたつて利口さうなのが好きになる始まりで、一週間ほどの滯在中一晩もかゝさず逢ひ續け、宿屋へ歸つて行くにはおそすぎる時刻になつて了つた或る晩など、まんざら偶然でもなく雜魚寢の床をともにした思ひ出さへある昔の戀人なのだ。尤もとの戀は、よもや十五になる小娘などに通じやうとも思はれなかつた杏にとつては、悲しくも心の奧深く秘めて置いた、つまり片戀だつたが、それだけになほさら今度の再會が望ましいわけでもあつた。——兎も角さきがどう云ふ境遇にゐようとも、弓山が逢へるものなら、自分も是非逢して貰はふ。そうして逢つてみた上で……、その先はいろ〳〵さま〴〵に空想された。

事實としてその後耳へはつて來たことは、十五の春、彼が初めて逢つた時分、——都踊りの小さい組の尻つぽから三四人目にゐた時分、既に、有名な東京の實業家で、骨董いぢりは結構としても、家藏の古美術を贋造させては賣り〳〵して、結局蒐集の費用くらゐは浮せてゐると云ふ、あんまり名譽でもない噂のある人に寵愛されてゐたこと、表向きの浮氣は、その當時の人氣を背負つて立つてゐた若手の大阪役者、何某として置いて、その實は、京都大學の學生何某に命がけの惚れやうをしてゐたこと、そして十九の年齢に、たうとう本望を遂げて、その男のもとに嫁入つたこと、——そこまでは知つてゐたが、今はどうやらその何某夫人でもないらしく思はれるだけに、どう云ふ人として、どう云ふところで弓山が逢つたりするのか、皆目見當もつかなかつた。そんなことも知りたい好奇心やら、どう云ふ續き合で自分の話が出たのかは解らないけれど、兎に角、その杏さんならあたし小さい時分にお目にかゝつたことがあります、とかなんとか、おそめ

の口から云ひ出さなければほかに持ちあつて來ようのない事件だし、さうだとすれば……、と、そこに自惚た氣持も、少なからず動いたのだ。いつにない心の張りを感じながら、弓山からもう一度なんとか云つてよこすのを、一時千秋の思ひで待つてゐた。

四日目の午後に、

「マチガイナイ　スグオイデマツ」

と云ふ電報を受けとると、早速支度を備へて、すぐその晩の夜行で、杏は、久振りで懐しい東山の麓なる古都へと向つたのだ。

二

急な阪をあがりきつたところで、自動車をおりた。スーツ・ケースは弓山がさう云つて、助手に持たせ、往來から左へ、細い石甃道をだら〳〵と登りきつた右角の、可なり廣さうな二階家の前に立ち停つた。

「こゝです」

上方訛で「す」にアクセントを置いて、弓山は、言葉數を惜むごとに、肚のなかの面白さが増しでもするやうに、またしてもニヤニヤと笑つた。

「あゝ、さう」

停車場まで迎に出てゐてくれたのは嬉しかつたが、それからこつち、云ふことが一々へんてこで、自分一人面白がつてゐる肚を、故ら見せつけられ通しに、すぐこゝまで運ばれて來て了つた杏には、何がなんだかさつぱりわけが解らなかつた。一體「こゝです」と云ふその「こゝ」が、「貴方をお泊めしようと思ふ宿屋」の意味なのか、「おそめさんを呼びよせて

逢はさうと思ふ茶屋、料理屋の儔」なのか、おそめ自身がやつてゐるさう云ふ儔のうちなのか、住居か、或はまた妾宅なのか、それともまた、二三年前に尋ねてから後、引越をしたと云ふ弓山の、今度の屋敷なのか、一切見當がつかなかつたそれでも先刻から何か訊くと、今に解る、と云つた調子で、必ず焦すやうな答ばかりされて來たので、もういゝ加減いや氣がさして了ひ、別に考へてみようとも思はなかつた。「今に解る」その場へ臨むまでは、どこへでも平氣でくツついて行く氣になつてゐた。

「こゝですよ」

もう一度、こゝが何處であるか訊いたらどうだと云はんばかりに繰り返した。

「玉の井」

丸　星の軒燈に書いてあるまゝに、口へ出して讀んでみたきり、それには相手にならなかつた。

よく晴れた午前十時半ごろだつた。一間ほど奥へ引込んだ玄關の格子戸のそとに、もう一つ竹の格子があつたが、その影が、なかの三和土の上に、はつきりと映つて、見越の松が枝に風もなく、うらゝかな空の色だつた。夜の更る稼業のうちたら仕方ないことだけれど、その日射ゆゑに、三和土の上の汚れが、——これと云つて、巻煙草の吸ひ殼や紙屑が落ち散つてゐるわけでもないのだけれど、一體なら、寒中でも打水くらゐしてあつて似つかはしい洒落た玄關前だけに、さびれた氣持で目についた。人通りも稀な露次のたゞずまゐと云ひ、昨夜汽車のなかでよく眠れなかつたために、薄ぼんやりしてゐる杏のあたまには、何かから狐にでも魅まれてゐるやうな、へんな氣持の霧がかゝつて來た。

「ちア。御案内役に、お先へ御免かふむります」

弓山は、軌道で上から吊した竹格子を、吃驚するやうな音をたてゝ引きあけ、更にもう一つ玄關の格子をはいつて、

「今日は……」

と、故意と飾りのない馬鹿聲で案内を乞ふた。「もし〳〵。誰かゐませんかね」
「へーい」
奥の方で答へる女の聲を聞くと、振り向いて、格子戸の外に立つてゐる杏の方へ、もう一度ニヤリと笑つてみせた。
「あれです」
矢ツ張り「す」にアクセントを置いて、「構ひません、あがつて行かうぢアありませんか。さアおあがんなさい」
杏は、玄關の式臺にあがつてから、助手の運んで來てくれた荷物を受け取り、賃金を拂はふとすると、弓山が遮つて、帳面になつてゐるのだからそのまゝにして置けと、手早く一圓札を出して、助手に心附だけを握らせて了つた。成程さう云へば、七條の停車場前に待たせてあつた自動車だが、いつの間にか弓山も大した威勢になつたものと、ちよいと意外の感に撃れてゐるところへ、やつとその時分になつて、小走りに女の足音が近づいて來た。
「お歸り……。お着きやした？」
見ると、四十格好の、小柄な、むき玉子にちよいと鼻だけ摘み上げたやうな、つまり古い内裏雛の感じに、中高で、黄色ツぽい光澤のある、いかにも王城の地に適はしい顔つきの女だつたが、慌てゝ羽織を引ツかけて來たものか、奴凪の形に兩手を擴げ、ゆきを揃えながら、スル〳〵と廊下を近よつて來た。
（はてな、お歸り、と云つたな、してみると、こゝから迎ひに出かけて來たんだな……）
杏は、それで、益〻わけの解らない氣持になつて了つた。
「早速つらつて來ました」
「おこしやす」
「こんちは」

「ようこそ。さア、すツとお通りやしておくれやす」

「二階？」

「へえ、どうぞ……」

「ぢア僕が御案内しよう」

弓山が先に行つて、京都の屋造りにしては珍らしく明るい、――尤も日本晴れの眞ツ晝間のせいもおるが、兎も角も明るい廊下を二間ばかり行つて、右へ階段をあがつた。

「お歸り」

あがり切らないうちに、上で聲がした。

「さア、お糸ちやん、どうしてくれる!? どうしてくれますよウ」

駈け上つた勢を借りて、兩手を肩にかけ、二三度邪慳に搖ぶつてから、後を見返り、「杏さん、僕の役はこれまでだ。あとはどうぞよろしく」

と、そのまゝ弓山はすた〳〵行つて了ふ……。續いてあがり切つた廊下の、こゝはまた三方部屋の襖で、縦に右に折れて、配膳棚の上の高窓から、摺硝子越しに北の光線がさしてくるばかり、大ぶん薄暗い階段口に、辨慶縞の割烹着を着て二の腕をまるだしに、帚木とはたきとを一緒に右に持ち、左の手の巾をちよつと口のはたへあてがつて、きまり惡げに首をかしげて立つてゐたのが、見違へるばかり面變りはしたれ、紛ふ方なきおそめだつた。

「やア……」

「ごめんやす、こんなうまいなりして……」

と、手に持つたものを廊下へ置き、急いで兩手を盆の窪へ廻して、割烹着の紐をとかうとしたが、よして、「まア御挨拶

はあとからゆつくり……さきに、ちよつと、風を按配して來ます……」
ものに馴れた笑顔だつた。昔と違ひ、白粉ッ氣なしの、淺黑い牛地が、健康さうにつや〳〵してゐた。
「どうぞごゆつくり……」
杏はすつかり堅くなつて了つて、よくは顏も見られず、二重廻しの羽根を手に卷いて身を細め、するりと摺り違つて、弓山がはいつて行つたまゝ襖のあけ放してある左手の部屋へ急ぎ足にはいつて行つた。
そこは十五疊の間だつた。紫檀の大机の前に、座蒲團が二つ、手焙りもそれ〴〵に、もうすつかり用意が出來てゐた。
弓山は、隅に外套と帽子とを擲り出して、南一面にあけ放した肘掛窓に腰をおろし、手摺りに背を倚せかけて、組み重ねた足の先で、宙を蹴るやうなまねをしながら、相も變らずニヤ〳〵と笑ひかけて、
「どうです……？」
「え？」
てれて、すぐには眞面に顏が向けられないやうな氣がして、杏は、同じ隅へ外套や帽子をかなぐり捨てながら、「變りましたなア」
「その十年の間、よそながらでも見たことはないのですか」
「一二度大阪神戸へは出かけたが、不思議に京都へは來る機會がありませんでしてね」
「それが彼方でちやんと憶えてゐたんだから、これア御馳走になつてもよささうですなア」
「いやなやツ！　と思つて憶えてる場合もありますからね。まだ〳〵海のものとも山のものともきまりませんやね」
杏も、出窓の敷居に横向きに腰かけて、瑠璃色の冬の空を眺めた。黑ずんではゐるが、惡く光らないで、落ちついた感じのする家々の瓦を越して、遠く八阪の塔を望むことが出來た。なんとなく澄み透つた山の氣が動いてゐた。誤魔化して

話題を變へると云ふ意味ばかりでもなく、
「然し、いゝとこですね。一體こゝはなんなんです」
「待合のやうな、宿屋のやうな、こちらでは貸席と云ひますがね、つまり、强ゐて藝者なんぞを呼ぶ必要のない待合とでも云つたらいゝでせう。ですから、どうぞお氣兼なしに、ゆつくり御滯在なすつてください。もつと落ちついた小部屋もありますから」
「へえ、さうですか。で、貴方は、昨夜はこゝでお泊んなすつたのですか」
「えゝ、丁度こゝに來て相變らず飲つてたところへ、うちにゐる男が、貴方からの電報を持つて來てくれましたんでね、うちへ歸つて了ふと、ちよつとまた七條まで出かけるのが億劫になると思つて……」
「今度のお宅は……？」
「えゝ、もつとずツと北へよつてるんです。南禪寺の裏の方です」
「さうですか。……さうすると、なんですかね、かう云ふうちにも、純粹の旅客、つまり、あたしみたいに鞄なんぞ持ち込んで來て、幾日か滯在して行く客もあるんでせうか」
「さア、さう始終もないでせうが、然しあつたたつてちつとも差支はないんです。立派に旅館の鑑札をうけてるんですから」
「成程。それで、先刻玄關に出て來たのが女將さんですね？」
「さうです、お玉さんと云つて、一番上の姉さんです。その次がお信さん、それからお糸さん」
「お糸さんてのが、おそめさんの本名なんですか」
「白ばツくれちアいけませんぜ」
「白ばツくれやアしない、ほんとに初て聞いたんですよ。さうですか、お糸さんてんですか」

「お玉、お信、お糸の頭字をとつて、玉の井なんです、つまり、文字通りの合名會社ですなア」
「成程さうですか。兄弟商會でなくつて、姉妹商會ですね。そいつア氣が揃つていゝでせう」
「えゝ。……然し何をしてるんだらう。こゝのうちの連中は、みんな豪酒でしてね、昨夜もみんなで、かれこれ夜明がたまで飲んでたんで、それで今朝は特別寢坊したんですよ。僕なんぞ、お茶一杯飮まされずに、愚圖々々してなはると間に合ひまへんで、かなんかで、おん出されちまつたんですよ」
「そいつはお氣の毒さんでしたね。さぞおなかゞおすきでせう」
「いや、さうでもありませんが……、何してるんだらう。貴方が見えたんで、みんな急におめかしでも始めたかな」
「然し感心に、みんななりふり構はず働いてるらしいんですね」
「えゝ。上のがまア大部分資本はもつたらしいんですよ、社長格ですな。中手はんには、いゝ旦那がついてゝ、それでますこゝのうちが維持されて行かうと云ふものでせうかな。つまり專務取締つてところですな。末の先生が、年も若いと云ふんで、これがまア勞力奉仕、と云ふやうなことでやつてるんです。勿論ほかの人たちだつて中々よく働きますよ。何しろこれだけの間數のうちを、三人のほかには小女を一人使つてるきりで、一切やつて行きますからなア」
「さうですか」
と、感嘆して「然し、こつちから云はすと、ちと恐縮で、用が頼みにくい氣がしますねえ」
「その代り貴方が、着いて來たばかりの客を、この通りほつたらかしでさア」
取りなし顏にさう云ひながら、腰を擡げると、弓山は、ポン〳〵と手を拍ち、それからまた部屋の隅へ行つて呼鈴を押した。

三

違棚の下に口をあけたまゝの鞄や、みだれ箱、鏡臺などがやゝ亂雑になつてゐる二階の六疊間で、杏は、たつたいま床にはいつたばかりだつた。

「ごめんもうおやすみやした?」

襖のそとの聲はお糸だつた。

「いゝえ、どうぞおはいり」

云ひながら、起き返らうとしてゐるところへ、足もとも怪しく、ぺた〳〵と駈け込んで來て、枕もとにぐツたり横坐りになつて、

「あゝ、きつう醉うたわ」

「あたしも大變だ、心臓がドキン〳〵して……。こんなに飮んだことは生れて始めてだ」

「起きんとお横にゐやはつたらえゝわ」

「まアいゝ」

「寒おつせ」

手を延して、夜着を肩へかけやうとしたけれど、ちつとも力ははいらないで、體が崩れる……。

「よし〳〵、ちア御免かふむつて、横にならう。……それより、明ツぱなしが寒いな」

「いまあとから、中手はんが來やはりますよつてん……」

滞在五日目の晩のことだつた。その間弓山は、ずツと玉の井に泊りつきりで、晝も夜もなしに飮み續けてゐた。たつた一

度、姉妹三人とも誘ひ出して、わらんじ屋まで飯を食べに行つたゞけで、あとは眠くなれば、時間構はず、座布團を並べてうたゝ寢をするくらゐのことで、覺めてゐれば必ず盃を手にしてゐると云つた風な、だらしのない生活が續いて來たのだ。尤も一昨日の朝から、酒のみにはとてもこらへられない雪になつて、今日こそは是非とも歸らなければならないと云つてゐた弓山が、またづる〳〵べつたりに居すはつて了つたりした。姉妹は、めい〳〵優り劣りなくよく飲んだが、お玉は醉ふと陽氣になつて踊り出したりするし、お信は、いつまでも眞面目で、しみ〳〵旦那の惚語でも聞かせたがるやうな風だつたし、お糸は、有繋に姉たちのゐる前では、容易に欒りを見せなかつたけれど、一人だけの時には、急に色つぽくなるのがきまりだつた。そして、この五日の間、ほかに客があるらしい容子は一度も見えなかつたが、それでも三人が三人揃つて座敷に來てゐることは稀だつた。階下が小女二人きりでは、代り合つて、料理屋などで謂ふ「下番」に、誰かしら一人は廻らなければならなかつた。おまけに、いかによく飲むと云つても矢つ張り女で、弓山の相手をしてゐるうちには、いつか盛りつぶされて、これも代りに階下へねに行く者も出來るわけだつた。それゆゑ座敷には、いつも大抵一人きり出てゐなかつた。

そこで杏はと云へば、これは、一晩かゝつて、猪句に五六杯が關の山だつた。醉つたと云ふ氣持になるまで飲まないうちに、苦しくなつて了ふ方だつた。で、いつも素面で、みんなの醉態を見物してゐることになつた。それ〳〵に面白かつた。酒は飲めないでも、さう云ふ生活が嫌ひなわけではなかつたから、明方までゞも悅んでつき合ひ、座布團のごろ寢も苦にはしなかつた。たゞさうして素面で觀察してゐると、初め來た時に想像したやうなものではなく、この三人姉妹の間に、可なり烈しい暗流の渦いてゐるのが目について來て、そのために、或る時は情なく、或る時は淺間しく、また或る時は腹立たしくされるやうなことが多かつた。誰しも二階で、好きな酒を飲んで、云ひたい放題のごたくを並べてゐる方がいいにきまつてゐるから、めい〳〵勝手な時にあがつて來る、その交代の度ごとに始る氣持の惡い眼使や、すさまじい囁

きで、よそごとながら、つい陰鬱にされて了ふのだつた。もう一つ不愉快なのは弓山の態度だつた。陽氣で、才はじけてゐて、相應相手の氣持に敏感な、男ぶりだつて決して惡くない三十五歳の壯者として、座は三人の誰からも好意をもたれてゐた。それを意識しすぎるほど意識してゐて、三方へそれ〲愛嬌を振りまく具合が、杏の目には色魔のやうに映つたのだ。上の姉の富に中の姉の成熟しきつた豐滿な肉體に、末の娘の若さに、——と云つたところでもう廿五にもなるのだけれど、兎も角も中での若さ、美しさ、それから初心さに、そのどれに對しても、相應捨てがたい執着を感じてゐるやうに考へられて、自分のお糸に對する一本槍の戀心までが、そのために汚され、傷けられる思ひがするのだつた。そんなことがあつても、然し彼には、斷然として歸つて行くやうな氣概はなかつた。誰にも當りさわりなく、穩かな笑ひを頰から絕たずに、仕舞にはみんなが呆れ返つたほど、何事にもつき會ひよく、必ず一緒の行動をとつてゐた。

そして今夜こそは、どうしても歸らなければならない用事の使がうちから來て、いや〱ながら弓山が、有繫にひよろつく足を踏みしめても、玄關前の殘雪に踏み込んだりして、やうやうやつと自動車へ納るまで、親切に劬り助けて送り出してやつたのは、つい今しがたのことだつた。——久振りに一人になつた氣安さが、却つて杏の心を浮きたゝせた。自分の部屋ときめて置いても、めつたにはいつたことのない六疊へ引きとり、今夜こそは連日の寢不足が取り返へされると、まだ九時を打つたばかりなのに、早速寢間着に着更へてのふ〱と手足を踏み延ばしたところだつた。

「あんた、でもよく舊いことを覺えてたね」

今まで殆どその機會のなかつた二人きりの差向ひになると、杏としては、何よりもまづ、しみ〲と十年前の思ひ出が語り合ひたかつた。「十年と云へばひと昔、舊いことだからねえ」

「よう憶えまつせ……」

それから、お糸は、その時の連の大學生のこと、始終一緒によばれた舞妓たちの云つたり仕たりしたこと、云ふまでも

なく、一緒に日傘を買ひに出た時のことなど、それからそれと、細いところまでよく憶えてゐて話した。杏は、辱めて、遥々こゝまで出かけて來た甲斐を感じたほどに、嬉しくなつてゐた。

「わて、あんたと一緒の床でねたことおすつせ。憶えてなはる？」

とろんとした眼つきで、瞬きもせず見おろされると、杏は、枕の上で、顔の向けどころもないほどに頬の熱くなつて來るのを感じた。

「憶えてる。手をつないでねたね」

云ひながら、その手の平の皮が、馬鹿に堅いので、不思議に思ひながらいぢくつてゐると、それは鼓の稽古をするためだ、と訊きたくないのに、おそめの方から云ひ出したことなども思ひ出されて來た。

「あの時分、ほんまに氣樂におしたな。今やつたら……。なア……」

「今だつて……」

「一緒にねかしてもろても、大事おへんか」

「いゝどこちアない。さアおはいんなさい」

ためらはず、裾を膝の間にはさんだ足の方から入れて來る。その落つきが、杏にとつては、安心でもあり、落膽でもあつた。が、何は兎もあれ嬉しかつた。

そこへ、トン／＼と輕く階段を駈けあがつて來たお信が、明け放しのまゝで見通しの廊下から、

「まアま、この子は、えゝことしといるえなア。おゝ、けなる。わてかて、入れてもらお……」

寒さうに袖口へ覗かせた指先で、あとをたて切つて駈けよると、杏を眞ン中に、反對の側から、色氣もなく、もぐすり込んで來て、いきなりしがみつき、「おゝ、さむ、さむ、さむ／＼さむ」

「姉さん、可厭やわ。そんなんこすいわ」
「なんでこすい」
「わて、布團のそとへはみ出してもた……」
「だんない」

暫くそんな騒ぎが續いて、やつと靜まつたと思ふと、いつか二人は、眞ン中に挾んだ杏の存在などは忘れて了つたやうな、肉身の無遠慮さで、低聲に內輪のごたくさを話題にしてゐた。この二人がよれば、その蔭口、上と中とがよれば末の惡口、と、そこまでの組み合はせは始終あるが、上と末との間には、性分でも合ないと云ふのか、どうしてもへんな墻壁がとれない容子で、今もお糸は、盛に、上の姉に對する不平、怨嗟の聲をあげた。初めはいゝ加減に同感を表はしてゐたお信も、だん／＼には、さうばかりも云へない、お前さんだつてよくないのだ、と云ふ調子になつて來た。何しろ二人とも、大ぶん醉つてゐた。自分たちの感情に、反省と檢則を加へる力が、殆ど失はれてゐた。

一體、お前さんは、昔から虛榮心が强い。なんのかのと云ふのも、もとはと云へば、みんな今の境遇に飽きが來かけてゐるからだ。もつと體に藥をきかせて、面白可笑しく暮したいからだ、いゝなりでもして、毎日しやら／＼と歩き廻りたい方の性分なのだ。――そんな風にお信が、峻辣にやつつけ出した。中々負てはゐず、お糸もそれに答へて、そんなことを云へば姉さんだつて、あゝだからだのあらを拾ひあげて、互に云ひ爭ひの言葉が入り亂れてゐると思ふうちに、突然杏は、耳のはたで、嚙みつくやうな男の叱聲を聞いた。

「妮い／＼！　默れ、默らんか！」

吃驚して、見ると、お糸は、半身布團から乘り出して、ふん反り返り、爛々と眼を光らせて姉を睨め据ゑてゐた。その眼尻はきり／＼と吊りあがり、小鼻は怒り、顏色は蒼白に、そして、堅く握つた兩の拳を、痙攣つたやうに顎の下へくつ

つけてゐた……。

「一體、お前たちは口うるさいぞ！」

續いてもう一言、まるで常とは似ても似つかぬ男の聲で叱り飛ばされると、お信は慌てゝ起き直り、疊の上に平伏して

「はゝア」

と、恐れ入つて了まつた。

いつの間にか杏も起きあがつてゐた。なんのことやら、彼には、全くわけが解らなかつた。たゞ、惡心に似た不快な胸の壓迫を、不氣味さで、一刻の猶餘もなく、この場から、――いや、この家から立去りたかつた。

「よくお出で下さいました。どなた樣でいらつしやいますか」

「うん、俺か？」

その男の聲は、下品で、安つぽかつた。「俺は……」

何々と、人間らしい名を云つたが、あとで聞けば、それは、謂ふところの眷屬の名だつた。――お糸には、時折「お狐樣」が降りるのだつた。

百年の戀も醒め果てる、と云ふが、杏の、十年の戀は、あとかたもなく飛んで了つた。人智を絶した不思議といふものは、いつも必ず莊嚴であるものゝやうに考へられてゐたが、事實、その場の空氣は、なんとも云へず劣かつた。人間以下の世界にだけ流れるところの空氣で、窒息しさうな氣がした。

「おい、お信さん、なんとかしないか。あとが勞れるだらう……」

いつまでも、何くれと、家事について伺ひを立てゝゐるのを、傍で聞いてゐられなくなつて來て、不繋に杏も、怒を含んだ聲音でかう云つた。

「馴れてますよつてん、大事おへん」

「いや、よしたまい、よしてくれたまい。あんまりいゝ氣持ぢアないよ」

お信は、氣樂に笑つて、態々お降りくだすつて有難かつた、もうお歸りくだすつてもいゝ、と云ふ意味を、恭しく疊に頭をつけて云つた。

「よし、では歸る、いま歸るぞ！」

云ふかと思ふと、お糸の體は、ばたりと前へ伏つて、グウ〳〵と、鼾のやうな息使ひが聞えて來るばかりだつた。――

それでも、杏はほつとした。

「おどかされたよ。だしぬけにどうも……、何事が起つたかと思つたぜ……」

お信は、相變らず氣樂な、毒ツ氣のない笑顏で、いろ〳〵と「狐憑」に關する話をして聞かせた。お糸のは、まだ舞妓の時分、お客や朋輩と一緒に伏見へお參りに行つた時からの、もう舊いものだつた。その以前からも、稻荷は信仰してゐたのだが、或る時朋輩の一人に、貴方の信心してゐる眷屬は誰かと聞かされ、甲某と答へたところ、自分のは乙某と云ふのだが、それは〳〵あらたかだから、いつそその方に變へたらどうかと勸められた。然しさうする氣もなく、そのまゝ乙某の名も忘れてゐると、いま云ふ大勢で、遊びがてら伏見へ參つた時に、歸りがけ、石段をおりかけると、ひとりでにとツ〳〵とツ〳〵と足が早くなつて來て、仕舞には自分でも可怕いやうな早さで、こつぽりのまゝ石段を駈けおりる。客や仲居が、後であぶない〳〵と云つてゐるのもよく聞えるのだが、その上自分でも可怕いのだが、どうすることも出來ないそのまゝ中段の廣場へ來ると、くるりと橫に體が向いて、またとツと〳〵歩き出し、ふと氣がついた時には或る眷屬の社の前で、合掌禮拜してゐる自分だつたと云ふ。それが以前朋輩に勸められたことのある乙某の社だつたのだ。――それ以來のことだと云ふのだから、恐らくは、深く思ひ合つて、やつとのことで一緒になれた京都大學の學生だつた男との離別

も、こんなところにその原因の一端はあるだらう、などゝ、そんなことまで思ひやつて、杏もそゞろに哀れは催したが、然し、百年の戀も醒め果てた落漠の感は、なんとも取り返しのつけようがないものだつた。ぐつたりと、うつ伏しに倒れてゐる體には、動物園の狸や狐の小屋の前で襲はれるところの、あのたまらない臭さが、まだ幾分か殘つてゐさうな氣さへして、振り向く氣にもなれなかつた……。

いろ〳〵世話になつた弓山にも逢はずに、翌朝の特急で、逃げるやうにして杏は京都をたつて了つた。

（……俺は仕合だ、世の中に獨身者ほど仕合なものはない。いつなんどき、默れ、默らんか！ なんて云ひ出さないとも限らない女房と云ふ危險物を、有難さうに飼つて置くとは……。結婚なんぞするやつの氣が知れない……）

めつたに新聞一枚でも讀む氣にならない「活字嫌ひ」の杏は、汽車のなかの徒然に、そんなことも考へたりした。然しさも得意げに、そんなことを考へる尻から、孤獨の寂しさは、絶えずちり〳〵と迫つて來てゐた……。

誰にも出來る

手輕な强健法

エッチ・ニッセン氏考案
白井規矩郎補删

目次

誰にも出來る 手輕な强健法

自分の身體の狀態を最も詳しく知つて居るものは自身の他にはない。どんな名醫であつても或る點までの診察は出來るが診斷は出來ない。其診斷に顯はれるときは、既に缺損の程度が顯著になつて居る場合で、疾病の萌芽期に於ては決して他人に解るものではない。

强健法も亦た此通りで他人の製作した强健法が、誰れにでもピタリと適合するといふ事はないので、言ひ換へれば自身の强健法は自身で作るのが最も有効なのである。

靜坐法も結構、自彊術も良いには相違ない。併し何れもそれが萬人に適するとは言はれないので、此等を行つて効果のあつた人は適ま此方法が其人の身體に適合したのである。又た此等を實行して効果のない人でも自身に適する樣に改刪工夫して行へば、必ず効果は顯はれてくると思ふ。

既に種々の强健法と名付けたものが出來て居るが、何れも考案者自身の體軀を基としてあるもの斗りだから、他人が之れを實行しやうといふのには矢張り多少の改訂を加へなければ十分の効果が得る事は出來ないのである。併し此何れを省き何れを加へるかといふ事は多少でも斯道に智識のないものでは纏め兼ねる。

夫れには此の强健法は極めて都合よく出來て居るので、これならば實行者が自身に適合する方法を自身で工夫して組立て試みられるのであるから、一寸面倒の樣ではあるが、他に比することが出來ない効果を得られる。

第一章　なぜ、どうして　なぜ、體育をする

身體の健康といふことは、生理的に進んで行くこと、生理的に作用して行くといふ、二つの結果である。この二つは丁度、衡秤の樣なもので、どちらが重くても輕くても宜しくない、チヤンと平均して居るので、始めて健康が保たれるのである。

誰れでも身體の益になる練習の必要なことや、それを全身

に平均にすることや、又前に云つた衡秤を維持することなどは承知はして居る、がさてこれを實地に行なふとか、行なつて居るとかいふものは實に尠ない。

又た其必要を認めて實行して居る人を見ると、身體の練習と一口に云つて誠に容易いもの丶樣にして、手前勝手に定めた極めて不確な生理的練習を行つて居る。それも無病で普通の體軀を持つて居る人ではない、大概元氣の尠ない健康が平均以下の人計りである。

此人達の行ふ事は先づ正格に歩行するとか、不規則の練習を行つて居るのが關の山で、頗る不充分の仕方としか云へない。

運動といへば必ず歩行の如くに思つて、またそれを行つて居るが、之れは唯だ脛脚の筋肉に烈しい働きを起させる斗りであつて、まだ此他に最も肝腎な筋肉を使用することを少しも考へないのである。四大筋肉とは肩、胸、腹と脊とにある筋肉をいふものである。

先づ第一に兩腕の運動を行つて、次に呼吸法で胸部を濶展するのである。其處で始めて血液(それは肺臟を通過して化學的變化をする)は完全に循環して、身體に何とも云へぬ快味を覺へる。これが則ち元氣を恢復したので自然と身體に力づくのである。

全體に渉たる練習の不足は扨て置き、唯だ此肝要な腕の運動の不足斗りでも、呼吸が薄弱であるから從て血液は不完全に還元する。其結果は胸の伸縮壁が十分に濶展しない發育もしないことになつて變態な狹縮を呈する樣になる。

血液　は此原因からして肺臟で十分に滌洒せられない爲めに、心臟や肺臟又た其他の諸機關の疾病を起すに都合よい狀態になつてくるのである。

腹部の筋肉　とは肋骨と尻骨盤との中間に横たはつて居る筋肉を云ふので、其の收縮する力で腹部機關の作用を健全にしたり、又は消化分泌を助けるのである。

又腹部の筋肉には蠕動的作用といふものがあつてそれは胸で呼吸をする作用と協同して、極めて有益な作用をなすのである。それ故此等の筋肉の伸縮と健全とを保護するといふことは極めて必要である。否保護しなければならないのである。

消化と呼吸　とは生理的經濟といふことに付て、最も必要な仕事なので、一は食物の滋養分から血液を製造する、一は血液を清淨にしたり元氣を補ふたりするので

人間は生れてから生活を終るまでの間絶えず休まず之れを反

獲するので健康が維持して行かれるのである。
　消化と呼吸とが甘く體力に調和して行かぬと一日も健康は保たれないのである。

背後の筋肉　は身體の上の部分を左右前後へ自由に働かさせ、又た體軀を眞直に保つといふ役があるので、其上に呼吸の筋肉と協同して胃や腹の機關の牽制を防いで出來るだけ他の機關を自由に働かさせる。
　此他にも上體の筋肉の發育は唯だ彎曲とか屈曲とかを防ぐ許りでなく、他から來る有害な誘惑をも防ぐ樣になつて居る。
　脊柱を強健にする爲めの練習が必要なことは之れだけでも解るが、脊柱に近い處の神經的疾病とか又全身の衰弱とか不良とかいふ事も、背後の筋肉の練習さへして強健にさへすれば、大抵豫防の出來るものである。昔の人さへ背に腹は代へられぬと云ふて居る位だもの。

どうして練習をするか

人間の身體には一番の血液の循環といふ事が大切で、之れさへ正しくいつて居れば必ず健康である。或る場合には發汗を促すのも悪くはないが、畢竟之れは心臟や肺臟へ一時過激の動作を與へるので、常に之れを行へとは勸められない。
　又た啞鈴、棍棒、條竿、胸錐(之れは一種の體操用具です)などを持て運動を試みるものもある。之れも極めて良い運動法ではあるが、素人はどういふ身體の狀態に何を用ひたらよいかといふことを辨別しないから、時には有効の運動も反つて害を招くことがある。例へて見ると便秘で煩悶して居る人があれば、之れは棍棒や條竿の運動では役にたゝない、特に注意して上體の運動さへすれば、別に服藥をせないでも治療することが出來る又た

不眠症　で惱む人は胸錐とか啞鈴とかは全く使用してはならない、徐かに頭、上體、腕と又た脚をも使用する練習を行へば、暫時の中に効が顯はれる。又た

猫背　といつて肩の丸くなつた人がある。之れは頭と肩とが前の方へ突屈して、胸が壓縮せられてゐるので、斯樣な人は何も重い物を以て練習するにも及ばない。胸隔を濶くしたり背や肩を眞直にする練習さへしたならば、忽ち立派な身體になるのである。
　吾々が日々生活する爲めに使ふ筋肉は、緊張する筋肉よりも、收縮する筋肉の力が主である。血管や神經などは屈すれば屈する程其の働きが鈍くなることは、丁度護謨管を屈折して水を注入しても勢よく水が通らないのと同じ理屈である。

それ故成るべく筋肉の緊張する樣な練習をする樣に心掛けるので、緊張することが強くなれば、其他の筋肉は少し位不良な場合でも自然に矯正することが出來る。

此書に掲げた練習の大部分は徒手でする。則ち何も持たないで練習する仕方であるが、慣れて面白味が少いとか、未だもう少しは運動してもよいといふ樣なときは、啞鈴なり條竿なり其他の器械を以て行ふのは至極有益である。猶ほ充分に云へば、終りに掲げて置いた運動的處方を參考して、之れに依つて練習をしたならば、更らに一層の好い結果を得られるであらう。

誰でも練習が出來る

練習にも種々あるが、容易いものであるから小供でも虛弱な人でも老人でも出來る、が餘り長い時間續けてするのは宜しくない。

女子は健康と美容とを兼ねて特に適應する輕麗運動を行ふべきである。

多少疾病のある人は處方の運動法を行ふ前に、先づ以て適當の醫師に相談してから始めて貰ひたい。

練習にも程がある

僅かしてさへ好い事なら澤山すれば猶ほ好いと云ふ理屈は今は學理が許さない。練習も極めて疲勞しない樣に、筋肉の疲まないのを度としなければならない。

練習も度を超えると過勞になつて筋肉は彈力がなくなつて硬くなる、其結果容易くて美しい動作をするにさへ堪へられなくなる。遂には反て病氣を製造する樣なもので、心臟病などは全く過勞に原因するものが多い。

其故筋肉を使ひ過ぎるのは、全く使ひ足りないと同じ事になつて、非說早熟、老年、死といふ順序を早める計りであるから其邊は吳々も注意して各自己れの身體に應じた運動法を選んで、其運動も時間や回數に制限をつけて、長く持續する樣に考へられたいのである。

練習は何時がよい

朝起きぬけでも晝飯前でも夕飯前でもよいが、一番夕飯前がよからう、虛弱な人は朝飯後と晝飯後の二度位に行つたら最もよろしからう。

練習の實行

前にも云つたが、練習を實行するには餘程注意しないと反て害になるから、執着やうだが今一度云ふので、それは此練習といふことに付て決して或る運動――一局部の運動は勿論全體の運動にしても――過度反覆を許さないことである。まだ少しは出來ると思つても、決して無理な事はなすべきでない、各々の機關は其働きが限りあるもので、精神でも筋肉でも同じ事である。決して度を超えて行つてはならない。

此篇の終りに掲げたものも此限りある中で處分したのであるから、回數や時間は正しく守つて行つて貰ひたい。又た順序や種類計りでなく無暗に急激にしたり要もなく元氣を出して行ふのも宜しくない。能く自分の身體を考へて始めることを望むのである。

練習は均一に

始め徐々と行つて漸く僅かづゝ力を增して行く樣にして、練習の間は決して他の事を考へない樣に、精神を專ら其一方に注いで行ふのである。其處で少し疲勞かけた樣だと思つたら直ぐ止めて仕舞ふのである。

常に着る衣服

輕くて寬るやかに織られたものを着るのが何よりである。又た運動の練習をするにも都合がよい。

室の空氣

練習をする室の空氣は特に清潔を要するし、又た常の居室の樣に暖かくない樣にする。次に運動をして居る間は別に注意もいらないが、身體を靜穏にして居るときは深く正しく呼吸をするので、之れは云ふまでもなく鼻孔からする。

好い結果

練習をして居る間は食慾が增進して來れば則ち好結果を得たのであるから、新鮮なものとか滋養品とかを程能く攝るのがよい。が過勞となると反て食慾を減少するものである。屢々正しく沐浴するのは健康上最も必要な事である。

第二章　運動と其の結果

A、身體の正しい姿勢

一、兩方の踵をそろへて、兩方の趾尖を外の方へ開く。

二、兩方の膝を眞直にして、餘り引き縮めない樣に。

三、兩方の臗骨を左右高低のない樣平らにして、後ろへ引く樣にする。

四、胸を前へ出して充分に開く。

五、肩を平らにして後ろへ引く、(固くしないで、上へも揚げない樣にして)

六、腕を肩から指尖まで眞直にして垂れて、掌を外股へ向ける。

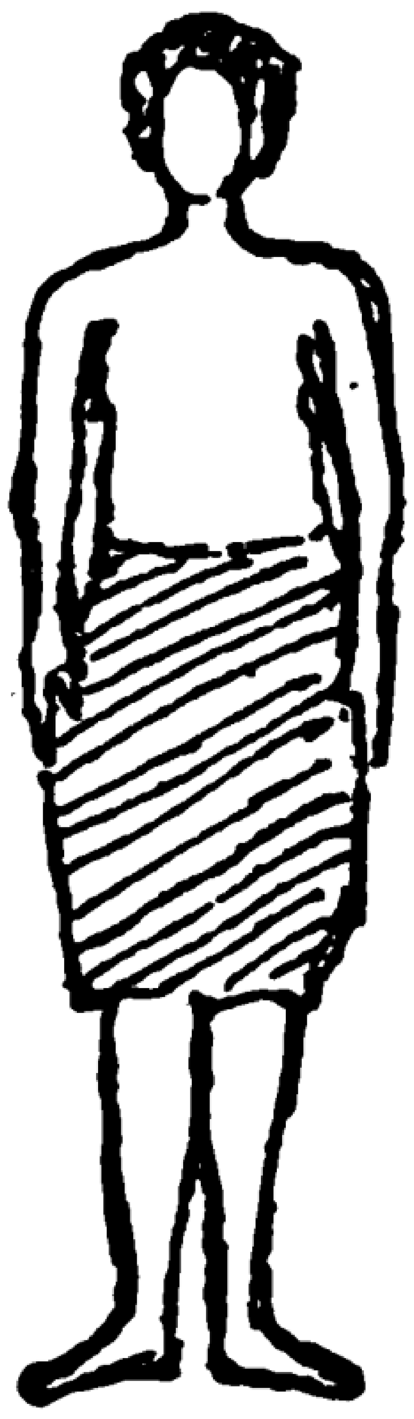
七、頸を眞直にして頤を内の方へ引く。

八、目は一直線に前を視て。

九、體の全重量は踵でもなく趾尖でもなく、兩方の踝の處で保つ樣にして、頭から耳、肩、腕、臗骨、膝頭の側、踝に掛けて眞直に一線を畫かれる樣にするのが、體の完全な姿勢である。

(第一圖は前向、第二圖は側面を示したものである。)

一圖



B、腕の運動

一、肩の圓回

三回乃至十回位

肩を靜かに、上に、後に、下に、前に、と動かして恰も圓形を描く樣にするので、兩腕は輕く垂れて置く。

二圖



肩を上から後ろへ動かすときに息を吸入して、下から前へ動かすときに呼出する。

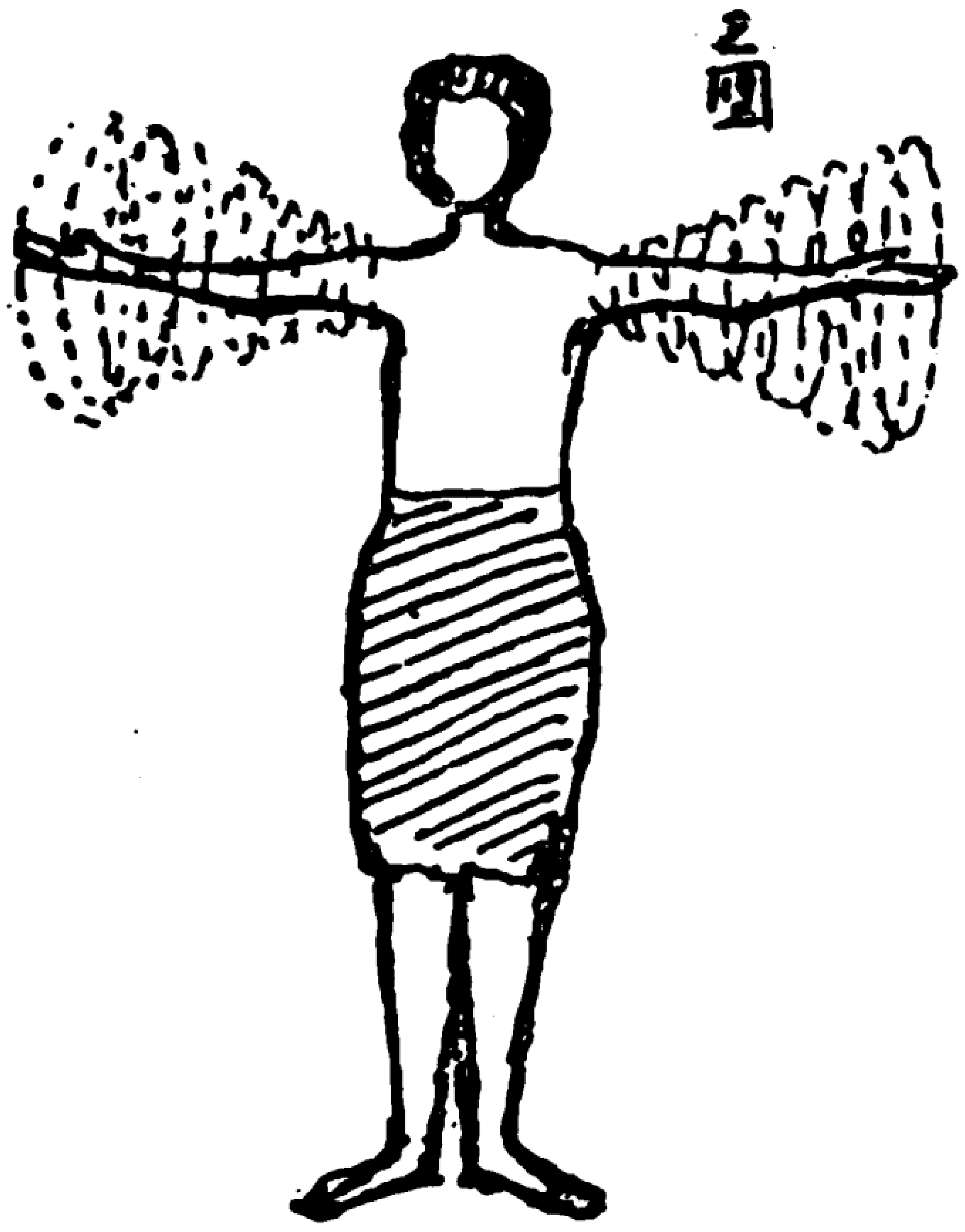
結果　此運動は胸と肩との筋肉を緊張して、肺を脹潤にし心臟の動作を正しくして、又た腦から心臟へ血液の流下することを補ふのである。

二、腕の圓形（小さく）

五回乃至十二回

兩腕を兩側へ十分に展伸して（掌を上向にして）、徐に上に、下に、後ろに、前に、と動かすので、空氣へ圓錐曲線を畫く樣にする。（第三圖）

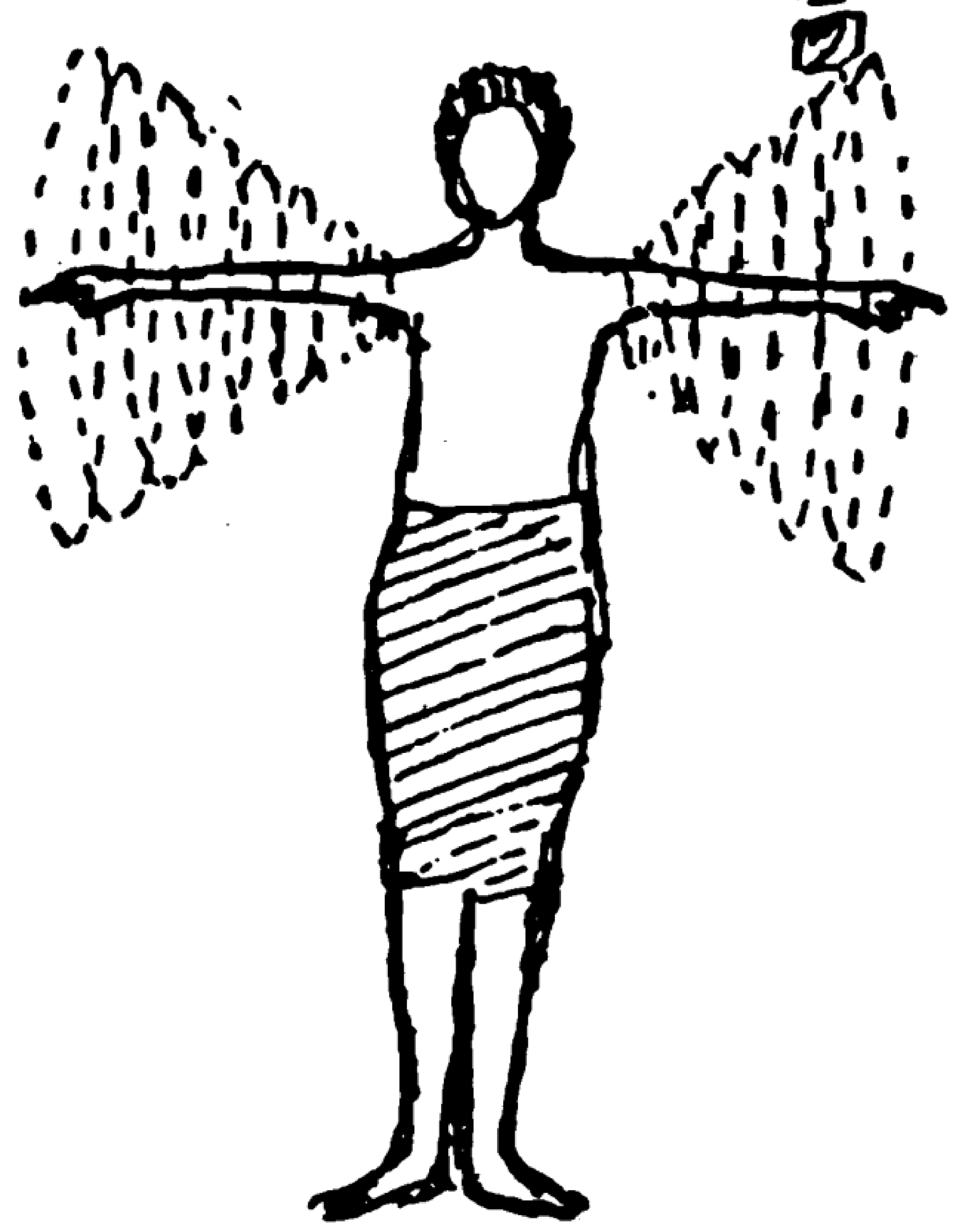
三圖



呼吸は前の練習と同樣に行ふ(頭は眞直にして動かないで胸を十分に濶げて)

結果　此運動は前と同じ樣な結果であるが、幾分か強い。

四圖



三、腕の圓形(大きく)二十回及至四十回

片々づつなり兩方なり腕を兩側に(掌を下向にして)展伸して大きく圓形を畫く、始めは片々づつ行つて、次に双方同時に行ふ、體は眞直にして動かさないで。(第四圖)

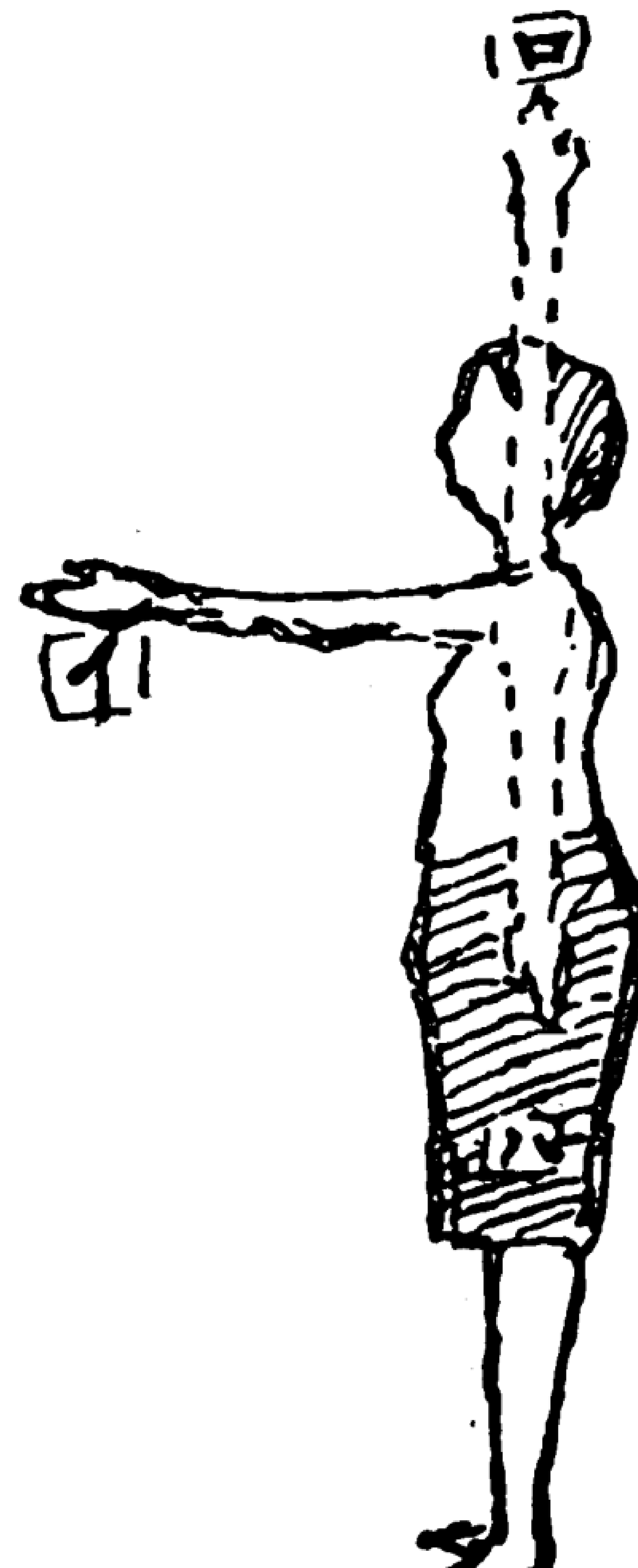
結果　此運動は肩の關節をよく和らげ軟らかにするのでそれを包圍する筋肉と神經とは強健になるのである。從て血液の運行と腕にある神經の動作を活潑にさせて、血液が頭や胸に逆滯しない樣になる。

應用　此運動は筋肉の過勞、肩の關節及び腕の神經の働きの鈍いもの、慢性リューマチ、或は肩の關節の強勁もの、胸隔の狹いものなどに應用する。

四、腕の舉上(前面へ)七回乃至十回

腕を十分に展伸して、急に前から頭上へ(第五圖のイロハ)次に徐かに兩側へ自然の位置に垂下する、胸を前へ出して頭と上體とは眞直に。

五圖



腕を舉上するときは吸入して、垂下するときに呼出する。(第五圖)

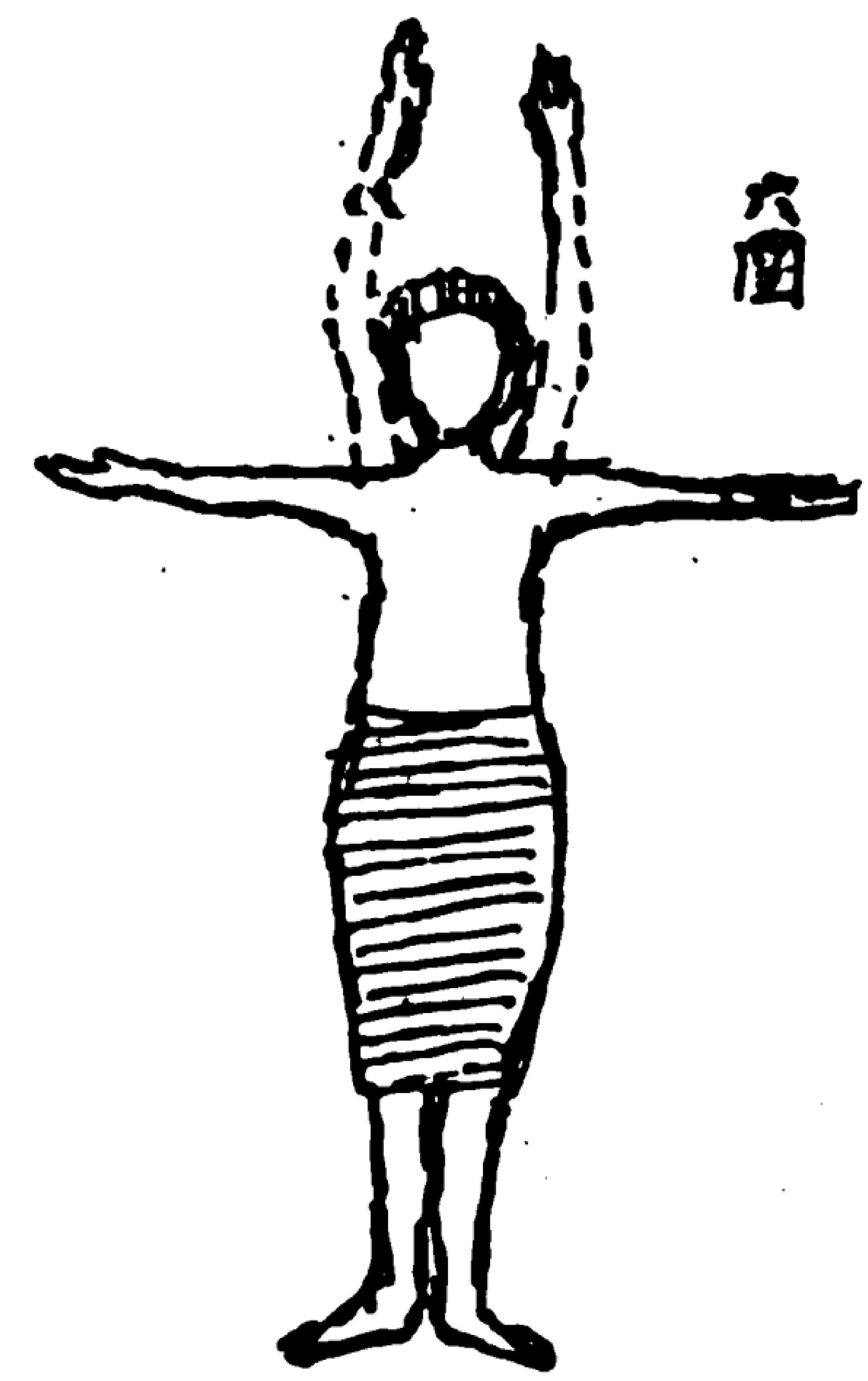
結果　此運動は胸を濶展し肺を膨脹せしめて、神經と肩の筋肉とは強くし、肩の關節を柔かにして、脊筋を眞直にする。

應用　胸隔の狹くして弱いもの、呼吸器や心臟の弱いもの、肩の變態に屈して居るものなどに應用する。

五、腕の舉上(側面へ)八回乃至十四回

腕を徐かに側方へ展伸して漸々頭上へ垂直に揭げる(第六圖のイロハ)ので、始めに掌を上向にして展伸して第六圖のロまで平らに揭げられたとき掌を下向に回して、頭上に揭げたときは手の甲と甲とが向き合ふ樣にする。一旦頭上に揭げ

六圖



たならば猶豫なく直ぐに徐々と（上に揚げたときと同じ仕方で）兩側に垂下する呼吸法は前の通りで宜しい。（第六圖）

結果　胸廓を濶展揚上して、肩、上腕及び背の筋肉を强くする。

應用　特に呼吸運動として用ひてよい。

六、腕の投放（側面に）十回乃至十六回

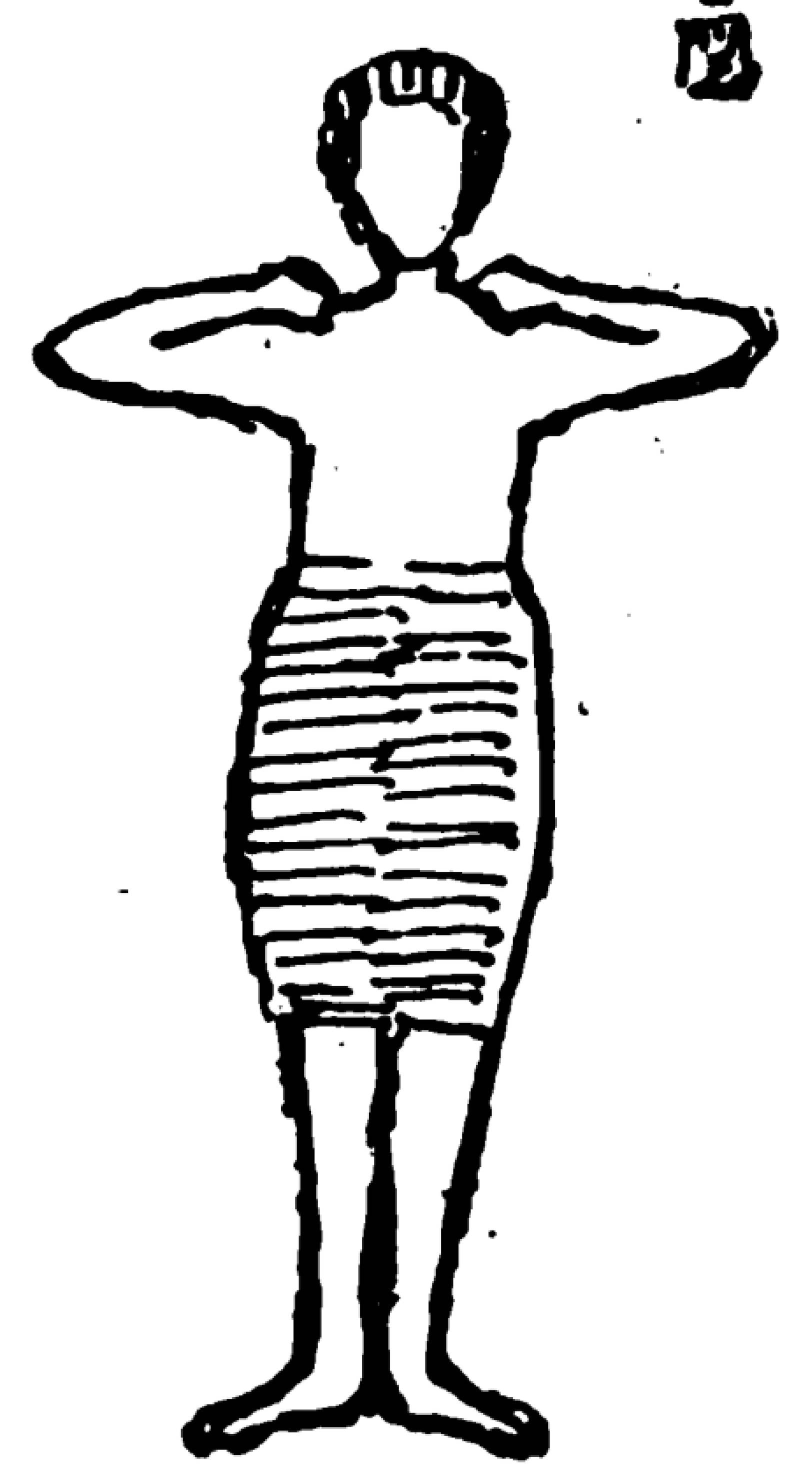
腕と肩と平に側方へ揚げて能く後ろへ引く様にして。急に臂を屈げて前腕を前へ來たす。

次に此位置から前腕を烈しく强く外方へ突いて出す樣にする。（此時に吸入して）上腕は動かさない樣に。

前腕は又た前へ屈げて、（此時呼出して）といふ樣にして反覆する。

結果　腕や背の神經と筋肉とを强健にして、胸廓を濶展して、腕の方へ血液の循環を良くする。

七圖

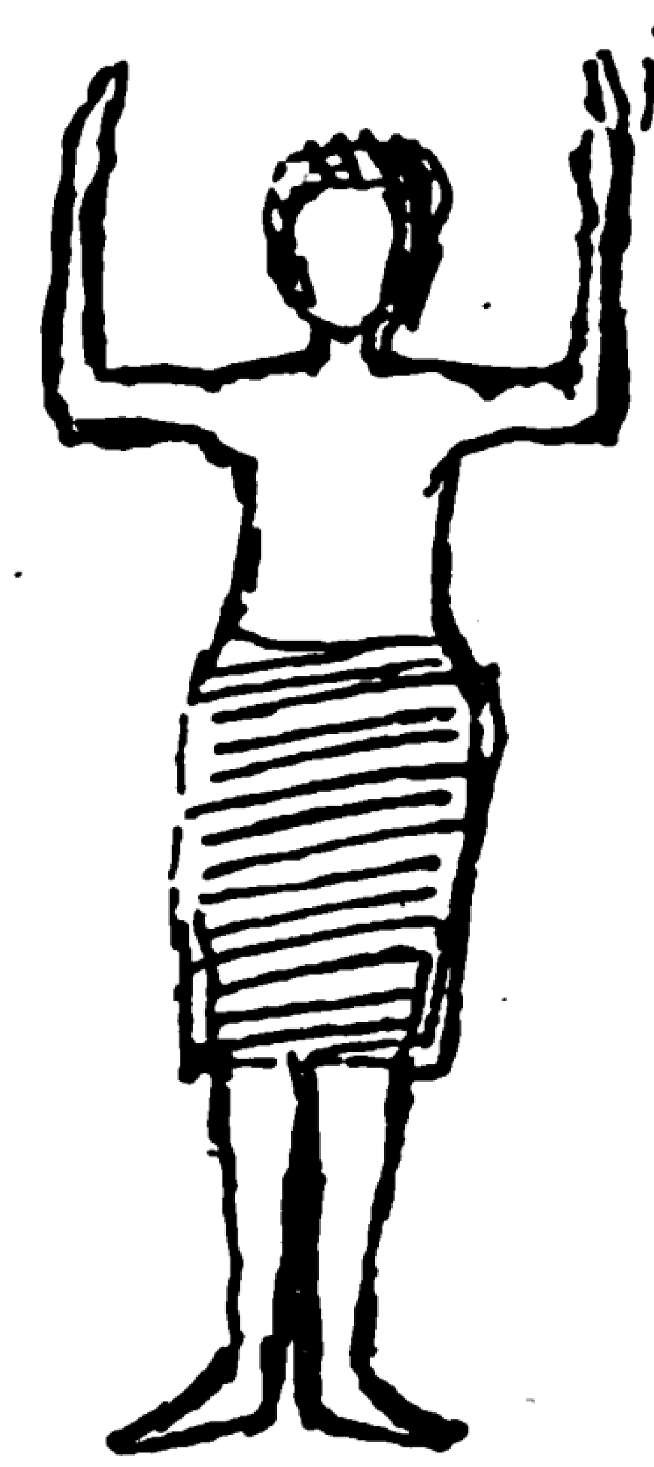


應用　肺や心臟の弱いもの肩の變態に屈曲してゐるものなどに應用する。

七、腕の回轉　六回乃至十二回

是は第八圖の樣な位置にして、次に兩腕を肩と平らにして上腕と臂とを動かさない樣にして、前腕を撚回して掌を外方に向ける。胸は十分に濶げて次に始めの位置に復して、六回乃至十二回反覆する、頭は眞直にして。

八圖

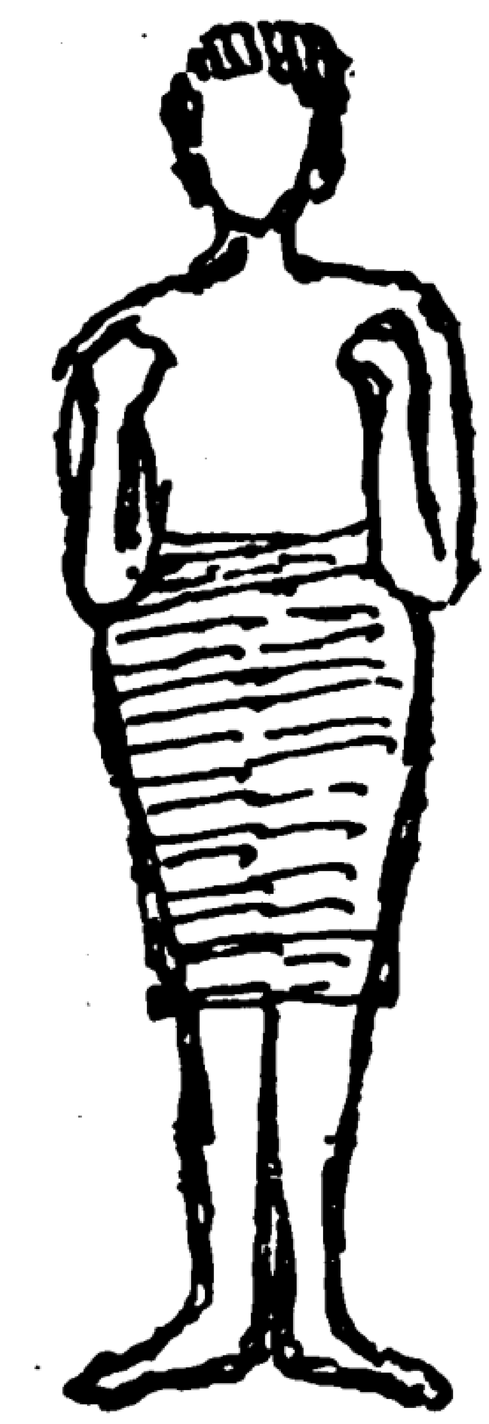


結果　此運動は肩の前へ突出して居たり、屈曲して居たりするものを眞直にするには極めて良い。

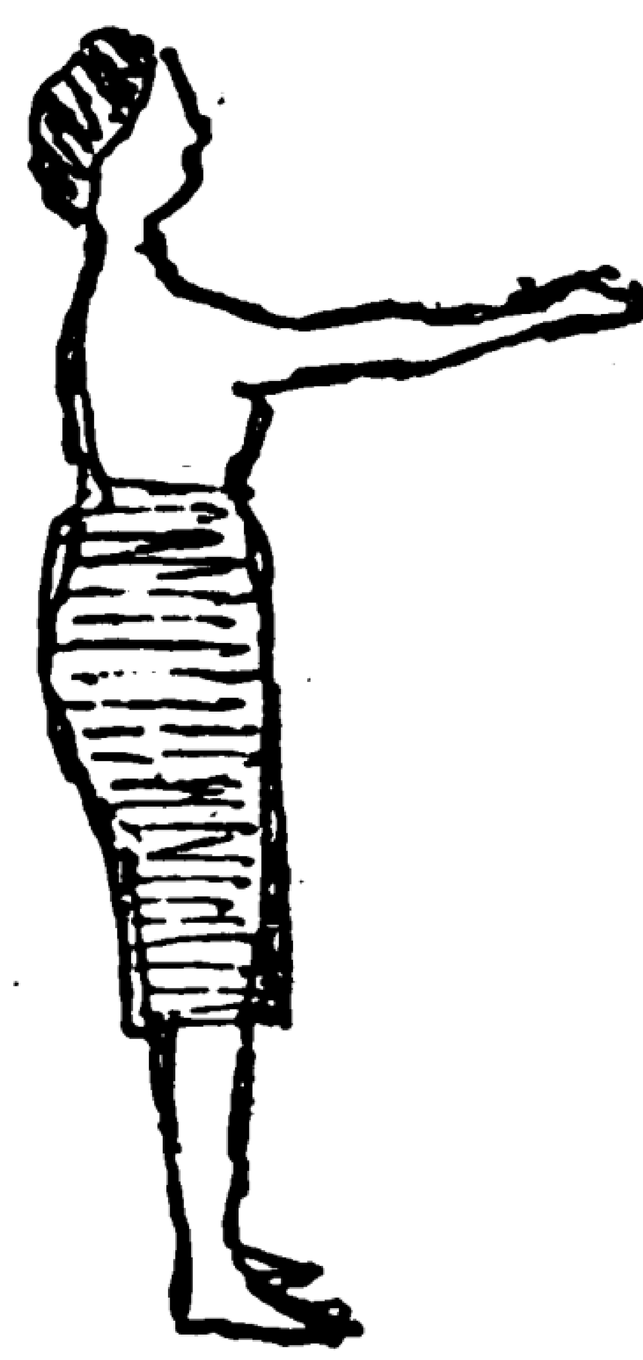
八、腕の屈曲と展伸　八回乃至十六回

前腕を徐かに上の方へ屈げて、上腕と併行せしめ、臂は能

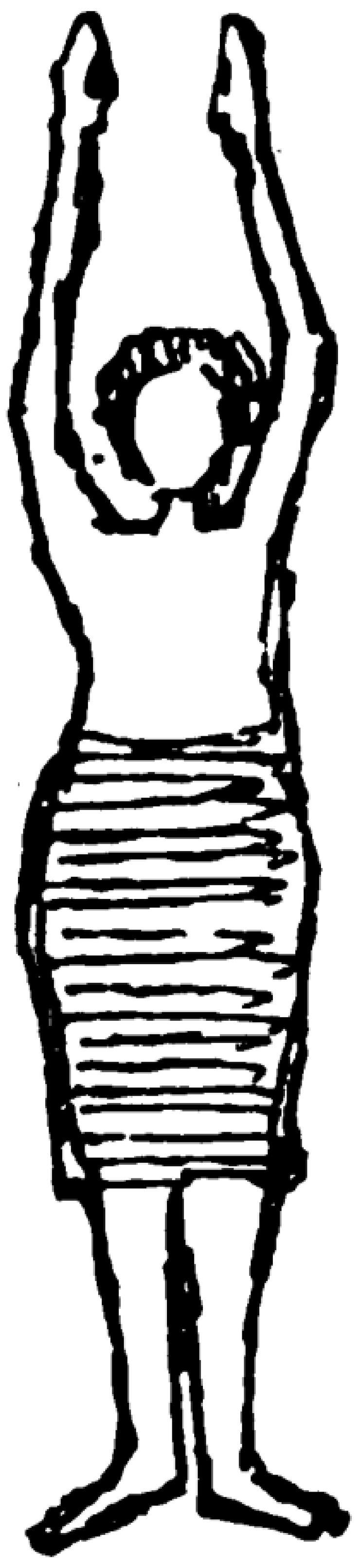
九圖



十圖（イ）



十圖（ロ）



く體に付けて指を軽く肩の方へ觸れる。（第九圖）

　此位置から腕を急に前へ展伸して（第十番のイ）兩掌を向き合せ次に徐かに前の位置になる様に屈げて。

　次に此位置から烈しく頭へ垂直に揚げ手の甲と甲とが向き合ふ様にする。（第十圖のロ）次に又た始めの位置に復して、次に兩側へ充分に肩と平らに展伸して掌を下向にする。（第六圖のロ）又た始めの位置に復して、次に急に垂下する。

斯様に交互に屈げたり伸したりする間に、常に頭を眞直にして居る。

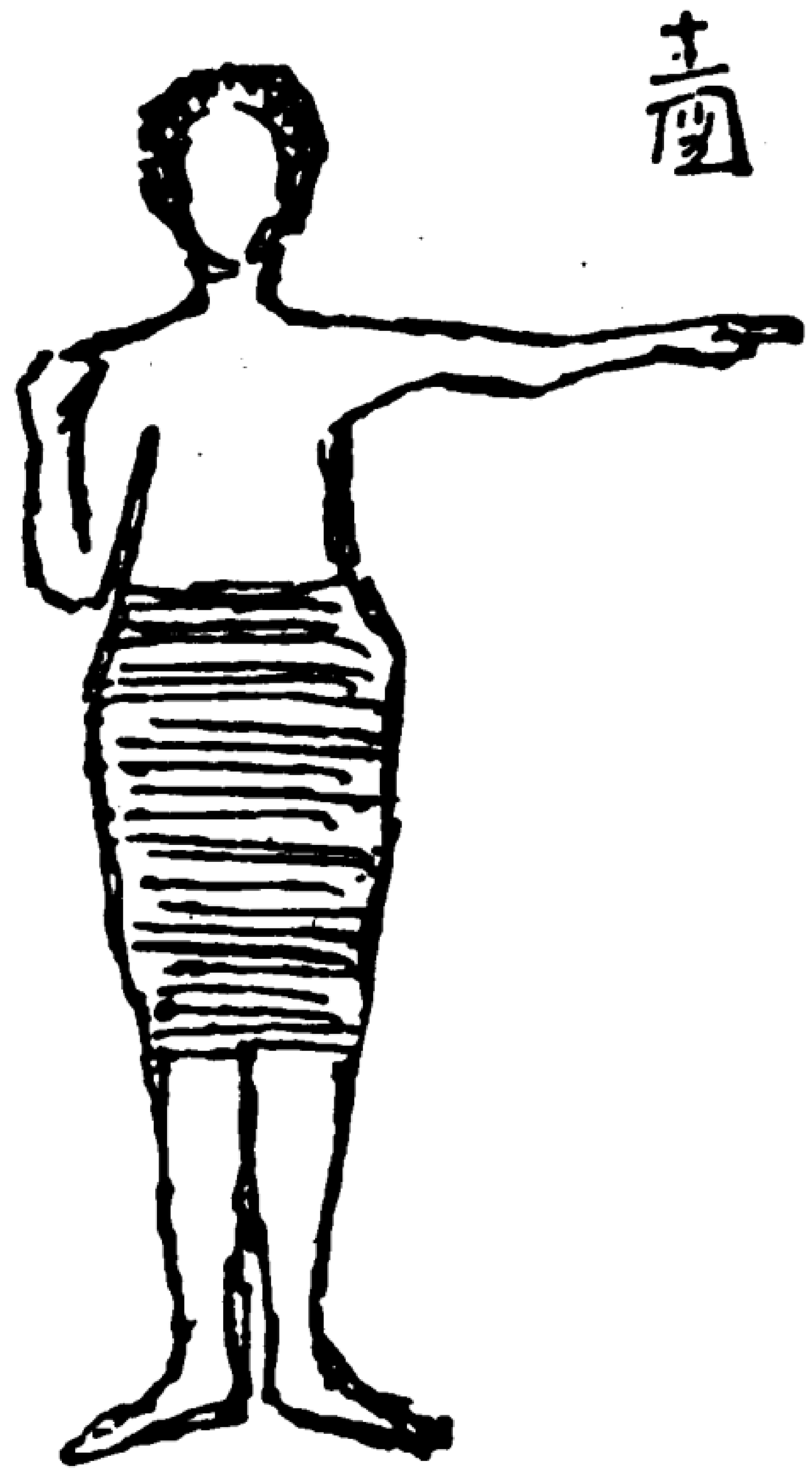
　結果　腕及び肩の筋肉と神經とを強健にして、胸を濶げ關節を柔らげ、血液の循環を良くして心臓や肺の精力を增させる。

　應用　リユーマチ及び腕の硬剛い人、神經や筋肉の弱いもの、血液の澁滯し易いもの、感冒の初期、又た心臓の働きを強くする爲めなどに應用する。

九、腕を交互に展伸す（側方へ）十回乃至十二回

　第十一圖の様な位置で、一方の腕を急に側へ展伸して、同時に他の一方の腕を屈げるので體や頭を動かさないで交互に之れを行ふのである。

十一圖



　應用　猫背のものや、肩の凸起して居るものなどに應用する。

一〇、手の圓形　十五回乃至三十回

　腕は肩と平らに側方へ伸展して、手首で圓形を畫くので、始めは十五回から三十回位として漸々回數を增してよい。

結果　前腕の神經や筋肉を強くして、手首を柔らげ、血液の循環を良くする。

一一、指の屈伸　八回乃至十六回

指を輕く握り結んで、次に烈しく急に開いて指を伸ばす。

結果　手、前腕の神經や筋肉を強くして、指の關節を柔らげ、指へ血液の循環を良くする。

應用　第十と第十一との練習は指及び腕の痙攣、リューマチ、又た手の縮屈とき、又た洋琴や風琴奏者に特別の練習として應用する。

C、腰脚の運動

一二、足の側上（側方へ）三回乃至八回

十二圖



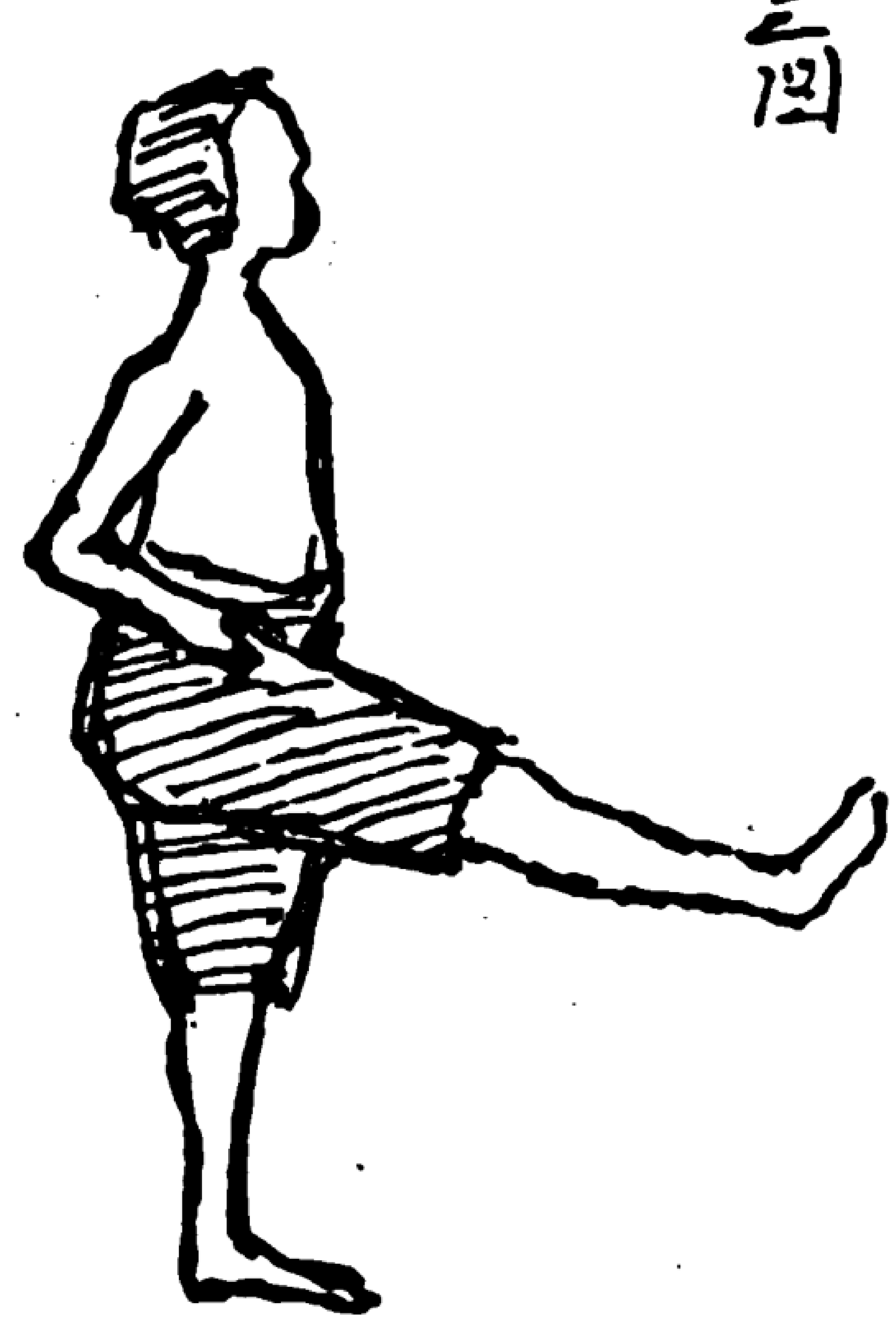
兩手を腰骨に置くか（拇指を後ろにして、他の指を前の方へ置いて）或は倚子かテーブルで保つかして、徐かに片足を側方へあげる、第十二圖の樣にして、片々づつ三回乃至八回反覆する、時には腕を側方へ揚げる運動を加へてもよい。

結果　股、腰骨、腹及び股の付け根の神經と筋肉とを強くする、又た全身の動搖練習として神經組織の上に全體に渉つて良結果を與へる。

應用　尻骨機關の弱いものに應用してよい。

一三、足の前上（前面へ）三回乃至八回

十三圖



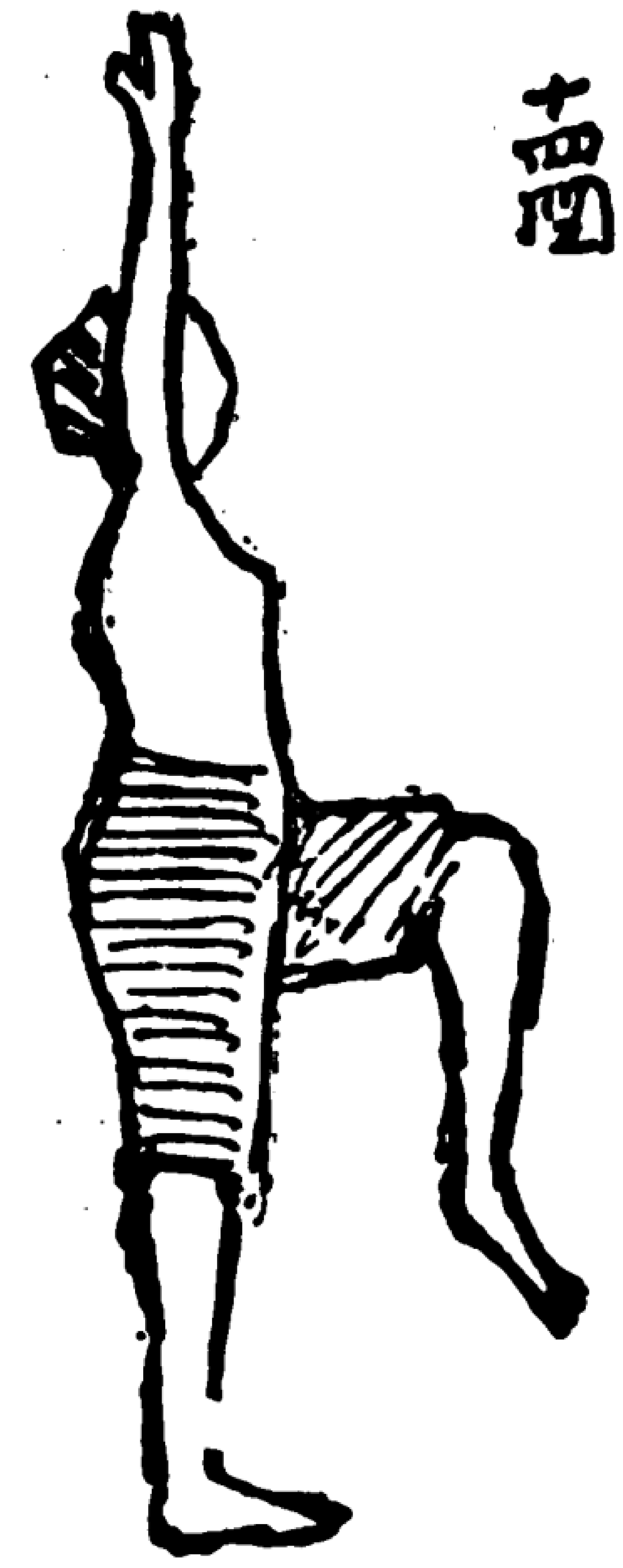
體を屈げないで足を徐かに出來るだけ前の方へあげる、次に徐かに垂下する、三回乃至八回十分に足を伸ばして行ふ。（第十三圖）

一四、膝を擧げて前へ伸ばす。四回乃至八回

第十二の練習の樣にして、膝をあげ腰と股とが正しい角度をなす位にして趾尖を下に向け、（第十四圖）次に膝を前へ伸ばして第十三の練習と同じ樣にする。

次に又た膝を屈げて股と腰とを正しい角度にして、次に又

十四圖



た前へ伸ばす四回乃至八回反覆して、體を眞直に胸を前に出す、又た時には腕を頭上へ揚げる運動を加へて行ふもよい。

結果　第十三第十四の練習は脛脚の筋肉を眞直に強くして、坐骨神經を強くし、髖骨や膝の關節を柔らげ、腹部の筋肉を強くして血液循環を良くする。

應用　坐骨神經痛や、關節の剛いもの、便秘、尻骨機關の弱いもの、又た身體を美しく運ばせる爲めなどに應用する。

一五、足を後ろへ蹈げる　四回乃至八回

十五圖



(イ)兩手を髖骨に置いて片足を出來るだけ後ろへあげて、上體と膝とは屈げない樣にして、趾尖を下に向けて胸を能く前へ出して(第十五圖)後ちには手を頸の後ろへ置いて行つてもよい。

(ロ)足を前へあげて、次にそれを後ろへ振動して、次に前へ又た後ろへと交互に四回から八回位まで反覆する、之れは片手を椅子にでも掛けて行へばよい。

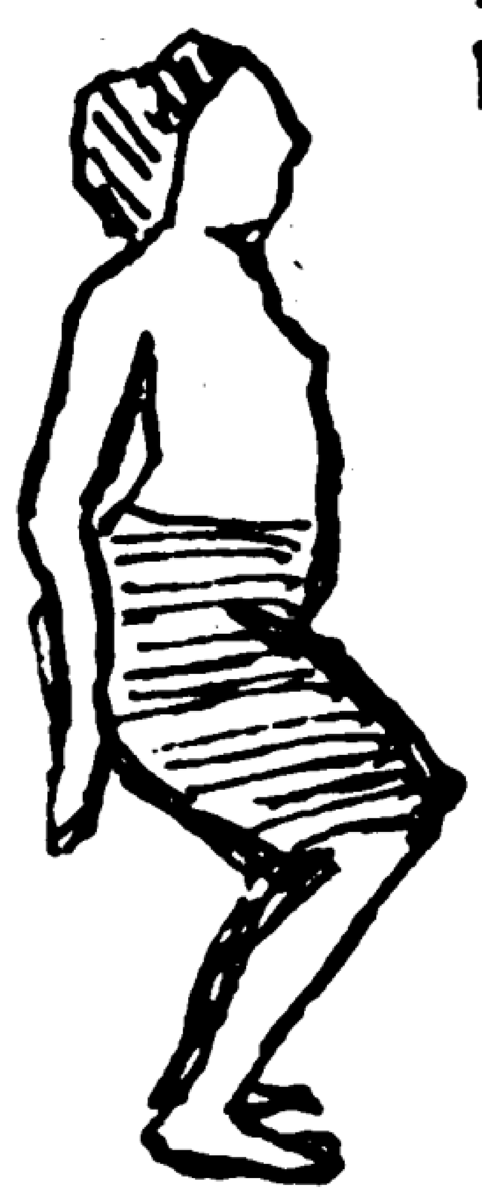
結果　前の練習と同樣で、血液を頸から腰へ引下げて足を暖める。

一六、膝を屈げる(輕く)　六回乃至十五回

十六圖



十七圖



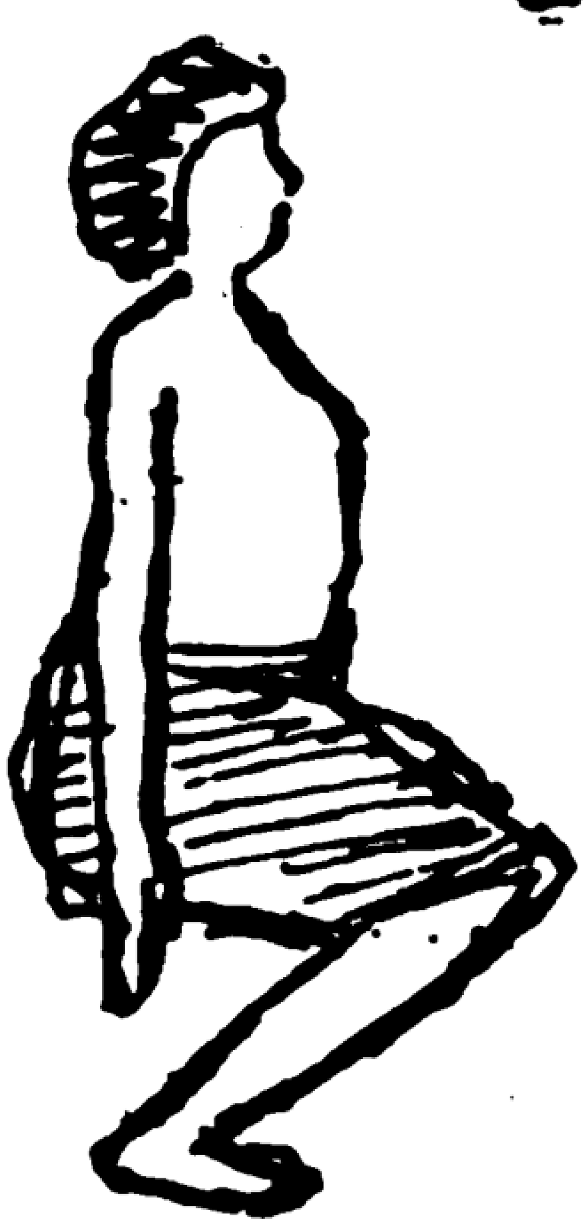
兩方の踵をあげて膝を徐かに正しい角度を作る位に屈げる。之れは兩方の趾尖を能く外へ開いて踵を付けるので第十六圖の樣にする、次に徐かに膝を伸ばして起つ。(第十七圖)此の屈げるのと伸ばすのとを六回から十五回位まで反覆し

て胸を前へ出して背を眞直にして行ふ。

一七、膝を屈げる（深く）二回乃至六回

前の練習の様にして、第十八回の様に十分深く膝を屈げる

十八圖



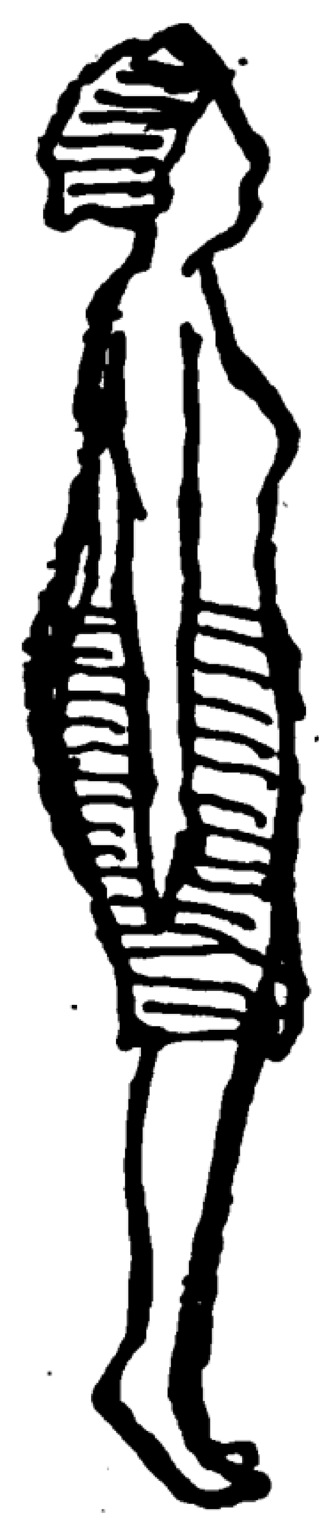
ので、二回から六回位反覆する後には手を頸の後ろへ置いて行つてもよい。

結果　膝を眞直にして踝の關節を柔らげ、全脚、腰、腹などの筋肉や神經を强くして、血液の循環を速かにし、又尻骨機關や腹の働きを强くする。

應用　下脚の神經や筋肉の弱いもの、坐骨神經痛、消化不良、痔疾、尻骨の弱いもの、脊骨の屈つたものなどに應用する。

一八、踵の踏上　十回乃至三十回

十九圖



（イ）兩方の踵を能く付けて、出來るだけ高くあげる、膝や上體は屈げない様にして（第十九圖）次に徐かに踵を下す、十回から三十回位まで反復してよい。

（ロ）兩足の間を離して手を頸の後ろに置いて踵をあげる。（第二十圖）

二十圖



二十一圖



（ハ）片足を一歩前へ出して趾尖を外へ向け、兩方の踵を擧げて平均に衡秤の様に上下に搖動する、體を前へ出したり屈げたりしてはならない。（第二十一圖）

結果　脛脚の神經や筋肉を强くして、脊骨を眞直にする。

應用　踝や脛の弱いもの、足の冷えるもの、脊骨の曲つたもの、又た神經組織を强くするためなどに應用する。

一九、足の圓形　十回乃至二十回

足をあげて踝で圓形を畫く様にするので、始めは外へ外へと圓形を畫いて十回から二十回位行つて、次には內へなり外へなり數回行つてもよい。

結果　脛脚の神經や筋肉を強くして血液を足部へ良く循環せしめる。

D、上體の運動

二〇、上體を前へ、後へ屈げ　四回乃至八回

(イ)兩手を腰骨に置いて、肩と頭とは後とへ引いて、頤を内へ胸を前に膝を眞直にして、徐かに上體を前へまげる。第二十二圖



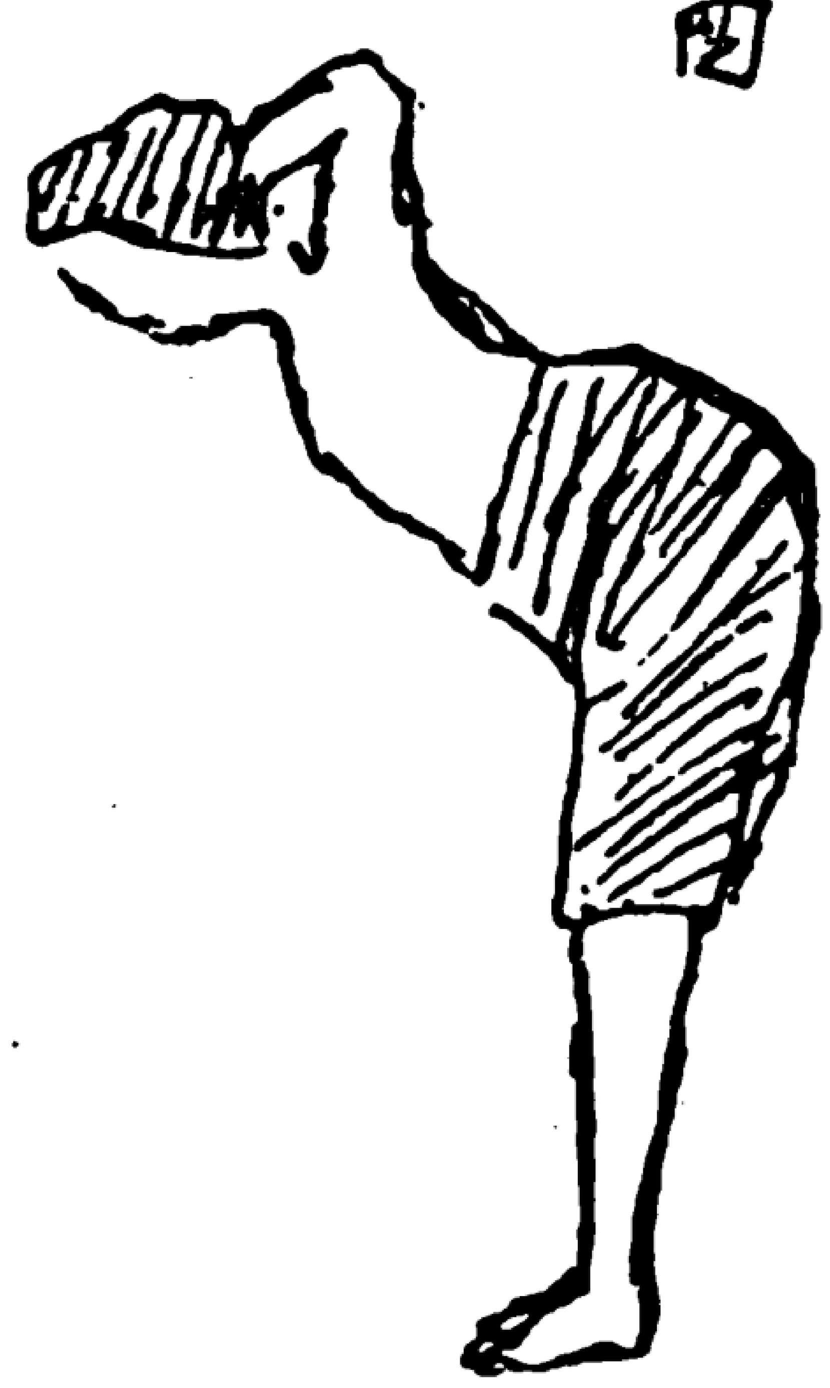


次に上體を眞直にして徐かに後ろへ屈げて脊筋を平均に屈げ胸を前へ弓形にして、腰骨や脚を屈げぬ樣に。第二十三圖

結果　此練習は頸や脊を眞直にして胸膈を濶展する。

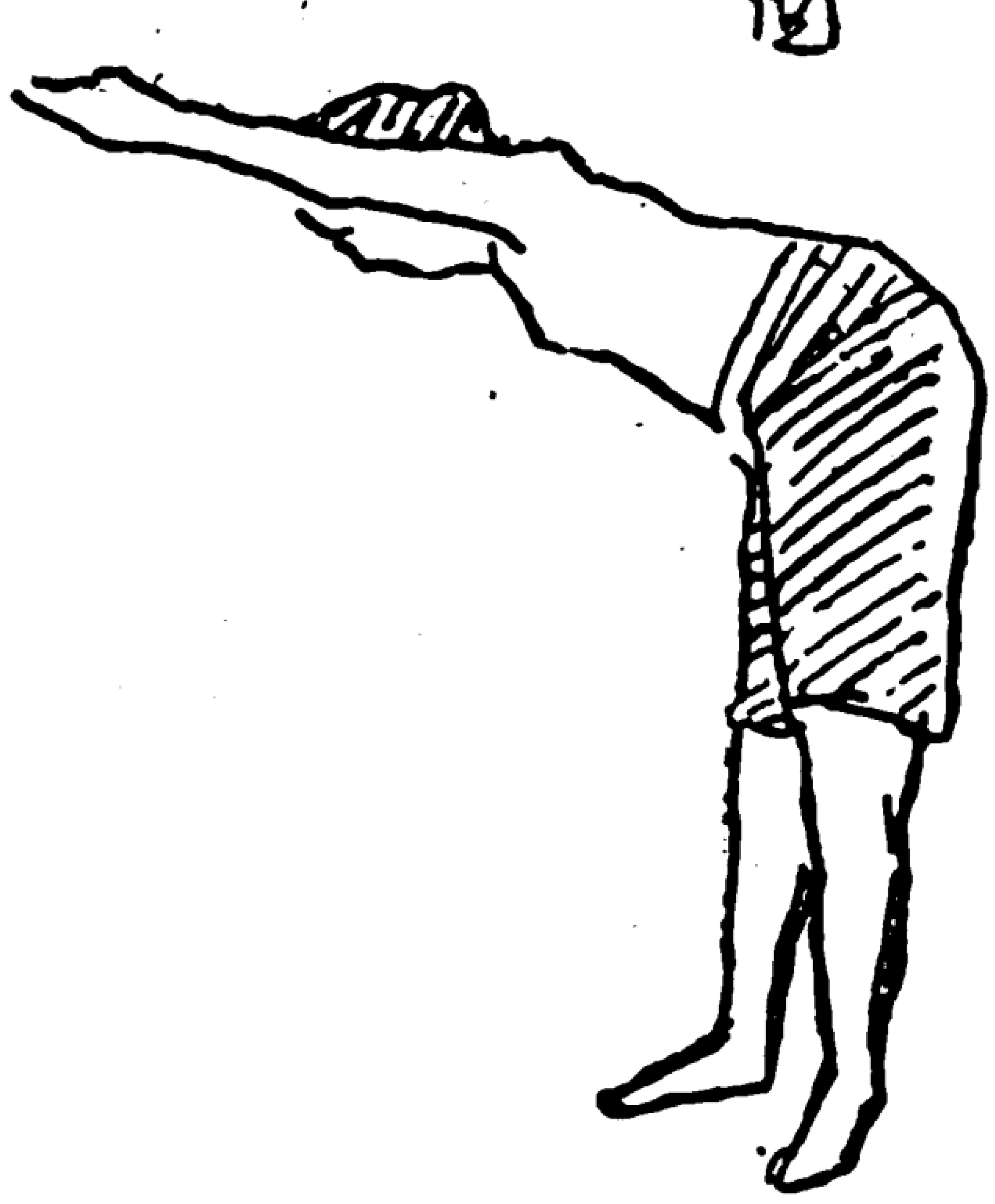
應用　胸の狹いもの、猫脊、肺の弱いもの、曲つて居るものなどに應用する。

(ロ)兩手を頸の後ろに置いて、上體を徐かに前や後ろへまげる。第二十四圖　上體を前へまげる時は正しく腰骨の處から屈げる樣にして其他の部分は平らにして、脊は眞直にして行ふのである。



(ハ)兩腕を頭上に揭げて兩足の間を離して、上體を出來るだけ前へまげて、腕は耳に付ける樣にして、腕を屈げないで。

(第二十六圖)



結果　之れは背を眞直にして、又た其神經や筋肉を徐かにして強くする。

(ニ)兩腕を頭上に揭げて、片足を一歩前へ出して、上體を

後ろへ屈げ、兩足で平均に起つ、（第二十六圖）是は腹下の練習です。


二十六圖


二十七圖


二十八圖

二一、上體を屈げ（側方へ）四回及至八回

上體を出來るだけ右へ又た左へ屈げる、體を捻つてはならない。（第二十七圖）時には片手を頸の後ろに置て片手を體骨に置いて行つてもよい。（第二十八圖）又た兩手を頸の後ろへ置いて行ふもよい、又た兩手を兩側へ伸ばしたり、頭上へ伸ばしたりして行ふもよい。

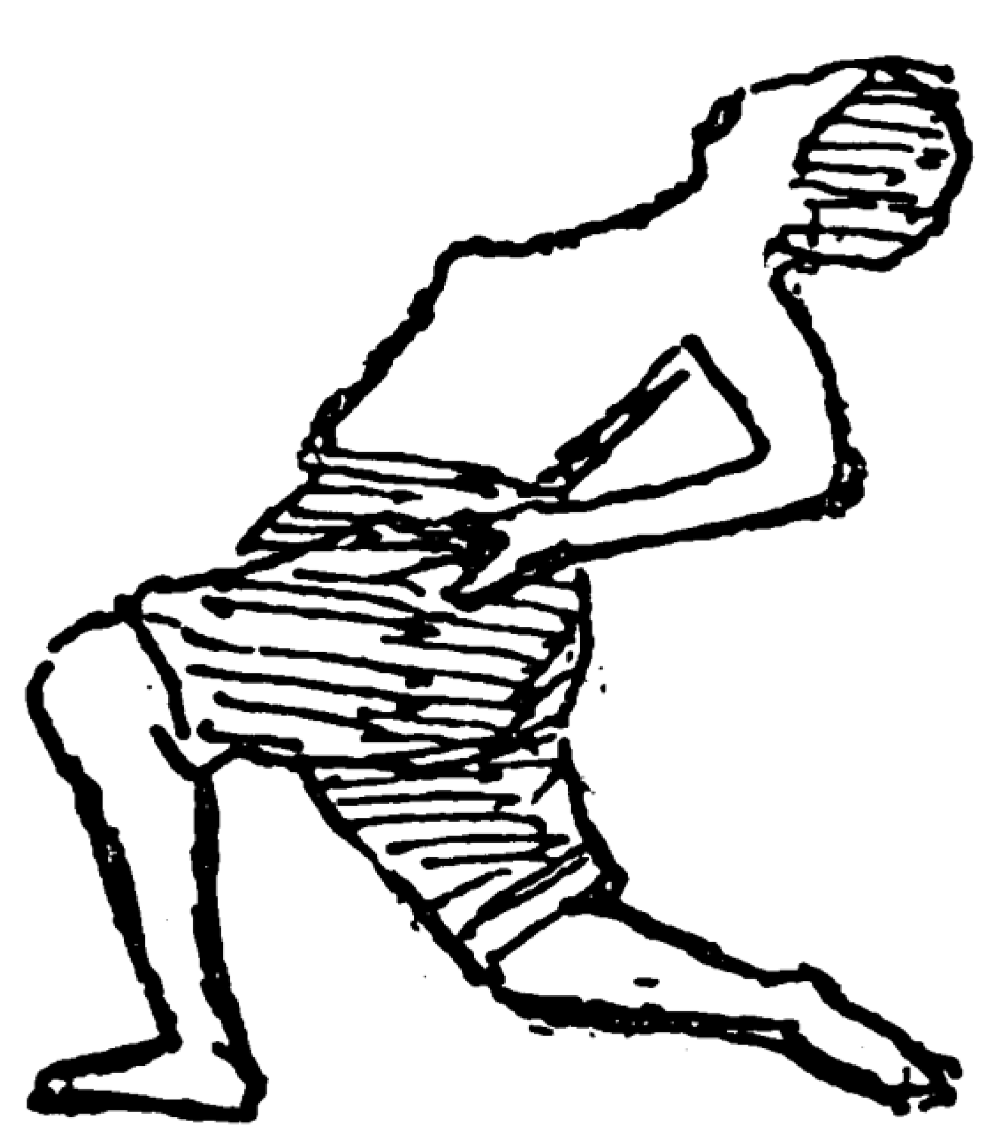
二二、上體の回轉　五回乃至十回

上體を右の方へ又た左の方へ回すので、この際體骨を動かさぬ樣にして行ふ。第二十九圖


二十九圖

二三、跪いて上體を後ろへ屈げ、（二回及至八回）

兩手を體骨に置て兩膝か片膝で跪いて、上體を第三十圖の樣に屈げる、後ちには兩腕を頭上へ揭げて行つてもよい。


三十圖

二四、上體の圓形　三回及至八回

兩手を體骨に置いて兩足の間を離して、上體を前へ左へ後ろへ右へと屈げながら動かして、腰の處を中心として、出來るだけ大きく圓形を畫く。圓形を畫くといつても上體はソー自由に捻れるものではない、正しく方形を畫く樣なものである。胸膈を潤げて、體骨

や頭を固く脚を眞直にして行ふ、又た之れは三回から八回位としてあつても、度々反覆してもよいのである。

結果　以上の數練習は、腹、脇腹、背の筋肉などを強くするので、脊や腹を柔らげ、脊骨や其神經を刺戟して、胃、腎、腸などの働きを助け、血液の循環を良くする。

應用　便秘、胃弱、怒り易いもの、腰痛、痔疾などに應用して頗る効がある。

E、頭の運動

二五、頭を屈げ　四回乃至八回

(イ)頭を徐かに前へ屈げ、次に後ろへ屈げる、此際體を動かさぬ樣にして。

(ロ)頭を徐かに左肩の上に屈げ、次に右の肩の方へ屈げる此際肩を動かさぬ樣にして。

二六、頭の回轉　五回乃至十回

頭を左に右にと交互に出來るだけ早く回はすので、此際頸を屈げたり、肩を回はしたりしてはならない。

二七、頭の圓形　三回乃至八回

頭で徐かに出來るだけ大きく圓形を畫くので捻る樣にしたり又た摘く樣にしてはならない。始め三回から八回位まで行つて、次には右へ圓形を畫いたら左へ戻すといふ樣にして度々行つてもよい、肩を動かさないで體を眞直にして行ふ。

結果　頭の運動は咽喉や頸の筋肉を強くして、血液の胸部に鬱滯するのを防いで、神經を爽快にするものである。

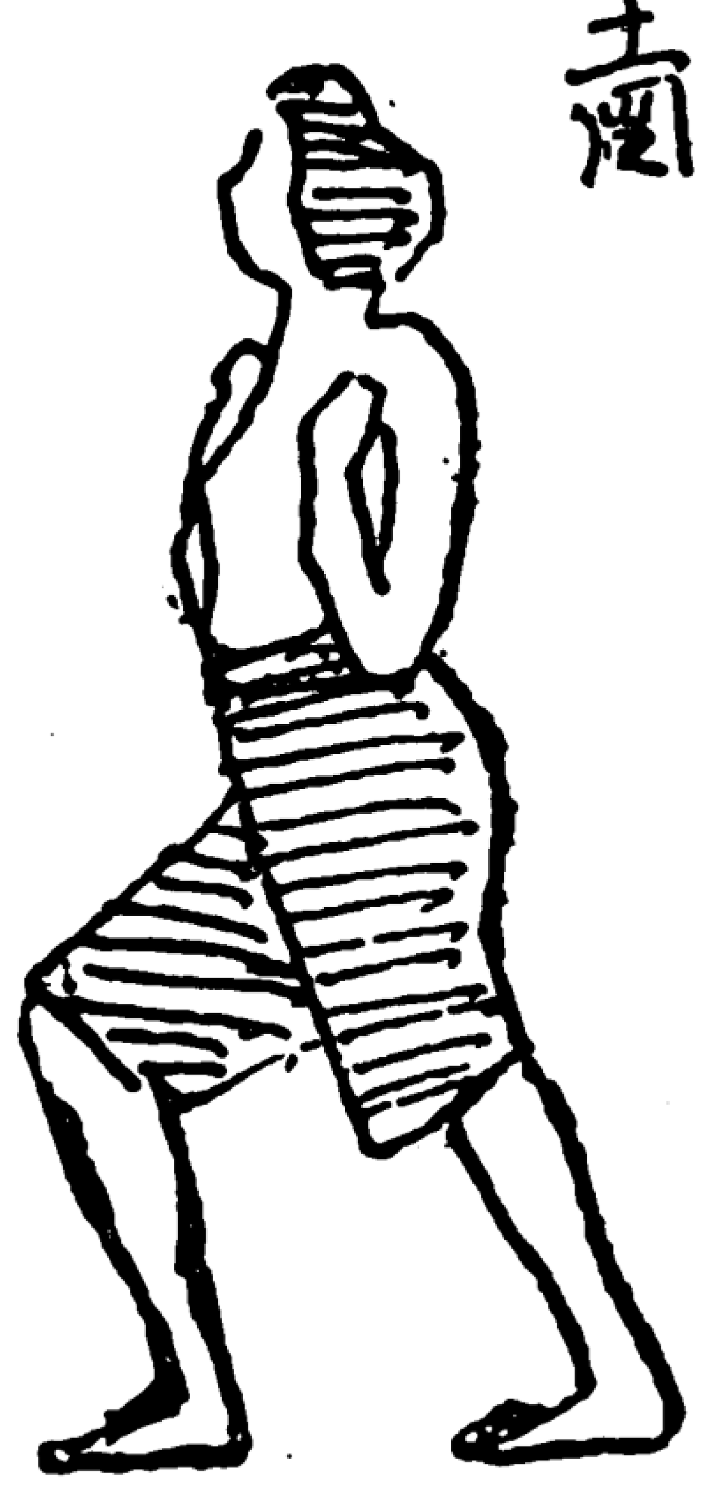
應用　頸のリューマチ、血液の頭に滯るもの、又た不眠症などに應用して頗る良い。

F、種々の運動

二八、前面の攻勢　五回乃至八回

片足を眞直にして一歩前へ出して、兩方の踵の間は足の長さの三倍位にして、能く外へ向けて前の膝を正しく屈げる。體を前へ出して後と足(眞直にしてある)の方で支へる樣にして、(第三十二圖)頭は擧げる樣に注意して兩方の足で五回から八回位反復する。

三十二圖



結果　背及び脚の神經や筋肉を眞直にして強くするので普通一般の練習として與へられてある。



三十三圖

二九、斜前面へ攻勢

趾尖を回はして足を斜に前へ出して、上體を共方へ屈げて、體は後足で支へ前足の膝を正しい角度に屈げて、後の足は眞直にして。（第三十三圖）



三十二圖

前足の踵をあげては下げあげては下げして十回から二十四回位行ふ、體は前へ屈げたまま動かさないで行ふ。

應用　前の練習と同樣で、脛脚の筋肉には特別の効がある。

三〇、背を伸ばす　二回乃至五回

第二十八の練習と同じ姿にして、兩腕を頭上に揚げて上體を第三十四圖の樣にする。（第三十四圖）



三十四圖

結果　脊骨を眞直にして、神經を興奮させるのに良い練習である。

三一、膝を伸ばす　二回乃至四回

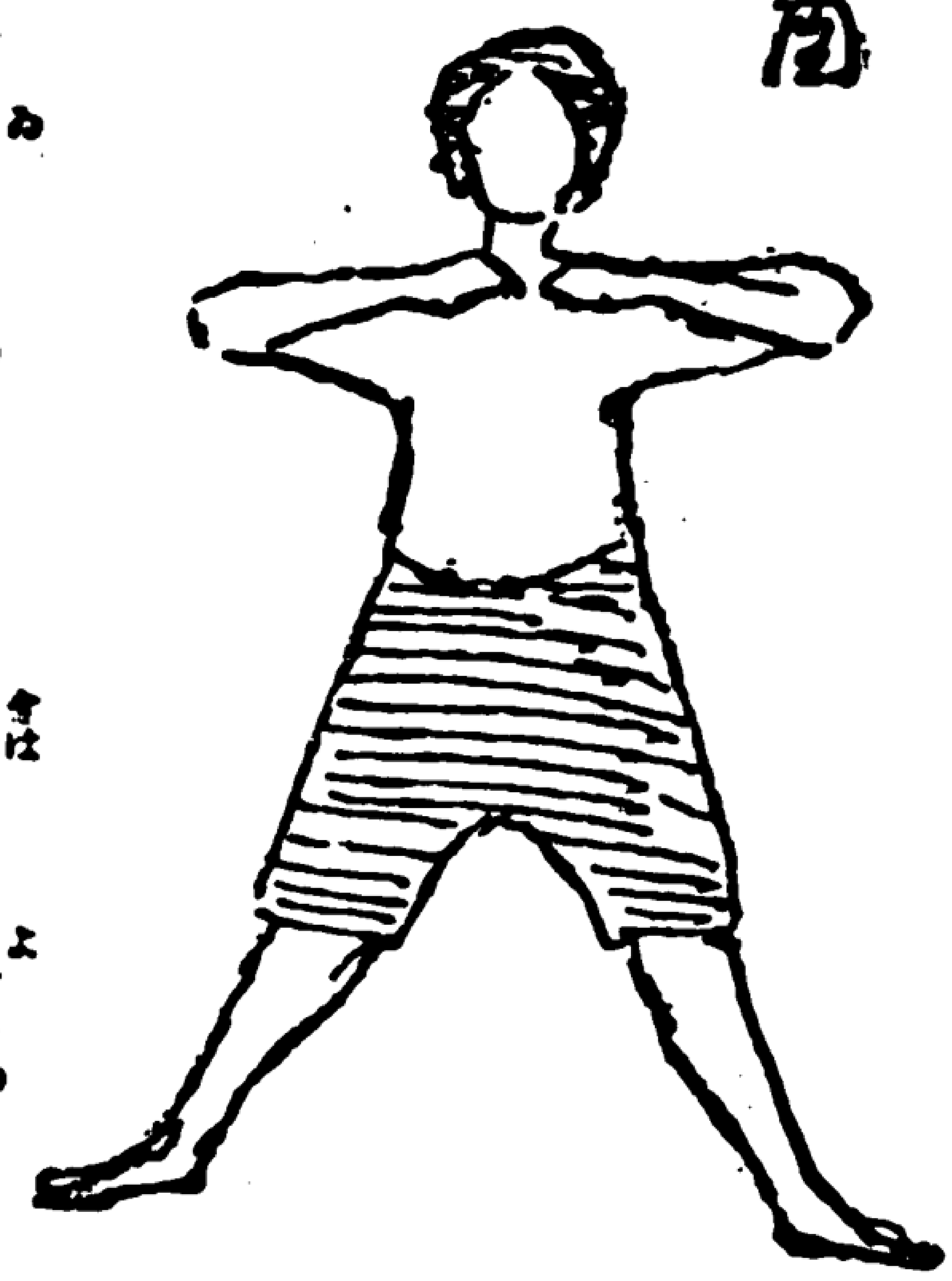
兩膝を頭上に揚げて右膝を後ろへあげ、左背を正しい角度に屈げて、體を平らにする樣に前へ出す、頭と肩とは後ろへやる樣に注意して（第三十五圖）



三十五圖

結果　これは脊を眞直に伸ばして、神經を強くして、體の姿勢を美しく良い釣合ひにする。

第三十六圖



三二、上體を前へ屈げ、腕を曲げる

兩足を兩側へ開いて兩腕を前へ胸の方へ屈げて、上體を前へ屈げる、（第三十六圖）此位置で腕を第五の練習の樣に屈げたり伸ばしたりする。

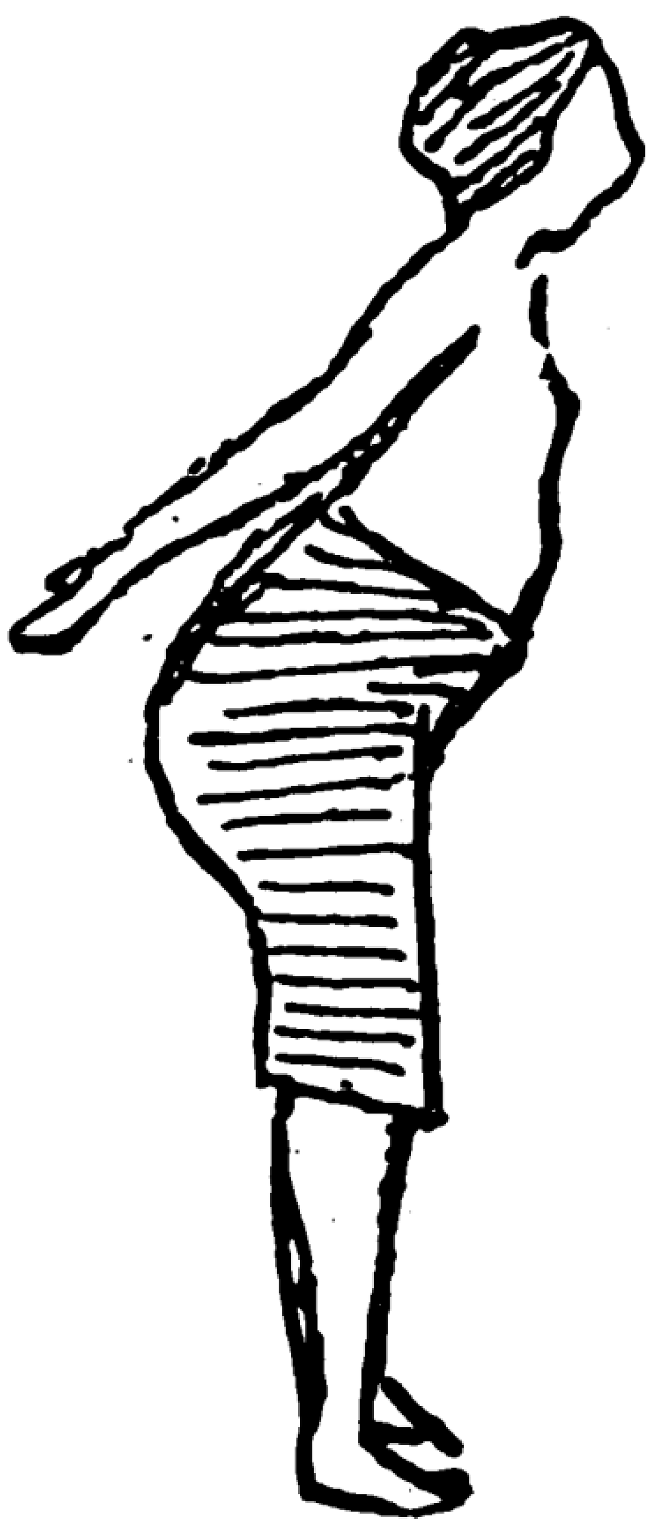
結果　背骨の曲つて居るものなどには極めて良い。

三三、腕の離組

兩腕を後ろへ投げる樣にして、（第三十七圖）上體を前へ屈げて、次に急に腕を胸へ組むで上體を眞直にする。（第三十八圖）八回から十六回位まで反覆する。

結果　血液の循環を良くして、又た觸覺の凍へたときなどに最も良い。

第三十七圖



第三十八圖



四、速屈運動

兩足の間を離して兩腕を頭上へあげて、兩手を握り合せて體を急に前へ屈げる、次に體を眞直にして兩腕を垂れて。五回から十回位まで反覆する。

結果　脊や腕や腹などの神經と筋肉とを強くして、尻脊機關の働きを良くする。

三五、收容運動

上體を前へ屈げて、烈しく兩腕を一方から一方へ投げる樣にして、同時に上體を其方へ回はす。（第三十九圖と第四十圖）八回から十六回位まで反覆する。

第三十九圖



結果　前の尻骨の練習と同樣で血液の循環を良くして、胸背の神經筋肉を強くして、肩や

四十圖



腰などの關節を柔げる。

三六、體を平にして手と趾とで立つ

兩手を床の上へ置て腹這ひになる樣にして、足を後ろの方へ伸ばして、暫くの間體を平らにする、疲れたら腹を床に付ける樣にして、又た腹を上へ揭げる樣にする。

結果　體の前面と腹と尻骨との收縮筋肉を緊張させる。

應用　子宮脫や直腸の弛脫、又た脂肪過多のものに應用する。

三七、腹の壓搾

立て居ても坐つても又た横臥してもよい。腹を兩手で壓して內の方へ徐かに强く壓して、次に力を弛めて急に外へ突き出す樣にする。

四回から六回位反覆する。

結果　腹の筋肉を强くして、胃と腸との働きを助ける。

三八、脚を擧げ（三回乃至七回）

仰向きに臥て足を出來るだけ上へあげる。膝は眞直にして徐かに下ろして又た片方の足で行ふ、三回から七回位まで行つて追々慣れたら兩足で同時に行つてもよい。

結果　腹の筋肉と腸の働きとを强くして、坐骨神經を伸張し尻骨や脚へ血液の循環を良くする。

三九　上體を擧げて

長椅子か寢臺の上へ横臥して、膝から下は垂れる樣に下げて置て、其の位置から坐る樣な姿に起き上る。一回から六回位まで反覆する。

結果　前のと之れと二つの練習は便秘や脂肪過多、背足のリユーマチなどには最も効がある。

四〇、股の圓形（十回乃至二十回）

仰向きに臥て片膝を立てゝ正しい角度にして、髖骨の關節で圓形を畫く樣に動かす。片膝で十回から三十回位行つたら、他の方の膝で又た行ふ。

結果　腰、股、髖骨、腹の神經筋肉を强くして、髖骨の關節を柔らげ、血液の循環を良くする。

四一、體を片手で支へる

右向きに臥して全身を眞直に伸ばし、次に右手を十分に伸

して、其手で體を支へる樣にして全身に力を入れる。
次に左向になつて左手で行ふ。
結果　脇腹の筋肉を強くするのに最も良い。

四二、 後屈
腹を床に付ける樣に臥して、兩手を髖骨なり頸の後ろなりへ當て、上體を出來るだけ上へ屈げる。
結果　背の筋肉を最も強くする練習で、又た脊骨の曲つたものに頗る良い練習である。

第三章　歩行と自轉車

前にも話したが大抵の人は唯だ運動といふ考で歩行する、――それは片足づゝ進めるので、兩足を一處に前へ出すなどゝいふ事はしないにしても――家庭でする正しい他の練習に組み合せて、新鮮な空氣の處で活潑に歩行するといふのは尤も必要であるが、歩行をした計りで必ず健康を得られるといふ譯にはゆかない。眞に歩行の練習をするとなれば、田舍あたりへでも行つて空氣の良い處で、歩調を長くして見たり急にしたり、時には驅けでも見る、又趾先で徐かに歩行といふ樣に、種々に變へて出來るだけ練習したらば大に効能がある。

又た近來自轉車が頗る利用されて來た。之れは健康體の動作としては頗る利益のあることは、確に證明せられるし、脛脚を緊張させる。又た背や胸腹などを或る程度までは擴展するし、肺や心臟の神經は大きい活動にも堪へられる樣に力付くといふ利益もある。

が又た一方から見ると頗る害もある、先づ第一には過劇といふ事で、活潑な愛輪家や刺戟を得易い負け嫌ひな人などは最も之れに罹り易い。

斯樣な人が自分よりも上手な愛輪家を伴つて立派な町でも走らうものなら、勢一杯に速力を出して、負けずに追付て行かうとするので、其時直ぐには格別の疲勞を感じないにしても、隨分危險な仕事である。假令ひ其疲勞には堪へるとしても、長く此過勞を續ける事になると神經虛脫になるか、少くとも全體の健康を損するのは當然の事で。又た女子にあつては髖骨や子宮の安寧狀態を破壞する虞がある。

第二には、冷へた體を疾走で急に發汗狀態にするので、總て斯いふときには水や氷を多量に欲がるが決して好い事ではない。

多くの人はコンナ事で大抵一生涯健康を損して仕舞ふもの

だ。

又たモー一つの危險は大人でも子供でもであるが、十分快走するために競走乘とかいつて、體を出來るだけ前へ壓迫して背を低くして乘て居るが、これも尠なからない害を與へるものである。

自轉車は適當に乘つたなれば、隨分肺や心臟を健康にもするが、其度を過すと反てそれらの機關を弱くするし、又た之れに深く耽溺すると忽ち肺病や心臟衰弱などで夭死することになる、實に恐るべしだ。

時間や距離を規定して輪走することなぞは、健康に良くないし、虛弱なものには誠に勝ち過ぎた荷である、啻だ筋肉の上に斗り勝ち過ぎた荷なれば未だよいが、其影響は神經にも肺にも心臟にも來る。

自轉車で快走するのは最も良いなどゝいふものは競爭を職業として居る人か乃至は老年まで遊戯家として生活して居る僅かの人の言ひ草にしか過ぎない。

體操や又た種々の遊戯は、健康と快樂とを與へるために練習せらるゝのであらうが、それも胸を濶展して良い姿勢でやる事なれば頗る良い結果が得られるに違ひないけれども、若し左もないなら決して好い結果は得られない。

家庭では時には、次の樣な練習を試みるもよからう。

四三、 複急步

兩足をそろへて、輕く前へなり後ろへなり急に跳ぶので、體は趾先で支へてする。

此練習は步行のときにも出來るから、此練習を漸々速度を增して急に疾走する位にまでする。

四四、 交互に膝を伸ばす（急に）

兩膝を交互に第十四圖の如くにあげて、出來るだけ急にする。但し餘り大きく動かさないで、體は交互に下にある方の足で支へる。

四五、 趾尖步行

兩方の踵を出來るだけ高くあげて、徐かに趾尖で步行する。

第四章　マッサージと水

マッサージといふ言葉は捻るといふ意味であるが、今では擦摩、緊握、按揉、などゝといふ筋肉取扱方や手術に書いたものにまでも使用する樣になつた。

今では受術者を强壯にする樣な種々の方法が案出されてあ

るが、何れにしても機關を平均する様に優れた腕前のある人に、能く注意して行つて貰はぬと良い結果はない。

尤も十分な結果はないにしても、露出して居る皮膚を捻つたり輕く擊つたりしたらば良からうと思ふときなどには、中々良いもので、ワセリン（膏薬の名）や軟膏なども使用するから見れば遥かに優つて居る。

マッサージは如何に熟練したものに行つて貰つても、又た特に効能がある様に導引して貰つても自分の體に適した處でないと左程にも感じないものだ、がそれが自分に適した局部に的中すると、何んとも云へぬ妙味で唯だ一度行つた計りでも頗る効を奏するものである。

マッサージは凡て心臓の方へと行つて行くので、假令ば指先から肩へとか、又た足から腰へとか云ふ様に揉み上るので、又た背の方に脊骨から脇へ掛けて下の方へ手術する。甚だしく疲労したとき、又た刺戟し易い神經をマッサージするには腕や足を垂れさせて極めて柔らかに行ふのである。

四六、摩擦

之れは兩手で腕とか脛とかの周圍を握つて眞直に撫で下げる、又た兩手を穩かに後ろへ肩の方へ回はしたり、又た長く平坦に背を打ち下げたり、又た額の中央から頭顱後頭へ掛けて頭まで揉み下げるなどにする。

結果 之れは神經に最も快く靜穩の結果を與へる。

四七、緊握

心臓に近い方から始めるので、兩手で肢（手か足の）又た指の周圍を握り緊めては弛め。緊めては弛めるので、上の方へ行ふときは殊に拇指へ力を入れてする。

四八、捻搓

片手で筋肉を一束づゝ摘み上げる様にして、それを放しては他の片手で上の方へ撫でる。

四九、圓搓

これは拇指か中の三本の指かで小さく圓形を畫く様に壓しながら撫でる。

五〇、轉揉

兩手の掌で肢を握つて交互に急に衝いたり、引いたりして肩から下へとか、髖骨から下へとか、揉み下げるので、頗る血液の循環を良くするものである。

五一、按揉

手首の關節を急速に働かせて、指を筋肉の上へ投げ付ける様にするのである。

結果 此は神經を頗る興奮させるものである。

腹のマッサージ

五二、胃の摩擦
仰向きに臥て兩膝を立てゝ、兩手で腹の全體を摩擦するので、中央から兩側の方へ擦り擴げる樣にして、又た片手で右の股から肋骨の方へ壓し上げる樣にして、次に左の方でも同じ樣にする。

應用　消化不良、胃弱、便秘、等に應用する。

五三、胃の捻搓
兩手の指の關節を屈げて、輕く交互に腹の筋肉を捻る樣にする。又た輕く摘んでは放す樣にして、右の方へ摘み上げ、左の方から下へと摘んでは放しながら、圓形を畫く樣にする。

應用、特に便秘に效がある。

五四、腸の震動
少し前へ屈む樣にして立て居ても、又た寄り掛るようにしてもよい、兩手を腹へ置て急に兩手で押したり引たりする樣にして、全腸へ平均に震動を與へる樣にする。
三回から六回位まで反覆してよい。

應用　便秘、消化不良、痔疾、などに應用する。

素人のマッサージとしては先づ斯んなものだ、是れで何れでも疼痛とか不快の感情が出でる樣なれば見合せた方がよい又た此他に咽喉や鼻のマッサージ法もあるが夫れは省いておく。

水

水は吾々の生活には一日もなくてはならぬもので、又た頗る健康にするものであるが、之れも多量に用ひると害になる。普通に攝取する一日の量は冷水二三合位の處がよい。

熱いものや後で渇を覺へるものなどは、假令甘い食料の上に掛けてあつても健康には宜しくない。又た四十五度五十五度などに冷へたものなども良くない。尤も夏季などは良い飲料を調合したものならば、僅か呑む位は差支はなからう。

消化不良とか便秘とかで苦むものは、毎日朝飯前に溫湯を小さい湯呑で一杯づゝ呑むと非常に効がある、

水浴や溫浴に使ふ水も、出來るだけは清淨なものを擇ぶのである。何れにしても顏や手許りでなく、全身の皮膚を清潔にするためであるから、其水が汚濁して居ては何んの益にもならない。

病氣の種類や身體の狀態各自の好き不好もあるから一樣にはならない、水浴でも溫浴でも摩擦浴でも、それに應じた

ものを探ぶのがよい。唯だ冷え過ぎた水浴や熱つ過ぎる温浴などは何れも害あつて益ないものである。又た水浴や温浴の後でマッサージを行ふなどは至極良い強健法である。

第五章　各練習の用ひ法

A、健康者のため

前に話した練習法は、各何れも特別の効能と結果とがあるけれども悉く其日に一度に行ふといふ事は迚も出來ない。だから每朝每晩少しづゝ練習して、月を逐つて進めて行くといふ事にしたらば至極宜しからう。

三度の食事と此練習とは最も正しく行ひたいのである。又た一度始め出したら、嫌になつたからといつて、半途で止める事のない樣にしたいものだ。

練習は良く正しく行つて、又た其間は徐かに呼吸をして居る、練習の前後に深呼吸といふ——徐かに深く息を吸つて徐かに呼出す——ことを數回するのがよい。

次に掲けたものは、第二章の各運動中から採て、種々に組合せたもので、下段の第○○練習とあるのは第二章の運動の番號であるから、其處の揷圖と比べて試みられたい。

運動

イ、保健運動

始めの月

（朝）

一、頭の回轉……第廿六練習（イ）
二、上體を屈げ（前後へ）……第二十練習（イ）
三、膝を屈げ（輕く）……第十六練習
四、肩の圓回……第一練習

（晩）

一、上體の圓形……第廿四練習
二、腕の離組……第卅三練習
三、足の圓形……第十九練習

（各復習を反覆する回數は、第二章にあります）

二月目

朝

一、頭を屈げ……第廿九練習
二、上體の回轉……第廿二練習

三、腕を屈げ(前へ)……第四練習
四、膝を屈げ(深く)……第十七練習
五、腕の圓形(小さく)……第二練習

晩

一、上體の圓形……第廿四練習
二、腕の雜組……第卅三練習
三、踵をあげ……第十八練習

三月目

朝

一、頭の圓形……第廿七練習
二、腕の回轉……第七練習
三、上體を屈げ(側方へ)……第廿一練習
四、足をあげ(側方へ)……第十二練習
五、腕の屈伸……第八練習

晩

一、上體の圓形……第廿四練習
二、腕の雜組……第卅三練習
三、腕の圓形(小さく)……第二練習

四月目

朝

一、手の圓形……第十練習
二、踵をあげ……第十八練習(ロ)
三、腕の投放……第六練習
四、上體の圓形……第廿四練習
五、足をあげ(前へ)……第十三練習

晩

一、上體の回轉……第廿二練習
二、頭の圓形……第廿七練習
三、指の屈伸……第十一練習
四、肩の圓回……第一練習

五月目

朝

一、頭を屈げ……第廿五練習(ロ)
二、足を後ろへ……第十五練習(イ)
三、上體を屈げ(前へ)……第廿練習(ロ)
四、腕を交互に伸ばせ……第九練習
五、腕を擧げ(前へ)……第四練習

晩

一、上體の回形……………………第廿四練習

二、腕の回形（大きく）…………第三練習

三、股の回形……………………第四十練習

六月目

朝

一、腕を擧げ（前へ）……………第四練習

二、膝を屈げ（深く）……………第十七練習

三、上體を屈げ（前へ）…………第廿練習（ハ）

四、複急歩………………………第四十三練習

五、腕を擧げ（側方へ）…………第五練習

晩

一、頭の回形……………………第廿七練習

二、腕の離組……………………第卅三練習

三、踵をあげ……………………第十八練習（ロ）

七月口

朝

一、頭を屈げ……………………第廿五練習

二、前面へ攻勢…………………第廿八練習

三、上體の回轉…………………第廿二練習

四、膝をあげ……………………第十四練習

五、腕の放投……………………第六練習

晩

一、上體を屈げ（前へ）…………第卅二練習

二、上體を屈げ（前へ）…………第廿一練習

三、足の回形……………………第十九練習

八月目

朝

一、指を伸ばせ…………………第十一練習

二、速屈運動……………………第卅四練習

三、腕の回轉……………………第七練習

四、足を後方へ…………………第十五練習（ロ）

五、肩の回回……………………第一練習

晩

一、上體の回轉…………………第廿四練習

二、腕の離組……………………第卅三練習

三、趾尖歩行……………………第四十五練習

九月目

朝

晩

十月目

朝

晩

十一月目

朝

晩

十二月目

朝

一、頭を屈げ……第廿五練習
二、上體を擧げ……第卅九練習
三、腕の屈げ伸ばし……第八練習
四、交互に膝をあげ……第四十四練習
五、腕の圓形（小さく）……第二練習

晩

一、上體を屈げ……第二十練習（ロ）
二、膝を伸ばせ……第卅一練習
三、手の圓形……第十練習
四、足の圓形……第十九練習

□女子の美的健康運動

女子の運動法としては、特に、
一、心臟の働きを強壯にする樣に、
二、胸膈特に肋骨の下部を濶展する樣に、
三、腸の自由に働く樣に、
四、腰及び尻骨の神經筋肉を強壯にする樣に、
五、背から脚へ掛けて血液の循環を良くする樣に、
組織したものが良いのである。其積りで處方を次に掲げた

が、猶ほ始める前には念の爲め醫師と相談して、此練習はチト苦しいと思ふものがあれば、他の練習と代へるなり、又た省くなりしてもよいが、決して夫れ程ではあるまいと思ふ。

一、二、三月目

一、足を擧げ（側方へ）……第十二練習
二、肩の圓回……第一練習
三、膝をあげ……第十四練習
四、上體の圓形……第廿四練習
五、腕を擧げ（側方へ）……第五練習

四、五、六月目

一、膝を屈げ……第十六練習
二、腕を擧げ……第四練習
三、上體の圓形……第廿四練習
四、股の圓形……第四十練習
五、腕の圓形（小さく）……第二練習

七、八、九月目

一、足を後ろへ……第十五練習

十月目からは、又た始めに返つて練習をしてよいのである。

B、病者や虚弱者のため

病ある人又た虚弱の人などの爲めに、次に種々の處方を掲げた、が必ず之れだけを一度に行はなければならぬと云ふのではない。休み〳〵毎日怠らず行へばよいので、少しでも厭な感が起つたら一ト休みして又た行ふ樣にするのがよい。

（イ）一般の虚弱、貧血症、神經衰弱

一、二月目

三、四月目

五、六月目

八、腕の離組……第卅三練習
九、腕の圓形（小さく）……第二練習
七月目からは、又た始めに返つて行ふ

（ロ）肺咽喉などの弱いもの

一、二月目

一、頭を屈げ……第廿五練習
二、腕の屈げ伸ばし……第八練習
三、上體を屈げ（前へ）……第二十練習（イ）
四、足を後ろへ……第十五練習（ロ）
五、腕の放投……第六練習
六、上體の圓形……第廿四練習
七、背を伸ばせ……第三十練習
八、踵をあげ……第十八練習（イ）
九、腕の離組……第卅三練習
此他適宜に咽喉のマッサージを行つても差支ない。

三、四月目

一、頭の回轉……第廿六練習
二、前面の攻勢……第廿八練習
三、腕を擧げ（前へ）……第四練習
四、膝を屈げ（輕く）……第十六練習
五、上體を屈げ（前へ）……第卅二練習
六、上體の回轉……第廿二練習
七、收容運動……第卅五練習
八、肩の圓回……第一練習
九、腹の壓搾……第卅七練習
一〇、趾尖歩行……第四十五練習

五、六月目

一、頭の圓形……第廿七練習
二、腕の回轉……第七練習
三、膝を屈げ（深く）……第十七練習
四、後ろへ屈げ……第四十二練習
五、腕の離組……第卅三練習
六、速屈運動……第卅四練習
七、膝をあげ……第十四練習
八、腹の壓搾……第卅七練習
九、膝を伸ばせ……第卅一練習
一〇、腕を擧げ（側方へ）……第五練習

（ハ）消化器の衰弱、胃腸、便秘などのもの

一、二月目

朝

一、上體を屈げ（前へ）……第二十練習（イ）
二、腕の圓形（大きく）……第三練習
三、上體の圓形……第廿四練習
四、膝をあげ……第十四練習
五、腕の屈げ伸ばし……第八練習
六、收容運動……第卅五練習
七、腹の壓搾……第卅七練習

晩

一、交互に膝を伸ばせ……第四十四練習
二、上體の圓形……第廿四練習
三、腹部のマッサージ

三、四月目

朝

一、上體を屈げ（前へ）……第二十練習
二、膝を屈げ（輕く）……第十六練習
三、速屈運動……第卅四練習
四、足をあげ（側方へ）……第十二練習
五、跪いて上體を後屈……第卅三練習
六、腹の壓搾……第卅七練習
七、交互に膝をあげ……第四十四練習
八、腕を擧げ（前へ）……第四練習

晩

一、踵をあげ……第十八練習（イ）
二、上體の圓形……第廿四練習
三、脚をあげ……第卅八練習
四、股の圓形……第四十練習
五、腹部のマッサージ

五月目よりは又た始めに返つて行つてもよい。

（ニ）慢性腸加答兒

朝

一、跪いて上體を後屈……第廿三練習
二、踵をあげ……第十八練習
三、上體を屈げ（前へ）……第廿一練習
四、足を後ろへ……第十五練習（ロ）

五、腕の圓形……第二練習

晩

一、上體を屈げ（前へ）……第二十練習（二）

二、股の圓形……第四十練習

三、腹部のマッサージ

（ホ）肥滿症のもの

朝

一、膝を屈げ（深く）……第七練習

二、上體を屈げ（前へ）……第二十練習（八

三、腕の屈げ伸ばし……第八練習

四、上體の圓形……第廿四練習

五、手と趾尖とで立つ……第卅六練習

六、交互に膝をあげ……第四十四練習

七、腕を擧げ……第四練習

八、速屈運動……第卅四練習

九、腕の圓形……第二練習

晩

一、上體をあげ……第卅九練習

二、斜前面へ攻勢……第廿九練習

三、手と趾尖とで立つ……第卅六練習

四、脚をあげ……第卅八練習

五、腹部のマッサージ

（ヘ）膽汁質のもの

一、肩の旋回……第一練習

二、膝をあげ……第十四練習

三、上體の圓形……第廿四練習

四、足をあげ（側方へ）……第十二練習

五、腕をあげ（側方へ）……第五練習

六、體を側方へ……第四十一練習

七、股の圓形……第四十練習

八、收容運動……第卅五練習

九、腕の圓形（小さく）……第二練習

一〇、腹部のマッサージ

（ト）痔　疾

一、上體を屈げ（深く）……第十二練習

二、膝を屈げ……第十七練習

三、上體の圓形……第廿四練習

四、膝をあげ……第十四練習
五、腕の屈げ伸ばし……第八練習
六、背を伸ばせ……第三十練習
七、手と趾尖とで立つ……第卅六練習
八、交互に膝をあげて……第四十四練習
九、股の圓形……第四十練習
一〇、腹部のマッサージ

(チ)尻骨機關の衰弱

朝

一、上體の回轉……第廿二練習
二、腕の圓形(大きく)……第三練習
三、膝をあげて……第十四練習
四、上體を屈げ(前へ)……第二十練習
五、足をあげ(側方へ)……第十二練習
六、收谷運動……第卅五練習
七、股の圓形……第四十練習

晩

一、上體の圓形……第廿四練習
二、足を後ろへ……第十四練習(ロ)
三、速屈運動……第卅四練習
四、踵をあげ……第十八練習
五、手と趾尖とで立つ……第卅六練習
六、膝を屈げ……第十七練習

(リ)頭痛と腦の充血

朝

一、頭の回轉……第廿六練習
二、頭を屈げ……第廿五練習
三、手の圓形……第十練習
四、膝を屈げ(輕く)……第十六練習
五、上體の圓形……第廿四練習
六、腕を擧げ……第四練習
七、足の圓形……第十九練習

晩

一、指を伸ばせ……第十一練習
二、頭の圓形……第廿七練習
三、足を後ろへ……第十五練習(ロ)
四、頭のマッサージ

(ヌ)不眠症

朝

晩

(ル)背の屈つたもの、肩の突出して居るもの

特に女子は小供にしても大人にしても、脊骨が屈んで居るものが多い。これは前に記した練習さへ怠らずに行へば、直ぐに矯正して行かれるが、猶ほ此練習を始める前に一應醫師と相談し以上の中適當の練習法を指定して貰へば十分である。

又た小供には絶えず眞直に立つて兩足をそろへ、頭を正しくして肩を平らに胸を十分に濶かせる事をさせるのがよい。

女子は十二歳から十六歳位までの間は、殊に脊骨の屈し易い時期であるから、母親は此時分には能く注意して、時々子供の脊を掌で輕く撫で下ろして見て、少しでも屈んで居る様であつたら、適當の練習法を奬勵することにしたら、其兒の一生に取つてどの位幸福であるか知れない。(終り)

バラックの編輯室から

◇新年號の編輯がやつと今日で終りました。今から賀新年を申しあげるのも變ですから震災後第一年の私共の計畫やら抱負やらを少しばかり申しあげて御挨拶に代へます。本號を御覧になつてもその一端を御諒察下さる事と存じますが、今後の女性改造は知識的に藝術的にそして實用的に進みたいと存じて居ます。

◇普通選擧は既に議論の時代を過ぎて實行の時代に移らんとする今日、本號に於て「外國に於ける婦人參政權運動の實情」を紹介しましたのは何の爲めであるか御諒察の上、特に諸姉の御奮起を希望いたします。本紙は前にも述べましたやうに、我國婦人文化運動のためには能ふ限りの應援をさせていたゞき度いと願つて居ます。

◇今後の本誌家庭欄に就ても、特別の計畫をもつて居ます。實生活に即した記事を求めると共に、諸姉の家庭生活に貴い精神的の贈物を献げたい希望で居ます。だが新年號に於て私達の理想や計畫の全部を實現する事の出來なかつたのは遺憾に堪へませぬ。二月號から諸姉の應援と鞭撻に待つて、出來得る限り良い雜誌にいたしませう。もし編輯に就て御希望があれば編輯者宛に御申越下さる御親切をお願ひいたします。

◇我社刊行の「大正大震火災誌」の評判は非常なもので、全國の學校や家庭よりの申込が殺到して參りました。どうか皆さんの家庭にも一部づつ御備へをお願ひしたいと思ひます。そして豫約の締切は十二月卅一日ですからこの事も御承知を願ひます。

◇アインスタイン全集は十一月末日出來る豫定でしたが、印刷の都合で、少し遅れましたことを御詫びします。若し第四卷が十二月廿三日まで配達未着のときはどうか本社まで御一報下さい。第三卷は第四卷より後れて出來ますがこれもこの程飜譯が出來上りました。

◇倉田百三氏は來春早々我社から「超克」と題する一書を出版して下さいます。尚ほその内容は二月號に委しく發表したいと思ひます。

◇今年はこれで筆をおさめといたします。どうか立派な齢を數へて下さることを祈つています。

女性改造定價表

册數	定價	郵税
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵税共
十二册	六圓	郵税共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇中途金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵税拾六錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は呈送せす
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十二年十二月十三日印刷納本
大正十三年一月一日發行
（新年號金八十錢）

編輯兼發行印刷者 平田貫一郎 東京市芝區愛宕下町一ノ一
印刷所 株式會社秀英舍 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一
發行所 改造社 東京市芝區愛宕下町一ノ一 電話芝一六三九 振替東京三二八〇

ライオン歯磨

恭しく啓す

客年殘暑の砌一朝未曾有の激震猛火を浴びて諸事面目を革むると共に帝都の人心極度に緊張し復興の氣分漲溢する間に目出度新春の曙光を迎へ大方各位の壽を爲すは小舖の慶福之に過ぎず候既に災後増設の大阪分工場並に舊工場等諸般の設備悉く恢復し日日大量製產の實を擧げつゝあるは勿論愈々絕對優良の製品を搬出致し居り候へば益々大方各位の期待に乖かざるの光榮を荷ふべく年頭の祝詞に加へて懇禱如斯に御座候　恐惶謹言

大正十三年一月一日

ライオン歯磨本舖

株式會社 小林商店

東京・大阪・名古屋

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十三年一月一日發行（毎月一回一日）
大正十二年十二月十三日印刷納本
新年號定價八拾錢（送料二錢）

復刻版 女性改造〔戦前編〕
第3回配本（第7巻～第9巻・別冊1）

2008年6月25日　発行

揃定価（本体60、000円＋税）

発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03(3812)4433
印刷所　三進社
製本所　青木製本
乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6077-4（全4冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6076-7）